
半熟果実

ドルフィン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半熟果実

【Nコード】

N2305D

【作者名】

ドルフィン

【あらすじ】

純と夏菜。高校二年。十六歳。幼馴染。二人の恋模様を中心に繰り広げられる、笑いあり、涙ありのドタバタラブコメ。

1・優雅な朝（前書き）

ネット小説ランキングに参加してみました。よければクリックしてください。励みになります。

優雅な朝

チュンチュンチュン……。

小鳥のさえずりが窓の外から聞こえてくる。しかし、それは朝の来訪を爽やかに俺に伝えはすれど、人間の三大欲求のうちの一つに包まれ、おまけに布団にまで包まれた俺をそこから呼び覚ます力は持ち合わせていなかった。もちろん、目覚まし時計の忌むべき能力は昨晚のうちに封じておいた。これで、目覚まし時計も、ただの置時計に成り下がったわけで、この心地いい朝を満喫しながら、俺は優雅に夢の世界を――。

ギリギリギリギリギリギリギリ!
夢の世界を――。

リ
リ
リ
リ
リ
リ
リ
リ
リ
イ
リ
リ
リ
リ
!

満喫。

リ
リ
リ
リ
リ
イ
リ
リ
リ
イ
リ
リ
リ
リ
!

「だああ！　うるっせえええええ！」

唐突な目覚ましのアラーム音に夢心地を吹き飛ばされ、俺は思わず包まっていた布団を投げ捨て、上半身をガバツと起こした。そして、寝ぼけ眼の俺の目に映りこんできたのは、幼馴染の夏菜かなの笑顔だった。

「おはよう、純^{じゅん}。朝っぱらから随分ハイテンションだね」

「あ……？ あ、ああ……お、おはよ、夏菜」

俺が普通に挨拶を返すと、夏菜はにっこりと微笑んで目覚まし時計のアラームを切って、普通に俺の部屋から出て行くとした。

「——って、ちょっと待てえ！　なんでいんの！　お前がなんで俺の部屋にいんの！　そして、なんで何の説明もなしにしれっと部屋から出て行くこうとしてんの！」

「おお。期待通りの反応だ。さすが、純だね」

「……いや、意味が分からねえ。つつか、頭いてえ……」

「それは、朝からそんなにテンション上げてたらねえ」

そう言いつつ、片手に目覚まし時計を持った夏菜がおかしそうに笑う。夏菜の手に持たれた目覚まし時計に目をやって、俺は自分にできうる限りの怖い顔を作りこみ、夏菜を睨みつけてやった。

「俺の優雅な朝を台無しにした犯人はお前か」

「ううん。私じゃないよ。この子だよ？」

そう言って、夏菜は笑顔で手にした目覚まし時計を上に掲げた。

「そいつの封印を解いたのはお前だろうが！」

「誤解だよ。この子が自らの力で限界を突破したんだよ。私はほんの少しその手助けを——」

「だから、お前が目覚ましのアラームのスイッチ入れたんだろうが！」

「あはは。うん」

怒り狂う俺を見て、可笑しそうに笑う夏菜。ちくしょう。ここでいくら怒っても、こいつを喜ばせるだけだ。にしても、相変わらず可愛い顔して笑いやがるな、こいつは。

「ん？ どしたの？ 私の顔に何かついてる？」

思わず、夏菜の顔を眺めていると、夏菜がきよとした顔で俺に顔を近づけてきた。いや、近い、近い、近いから。

「あ、ああ……。なんか、ほっぺたにニキビが」

苦し紛れの照れ隠しにそう言葉を発すると、夏菜は手にした目覚まし時計を容赦なく俺の顔面めがけて投げつけた。至近距離から飛んできた目覚まし時計は、見事俺の顎にクリーンヒット。

「うげ！」

「失礼ね。ニキビなんてないわよ。今朝ちゃんと顔洗ったときに確認したんだから」

「……さいですか」

目覚まし時計って凶器になるんだ……。

「って、そんなことより、なんで夏菜が俺の部屋にいるんだよ」

「え？ ……うーん。とりあえず、話せばいろいろ長いんだけど」

そう言つて、人差し指を顎に当て、上のほうを見る夏菜。その隙に俺は投げ捨てた布団を拾い、ベッドの上に寝転がった。

「あ！ ちよつと、純！」

「ご苦労、夏菜二等兵。上官には私からよろしく言つておく。君は戦場（学校）に向かつてくれたまえ。幸運を祈る」

「な、なにそれー！ ちよつと、馬鹿純！ せつかく起こしに来たげたのに！」

いや、誰も頼んでませんから。つーか、誰だ。こいつをよこしてきやがった奴は。考えられるのは……親父か。

「ちよつと、純！ 起きてよお！ 私まで遅刻しちゃうじゃない！」

布団の上からゆさゆさと俺の肩を揺らす夏菜。目覚まし時計は今俺が布団の中で抱え込んでいるので、使えまい。ザマーミロイ。

「ちよつと、純！ 純！！ 純ー！！！」

布団越しに夏菜の甲高い声が響くがなんのその。その程度で俺の睡眠欲が破れると思うな、未熟者。二度寝に入つた俺を起こしたければ、目覚まし時計を十個は用意して出直して来るがいい。

やがて、夏菜の声が聞こえなくなり、しつこく揺さぶられていた振動もピタリと止んだ。夏菜が諦めて部屋を出て行ったことを確信した俺は、布団の中で一人ほくそ笑んだ。のだが――。

なにやら、背後で布団がもぞもぞと動く感触が伝わり、その後、布団の中でまたもぞもぞと動くものが俺の聖域（布団の中）に侵入してきたではないか。ちなみに、ベッドは部屋の壁際に設置されていて、俺は壁と向かい合つて寝ているわけだ。そして、何か暖かいものがヒタリと俺の背中にくっついてきたわけだ。

その、柔らかく、不思議と優しいぬくもりを帯びたそれに、不覚にも興味を惹かれた俺は布団の中で寝返りを打った。すると、どうだ。なぜか、目の前には、夏菜の顔があるではないか。

「……起きて、純^{ハート}」

「……！」

上目遣いで俺を見つめた夏菜は、俺の胸に頭をもたげ、ぴったり

と体を寄せてきた。一瞬で強制的に目覚めさせられた俺と、俺のマイサンは思わず一緒になって立ち上がった。いた。

「な、な、なにやってんだ、おめーは！」

ベッドの上に立ち上がり、横に寝そべっている夏菜をピシッと指差す。が、夏菜は悪びれもせず人懐っこく笑い「あはは。目、覚めた？」と言いつつ体を起こした。が、すぐに夏菜の笑顔は引きつり、ある一点に目を留めたまま、夏菜の表情はピシッと固まった。

解説しよう。夏菜はベッドの上で体を起こした。つまりベッドの上に座ってる。俺はベッドの上で立ち上がり、夏菜を指差してる。そこで、注目すべきは今のやり取りで強制的に立ち上がったしまった俺のマイサン。いや、決して夏菜でこうなったわけではなく、朝の生理現象でもともと少し固まっていたのが、夏菜のせいで完璧に目覚めてしまったわけだ。そして、これは神のイタズラか。立ち上がった俺のマイサンは配置的に夏菜の目の前で元氣よく朝のご挨拶——で、やべえ！ 呑気に解説してる間に、夏菜の顔がみるみる赤くなっていく！

「い、い、いや……。か、夏菜？ こ、ここ、これはね？」

「純の馬鹿——！！！」

狙ったのか、狙っていないのか。そんなことは夏菜本人に聞いてくれ。とにかく、俺から顔を背けながら放たれた全力の右ストレートは、見事に俺のマイサンにぶち込まれたわけ。

「はおおおおおおおおおお！！！」

泣きながら俺の部屋を飛び出していく夏菜の姿が、激痛の中でうつすらと見えたわけで。泣きたいのはこっちだと言う気力もなく、俺はマイサンを抱え、しばらく地獄の中をさまよう羽目になった。

2・リミット三分

「おい、純！ お前一体夏菜ちゃんになにをしたあ！」

騒動の一分後、俺の部屋に親父が雪崩れ込んできた。が、いまだ地獄の中をさ迷っていた俺を見て、親父は「うおおう」とまるで見てはいけないものを見てしまったようなりアクションを見せ「お、お取り込み中のところ、失礼しました」とアホなことを言いつつ俺の部屋を出て行こうとした。

「ち、ちよつと、待てえ……！」

何とか親父を引き止め、事の経緯を説明する。しかし、息子の受難に親父は笑いながら「そいつは災難だったな」と感想を述べ、俺の背中をさすりやがる。

とにかく、俺はダメージの回復に努めた。その間に、俺の親父について簡単に解説しとくか。長谷川拓^{はせがわたく}、今年で四十三歳の、最近抜け毛が気になり育毛剤を使い始めた、しがないサラリーマンだ。見た目は、まあ、周りから言わせればダンディなオジサマということだが、俺からすれば、ただのアホ親父だ。抜け毛が気になるなら、無理して髪を茶髪に染めるなつての。が、確かに、年齢よりは若く見えるかもな。精神年齢はいまだティーンエイジャーだから、たちが悪い。性格は、まあ、おおらかだな。そこだけは、親父の唯一の長所か。お袋に先立たれた親父は、今は男手一つで俺を育ててくれる頼れるパパなワケだが――。

「よし、そろそろ落ち着いたか？」

「おう。サンキュー親父」

そう言つて、親父に笑顔を向けつつ、俺は親父の頭を引っ叩いた。「イタ！ な、なんでいきなり頭を叩く！ それが命の恩人に対する仕打ちか！」

おー。相変わらず、絡みづらいお人だな。

「……とぼけんじゃねえよ。夏菜を俺の部屋に差し向けたのはため

えだろ？」

「ちょ……、純君目が怖いよ？ それに父親をてめえ呼ばわりって、天国の母さんが泣いちゃうよ？ 純が不良になっちゃったーって」「やかましい！ てめえのせいでえらい誤解が生まれちまったじゃねえか！ 年頃の息子の部屋に、年頃の女の子を差し向けんじゃねえよ！」

「はっはっは。まあまあ、いいじゃないか。隠し持ってるエロ本が見つかるとはいくらかマシだろ？」

俺は今度は全力で親父の頭を引っ叩いた。

「そういう問題じゃねえ！」

「痛い！」

「親父い……あんたなんか俺に恨みでもあんのか……？」

ものごっついガンつけて、胸の前でボキボキと拳を鳴らすと、親父は慌てて後ずさった。

「い、いや、誤解だつて！ 夏菜ちゃんを呼んだのは俺じゃないから！」

「……あ？ そうなのか？」

「ふー。そうだよ、まったく。担任の先生にお前のこと頼まれてわざわざ起こしに来てくれたって、夏菜ちゃん言ってたぞ。お前、遅刻の常習犯らしいじゃないか。この前も担任の神楽先生かくらから電話があったぞ。お宅の息子何とかしてくださいってな」

いや、教師のクセにその率直な言い方はどうかと思うぞ。

「とにかく、今日はわざわざ夏菜ちゃんが起こしに来てくれたんだ。絶対遅刻なんかするんじゃないぞ。それと。今日のは不可抗力かもしれないが、夏菜ちゃんを泣かすような真似をしたら、父さん許さんからな。分かったか」

「お、おう……」

いきなりマジモードの入った親父に、俺は少々萎縮しながら返事をした。昔から、夏菜のことになるとマジモードになんだよな、この親父は。まあ、夏菜に限っただけじゃなく、昔から親父は俺が友

達を傷つけたりすると、いつも本気で怒るんだよ、これが。普段温厚なだけに、こっちもリアクションに困るっての。
って……。

「遅刻まで、あと3分……?」
うそぉん。

3・ミイラ取り

「あー、こういうのを諺でなんて言ったかな。えーと……おお、そうだ。ミイラ取りがミイラになる」

「いや、それ微妙に意味違わないっすか？」

「んー？　なんか言ったか、はーせーがーわー？」

につこりと笑いながら、額に青筋を立て、デスクの上にあった数学の教科書で俺の頭をバシバシと叩くこのお人は、我が同朋高等学校^{どうほう}数学教師、並びに二年A組担任教師、つまり、敬愛すべき我が担任の先生様だ。名前は傍・若無人（ぼう・じゃくぶじん）おっと違った、神楽弥生大先生^{かぐらやよい}だ。すらりと伸びたロングヘアーに、その端正な顔立ち、いつもびしっとしたスーツを着こなすこの美人数学教師は、かなりの兵だ^{つわもの}。その容姿から、マドンナとして祭り上げられ、男子生徒から絶大な人気を誇るその秘密は、熱烈なファン（男子生徒）の声援を「うるせえ」の一言で一刀両断するそのクール＆ワイルド。ちなみに、歳は27。未だ独身。

さて。ではなぜにそのクール＆ワイルドなマドンナに俺が今数学の教科書で頭をバシバシ叩かれているのかというと、説明すればこれが長いのだ。マドンナの話によると、今日の遅刻で、俺の連続遅刻記録が17に更新。それでもって、昼休みに職員室に呼び出され たってワケだ。しかし、本人も数えてない記録をいちいち数えて新記録樹立を祝ってくれるとは、神楽先生って意外に律儀だな、うん。しかし、御褒美に教科書で人の頭を叩くって、生憎俺にそっちの趣味はないのだが……って、痛い、痛い、急に力込めてどうしたの！？

「お前、今頭の中でこの状況を茶化してたろ？」

「いや、あんたは超能力者ですか。人の思考が読めるんですか。全力で否定させていただきます」

図星だけどな。

「んー？　君はそんな偉そうなこと言える立場なのかなー？」

俺の頭を叩く数学の教科書が、バシバシからドバシドバシと進化したので、俺はたまらず素直に謝った。

「申し訳ありませんでした」

「謝るぐらいなら初めから遅刻すんな」

いや、あんた俺に謝らせたかったんじゃねえの？

「ってか、なんで夏菜まで呼ばれてんすか？」

そう。さっきから気になっていたのだが、俺の隣には今朝俺のマイサンに右ストレートをぶち込んだ、悪魔の女、夏菜が立っているのだ。いや、超気まずくて目え合わせられませんから。同じクラスなのに、今日学校で一言も口利いてません。俺にどう切り出せと？

「大山。お前には期待していたんだけどな。非常に残念だ。まさか、お前がミイラになって帰ってくるとは」

あー、解説すると、夏菜も今日遅刻しちゃったわけだな、うん。

「あの、先生。だから、それ使い方間違ってますよ」

「大山。お前、皆勤賞狙ってたんだろ。今までずっと無遅刻無欠勤でがんばってたもんな。なのに、悪かった。こんな奴のことを私が頼んだせいで、全部台無しにしてしまった」

俺の言葉を見無視してその声を出し、神楽先生がめっさ怖い目で俺を睨んでくる。そこで、夏菜は元氣なく俯いてる。

あれ？　もしかして、今朝から夏菜が元氣なかったのって……？

「大山。お前はもういいぞ。教室に戻って昼食摂ってこい」

「……はい。失礼します」

会釈をして、とぼとぼと職員室を出て行く夏菜。うわあ、かつてないほどの罪悪感が今俺の両肩に乗っかってます。

「さて、そういうことだ、長谷川。何か言いたいことはあるか？」

「あーと……。とりあえず、夏菜の遅刻分を俺の方に回してもらうつてことは」

「できるか、アホンダラ」

うお。相変わらず、容赦なく口が悪いお人だな。

「何でもしますお願いしますどうか夏菜にもう一度チャンスを」

棒読みでその声を出す俺に、神楽先生はようやく数学の教科書をデスクの上に放った。うん、今までずっと頭叩かれてたから。

「これに懲りたら、もう遅刻はしないことだな」

「神様お願いしますあなた様のお力で夏菜にもう一度希望を」

「真面目に聞け、馬鹿野郎」

ぐりぐりとハイヒールのかかとで俺の足をふんづける神楽先生。分かりました、もうふざけませんから！

「お前の無責任な行動で他人がどれだけ迷惑をこうむるか理解できたか」

「え……いや、それは話が飛びすぎじゃないすか？」

「同じだよ。誰かの無責任な行動の裏では、見えないだけで他の誰かがそのとばっちりを受けるんだ。今回はたまたまそれが大山だった。でも、社会に出たら、それはもうごめんなさいじゃ済まされないんだぞ。分かったか、この馬鹿野郎」

神楽先生の言葉に、俺は返す言葉もなく俯いた。

「……あの、先生。お願いがあります」

「なんだ？」

「今後絶対遅刻しません。今までのことも全力で謝ります。だから、夏菜の遅刻分を俺に回してください。お願いします」

俺は股関節脱臼ギリギリまで頭を下げた。しかし、そんな俺に神楽先生のため息交じりの言葉が響く。

「頭を下げる相手が違うんじゃないのか。もう教室に戻っていいぞ」
椅子をくると回転させ、デスクに向かい合う神楽先生が、もう一度こつちを向いてくれることはなかった。

4・涙と告白

職員室を出た俺は、夏菜に合わせる顔がなかったので、教室には戻らずにまっすぐ屋上へと向かった。ああ、こういうブルーな気分の時は、屋上で一人寂しく風に当てられるに限る。神楽先生め、終いには土下座までした可愛そうな教え子をとことん無視しやがってスパルタにもほどがあるだろが。生徒が職員室で惜しげもなく土下座すんのがただけこっ恥ずかしいことが分らないのか、あんたは。教師の仕事は生徒と正面から向き合うことじゃないのか。それならば、土下座する生徒を無視して弁当を食うあんたは、もはや教師じゃないよな？ どうやったら、そんなにふてぶてしく生きられんだよ、ちくしょうめ。

あ、神楽先生め、以降全部声に出てたらしい。廊下をすれ違う生徒みんな、揃いも揃ってあからさまに俺を避けて歩いていく。いや、俺変人じゃありませんよ？

と、そうこうしていると屋上に着いた。開け放しのドアをくぐると、すでに屋上には五、六人先客がいたのだが、そのうちの一人に、夏菜を見つけた途端、俺の足はピタリと止まった。ああ、なるほど。夏菜もブルーなワケだ。それで、屋上で一人寂しく風に当てられに來たわけだ。それで、そんな簡単なことを読めずのこのこ屋上にやってきた俺はSK（救いようのない・馬鹿）なわけだ。って、誰が馬鹿だ！

さて。苦し紛れの脳内一人ボケ突っ込みも終わったところで、夏菜に気づかれる前に教室に非難しようか。明日になれば、夏菜だって機嫌直すさ、うん。ほとぼり冷めてから謝ろう。

（謝る相手が違うんじゃないのか？）

いや、いや、いや、なんでこのタイミングで出てくんの神楽先生。それで、なんで足を止める、俺。あの人は俺を見捨てた汚い大人だ。ちよっと美人だからって、調子に乗んなっての。聞く耳持つな。

「か、夏菜……？」

って思ってるそばからなんで夏菜に声かけてんだよ、俺の馬鹿野郎！

ああ、無意識のうちに足がふらふらと屋上の手すりの前に立つ夏菜の下へ。それで、勢いだけで声をかければ（恐る恐る）、振り返った夏菜の目には涙が溢れていましたとき。

って、泣いてる！？

俺の声に振り返った夏菜は、目から零れた涙を慌てて制服の袖で拭ってから、俺に繕った笑顔を向けた。昔からこうなんだ、こいつは。隠し事をする時、いつも夏菜は笑ってごまかそうとする。

「ど、どうしたの、純。なんでこんなところにいるの？」

そう言って、夏菜は感情を悟られまいと俺に背中を向けてもう一度涙を拭った。鼻をすすって、あはは、と笑う夏菜。

「分かった。弁当せびりに来たんでしょ。ほんと純って昔からデリカシーってものが」

そう言って笑顔で振り返る夏菜の言葉を遮って、俺は「ごめんな」とまっすぐ夏菜を見つめて謝った。

「え……」

「お前がそこまで本気で皆勤賞狙ってるなんて知らなかった。そういえば、お前小学校も中学校も一回も学校休んだことなかったもんな。体調悪くても無理して出てきたりしてさ」

「純……」

「気づいてやれなくてごめん。俺のせいで台無しにしてごめん。……ほんとうに、すいませんでした」

俺は、思いつきり頭を下げて夏菜に心から謝った。例え相手が親しい人間でも、自分が悪いことをしたら、素直に謝らなければならぬ。親父の教えだ。

「……もう、いいよ。純」

「……夏菜」

顔を上げると、夏菜は俺を見てくすつと笑った。

「そういえば昔から、私たちケンカしたら、先に謝るのは決まってる純だったよね」

「え？ あ、ああ。親父がさ、夏菜のこと泣かしたらマジで怒るんだよ。女の子を泣かすような奴は男じゃないってさ。母さんがいない分、その辺の躰は徹底してんだよね。まあ、親父は夏菜のこと本当の娘みたいにしてるみたいだから」

「私も、おじさんのこと本当のお父さんみたいに思ってるよ。うち、お父さんいないけど、おじさんがいつも優しくしてくれたから」

「おいおい、そんなこと言ったら、夏菜の親父さんの立場ないだろ。天国で泣いてるぞ」

俺の言葉に夏菜は困ったように微笑んで、俺から目を逸らした。

「天国、かあ。そこに、私のお父さんも、純のお母さんもいるんだよね？」

「……夏菜？」

「私ね、純のお母さん大好きだったんだ。小さい頃、学校から帰ってもうちのお母さんパートに出てていつも家にいなかったでしょ？

だから、いつも純の家に押しかけてさ。私が来ると、おばさんいつも笑顔でおかえりって言ってくれた。おばさんのおかえりが聞きたくて、私いつも純の家に通ってた。だから、おばさんが死んだ時はすごくショックだったな」

五年前、俺たちがまだ十一歳の頃、母さんが病気で死んだ。元々、母さんは体が弱くてよく入退院を繰り返していたが、癌を患った母さんは、三ヶ月の闘病生活の末、俺たちに見守られ、静かに息を引き取った。その時、一番大泣きしていたのは、俺でも親父でもなくて、夏菜だった。

「いつかお見舞いに行った時、おばさん、私に言ってくれた。私がいいい子にすれば、おばさんも安心して病氣と闘えるって。だから約束したの。私、一日も学校休まない。皆勤賞取ってみせるから、おばさんもきつと病氣に勝ってねって。おばさん、優しく笑って肯いてくれた」

その時、母さんの体調は日に日に悪くなり、面会もあまりできない日が続いていった。それでも、夏菜は毎日病院に顔を出して、母さんの病室の前に立っていた。

「元気だけが取り柄の私が、おばさんのためにしてあげられることってそれしかなかったの。でも、おばさんは死んじゃって、結局私はおばさんのために何もしてあげられなくて」

夏菜の頼りない細い肩が、かすかに揺れた。声を震わせて言葉を発する夏菜を前にして、俺はどうしてやればいいのか分からず、ただ夏菜を見守った。

「そんなことしても何の意味もないって、分かってるの。でも、あの時、私に笑って約束してくれたおばさんの顔が忘れられないの。

馬鹿だよ、私……」

「……いや、それは違うだろ」

「え……」

「意味なくなんてないだろ。母さんを想うお前のその気持ちは絶対空を突き抜けて、天国の母さんに届いてる。それに、お前のその優しさに母さんはきっと救われてたよ。傍で見てた俺には分かるよ。断言する。お前は母さんと一緒に母さんの病氣と闘ってくれてた。

それが、母さんには何よりも嬉しかったんだ」

「純……」

「お前は絶対馬鹿じゃねえ。それで、そんなお前が母さんは大好きだった。傍で見てきた俺が保証してやる」

「ふえ……」

その時、夏菜の顔はくしゃっと崩れて、途端に涙の溜まった目から涙がポロポロと零れ出した。こんな風に、夏菜の泣き顔を見たのはいつ以来だろう。懐かしさと、悲しさと、切なさと、言葉にはできない感情が俺の胸の中に広がった。

両手で顔を覆って、嗚咽を漏らしながら泣く夏菜。その頼りなく震える小さな肩も、抱きしめると折れてしまいそうな細い体も、目の前で泣く夏菜の全てが、なぜか目の前から消えてしまいそうなほ

ど儚く見えて、俺は夏菜に向けてゆっくり手を伸ばした。

抱きしめてやりたい衝動が、俺の心臓の鼓動を一人でにヒートアップさせる。このわけの分からない感情はなんだろう。夏菜を抱き締めれば、自然にその答えが出てくるような気がした――。

「あ、いた、いた、大山！」

「――！」

突如横から割り込んできた声に、夏菜に向けて突き出した俺の手は空中で急遽軌道修正。あたかも、俺はただ夏菜の傍を漂っていた蚊を殺していただけですよ、ってな具合にすっとぼけてパンパン一人で手を叩いて、はい、間抜けの一丁上がりだ。

「……あれ、大山？」

突如俺たちの元に駆け寄ってきた見知らぬ男が、泣いている夏菜を見て目を丸くさせる。一方、夏菜は慌てた様子で涙を手で拭うと「か、金田先輩……」と男を見て言葉を発した後、なぜか気まずそうに俺に目を向けて、すぐに俯いてしまった。

「どうした、大山。なんで泣いてるんだ」

そう言っ、俺たちの傍に駆け寄った男は、心配そうに夏菜の顔を覗き込んだ。って、いや、あんたちよつと、近くねえ、顔？ 馴れ馴れしい奴だな、この野郎。と思いつつ、とりあえず俺はパンパンと蚊を殺す演技を続行。よし、この調子で大間抜けにまで進化しようか。

しかし、見知らぬ男と夏菜の痛い視線がダブルで突き刺さり、俺は手を叩くのを止めた。

「……なにしてるの、純？」

「いや、特に意味のない行動なのでスルーしてくれ」

お願いだから、事情は聞かないでください。

「えーと……で、こちらの方は、どちら様で？」

話を逸らすために、とりあえず、そう声を出す。そして、そんな俺を、見知らぬ男は険しい顔をして睨んできた。おお、初対面の相手にガンを飛ばすとは、随分勝気な男だな。

「大山を泣かしたのは君か？」

「……はい？」

「って、いや、今のは肯定の意味の「はい」じゃないから。確かに、泣かせたのは俺だけだ。」

「ち、違うんです、金田先輩。純は何もしてません」

「険悪ムードぶんぶんの中、俺に詰め寄ろうとする金田先輩とやらの制服の袖を掴む夏菜。って、おいおい。どうでもいいけど、お前から距離近くねえか。って、なんでム力ついてんだ、俺？」

「そうか？　ならいいんだけど……大丈夫か？」

「は、はい。ありがとうございます。もう、大丈夫ですから」

「そう言って、金田先輩とやらを見た後に、夏菜はおずおずと俺に目を向け、言葉を発した。」

「純。この人、三年生の金田健吾先輩。今……私が付き合ってる人」
「……？」

「……突き合ってる？　いや、夏菜よ。お前はいつから空手を始めたんだ。確かに今朝の右ストレートは見事なものだったが。」

「とにかく、状況が理解できず呆気にとられている俺に、金田先輩が「よろしく。誤解して悪かったね」とさっきとは一転、爽やかな笑顔を携え俺に握手を求めてきた。そこで、俺は初めて対面した宇宙人に手を差し出すがごとく、慎重に、恐る恐る手を伸ばした。」

「あ、いや……こちらこそ。そうだ、えっと……純です。よろしく。えーと……苗字は……——忘れしました。すいません」

「ボケでもなんでもなく、マジで自分の名前も浮かんでこないほどテンパっている俺に、金田先輩は「はは、君って面白いな」と笑って俺の肩をぽんと叩いた。それで、俺と付き合いの長い夏菜は俺が激しく動揺していることが分かるのだらう。金田先輩の横で、なんとも言えない顔をして俺を見ていた。」

「あーじゃあお邪魔虫は退散しますので後はどうぞ二人でぐゅっくり」

「何とか、棒読みでその台詞を口に出し、俺はそそくさと屋上から

避難した。

5・戸惑い？

あー、なにがなんだか、意味分かんねえ。一体全体、さっきのアレはどういうアレだ。神楽先生の授業より難解な問題だな、おい。いや待て、冷静に分析すれば謎は解けるはずだ。犯人はお前だ！

さて。えーと……。

（純。この人、三年生の金田健吾先輩。今……私が付き合ってる人）
おう。さすが、俺。たった三秒で謎は全て解けた。なるほど、あの金田先輩つてのと夏菜は付き合ってるわけだ。ったく、なら初めからそう言えつての、紛らわしい。危うく迷宮入りするとこだったじゃねえか、馬鹿馬鹿しい。

にしても、あの夏菜がなあ。確かに、ぶっちゃけトークでいくと夏菜は可愛い。肩で揃えたストレートのショートカットの黒髪。パツチリとした大きな御目目おもめに、高いお鼻。ぷっくりとした唇。小動物に例えるなら、とりわけリスのかわいらしさを連想させるその顔立ちは、その笑顔が最終兵器だ。プロポーションはまあアレだが、あの折れるようなすらつとした細い体も女の子っぽくねえ？俺なんか、さっき危うく抱き締めちまうとこだった……って、いや、いや、いや、あそこでもし夏菜のこと抱き締めてたら俺どうなったの？おう。仮想修羅場が俺の脳内でひとりでに浮かびやがる。

嫉妬の鬼と化した金田先輩。ひたすらすつとぼけてパンパン手を叩く俺。てめえ、ふざけんじゃねえ、いや、ふざけてませんこつちも内心必死です。んで、押問答の末、そこには嫉妬の鬼に刺し殺された変死体が一つ。

とにかく、あの夏菜がなあ……。まあ、今まで一度も男と付き合ったことないって方が不思議っちゃ、不思議か。夏菜の奴、結構モテるって話だしな。

んで、その夏菜のハートを射止めた王子様が、あのクソ野郎か。って、あれ？なんか今言葉遣いおかしかった？すいません、金

田先輩。

しかし、夏菜はああいうのがタイプか。一見、長身細身の優男。あれは何かスポーツやってんな。だって、肌が少し黒かったし、体つきも細かったけど、なんとなく鍛えてそうだなさそうな、まあ、どっちでもいいや。しかし、結構なハンサム様だったな。すつきりとした短髪は今時珍しく染髪されてなかったし、いかにも爽やかなスポーツマンって風情だ。俺より少し、背え高かったしな（ちなみに俺の身長176センチ）、負けたぜ、ちくしょう。

にしても、このわけの分からん胸のざわめきはなんだ。やべえ、今誰でもいいから殴ってやりてえ、気分だ。よし、このまま職員室直行して、神楽先生殴ってくるか。

……はあ。教室戻る。

6・付き合うつてなんですか？

一棟の校舎の二階の隅。そこが我が二年A組の教室だ。そこで、俺の生息域は窓際一番後ろのベストポジションなワケだが、席に着いて早々重大なことに気づいちまった。そう、いつも昼飯は夏菜が俺の分の弁当も持ってきてくれていたのだ。ウチの親父は料理苦手だし、俺も朝にはめっぽう弱いもんだから、弁当持参なんて夢のまた夢だ。が、心優しき夏菜のお母様、紗枝さえさんがそんな俺のために、夏菜と俺の分の弁当を毎日作ってくれているのだ。一人分も、二人分も作る手間は同じだからと、そう言つて。おお、神よ。あなたはなんて慈悲深い女神なんでしょう。しかし、欲を言えば、もう少しおかずの量を増やして欲しい。つて、なにほざいてやがる、この罰当たりがつ！

はあ、それにしても腹減った。しかし、夏菜は今頃屋上で金田先輩とイチチャイチャラブしてんだろうし、どうしたもんか。勝手に夏菜の鮑漁るわけにもいくまい。仕方ねえ。購買にパンでも買いに行くか。

「よ、純。どうした、元気ないじゃん。その様子じゃマドンナにこつてり絞られたか」

そう言つて、俺に声をかけてきたのは、我が親友、大友大樹おおともだいき。短髪に切った髪を赤く染めた素敵坊主がよくお似合いの、色男だ。ブレザーの下のカッターシャツの裾をズボンからだらしなく出し、第二ボタンまで空けて自分の肉体を見せたがれば、女つたらしの完成だ。

「おう、大樹。ちょうどいいや。ちょっと、お前に聞きたいことがあるんだけど」

「聞きたいこと？　なんだよ？」

「付き合うつてなんだろうな」

「……は？」

俺の唐突な質問に、大樹はなに言ってたんだ、こいつは、ってな具合に顔をしかめた。やはり、もう少し分かりやすく解説が必要か。

「いやな、男と女が付き合うってことは一体どういうことなんだろうと思っただけ」

「はあ？ また、随分唐突にわけの分からん質問をするな、お前は」

「いや、分からんはずはないだろう。過去36人の女を泣かせてきたお前なら、その何たるかを知っているはずだ」

「へーえ。じゃあ私は大樹の37番目の女ってわけ？」

おう。いつの間にか大樹の後ろに立っていたこの鬼神、おっと、間違えた、よく見ればその顔にはまだかすかに麗美れみの面影が残っている。ってわけで、鬼の形相で大樹を睨み、腕組みしつつ大樹の後ろに仁王立ちしているこいつは、俺のクラスメイトにして大樹の37番目の女、大川麗美だ。おおかわれみ首元あたりで切りそろえられたボブカットの髪型がよくお似合いなこの気の強い女は、夏菜と並んでクラス一の美人と呼び声高い鬼、おっと、女だ。華奢な夏菜とは違って豊満な肉体の持ち主の麗美の方が、男子連中からはやはり、若干受けがいいようだ。っと、呑気に解説してる間にいつの間にか目の前で修羅場が。

「ねえ、大樹？ あなた、女の子と付き合っの私が初めてだって付き合い始めの時言ってた？ それとも、それって私の聞き違い？」

いや、いかにも遊び人なこいつを見てそれを信じるのもどうかと思うが。

「い、いや、もちろんそうだって！ 誤解だよ、誤解！ 純の冗談だから、な！ な！」

そして、必死に俺に助けを求めてくる大樹。あーあ、ただの冗談がこんなことになるとは本当に思いもよらなかったな。

「ってか、お前！ 麗美がこっちに来てるの知ってて、わざと誤解受けるようなこと言っただろ！」

「いやいや、私は冗談は言わない性質ですから」

「嘘つけ！ さつさと、お前の口から麗美の誤解を解け！」

しょうがない。麗美が本物の鬼と化す前に本当のことを話しておくか。本当は大樹は過去に6人の女を泣かしてきたと。おっと、大樹が空気読めよ、お前？ ってな具合に必死な目をして俺を睨んでるな。しょうがない。ここは二人の良好な関係継続を願って一肌脱いでやるか。俺って奴はなんて友達思いなんだ。

「おい落ち着けよ麗美今のは軽いジョークだよ」

「……なによ、その無理やり言わされてるような、棒読みの台詞」
じとつと俺を見て、ついっと大樹に目を移す麗美。

「おい、純！」

「はいはい、もういいよ、飽きたから。大樹は至って清廉潔白。かわゆいチェリーボーイだよ」

「……本当かしら」

いや、もちろん嘘です。

さて。この場は無事一件落着。そろそろ本題に入ろうか。

「——でき、大樹。付き合うつてなんだろうな」

「……デメエ、コノヤロ——」

「なに？ なんの話？」

お、話に食いついてきた麗美を見て、うまく話が逸らせるぜラッキ―とばかりに、ヒクついていた大樹の顔面が笑顔に一変した。

「いやさあ、なんかこいつ、急におかしなこと聞いてきてさ。男と女が付き合うのって一体どういうことなんだって」

「へえ。なんかあつたの純君？　もしかして、女の子に奥手な君にもとうとう春が来た？」

そう言つて、からかうように笑う麗美。いやはや、そのカワイイ笑顔の裏にあの鬼の面が隠れてるとは信じられないな。女って恐ろしや。

「なんだよ、お前。やつと夏菜とくつついたわけ？」

「いやん、ばかん。大樹君セクハラよお」

そう言つて、俺は大樹の足を踏んづけた。おもつきし。

「痛え！」

「あれ、私もてつきりそうだと思った。違うの？」

「おいおい、何のジョークだよ君たち。ってか、なんでそこで夏菜が出てくるわけ。第一、夏菜には素敵な王子様がもういるっての」

「「え？」」

二人揃えて声を漏らす二人に、俺は事の経緯を教えてやった。もちろん、いろいろと要点は省いてな。

「そっか……。夏菜、金田先輩と付き合うことにしたんだ」

そう言つて、なんとも言えない顔をして俺を見てくる麗美。いや、なにその可哀想なものを見るような目。ってか、お前金田先輩のこ
と知ってんの？

「なるほど。告る前に振られたわけか。そりゃ、きつついなあ。どんまい、純」

「いやん、ばかん。大樹君セクハラよお」

俺は大樹の足を踏んづけて、おもつきしグリグリねじり込んだ。

「痛え！ マジ、痛えから止めろって！」

「馬鹿。今のは大樹が悪いよ。純君は失恋して傷ついてるんだから。茶化したりしちゃ可哀想だよ」

「いや、お前らそこに直れ。俺と夏菜は付き合いは長いがただの幼馴染であり、それ以上でもそれ以下でもない間柄だ。親同士も仲がよく家族ぐるみの付き合いをしているが、決してお互い特別な感情なんて持ち合わせちゃいないわけだ。二度は言わんぞ。これ以上口で言つても分かん奴は先生終いには殴るからな。体罰なんて先生少しも怖くないぞ、これは愛の鞭なんだ。いいか、お前ら。先生はお前らの事を本気で——」

「はいはい、分かったよ、純君。分かったから、戻ってきて」

「——おう。分かればいいんだ」

なんだ、ほんと素直でいい子達だな、この野郎。

「つまり、なんだかんだ言つても、夏菜のことが気になるんだろ？ 友達として」

友達を強調してそう言いつつ、大樹は俺の前の席にどっかりと座り込んだ。

「まあな。俺はまだ女と付き合ったこと一度もねえし、夏菜もそうだろ。だから、ちよっと気になったわけだ。つつか、話が唐突すぎるっての」

俺の言葉に、大樹はクスクスと笑ってから「そうか」と言葉を発した。そして、大樹はおもむろに席を立つと、麗美の傍に立ち、麗美の腰に手を当ててぐっと自分の方へ引き寄せて、麗美の肩を抱いた。って、おいおい……。

「純。付き合うつて事は、こういうことだ」

そして、大樹は麗美の唇に自分の唇を軽く重ねた。うん。フレンチキスってやつだな。

「っへへ。分かったか、純？」

おお、なるほど。なんて分かりやすい答えだ。さすが大樹。我が親友。

「てめえ、表出ろ、ごらあ！」

「うるせえ！ さっきの仕返しだ！」

んで、取っ組み合う俺と大樹を、慌てて麗美が仲裁に入りましたとき。

7・ただの幼馴染

あー、ちつくしう。胸くそ悪い。これも全部大樹のクソ馬鹿ア
ンポンタンのせいだぜ、全く。今度、麗美に隠れて女とデートして
たことチクツちゃうぞ、この野郎。

「純君！ ちよっと、待って！」

ん？ おう。こちら機嫌悪いのになに馴れ馴れしく声かけてき
てんだ、誰だよん殴るぞこら、と握り拳を作りつつ振り返ってみ
れば、なんだ麗美か。噂をすればなんとやらだな。けけけ、大樹め。
今日がテメエの失恋記念日だ。覚悟しろい。

廊下を駆けてきた麗美は、俺の傍まで来ると息を切らしながら心
配そうな顔をして俺を伺ってきた。いや、私は別にあなた様がこち
らに駆けて来る際に、元氣よく揺れるあなた様の豊満なお胸様に目
を取られていたわけではありませんよ？

「お、おう。どうした麗美？」

随分と神妙な顔をして俺をじっと見つめてくる麗美。そんなに見
つめちゃ、いやん。

「……やっぱり、怒ってる？ 大樹のこと」

「え？ いや、いや、怒ってねえよ？ ただ、ヤロウは張り倒して
やらなきゃ気が済まねえだけだつて」

「やっぱり、怒ってるんじゃない……」

そう言つて、麗美は項垂れた。つて、あれ？ どうした、麗美。
いつもの気の強いお前はどこへ行った。ほら、あの時大樹に向けた
鬼面を思い出して。

「私もあれは大樹がデリカシーなかったと思うよ。でもね、あれは
あれで大樹も純君に気を遣ってたんだよ？」

「ほう。私には、奴は面白がっていただけのように見えましたか？」
「違うよ。純君なんだか辛そうだったから、大樹も純君に元氣出し
てもらおうと思つてああやつてはっぱかけたただけなんだよ。大樹に

悪気はないの。だから、気を悪くしないで？」

「いや、俺は少しも辛くななどないぞ」

「そう見えたの。私にも、大樹にも」

「でしたらお二人とも眼科へ行くことをお勧めします」

俺の言葉に、麗美は「もう」と言って呆れたように小さく笑って息をついた。

「とにかく、大樹とは仲直りしてね？ 大樹も反省してたから。こんなことで、二人の仲が悪くなるなんて、私やだよ」

「……なんだ。わざわざ、そんなこと言うために追いかけてきたのか？」

「そんなことで悪かったですね。でも、大樹は私の大事な彼氏だし、純君は私の大事な友達なの。私にとっては、そんなことじゃないんだから」

そう言ってイーと歯を見せる麗美。なんだよ、麗美ってこんない奴だったの？

「お前……いい奴だな」

「あら、心外。今頃気付いたわけ？」

そう言って笑う麗美を見て、俺もつられて微笑んだ。

「ま、心配すんな。俺って見かけによらず単純だからな。明日になれば大抵のことは忘れてる」

「ってか、見たまんまだよ」

「うっせ、バカ」

目を見合わせて、俺と麗美は一緒になって吹き出した。ああ、なんか、麗美のおかげでだいぶ気分晴れたな。仕方ねえ、麗美に免じてここは他の女とデートしたことは黙っててやるぜ、大樹。命拾いしたな。その代わり麗美を大事にしろよ、この野郎。

「よし。すつきりしたところで教室戻ろっか」

そう言って振り返った麗美に、俺は「あー、俺、購買行ってくるから」と言った。

「え？ どうして？ 今日夏菜が弁当持ってきてくれてるでしょ

？」

そう言つて怪訝な表情を作つて俺を見る麗美に、俺はふうとため息をついた。

「あのね、君。俺が夏菜に弁当恵んでもらつちや、王子様が気を悪くなさるだろ。それぐらい気がつきなさいな」

「……それはそうだけど、いきなりそんな遠慮しなくてもいいんじゃないかな。いきなり弁当いらないなんて言つたら、夏菜だつて戸惑うと思うよ。そんな風に気を遣われて純君との関係がギクシャクするのが嫌で、夏菜も金田先輩の事、純君に話せないでいたんだから」

「へえ。じゃあ、麗美は知つてたんだな。夏菜と金田先輩が付き合つてたこと」

「え……それは誤解だよ。三日前に金田先輩に告白されたつて事は夏菜から聞いてたけど。付き合うことにしたつて事は私も今日純君に聞かされて初めて知つたんだから」

「ふうん。ま、俺に遠慮なんてする必要ねえよ。俺と夏菜はただの幼馴染なんだしな」

「ほんとに？」

俺の言葉に、麗美はそう言つて、真面目な顔して俺を見つめた。

「ちゃんと言葉にしないと、気持ち伝わらないよ。純君は、本当にそれでいいの？」

「……じゃな」

俺は麗美にひらひらと手を振つてから、購買に向かった。

8・遅刻確定

さて、購買に到着。そうそう、いつも弁当持ちの俺は購買などと俗な場所へは滅多に足を運ばないのだが、噂では、昼休みは毎日この場は飢えた狼たちで溢れかえっているらしい。しかし、どうだ。昼休みも半分過ぎれば、兵どもが夢の跡。戦争は早期終結を見たらしい。いやあ、めでたいめでたい。これで、落ち着いてパンが買えるぜ。

「おばちゃん。カレーパンと、メロンパンと、焼きそばパンと、ハムカツと、卵サンドと、三食パンと、チョコデニ（チョココレートデニッシュ）と、チーグラコロ（チーズグラタンコロツケパン）ちょうだい」

「……全部売り切れだよ」

白い目をして俺を見ながら、そう言葉を発するおばちゃん。おいおい、おばちゃん。相手がいくら学生だからって、お客様に対してそんな白けた態度とっていいのかい？ ツッコんでくださいよ。

「じゃ、アンパン一つで」

初めからそうしろよ、と言いたげな冷たいおばちゃんからアンパン一つをゲットして、俺は閑散とした購買を離れた。ちくしょう、シケた昼飯だぜ。つうか、ウチの購買品揃えも量も少なすぎるんじゃない？ 大量売れ残り覚悟で今日から普段の二倍量を揃えますぐらの心意気はないのかね。商売人の血をこうメラメラと騒がせて——って、あのおばちゃん、ただのパートか？

まあ、いいや。オイラは一人で寂しくアンパン一つで昼食だい。教室戻って、夏菜と顔合わせんのもなんか気まずいしな。というわけで、アンパンをかじりながら校内をぶらぶらと歩いていると、頭に浮かんでくるは麗美の言葉。

（ちゃんと言葉にしないと、気持ち伝わらないよ。純君は、本当にそれでいいの？）

いやいや、俺にどうしろと？ 確かに、夏菜が男と付き合うことに関しては釈然としないというか、胸がムカム力するというか、でもこれって、多分、突然のことで戸惑ってるだけだろ、俺？ なんつーか、思春期の娘に彼氏ができて父さん悲しいよーみたいな？ もしくは、てめえ、ごら！ ウチの可愛い娘に手え出すんじゃないやねえ、ごるらあ！ みたいな？

夏菜とは昔から仲がよくて、でも、それはきつと、恋とかそういうのじゃなくて。俺たちの関係を言い換えるなら、それはきつと兄妹みたいなつながりだから。

夏菜だって、きつとそう思ってる。だから――。

「……アホくさ。なに一人でブルー入ってんだ、俺」

はあ、とため息をつき、アンパンをもう一口。ああ、ちくしょう。おばさんの手作り弁当が恋しいぜ。愛情に飢えた僕さんの胃袋に、アンパン一つじゃ物足りないの。ってあれ？ 確かアンパンには、愛と勇気が詰まってんじゃないやねえの？ あ、ただの友達って歌だった？

どうでもいいことを考えながら渡り廊下を歩いていると、向こうから歩いてくる四人組の女子の集団とすれ違った。うん。別に関係ないのだが、なんか、お友達同士って感じじゃなかったもんだから、なんとなく気になって俺は足を止めたわけだ。

三人が一人を囲むようにして歩いているその姿は、仲良しというより、どう見ても連行でしょ。まあ、そんなことより、左右後ろを囲まれて歩く女の子の表情のない虚ろな顔が気になったわけだ。なんか、迷子の子猫ちゃんみたいに、キョロキョロと周りを見回してたが、明らかに様子がおかしい。それで、何かその子とどこかであったような気がすんだよな、俺。あ、いや、ナンパの常套手段じゃないよ？ あくまで俺の正義感がうんたらかんたら。さて、後を追うか。

ウチの高校は五棟の内、四棟が新校舎で残りの一棟はほぼ人の立ち寄らない旧校舎でできている。それで、四人はなぜかまっすぐ時々辺りを気にしながら、旧校舎を目指しているようだ。いやはや、

尾行も楽しじゃねえな。こうしきりに振り返られちゃ、目が合った時
すつとぼけるのも大変だ。世のストーカーの苦勞を身^もを以って知る
今日この頃。

さて。案の定、四人は旧校舎の裏側の方へ姿を消した。これはも
う、あれでしょう。ここまで来たら、人に見られちゃまずいモンが
校舎の裏側で展開されてんでしょ。さて、どうしたものか。と旧校
舎の壁に寄りかかって考え込んでいると、あら不思議。争い声も何
もあつたもんじゃねえ。すぐさま女の子三人が旧校舎の裏から出て
きましたとさ。

「おう、そうだよ！ てめえ人をこんなとこに呼び出しといてなん
のつもりだよ！ ああ？ すぐ来るって！？ じゃあ、三十秒以内
にすつとんで来い、ごらあ！」

すかさず、携帯電話をポケットから取り出し、一人演技開始。さ
て。ケータイをポケットにしまうと、女の子三人はいかにも不審者
を見るような目で、俺にご注目。いや、イタイイタイ、そんな目で
見ないでください。

ああ、駄目だ。この状況は、口で説明して何とかかなりそうもない。
だって、僕口下手だもん。

「……おう、ごら。てめえら、なに見てやがんだよ」

開き直って片手をポケットに突っ込み、ガブリとアンパンに喰ら
い付きつつ、女の子たちをガンつける。すると、女の子たちは、無
言で逃げるようにその場から立ち去っていった。

——まあ、見覚えのない顔だったし、見た目からしてあの子達は新
人生だろう。うん。問題ないだろ。うん。お願いだから、俺の顔は
忘れてください。

にしても、やはり校舎の裏から出てきたのは三人だけだった。そ
して、案の定あの三人に囲まれて歩いてた子は校舎の裏から出てこ
ない。一体全体どういうこっちゃ。

考え込んでいると、昼休み終了五分前の予鈴が鳴った。やべえ、
時間がねえ。男なら、バツと。そう、もうバツと行っちゃって。

思い切って旧校舎の壁から顔だけを出し、恐る恐る裏の様子を伺う。すると、どうだ。校舎と壁に仕切られた隅っこに、さっきの女の子が一人ぼつねんとしゃがみこんでいるではないか。

「……？」

なにやってんだ、あれ？ てつきり、あの三人組にかつあげでもされるのかと思っていたが、そうと思いき争い声はまったく聞こえてこなかった。そんで女の子は一人取り残され、しゃがみこんでなんか地面を見てる。身じろぎもせず。いや、もう、一体全体なにがなんだか意味分かりませんから。

「なあ、そんなとこでなにやってんの？」

そろりと女の子の元に近寄って、背後から声をかける。すると女の子はゆっくりと顔を上げて俺を振り返り、なんのリアクションもせず、もう一度ゆっくりと地面へと目を戻した。

いや、今、目が合ったのになんでシカト？

「あ、あのさ。君、新入生？ そろそろ教室戻らないと授業に遅れんぞ？」

俺の言葉をなおも無視する女の子。うわ、なんか俺今すげえイタイ奴じゃね？ ナンパしてシカトされる野郎と同じぐらいイタイ奴じゃね？ クスン。でも泣かない。男の子だもん。

「四葉のクローバー……」

「え？」

「お姉ちゃんが言ってた……」

しゃがみこんで地面を見つめたまま、唐突に小声で言葉を発する女の子。なにに、「四葉のクローバー」に「お姉ちゃんが言ってた」？ いや、さっぱり意味が分からねえ。つつか、しゃべるならとりあえずこつち向こうよ、君。

「えーと……つまり四葉のクローバーを探してんのか？」

「幸せになれるって言ってたから探してあげるの……」

おう。話が見えてきた。つまり、この子はお姉ちゃんの幸せを願って今四葉のクローバーを探してあげてるわけだ。うん。泣かせる

ねえ。しかし、お兄さんはこの子に教えてあげるべきでしょうか？
君の足元にあるのは雑草で、クローバーなどこの一辺には姿形も
見当たらないよって。

「お姉ちゃんはどこ……？」

「お、おい……」

「お姉ちゃんは天国にいるの……」

果たして、この子の目に俺は映っているのだろうか。女の子は唐
突に立ち上がると、俺の横を素通りして歩き出した。

ここに来て、俺の疑問は確信に変わった。この子の虚ろな顔を一度
見た時に感じたが、どうやらこの子は何らかの障害者らしい。そし
て、かつあげなどよりよほどたちの悪いことをあの三人組がこの子
に対してしたことも理解できた。

「な、なあ、君一年だろ？ 何組が分かるか？ 自分の教室の場所、
分かる？」

「四葉のクローバーはね、幸福の象徴なんだよ……」

旧校舎の壁に片手を当てながら、ゆっくりと歩いていく女の子。
そのおぼつかない足取りは、頼りなく不安定で、どうやらこの子を
ほっというて一人教室に戻ることはできそうになかった。

「……いや、いや、ちよつと待て。物凄く嫌な予感がするのだが、
俺の記憶が確かなら次の授業は確か……」

と、ここでタイムアウトを告げるチャイムの音が無情にも鳴り響
いた。

「……数学？」

食べかけのアンパンがポトリと地面に転がった。

9・教育的指導

「長谷川君？ 昼休みにここで先生に言ったこともう一度言ってみてくれる？ なんだか、先生度忘れしちゃったみたいなの」

キレイな笑顔を俺に向け、穏やかな声で言葉を発するは、マドンナこと我が担任数学教師、神楽先生。いやあ、それにしてもさすがは、神楽先生。もう二度と遅刻しませんという誓いをたった三十分足らずで破った不届きな生徒を前にして、この落ち着きぶりはどうだろう。そうそう、人にはそれぞれのつぴきならない事情があるもので、まずは生徒を信頼してそののつぴきならない事情を問いただすのがあるべき教師の姿ですよ。うん。で、なんで俺今職員室の床に正座させられてんスか？

「あの、神楽先生。とりあえず、俺の話を聞」

「今のお前に発言権はねえ」

キレイな笑顔のまま、黒い台詞を吐く神楽先生。ちょっと、ほら。周りの先生方があんたの迫力に引いてますから。

「で、長谷川君？ 昼休みに先生になんて言ったつけ？」

「……今後絶対遅刻しません。今までのことも全力で謝ります。だから、夏菜の遅刻分を俺に回してください。お願いします」

「そうそう。そんなこと言ってたね？ 土下座までして、正直先生あれはウザイったらなかったな」

そう言つて、やはりキレイな笑顔のまま、俺の足を椅子に座ったまま、ゲシゲシと蹴る神楽先生。いや、痛え！ 痛え！ あんたの拷問（五時間目の授業遅刻した罰に、以降の授業、休憩時間ぶつ通しで床に正座させられてました）のせいで今俺の足痺れまくってますから！

「先生、長谷川君のこと信じてたんだよ？ ねえ、信頼してた可愛い教え子に裏切られた先生の心の痛みが分かる？」

いや、痛えのは俺の足だから！ 足蹴らないで、足！ ってか、

信賴してんならまず遅刻の理由聞け、ごらあ！

「ん？ なに、その目。何か言いたいことでもあるの？ 遠慮しなくてもいいんだよ？」

しかし、俺の足を蹴る神楽先生の蹴りの威力がヒートアップし、俺は「あう、あう」とまともに言葉を発せぬまま、とうとう正座を崩し、床に転がり込んだ。が、神楽先生は陸に打ち上げられた魚のごとくまともに動けない俺に情けもかけず、俺の足をなおもゲシゲシと蹴り続ける始末。……この人絶対Sだ。つつか、これって体罰じゃね？

と、そこで職員室の扉が開き、一人の教員が職員室の中に入ってきた。その眼鏡をかけた柔和な顔をした若い男性教師は、職員室の片隅で繰り広げられている光景を目の当たりにし、一瞬絶句した後、恐る恐るこちらに近付いてきた。

「あ、あの、神楽先生？ 一体なにを……？」

「あ、どうも、白川先生。お気になさらないください。ただの教育的指導ですから」

しかし、あう、あうと鳴き声を上げる俺を見て、白川先生は「あれ？ その子、確か長谷川君ですよ？」と声を出した。

「あら、白川先生。あなたの受け持ちは一年生でしたよね。この馬鹿のことをご存知ですの？」と白川先生に笑顔を向けた後、神楽先生は「お前はまたなにやらかしたんだ？ あ？」と俺をにらみつけながら、ドゲシ、ドゲシと今度は俺の足を上から踏みつけ出した。

「……！ ……！」

声も出せず反り返る俺。そして、白川先生は笑顔で「いやあ、実は昼休みにウチの生徒の一人がいなくなりましたね。実はその生徒というのは、ちょっと障害のある子でして。長谷川君は、わざわざその子をウチのクラスまで送り届けてくれたんですよ。いや、ほんとに助かりました」と言い放った。

「……え？」

途端に、引きつった声を出して固まる神楽先生。そして、ようや

く地獄から開放された俺は、カサカサとゴキブリのごとく地面を這い、神楽先生から逃げ出した。

「で、どうしたんです？ 長谷川君、何をしたんですか？」

「え？ あ、いえ、大したことじゃないんですよ。ほほほほ……」

あー……。とりあえずぶん殴っていいですか、クソヤロウ。

「……あ」

「あ……純」

ようやく誤解も解け、職員室から出ると廊下でばったり夏菜と出くわした。いや、出くわしたというか、どうやら夏菜は職員室の前で俺が出てくるのを待っていたらしい。いや、まあ、昼休みのアレからまともに言葉も交わしてなかったしな。話はせずとも、お互い気まずい空気は感じていたわけですよ。しかし、まあ、僕ちゃんには気まずい空気の中「よう、夏菜！」と切り出す度胸がなかったわけ。正座地獄でそんな余裕もなかったわけ。今立っているだけでも非常に辛いわけで。

「い、いよう、夏菜……」

「……だいじょぶ？」

ガクガクと足を震わせ、しまいには廊下に座り込む俺を見て、夏菜は目を丸くした後、心配そうな顔をして俺に声をかけてきた。

「いや、マジでひでえ目に遭ったぜ。こちらら人助けしてきただけだつてのに、なぜあんな拷問を受けなきゃなんねえんだ。訴えてやるぞ、コンチクショウ」

俺の言葉に、夏菜は「純は素行が悪いから」と言って苦笑した。ちなみに、六時間目の授業の際に全力で自分の無実を訴えてますから、クラスメイトの皆さんは、俺の無実を知ってます。はい、誰一人神楽先生には意見できませんでしたとき。

「いや、いや、そこは素直になれない可愛い生徒の善行を導き出してあげようよ。教師として」

「そんな押し付けがましい教師の理想像を神楽先生に求めてもねえ……」

「だな……」

今、男子生徒の声援を「うるせえ」の一言で切り捨てる神楽先生が頭に浮かびました。

で、話題がなくあえなく黙り込む俺たち。いや、いや、恐れていたことが現実。チョー気まじい……。つてか、夏菜と二人つきりでいて、こんな風に気まずい空気が流れるなんてこと、考えてみれば今まで一度もなかったな……。

「——ごめんな」

とにかく、今俺にできることは謝ることだけだった。

「え……」

「弁当。せつかく、おばさんが作ってくれたのにさ。おばさんに謝つといて」

「あ……うん」

「もう明日から俺の分は作ってくれなくていいって、おばさんに言つといてくれな」

そばで夏菜の視線を感じる。でも、夏菜がどんな顔をして俺を見てるのかは、夏菜の方を見てないので分からなかった。そのまま夏菜の顔を見ずに、俺は腰を上げた。

「部活あんだろ？ 早く行かねえと遅刻すんぞ。じゃな」

「あ……純。今日、話したいことがあるから、帰ったら——」

ひらひらと手を振って、俺は振り返らずにその場を後にした。

10・南結華（みなみゆいか）

はあ……自分の不甲斐なさのため息が出る、今日この頃。聞いた
いことも聞けず、言いたいことも言えず、その場から逃げ出すこと
しかできなかった腰抜けの俺を誰か罵ってください。いや、冗談で
す。本気で罵らないで。

つつか、言いたいことって何だよ。聞きたいことって？ おお。

今のうちに考えとかなきゃなんねえじゃん。夏菜の話ってのは当然、
金田先輩のことだろ？ ここは二人の馴れ初め話でも聞いてやって
場を盛り上げて——駄目だ、スベる確率120パーセント。大体、
麗美が夏菜は金田先輩に告られたつつてたじゃん。どう転んでも
話逸らせねえし、って逸らしてどうする俺！ 可愛い娘が我が手か
ら離れていくのは辛い、これも娘の幸せのため！ 耐える！ 耐
えるのだ俺！ そして、世のお父様方、あんたらこんな葛藤に打ち
勝つなんて、すげえの一言しか思い浮かびません。あんたら、大し
たハゲだぜ。

はあ……疲れた。

「ちよつと、言いがかりよしてよ！」

……ん？

職員室の廊下を出て、まっすぐ昇降口へ向かっていると、途中で
女の子の金切り声が聞こえてきた。どうやら、声の元は一年生の昇
降口付近。そして、その前を通りがかっていた俺は、なぜか反射的
にそばにあった渡り廊下の柱の影へ身を潜めてしまった。

……いや、なぜか体が反射的に勝手な行動を。

「わ、私はただ、昼休みに鈴木さんたちが沙里さりと一緒に歩いてると
ころ見たって言う人がいたから——」

「だから、あんた私たちがやったって言いたいんでしょ！」

「そ、そんなことないよ。ただ——」

「ただ？ ただ、なんだよ！？ おもつきし疑ってんじゃねえかよ

！」

うお。麗美以外にもそんな汚い言葉遣いをする女の子がこの世に存在したのか。あ、いや、麗美も普段はそんなじゃないけど、キレたら、あんな風になります。ただし、麗美の名誉のために言っとくと、大樹とのケンカ以外ではそんなとこ見たことないけどな。

おっと。いらないこと言ってる間に、なにやら険悪なムードがこちらにまで漂いだしてきたな。

「お前、何様のつもりだよ！ 学級委員でちょっと可愛いからって調子乗ってんじゃねえよ！」

うおお。これまた今時、そんないかにもな因縁をつける人間がまだ現代に存在しているとは。これは、思った以上の希少種だ。是非ケータイに収めておかねば。

「わ、私は——」

「んだよ！ そんなに疑うなら、本人に直接聞けよ！ まあ、あいつがまともにしゃべれたらの話だけど！」

そう言って人を馬鹿にしたような笑い声が響くと、遅れて複数の笑い声が重なった。が、その笑い声は、すぐにかき消されることとなった。

「——人でなし！」

大人しい印象の女の子の怒鳴り声に、一瞬だけ、時間が止まった。

「……あ？」

「何も知らないくせに！ あなたたち卑怯よ！ よってたかって、恥ずかしくないの！？」

「んだと、てめ——え？」

「……あ」

……し、しまった。柱から顔を出して、こっそりケータイのカメラで現場を収めようとしたら、目が合った。女の子に掴みかかっている女の子と。

「——え？」

さて、その場にいる四人の女の子全員がこちらに目を向けて、さ

あ大変。この状況どうしましょ。

「おう！　ここで待ち合わせのはずだろ！　そうだよ、一年の下駄箱前だよ！　あ？　ちげ、ちげえって、おま——はあ！？　もういいよ、俺帰んからな！　付き合ってらんねー！」

また懲りもせずケータイを耳に当て、一人演技開始。はい、案の定、女の子達全員キョトン顔。よい子のみんなは絶対真似しないでね。多少気まずくても、こういう場合は無条件でその場から逃げ出しましょう。じゃなきゃ、俺みたいに立ち去りたくてもこの如何ともし難い空気の中で身動き取れなくなりますから。

さて。戦況は我が軍が大いに不利である。見た目ギャルっぽい女の子は、おさげ髪の大人しそうな女の子の胸倉を掴んだまま、どうしていいか分からずそのまま固まり、こちらの様子を伺っている。また、掴みかかられている女の子も同様だ。そして、ギャルっぽい女の子の後ろに控えている二人の女の子は、険しい顔をしてなにやら内緒話を始めた。

ふむう……まずい。ここは潔く戦って散るべきか（とりあえず状況説明してみる？）、敵前逃亡（こんな空気にしといて、なんの責任も取らずに逃げちゃう？）するか……って、あれ？　こいつら、どっかで見た面だと思ったら、昼休みの時のあの三人組じゃね？

「お、お前ら、あん時の三人組だな！」

っと、そうと分かったら、思わず声が出ちゃった。ああ、そうさ。元を辿れば、あの無意味な拷問の原因はすべてこいつらのおかげなのさ。そこに直れ、てめえらっ！

「えっ……あ！」

そして、俺の指摘に、三人は三人とも訝しんだ後にはっとして声を出し、そういうあんたはあん時の挙動不審なキモ男じゃん！　ってなりアクション——って。

「誰がキモ男だ、こらあ！」

「はあ！？」

あー、もうこうなったらヤケクソだ。状況説明も逃げるのももう

ヤメヤメ。男なら、開き直って、直進あるのみ。さあ、男の生き様を見せてやれい。

「テメエらのせいで俺がどんだけひでえ目に遭ったと思ってんだ、ごらあ！ 昼休みに今後もう二度と遅刻しませんって誓つていて、いきなり次の授業遅刻して延々正座させられて、放課後まで教育的指導という名目の体罰受ける羽目になったんだぞ、ああ！？ つうか、テメエらがあの子（障害のある君）旧校舎の裏に置き去りにしてくのは、ばつちし、きつちりこのお目目が見てるってよ！ その子の言う通り、てめえら、揃いも揃っての人でなし共だな、ああ！？ まだ疼くこの足の痺れどうしてくれ——」

「あ、あの……もう、みんないませんけど」

恐る恐る女の子が俺に声をかける。はい。昼休みに、の時点で三人組が「キモツ」という残酷な捨て台詞を残してその場から立ち去ったことは知っていました。知ってましたけど、大人しそうな女の子とたった二人この場に取り残されて、あまりにも気まずいあまり、大人しそうな女の子の方から声をかけてくれるのを待っていました。すいません、相も変わらず腰抜けで。

「お、おう。なんだ。口ほどにもない連中だな」

「……」

いや、イタイイタイ。そんな目で見ないでください。

黙ってじつと俺を見つめてくる女の子の視線に耐え切れず、俺はそそくさと声を出した。

「あ、あーと、じゃあ、俺はこれで」

「あ……待ってください」

「——ほえ？」

つて、やばっ。引き止められるとは思ってなかったもんで、間抜けな声が出ちゃった。オーマイガッ！

「あの、あの時、沙里^{さり}を教室まで連れてきてくれた人ですよね」

察するに、沙里とは昼休み（過ぎ）に教室まで連れて行ったあの子のことらしいな。

「あ、ああ。うん。まあ、その、そうらしいね」

「どうも、ありがとうございました」

そう言って、女の子は俺に向けて丁寧にお辞儀をしてきた。うお、なんて礼儀正しい女の子だ。

「あ、いや……別に君にお礼を言われるようなことでは——つつか、あの状況じゃほっとけねえし、なくなかつつうの？　だから、別にお礼言われることではないつつうか」

って、やべ。なに緊張してんだ、俺。

「沙里は私の大事な友達なんです」

そう言って、今度は小さくぺこりと頭を下げてから、女の子は控えめに微笑んだ。

「ありがとうございます。長谷川先輩」

「お、おう。って、あれ？　何で俺の名前知ってんの？」

「沙里を連れてきてくれた時、先輩自分の学年とクラス、それと名前先生に言っていましたよね。私、沙里と同じクラスだから」

「あ、ああ、そういうことか」

「私、みなみゆいか南結華みなみゆいかって言います。本当に、沙里のことありがとうございますしました。じゃあ、私部活あるのでこれで失礼します」

「お、おう」

南はまたぺこりと俺に頭を下げると、渡り廊下を駆けていった。

いや、いや、それにしても今時珍しい礼儀正しいいい子だったな。

うん。みなみゆいか南結華ちゃんか。今時おさげ髪とは随分古風というか、地味

というか、まあ、あの子の場合はいいい意味で似合ってるからいいんじゃないね？　もつとも、結構な可愛いこちゃん（私語）だったから、

もつと派手にしても問題ナッシングだろうな、うん。おそらく密かにクラスで男子から人気を集めていることだろう。性格もよさそうだったし、なにより、友達思いだったしな。にしても、あの三人組は是非あの子のなんちゅうか、慎ましさっ—もんを見習うべきだ。柱の影からこっそりケータイのカメラで隠し撮りしてる野郎は確かに「キモっ」以外の何者でもないがな。

「……帰るか」

とにかくにも、これ以上のイベントをこなす元気も残っていませんので、俺はさっさと一人寂しく家路に着いた。

11・お守り

一人で帰りながら、ふと思った。俺と夏菜の家は近所だから、今まで夏菜が部活がない時は、当たり前のように二人一緒に帰っていたし、大樹や麗美と遊びに行ったりもしていた。でも、そんな当たり前のことも、夏菜が金田先輩と付き合う以上、できなくなるのかも、と。

いや、かもじゃなくて、そんなことは当たり前のことだった。そして、それが夏菜が望んだことならば、俺はそれを尊重してやりたい。少し……つか、かなり寂しいけど、夏菜がそれで笑ってられるなら、それでいいじゃね？

いつまでも、仲のいい幼馴染じゃられない。ガキの頃とはもう違うんだから。

そう。分かってる。ただ、夏菜の隣にいられないことが、こんなにも辛いなんてことに、今の今まで気付かなかった自分に腹が立つただけだ。

「ただいまー……」

と、言っても家には誰もいないのだが、とりあえず、ただいまを言ってしまうのは意味のない習慣だ。まあ、親父は仕事でいつも帰ってくるのは夜十時を回るし、お帰りを言ってくれる人間なんて家にはいない。毎日のように家に遊びに来ていた小さかった頃の夏菜の気持ち少しは分かるってものだ。この歳になって寂しいなんていう趣味はないけどな。

さて。今日はいろいろとありすぎて疲れた。夏菜と金田先輩のこととか、夏菜と金田先輩のこととか、夏菜と金田先輩のこととか、

さあ、全てを忘れて眠ってしまおう。レッツ現実逃避だつてばよ。

部屋に戻ると、俺は鞆を投げて、すぐさまベッドの上に倒れこんだ。ちらりと見ると、目覚まし時計は、四時四十三分を差していた。

真っ白で清潔なその部屋に、ビーズの様々に光るキレイな色彩はすぐ映えていた。陰鬱なその部屋の窓際のベッドの上で、午後のどこか気だるい日差しを浴びた女の子の横顔は、果てしなく静かで、病的に青白かった。

——惹かれた。

なぜか、視界にその女の子が映った瞬間、身動きが取れなくなった。好きとか嫌いとか、そういった感情はまだよく分からなくて。ただ、テーブルの上で日差しを反射した、ビーズのきらめきが、ただただ鮮明に眩しくて、その眩しさに気を留めてそこに立ち止まっていたのに、いつの間にか、彼女から目が離せなくなっていた。

やがて、病室の前にポケットと突っ立っていると、顔見知りの看護師さんに背後から声をかけられた。その看護師さんの無遠慮な大声は、前々から鬱陶^{うつとう}しくてしょうがなかった。そして、やっぱり俺は、その看護師さんを好きになれそうにはなかった。

どうしたの、ボーとしてとかなんとか、耳の外で無遠慮な声がしていたけど、こっちに気付いた彼女と目が合って、それどころではなかった。どうしていいか分からず、なぜか悪さをして叱られた後のような後味の悪い気分弾かれて、俺はその場から走って逃げ出した。

出会いというほど直接的なものではないけど、それが彼女との初めての出会いだった。陰鬱な部屋の片隅で、彼女という存在は当たり前のようにそこに溶け込んでいた。その意味を深く知ろうとしないうちに、彼女と関わり合おうとした俺は、やっぱり馬鹿だったのか

もしれない。でも、その頃俺の心を支えていてくれたのは、多分、彼女だった。

ドンガラガツシャーン！

「……んあ？」

なにやら、ド派手な音がして目を覚ました俺は、まだぼんやりと夢の世界を行き来している思考回路を持て余しながら、とりあえずベッドから体を起こした。いつの間にか部屋は薄闇に包まれていた。カーテンもしていないのにと、そんなにも寝入ってしまったのだろうかと部屋の明かりをつけて、目覚まし時計に目をやると、目覚ましはまだ五時半を少し回った辺りをさしていた。

少し湿った匂いが部屋の中に匂い立つ。窓を叩く激しい雨音が突然の天候の変化を告げていた。そして、派手に鳴り響く雷の音が空気を劈いて、窓の外で稲光る。

「……おいおい」

確か天気予報では、梅雨の到来はまだ少し先だと言っていたはずだが。しかしまあ、もう六月に入れば天候なんて人間の気分並みにコロコロ変わるもんか。それにしても、これじゃあ、降水確率0パーセントって言い切った気象庁の立場なくね？ 今頃抗議の電話でも鳴り響いてたりして。洗濯物てめえらが取り込みに来いごらあ！ いや、いや、ご愁傷様です。

って、そういや、夏菜は今日、傘持ってたかな。いや、降水確率0パーセントで傘持参ってどんだけ他人を信用しない根暗だよ。にしても、この雷ってやばくね？ 夏菜の奴、今頃口から泡吹いてぶっ倒れてるかもな。昔から、雷とゴキブリと納豆だけは大的苦手なんだよな、夏菜の奴。って、言ってる場合じゃねえな。仕方ねえ。この雨じゃ部活の練習も切り上げてるだろ。ここは、心優しきこの

俺様が救いの手を差し伸べてやるか。

「ったく、しょうがねえな……」

面倒くさがる体を起こし、頭を掻く。その時、ふと左手首にいつもつけてるお守り代わりのビーズのブレスレットが視界の中に入ってきた。

「……いくか」

ため息を一つついて、俺は足早に部屋を後にした。

12・ピエロ

大雨の中、苦勞して学校までたどり着いた俺は、校門をくぐった。さて、夏菜はどこだろうな。ここに来る途中、グラウンドを見てみたが、案の定、大雨の中練習を続行してる熱血馬鹿は野球部の連中だけだった。がんばれ、少年たち。その血と汗と涙の結晶はやがて君たちの宝物となるだろう。ってか、雨に浮かれてはしゃいでる連中ばかりでした。こりゃ、今年も地区予選敗退決定だな。大人しく校内で筋トレでもしてるアホ坊主共。

おっと、あんなアホな連中は置いといて夏菜はどこだろうな。夏菜……お、二年の昇降口付近にたむろしてる数人の女子の中に夏菜の姿発見。よし、待ってる夏菜。そして、感謝しろ。心優しい俺がわざわざこの大雨の中傘を持ってきて――。

「おい、大山！」

「――！」

悠々と夏菜のいる昇降口へ近付こうとした矢先、いきなり響いたその声に、俺は慌てて方向転換。はい、校舎の影に身を潜めました。って、またこのパターンかよ、おい！ いい加減にしろ、ごらあ！

どこのどいつだ、テメエ、ああ！ と威勢良く校舎の影から、こっそり昇降口の様子を伺うと、あら不思議。そこにはなんと傘を片手に立っている王子様、もとい、金田先輩の姿が。おいおい、金田先輩。あんた爽やかハンサム様のくせして、実は他人を信用しない根暗野郎だったわけ？ ふむう……非常に残念だよ、金田君。君が実はそんな人間だったとは。まあ、アレだな。非常に言いづらいが、君のような人間にウチの大事な娘はやはりやるわけにはいかんよ。ん？ なに？ 勘違いですお義父さん？ 黙らっしやい！ 君にお父さんと呼ばれる筋合いなどない！ どうごまかそうと、君は降水確率0パーセントという天気予報を信用せず、傘持参じゃないか！

言い逃れはできんぞ、けーっけけけ！

「――あ……」

と、くだらない妄想を繰り広げていると、金田先輩と夏菜が肩を並べて昇降口から仲良く出てきたではないか。

うん。あれは、うん。あれだ。世間一般で言う、そう。相合傘と
いうやつだ、うん。

「……」

楽しそうに金田先輩と話しながら校門を出て行く夏菜に声をかけることも出来ず、俺は立ち尽くしたまま二人の姿が雨の線に消えるまで、馬鹿みたいに黙って見送った。

……なんだよ。夏菜の奴、嬉しそうだったじゃん。

ってか、当然か。好きな奴と相合傘だもんな。そりゃ嬉しいだろ。ああ、それに端から見ても、あの二人お似合いじゃねえか、うん。

――さてと。ピエロは一人寂しく退散するとしますか……。

「……ん？」

そそくさと、校門を出ようとした俺の目にふと妙なものが映った。二棟の校舎の昇降口前。遠くに見えるそれに目を凝らしてみる。すると、雨の線に紛れて、今度ははつきりとその姿が浮かんできた。

この大雨の中、傘もささずにぼんやりと外に立ち、雨に打たれるままになっている誰か。遠目から、その人物が誰かまでは分からなかったけど、なにをしているのかはますます持つて分からなかった。心配半分、好奇心半分。俺はゆっくりと、その人物の元へ近付いた。

その誰かは、こちらに背を向けて、空を仰いでいた。身じろぎもせず、まるでこのまま雨の中に溶けてもいいと言わんばかりの哀愁を漂わせたその華奢な後姿が誰のものか、すぐそばまで近付いた頃には、もう思い当たっていた。

背後から、さしている傘をそつと彼女の頭上に持つていく。しかし、無反応な彼女に苦笑して、俺は構わず声をかけた。

「風邪引くぞ？」

やがて、無言のまま彼女はゆっくり振り返った。

「え……」

彼女と目が合った瞬間、俺は思わず声を漏らしていた。

予想通り、そこに立っていたのは昼休みに三人組の女子に旧校舎の裏に置き去りにされたあの女の子だった。でも、俺の記憶にある彼女は、虚ろな顔の、表情を持たない人形のような女の子だ。それなのに、今の彼女の瞳は悲しみに濡れて、その瞳からは涙が零れていた。

……見間違いだろうか？

雨の音が、そして、雨に濡れきった彼女が、俺の感覚を曖昧にさせていた。これは、ただの見間違いなのか？ 吸い込まれそうな彼女の瞳に目を奪われて、俺はまた疑問とは別の思いに駆られていた。初めて彼女を見た時にも感じたことだ。俺は、どこかでこの子と会ったことがある。

「……」

やがて、彼女が呟いた言葉は雨の音にかき消された。そして、口の端を歪めながら、もう一度彼女の口から漏れ出てきた言葉は、あの時のような感情のない声じゃなくて。

「許さないんだから……」

今にも泣き出しそうな、そんな哀しい声だった。

「お姉ちゃんのこと忘れるなんて、私が絶対許さない」

「え……」

時間が、止まったような気がした。

13・神木沙里（かみきさり）

神木沙里。^{かみきさり}それが、彼女の名前らしい。

彼女がおかしくなったのは、三年前。彼女の姉が病気で亡くなったから、彼女は感情を失くし、おかしい言動をするようになった。まるで、何かにとりつかれてしまったように。

それから、ずっと、南は彼女の世話をしてきたらしい。クラス編成の際、彼女の世話をしたいから同じクラスにしてくれと直訴した結果、それがまかり通ったというのだから、すごい話だ。

「昔は、あんな風じゃなかったんです」

——あの後。神木沙里が言葉を発してから、俺は金縛りにあってもいるように動けなかった。まるで、彼女の瞳に射すくめられたように。それとも、彼女の口から漏れた言葉に俺は縛られたのだろうか。雨の音が耳の外で妙によそよしく感じた。彼女は、それからすぐに俺から目を逸らして、何も言わずまた空を仰いだ。まるで、そこにいる誰かをじっと見つめているみたいに。その小さくて頼りない後姿は、そばにいながら俺を拒絶しているように見えた。そして、俺は何も言わず、彼女が雨に濡れないように気遣うことしかできなかった。すでに雨に濡れきっている彼女に対して、そんなことをしてもなんの意味もないことは知っていた。でも、そうせずにはいられなかった。

それから少しして、南が俺たちの元に駆け寄ってきた。

普段、神木沙里の登下校は彼女の母親が送り迎えをしているらしい。朝は時間を決めて、南が門の前で彼女と合流して教室に入る。そして、帰りは部活のある南を、彼女が図書室で待つ、というのが日課らしいのだが、今日に限っては図書室に神木沙里の姿が見当たらなかった。それで、校内を探しているところに、俺たちを見つけた、ということらしい。

その後、保健室で体操着に着替えてから、神木沙里は母親の車に

乗せられ学校を出た。そして、傘がなくて困っている南と、傘を二本持っていた俺が、今一緒に帰っていることは、まあ自然の流れだろう。もちろん、南は慎ましい女の子だから（偏見）、なぜに俺が傘を二本も持っているのかという疑問には不思議そうな顔をするだけで、無粋にその理由を聞いてくるような真似はしなかった。

「昔……って言っても、三年ぐらい前ですけど」

一緒に歩きながら、南はそう言って苦笑した。

「そのお姉さんがおかしくなった原因って事は、あの子にとって、それだけお姉さんが大事だったって事なのかな」

「はい。沙里、お姉さんのこと大好きみたいだったから」

「そっか。で、つかぬ事を聞くけど、そのお姉さんの名前ってなんていうんだ？」

「え……名前、ですか？」

どうしてそんなこと聞くんだと言いたげな顔をして俺を見てくる南に、俺は「いや、なんとなく気になって」と言った。

「えっと、確か——恵美さんです」

南の言葉に俺は思わず足を止めた。一瞬だけ地面がなくなってしまうような錯覚に陥った後、南が俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「長谷川先輩？ どうしました？」

「え？ あ……い、いや、別に……——どうってことないぞ、うん」

「傘……落ちてますけど」

「はっ！」

いつの間にか傘を落としていたらしい。っていや、なんて分かりやすい動揺の仕方してんだ俺は！ アホか！——はい、アホです。

「んだと、こらあ！」

「えっ！」

はっ。しまった。動揺してなんか南に怒鳴りつけた感じになっちゃった。いや、誰かが俺のことアホ呼ばわりしたんだよ。はい、アホですって。謎の声が。いや、ほんとだよ？

うん、ちょっと動揺しまくってラリってるだけだから気にしないで。

「い、いや、ごめん。今は南に対してのもんじゃないから」

「は、はあ……。大丈夫ですか？」

「うおい。それは頭がっつて事か？ いや、この子の目に悪気はない。とりあえず、本気で心配そうな顔をして俺を見ている南に、俺はごまかし笑いを見せた。」

「いや、なんつーの、ただの発作みたいなもんだから、気にすんなでも、今後俺という時は、気をつけろよ。この生物は時々わけの分からん言動をするからな」

そう言つて、胸を張る俺を見て、南はくすつと笑った。

「長谷川先輩つて、面白い人ですね」

「いや、つーか、それだけしか取り柄のない男だ」

「そんなことないです」

「そう、そんなことはないんだ」

「つて、ん？ 今この子おかしいと言わなかった？」

「長谷川先輩は、優しい人だと思います。私、先輩のそんなところいいなつて思います」

「……え？」

「……傘、ありがとうございます。明日必ず返しますからっ」

そう言つて、顔を朱に染めた南がぺこりと頭を下げて、その場から走り去ってしまった。

あー、いや。ほら。とりあえず、傘。うん。傘を持とうか。

14・検証

さて。それでは諸君、今回私はこの事例について検証してみることにした。いや、今回の事例は非常に興味深いものだったよ。私の好奇心をこれほどくすぐり、かつ探究心をうんぬんかんぬん。

では、検証に移る。

まずは長谷川純と、その後輩南結華の出会いからだ。長谷川純は、昼休み終了後、五時間目の授業があることも省みず、南結華の親友、神木沙里（障害のある君）をクラスまで送り届けた。これによって、南結華の中で長谷川純という人間が親切な人間であるという先入観が生まれた。そして、放課後、三人組の女子を一喝し、追い払った（正確には気持ち悪がつて帰っただけだが）長谷川純に対し、南結華は助けてもらったと錯覚し、好感度アップ。終いには、成り行きから傘を貸してもらったことで、南結華の中で、長谷川純が優しい先輩にグレードアップ。

——結論。

南結華はただ単に長谷川純という人間を思い違いしている。間違いない。

——おお！ さすが、教授だ！ 見事な検証でまた一つ珍事件を解決なされたぞ！ わあああああ……—。

「——とまあ、大体こんな感じか……」

なにやら、脳内で無駄に盛り上がっていたような気もして、俺自身が非常にムカついてならないのは、うん、気のせいだな。しかし、勘違いとはいえあんな可愛い子に、あんなこと言われた日にゃ僕タシ照れちゃうニヤー。って、いちいち動揺してはっちゃけん俺の馬鹿野郎。女にちよつといいと思いますって言われたぐらいで、舞い上がってんじゃねーよ。男なら、ドンと構えて「だからなに？」ぐらい言ってやるクールさをだな——。

「——なにしてるの、純？」

おっと。我が家の前で、門扉を開けたり閉じたりと繰り返していると、いつの間にか、後ろに夏菜が立っていた。って、おお！ 俺いつの間に家に着いてたの！？

「お、おお、夏菜。いや、聞いてくれよ。俺って、今無意識でいつの間にか我が家にたどり着いててびっくり仰天？」

「……え？」

あー、夏菜がリアクションに困ってる。って、そりゃそうか。とりあえず落ち着け、俺。さあ、大きく息を吸って、吸って、吸って、吸って、吸って……。

「……ぶはあ！ つはあ……！ はああ……。いよし、落ち着いた。もう大丈夫だ」

「落ち着くなら、普通に深呼吸しなよ」

そう言って苦笑を浮かべる夏菜に、俺は普段どおり軽口を叩く。はい。僕はあなたが金田先輩と相合傘して帰ったなんてまったくもって知りません。

「おお、その手があったか」

俺の言葉をまた苦笑で受け流し、夏菜はふと俺が雨に濡れていることに気付いたらしい。怪訝な顔をして、夏菜は俺に近付き、俺の目の前に立つと、俺の頬にそっと手を添えた。

「どうしたの、純。なんか、すごく濡れてるけど」

「え！ いや、何でもねえよ！」

普段のように、そのなんでもない夏菜との距離感になぜか焦りと不安を感じた。気がつくと、俺は夏菜の手を振り払って、一步後退っていた。

夏菜が「あ……」と声を漏らして、払われた手を中途半端に虚空に残して、表情を曇らす。し、しまった。避け方が露骨過ぎたか！？ フォロー、フォローしろ、俺！ いや、その前に落ち着け！ さあ、大きく息を吸って、吸って、吸って、吸って、って、そりゃもうええっちゅーんじゃ、ボケ！

「……」

——やべえ。なんだよこれ。言葉が出てこねえよ……。

しばらく、俺は声を出せず、夏菜も何も言わず俺の前に立っていた。気まずい沈黙の中で、ただ傘が雨を弾く音が、せわしなく俺たちの傍で響いていた。やがて、夏菜は気を取り直したように笑顔を作って、声を出した。

「早く着替えてこないと、風邪引いちゃうよ」

「え……、お、おう」

「ご飯できてるから、早く来て。お母さん待ってるから」

家に戻っていく夏菜の後姿を、俺は何とも言えない気分で見送った。

15・紗枝さんマジック

夏菜の家は、俺の家から二件家を挟んだ先にある。ご近所付き合いから始まった俺達の付き合いはやがて家族ぐるみの付き合いとなり、その関係は今や夕飯をご馳走になるのも当たり前というぐらい親密なものになっていた。

それというのも、ウチの親父は働き蜂のごとく毎日朝早くから夜遅くまで仕事詰めなものであるから、いつも一人家に残されている俺を氣遣って、夏菜の母親である女神様、もとい紗枝^{さえ}さんが俺のバイトのない週四日、夕飯をご馳走してくれているのだ。自分も近所のスーパーにパートに出ていて忙しいというのに、ほんと、紗枝さんには足を向けて寝られません。母さんが生きていた頃は、夏菜が随分世話になったからおあいこだと言って笑う紗枝さんは、母さんを亡くしてからはずっと俺の母親代わりのような存在だ。

さて。一旦家に戻り、部屋着に着替えた俺は、夏菜の家へ向かった。夏菜の家は俺の家と同様、二階建ての一軒家だ。控えめな門扉をくぐり、インターホンなど使わずに鍵のかかっていない玄関のドアを開ける。お邪魔します、と一言言っただけで、ダイニングキッチンから、おばさんが顔を出した。

「いらっしやい。ご飯もうできてるわよ」

そう言っただけで、紗枝さんは身に着けていたエプロンを脱ぎつつ、俺に笑いかけてきた。はい。このグラマラスな美人ママが夏菜の母親の紗枝さんだ。どう見ても二十台だろといいたくなるその若々しい容姿の実年齢が実は三十ピー歳（自主規制。つか、おばさん実年齢教えてくれません）だというのだから、驚きだ。パーマのかかった茶髪のロングヘアに、いつでも化粧バツチリ、おまけに露出度の高い衣服ばかりを常に身に着けているものだから、そのノリはもはやキャバクラのねーちゃんを思わせる（といっても、実物はよく知らない）。しかし、その外見とは裏腹に実は家庭的な一面を持つ

紗枝さんには、何かと、特に食関係で昔から随分世話になっている。それにしても、まあ、別に今更気兼ねなんてないのだろうけど、一応年頃の男の子の前でタンクトップ一枚に、長ミニのショートパンツだけの身なりはどうなのだろうか。いや、いや、タンクトップ越しにその存在を主張する豊満なお胸は、あの麗美^{れみ}をも凌駕する大砲なだけに、俺も目のやり場に困るわけですよ、はい。これで、十六歳の一人娘を持つ未亡人ってんだから、ほんと世界は広いってものだよ、うん。つか、この人の遺伝子を受け継いだ夏菜が、なぜ未だに胸がまな板（推定Aカップ）なのかも不思議だ。うん、世界は未知の不思議でできている。

「ちよつと、純君。あんたさっきからどこ凝視してんのよ」

おお。いつの間にか、紗枝さんの胸を食い入るように眺めていたらしい。ってか、これって不可抗力じゃね？

「あ、いや……いつ見てもご立派なお胸だなと思ってつい」

とりあえず、気兼ねする間柄でもないのでそう切り返す。すると、紗枝さんにもっこり笑って返してくれた。

「あら、お褒めのお言葉ありがとう。純君に言われると、素直に喜んじゃうわ、私」

「いやいや、マジで事実ですから」

「ふふ、ありがと。でも、あんまり考えなしに女を褒めるもんじゃないわよ」

そう紗枝さんは艶っぽい声を出して俺に擦り寄ってきた。って、うおお！ なに、なに、なんですか！？ なにやってんだ、あんた！？

俺の肩に豊満な胸を押し付けて、背伸びして俺の耳元に顔を寄せてくる紗枝さん。ほんわかとした甘い香りが俺の鼻腔をくすぐり、マシユマロのような柔らかな感触が、俺の肩から全身を侵食していく。そして、ごくりと生唾を飲んで身動きの取れない俺の耳元で、紗枝さんはクスツと笑って、囁いた。

「じゃないと、火傷するわよ？」

「……！」

「純君みたいなウブな子、私タイプなんだから」

紗枝さんの甘い吐息が耳をくすぐる。破裂しそうなほど心臓が早鐘を打つ。そして、まるでまどろみの中にいるように意識が曖昧になりかけたところで「なにやってるの、二人とも」と、夏菜の声が突如として耳を突いてきた。

どうやら、二階の自分の部屋で制服から私服に着替えていたらしい夏菜が、階段の途中に立って、じととした目で俺を睨んでいた。あくまで、俺を。

「なにつて、純君をからかってたんだけど」

しれっとそう言っただけで、紗枝さんはあっさり俺から離れた。

「ほら、見て見て、夏菜。純君ったら、顔真つ赤よ。さっすが純君。からかいがいあるう」

「もう！ 馬鹿なことしないでよ、お母さん！」

「あつは、妬かない、妬かない。ま、純君が私のタイプっていうのは事実だけだね」

「お母さん！」

きいきい金切り声を上げる夏菜をあしらいつつ、紗枝さんは「さ、ご飯にしましょ」と言っただけで、夏菜とともにダイニングルームに入ってしまった。

一方、一人取り残された俺は、密かに反応したマイサンが鎮まるまで、その場から一步も動くことができなかった。

——恐るべし、紗枝さんマジック……。

16・爆弾発言

テーブルの上には、チキンカレーに、鳥の唐揚げ、シーチキンサラダに、ポテトサラダと、どれもこれも俺の好物が皿に盛られ、豪勢に並べられていた。いや、いや、相変わらず紗枝さんは料理上手なことだ。

「ほんと、信じらんない。高校生の男の子相手にあんなことして」「あら、今時の子は随分進んでるんでしょ？ あれぐらいどうってことないわよ。ねえ、純君？」

「私が恥ずかしいって言うてるの！ 自分の歳考えてよ、もう！」「なに言ってるの。恋愛に歳の差なんて関係ないわよ」

さつきから、繰り広げられているこの親子喧嘩（といっても、大抵夏菜が紗枝さんにあしらわれて終わる）も、定番なワケで。うん、この二人何かといっちゃあ、よく衝突します。ほんと、親子なのに体つきも性格も全然似てませんな。

「大体、純も純よ。こんなおばさん相手にデレっとしちゃって！」

「え……」

うわ、こつちにまで火の粉が降りかかってきた。

「ちよつと。誰がおばさんですって？ 私はまだ（気持ちには）二十八よ」

夏菜のおばさん発言に、顔をしかめて言葉を発する紗枝さん。いや、しかし、それだとあなたは十二歳で夏菜を産んだことになりますよ。どんだけすれた小学生ですか、それ。

「なにが二十八よ！ 本当は三十ピー歳（禁句）なくせして！」

「ええっ！」

夏菜の爆弾発言に、俺は思わず驚きの声を上げた。まさか、長年謎に包まれていた紗枝さんの実年齢がこんなあっさりと暴露されるとは……そして、まさか三十ピー歳（自主規制）だったとは……つて、やべえ！ 夏菜の爆弾発言に紗枝さんがさつきまでの険しい顔

を一変させて、につこり笑顔作ってるしっ！

さて、解説しよう。紗枝さんは昔から、怒りゲージがマックスまで達すると、心理とは裏腹な表情が顔に浮かぶのだ。つまり、その笑顔はマジギレの証。その額に青筋の立った笑顔を見た者は、この世から抹殺されてしまうとか、しまわないとか。いや、俺も幼い頃うっかり紗枝さんのことを「おばちゃん」と呼んじまって、お尻百叩きの刑に遭ったものだ。うう、思い出すと今もまだ尻が疼くぜ……。

「あ……お、お母さん？ 今のはつい口をついて——」

おばさんの穏やかな笑顔を前にして、その恐ろしさを知っている夏菜が、一気に怒りを覚まして、顔を青くさせて弁明に入る。しかし、紗枝さんはあくまで笑顔でゆっくりと席を立った。

「かーな。ちよつと、こつちにおいで？」

紗枝さんの言葉に、夏菜は隣に座る俺に泣きそうな顔を向けて助けを求めてきた。よ、よし。ここは一つ、俺が夏菜の窮地を救ってやるぜい！

「お、お、落ちついて……おばさん（禁句）」

俺の言葉に、紗枝さんの額に浮かぶ青筋の量が倍ほどに増した。そして、夏菜はあんぐりと口を開けて、俺を呆然と見つめている。

……あ、あれ？ なに、この空気。俺なんかまずいこと言った？ 動揺しまくりで自分がなに言ったか、うまく思い出せねえ。いや、いや、思い出せ。えつと、確か……落ち着いて、って言った。うん。そこで……おばさん（禁句）、って言った。うん。

って、え？ おばさん（禁句）？ 俺、今、おばさん（禁句）つつったの？

「うふ。純君も、こつちおいで？」

んのおおおおおおお！

さて。夕飯を摂り終えた俺と夏菜は罰として、一緒に皿洗いさせられてます。いやはや、この歳になってまさか、お尻叩きの刑を受けるハメになるとは夢にも思わなかったな。しかも、布団叩きで容赦なく叩かれたもんだから、もはや、尻の感覚がなくて立ってなきややってらんねえから。つうか、足といい尻といい、今日は厄日だな、うん。

「……ごめんね、純」

と、黙々と洗物を片付けていると、隣で夏菜が申し訳なさそうに横目で俺を見ながら声をかけてきた。

「え……」

「なんか、巻き込んだじゃって」

「お、おう。いや、こちらこそ何のお役にも立てませんで」

もちろん、夏菜もしこたまお尻引つ叩かれました。もちろん、スカートの上からだけどな。

「でも、未だに二十八で通そうとする方がどうかしてるのよ。もう、いい加減いい歳なんだから」

「お、おい、夏菜。聞こえるぞ……？」

ちなみに、紗枝さんはリビングでソファーに座ってテレビ見てます。すぐそこにいます。

俺の言葉に、夏菜は顔をしかめて、しかし素直に声を小さくした。

「こっちの身にもなつてほしいよ。お母さんったら、ほんとにご近所の人には二十八歳で通してるんだから」

「いや、俺はその信念も、信念についてくる美貌もすごいと思うぞ。どっちかというと、三十ピー歳（超小声）という現実の方が疑わしいぐらいだな。つーか、夏菜だって、ママは美人の方がいいだろ」

「よくない。私は純のお母さんみたいに普通に優しいお母さんのほうがよかったよ」

そう言つて、あくまで膨れる夏菜に、俺ははあとため息をついた。
「お前ら親子つてほんと似てないよな。性格も——」

「……性格も、なによ」

言葉を止める俺をじっと睨んで、言葉を発する夏菜。

「か——」

と一文字の言葉を形にした途端、夏菜が俺の横っ腹に肘打ちを入れた。

「余計なお世話。どーせ私は未発達ですよ。純はああいうのがいいんですよ。ヘンタイ」

いや、お前がなによって聞くから……。つか、変態って。男の性を変態の一言で済ますってひどくね？　つか、俺はどっちかつつとお前みたいに華奢なのがタイプだ。なんて言えるわけないが、遠回しに言ってみたりして。

「おいおい、それは誤解だ。俺はどっちかといえば、ムッチリよりアッサリ派なんだぞ」

「馬鹿じゃないの」

——はい、馬鹿の一言で片付けられましたとき。

「そんなことより、純」

しかも、そんなこと呼ばわり。

「後で話したいことがあるから、私の部屋に行っててくれる？　洗い物、後は私がやっておくから」

「あ……お、おう」

そして、俺は夏菜のお言葉に甘え、夏菜の部屋へ向かった。

17 すれ違い

さて、いよいよこの時が来たな。ふっふっふ。こちらこの時のために、紗枝さんに尻を叩かれてる（文字通り）時からきつちりと対応策を練っていたんだよ。ふははは、俺が何の策も練らずにこのこと敵陣に乗り込んできたとも思っていたのか！ 愚か者め！ 貴様の敗因は我輩を甘く見たことだああ！

と、まあ、それにしても夏菜の部屋に上がるのも何気に結構久しぶりだな。そう、確か最後に夏菜の部屋を訪れたのは、一ヶ月ほど前、麗美の誕生日を祝ってここで、大樹と俺、それで夏菜と麗美の四人の面子で馬鹿騒ぎをして以来だ。もちろん、その後は恋人同士水入らずで誕生日を過ごしたようだが、って、今はそんなことはどうでもいい。

六畳間の小奇麗に整理の行き届いた部屋の中で、俺はぼんやりと突っ立ちながら、夏菜が上がってくるのを待った。クッションや様々な小さなキャラクターの人形があしらわれた部屋の中は、どこを見回しても女の子という言葉が浮かんでくるほど、女の子らしい部屋だった。明るい色彩で彩られたその部屋はまるで、ファンタジー世界の一部のようでもあり、そこに染み付いているかすかな夏菜の香りが、そこを現実世界だと告げている。とにかく、女の子の部屋というのはいつ来ても落ち着かないものだ。

いや、今落ち着かないのは、きっと、それだけのせいじゃないのだけど。

「……純」

「おわあ！」

物音一つ立てずに後ろに立っていた夏菜に不意に背後から声をかけられ、俺は心の準備をする暇もなく、激しく仰天した。

「……だいじょぶ？」

両手を挙げつつ飛び跳ねて驚く俺のオーバーアクションを前に、

夏菜は目を丸くして俺に声をかけた。

「お、おお、夏菜。んだよ、物音一つなく近付くなよ。忍者かお前は」

「ごめん。そんなに驚くとは思わなかったから」

そう言つて苦笑する夏菜に、俺はなんとも言えず、夏菜から目を逸らした。

「とりあえず、座つて」

気を取り直すようにそう声を出す夏菜。しかし、紗枝さんに叩かれたお尻がまだ痛くてとても座つたりできませんから。

「いや……尻が痛くて立つてなきゃやつてらんねえから」

俺の言葉に夏菜も笑つて「私も」と言葉を発しながら、部屋のドアを閉めた。

部屋のドアが閉まると、いきなり部屋の中が狭くなったような気がした。密閉された空間の中でお互い向き合いながら、俺も夏菜も相手にかける言葉を搜した。話すべきことは決まりきっているのに、その術を見つけれず立ち往生する俺たちは、やっぱり、まだ子供なのだろうか。二人きりになった途端、うまく回らなくなった舌がもどかしくて、それでも、言葉が前に出てこない。それでも、俯いている夏菜を見ていると、やはりここは俺から話を切り出すしかないだろう。

「えっと……さつきは、悪かったな」

俺のその言葉に、夏菜は顔を上げて、え、と呟いた。

「さつき。外で、お前の手振り払っただろ。あれは、別に深い意味なんてないから。ちよつと、驚いただけでさ」

「あ……うん。大丈夫だよ。気にしてない」

「そっか。よかった……。うん」

「うん……」

と、また沈黙が続いてしまいそんな雰囲気を持拭するように、今度は夏菜が声を出した。

「そ、そっいえばさ」

「え、な、なに？」

「今朝、大丈夫だった？ 純を起こしに行った時、私純のお腹思いつきり殴っちゃったでしょ？」

「……え？ あ、ああ。あれぐらいどうってことねえよ。問題ナツシン」

そう言っておどけてみせる俺を見て、夏菜は安心したように微笑んだ。

…… 真実は、やはり伏せておいた方がいいんだろうな。あれもいわゆる不可抗力というやつか。まあ、夏菜が狙ってあんなことするわけねえし、本人が腹を殴ったと思い込んでんなら、ここはあえて黙っておこう。

「それでね…… 金田先輩とのことなんだけど」

微笑んだ後に、表情を曇らせながらそう切り出してくる夏菜。夏菜の口から金田先輩の名前を聞いた瞬間、なぜか胸がズキンと痛んだ。同時に、金田先輩と相合傘をして帰っていった時の夏菜の嬉しそうな笑顔が浮かんで、俺はそつと夏菜から目を逸らした。

「金田先輩、私と同じテニス部の先輩なの。それで、何日か前に付き合ってくれないかって告白されて…… 昨日、オッケーしたの。純には、なんていうか落ち着いてから話すつもりだったんだけど——」

「そっか。うん。いや、別に俺に氣い遣う必要なんてねえよ。見た感じ、いい人そうだったし、端から見てもお前ら二人お似合いじゃね？」

「純……」

「麗美が言ってたよ。お前、金田先輩と付き合うことで、俺との関係がぎこちなくなるのが嫌なんだろう？ だったら、わざわざお前らに氣い遣ってる俺って馬鹿じゃね？ つうか、他に好きな奴がいるのに、お前が俺に何を求めてんのかがまず理解できねえし」

—— って、おい。なに言ってるんだよ、俺。そうじゃねえだろ。二人のことを快く祝福してやるって決めてたじゃねえか。

「大体、こっちだってあれだよ。お前の彼氏に氣い遣ってわざわざ

購買までパン買いに行つてさ。アンパン一つじゃ腹もたねえつての。これから先だつて、もう紗枝さんの手作り弁当食べねえんだろ。いい迷惑だよ」

俺の言葉に、夏菜は唇を噛んで、俯きながら言葉を発した。

「……なにそれ。私と金田先輩が付き合つて分かつて、純が心配なのはお母さんの弁当なの？」

違う。

「なんだよ、その言い方。俺がどれだけ紗枝さんの弁当に救われると思つてんだよ。昼飯だけが学校での俺の唯一の楽しみなんだよ」そんなことが言いたいんじゃない。

「そうだ。お前、金田先輩に弁当でも作つてやれば？ そうすりゃ、俺が紗枝さんの弁当もらつても、気兼ねすることなんてねえし」

でも、今更自分の気持ちに気付いたところでもう遅いんだ。そう思えば思つほど、心にもない言葉しか、口からついて出てこなかった。

「な？ そうすりゃ、全て丸く収まるつてもんだろ」

「もう、いいよ……」

「え？」

「もういい！ 純の馬鹿あ！！」

キツと俺を睨んで怒鳴る夏菜の目からは涙が溢れていた。それでも、そんな夏菜の泣き顔を目の当たりにしながら、部屋を飛び出していく夏菜を追い駆けることもできない俺は、救いようのない腰抜けなのだろう。

一人取り残された部屋の中で、俺は夏菜の涙に胸を痛めながら、投げやりに呟いた。

「なんだよ、それ。意味分かんねえよ……」

夏菜がなにを考えているのか、俺には何も分からなかった。

18・明けて翌朝

翌朝。ヤケ酒でも飲んでなきややってらんねーよ、バケヤロウ！
な気分をシラフのまま抱え込んだ結果、昨晚は一睡もすることが
できなかった。

あの後、紗枝さんに事情を説明して夏菜のことを頼んでおいて、
俺はすぐに自分の家に戻った。そして、昨日の夏菜の言葉の意味を
何度も何度も考えた。でも、俺には夏菜がなにを考えているのか、
まるで分からなかった。

確かに、昨日のことは俺が悪かったのかもしれない。あれでは、
夏菜のことより紗枝さんの弁当のほうが大事だと取られても仕方な
ないことだ。でも、泣くなんて反則じゃねえか。それも捨て台詞が、
馬鹿って。確かに否定はできないけども。

夏菜は俺にどうして欲しかったのだろう。やっぱり、友達として、
彼氏ができたことを祝福して欲しかったのだろうか。でも、もうそ
れは無理なんだよ。

気付いちまったんだ。お前のこと、好きだったってこと――。
いつまでも、仲のいい幼馴染じゃられない。そうだ。それが分
かってるから、夏菜への気持ちに蓋をしていただけなのかもしれな
い。今の関係が壊れてしまうのが怖かったから。

それで、壊れてからそんなことに気付くなんて、自分の馬鹿さ加
減にため息しかでてこない今日この頃。

夏菜が笑ってられるなら、それでいいと思ってた。それなのに、昨
日俺は夏菜を傷つけた。くだらない嫉妬に駆られて、夏菜を泣かし
たんだ。

「……」

「つよ。おはよう。純」

ベッドの上で悶々と悩んでいると、親父がひょっこりと俺の部屋
に入ってきた。ベッドの上に座っている俺を見て、親父は「なんだ、

今日は珍しくもう布団から出てるんだな。感心、感心」と笑い、俺の肩を叩いた。

「親父……いいとこに来てくれたな」

そう言つて顔を上げると、親父は俺の顔を見て、目を丸くした。

「お、おい、純。どうした？ 目の下にクマができてるぞ」

「おう……。昨日一睡もできなかったもんで——ってそんなことはどうでもいい。とりあえず、親父よ」

そう言つて、俺はぽんと親父の肩に手を置いた。

「俺を殴ってくれ」

「——え？ ち、ちよつと、純君？ なに言ってるの、君？」

「いいから、思いつきりグーで殴ってくれ」

「い、いや、そんなことできるわけないだろ」

「俺は昨日夏菜を泣かした」

俺の言葉に、親父の目つきが変わつた。はい、マジモードに変身完了。

「——歯を食いしばれ、純」

「おう」

親父の握り拳が容赦なく唸りを上げ、俺の左頬を貫いた。俺は耳元で自分の骨と皮膚がグチャリと嫌な音を立てるのを聞きながら、ベッドの上から転げ落ちた。そして、体を起こしてから、口から流れ出てきた血を左手で拭う。

っふ。さすが、親父の拳骨は芯に響くぜ……。

「——さて、純。事情を説明しろ」

「お、おう」

さて。全ての事情を俺が話し終わると、親父は小さくため息をついた。

「なるほどなあ。いやあ、青春してるな、お前ら。いいなあ……」

「いや、真面目に聞け、クソ親父」

「はは。まあ、冗談は置いといてだな」

いや、マジで羨ましそうに遠くを見つめてたあれが冗談と？

「とにかく、お前も男なら夏菜ちゃんにキチンと謝るんだぞ。気持ちを伝えるかどうかはお前自身の問題だけど、自分が悪いと思ってるなら、必ず謝罪すること。いいな？」

「分かってるよ。ただ、俺の気持ちを夏菜に押し付けるつもりはねえよ。そんなもん、今更言ったって夏菜を困らせるだけだからな」

「そうか……。成長したな、純。天国のお母さんもきっと喜んで――」

「そのネタはやめろ、クソ親父」

そう言っつて、ものごっつい睨んでやると、親父はあえなく「はい……」と縮こまった。

さて。親父を部屋から追い出し、俺は身支度を整えた。なんだかんだ言っつても、親父に話したらちよつとすつきりしたな……。

そうだよ。男なら、好きな女の幸せを一番に考えてやれないでどうする。俺が見たいのは夏菜の泣き顔じゃねえ。夏菜の笑顔だ。

俺はもう二度と、夏菜を泣かせたりしねえ。

己にそう誓いを立て、俺はファイト一発を謳い文句にしたドリUNKを威勢良く一気飲みして、家を出た。

19・シカト

さて。時刻は七時四十五分。家から学校までは徒歩で三十分もあれば足りる距離なので、今日は遅刻の心配はない。つか、今度遅刻したら、どういう目に遭うのかは昨日嫌というほど味わってるから、誰が遅刻なんてするか。

まあ、そんなことは置いといて、とりあえず、深呼吸をしよう。

さあ、大きく息を吸って、吐いて、吸って、吐いて、吸って、吐いて――って、やべ、普通に深呼吸しちまった。逆に、プレッシャーが増してんすけど……というのも、俺は今、夏菜の家の前に立っているわけだ。昨日、夏菜が俺を起こしに来た時間を考えれば、普段夏菜が家を出ている時間帯もおおよそ察しがつく。そして、今の時間はまさに夏菜が家を出るであろう時間帯なのだ。

いや、しかし、いざ顔を合わすとなるとやっぱり気まずいな。どれぐらい気まずいかというと、カツラずれてんのに、本人はそれと気付かずフレンドリーに話しかけてきて、言うにも言えず、気付かないふりをする友人、ぐらい気まずい。俺だったら、絶対見て見ぬ振りしかできねえよ……。

だが、しかし！ ここで引くわけにはいかねえ！ そうだ、ここで引いてちゃ男が廃^{すた}る！ 腰抜けにだって、意地ってもんがあるんだい。

しかし、どうしよう。ここは、やっぱり夏菜を迎えに行ったほうがいいのだろうか。それとも、夏菜が出てくるのをひたすら待つて、夏菜が出てきたところで、すっとぼけた顔して「お、おう、夏菜。偶然じゃねえか。一緒に学校行こうぜ」ってパターンが無難か。

「く……！」

カップラーメンにお湯を注いで待つぐらいの時間真剣に悩み抜いた結果、俺は意を決して夏菜の家の門扉に手をかけた。

そうだよ。危険を顧み^{かえり}ず死地に出向いてこそ男だ。今の俺は昨日

までの俺じゃねえ。待つてろよ、夏菜！ と意気揚々と足を踏み出そうとした直後、何の前触れもなく、ガチャリと玄関のドアが開いた。そして、そこには、はい。夏菜の姿が。

ぐはあああ！ なんだよ、この想定外の展開は！ 神様なんか俺に恨みでもあるスか、畜生！

「……あ」

門扉に手をかけたまま、完全フリーズ（戦闘不能）している俺を見て、夏菜は目を丸くした後に、気まずそうに顔を伏せた。そして、超気まずい膠着状態^{じゅうちやくじょう}。

や、やばいやばいやばい、心の準備が。できてないとは言わせねえぞ、ためえ散々アップアップしてたろうが、なんてもっともなツッコみは止めてください。だって、僕腰抜けだもん。

って、おちゃらけてる場合じゃねえよ。ここでちゃんと謝って、夏菜に「よかったな」って伝えてやらねえと。じゃなきゃ、昨日言った俺の言葉が、俺の気持ちだってことになっちまう。

息が詰まるほどの緊張の中で、俺はぐっと拳を握った。汗ばんだ手の平の皮膚にへばりつく感触が気持ち悪い。つばを飲み込むと、カラカラに乾いた喉がごくりと音を鳴らした。

強張る頬を無理やり引き上げて、俺は夏菜に笑顔を向けた。

「よ、よう、夏——」

俺が声を発すると同時に、夏菜は俯いたまま、何も言わず俺の横を素通りした。

「——菜？」

その夏菜の行動がうまく理解できずに、俺は呆気にとられて少しの間その場に立ち尽くした。そして、慌てて振り返ると、足早に通路を歩いていく夏菜の後姿が目に入る。

えっと……これって、もしかして——。

「……シカト？」

見えない謎の鉄球（100キロぐらい）が、俺の頭上に落ちてきた。

20・女心

「うわ、サイテー」

昼休み。ざっくりと切り傷のついた僕タンの心に荒塩を擦り付けるは、我がクラスメイトにして大樹の三十七番目の女、麗美だ。なす

「純君って女心が少しも分かってないよね。ってか、デリカシーなさすぎ。そりゃ、夏菜だって怒るよ」

荒塩を擦り付けた上から、容赦なく俺の心を足蹴にしつつ弁当をつまむ麗美に、俺は反論のはの字も言えず、机の上に突っ伏した。ってか、お前は弁当のつまみに俺の心を足蹴にするんじゃないよ！

さて。登校して間もなく、不屈の闘志を見せ、教室で自分の席に着いていた夏菜に「お、おはよ」と声をかけたところ、見事にシカトされて教室から立ち去られました。そこで、その様子を訝しんだ大樹と麗美が昼休みまで待って、俺を尋問。そこで、腰抜けの僕は全てを白状しちゃった次第で（つつても、もちろん、俺の心理状態は伏せてだけど）、麗美に心をズタボロにされてるわけで。

「まあ、そう言ってやんなよ、麗美。純の事だって考えてやれよ」机に突っ伏し、光の差さない奈落の底に突き落ちた俺をかばってくれるのは、おお、心の友、大樹様。そう。なんだかんだ言っ、いつだって君は最後には俺の味方でいてくれたよね。

「この先、目の前で好きな女が他の男とイチヤついてんの見ていかなきゃなんねえんだぜ。俺だったら、みじめ過ぎて絶対耐えらんねえよ。自殺もんだぜ。なあ、純」

そう言っ、俺の肩に優しく手を置く大樹。っふ……。大樹。お前って奴は――。

「表出る、ごあらあ！」

「うわ！ ちょ……落ち着け、純！」

全ての悲しみを怒りに変え、俺は大樹に掴み掛かった。そうだよ。大樹はそうやって俺を煽あおることで、自らサンドバッグとなり、俺の

鬱憤^{うつげん}を晴らそうとしてくれてんだ。ちくしょう、大樹。お前って奴は、親友の鏡だな。

「おい！ そうだよ、以降全部口に出てんぞ、お前！ 勝手に都合のいい解釈してんじゃねえよ！」

「るせえ！ てめえは親友の鏡として黙ってサンドバッグにならんかい！」

「なんだそりゃ！？ ってか、ぶっちゃけ俺はてめえをからかいたいだけなんだよ！」

「おお、本性表しやがったなこの性悪があ！ 親友として、その根性ばこぼこにして海の藻屑^{もくず}にしたらあ！」

「上等だ、ごらあ！」

「……いい加減にしろ、二人とも」

麗美のものごっつい低い声が、俺たちの動きをピタリと止めた。

そして、俺たちは二人揃って互いの襟首を掴み上げたまま、恐る恐る声の元を辿る。すると、どうだ。俺たちのドタバタのせいでいつの間にか机がひっくり返り、麗美の弁当が無残に床の上にひっくり返っているではないか。

「も、申し訳ありませんでした……」

俺と大樹は、取っ組み合ったままの状態で、声を揃えて麗美に謝った。

「もう……馬鹿やってる場合じゃないでしょ。冗談抜きで、夏菜相当怒ってるよ」

せっせと床を掃除する俺と大樹を横目で見ながら、麗美はため息をつきつつ机に頬杖をついた。そして、弁当の残骸を片付け終えた大樹が、麗美の隣に椅子を寄せて座りつつ、無神経な言葉を発した。「あれ。そういうば、夏菜ってどこ行っただの？ 昼休みに入っただけじゃないかってるけど」

「弁当二つ持って金田先輩のところ。夏菜もあれで、結構頑固だからね」

そう言って、麗美はじとつと俺を睨んだ。

「——で、どうするの、純君」

「どうって……やっぱ、謝るしかねえだろ。悪いのは俺なんだから」

「つつても、シカトされてんじゃ謝りよ」

「余計な茶々入れない」

そう言っで、麗美は大樹のわき腹に容赦ない肘打ちを入れた。しかし、悶絶する大樹を歯牙にもかけず、麗美は俺を見つめたまま、言葉を発した。

「純君は謝るだけでいいの？」

「え？」

「昨日も言っただよ。気持ち。伝えなくていいの」

真面目な顔をしてまっすぐ俺を見つめてくる麗美の目をまともに見返すことができず、俺は麗美から目を逸らした。

「あ、あのな。俺は別に夏菜のこと」

「純君が理由もなく夏菜を傷つけるようなことするわけないよね。それでも、夏菜を傷つけるつもりじゃなかったのに、そうしちゃったのは、自分の正直な気持ちに逆らえなかったからじゃないの？」

……うわ。あなた様は、どこの超能力者様ですか？

俺は、麗美の言葉に対する言い逃れを頭の中で考えてから、それが無駄であることを悟って、小さく息を吐いた。

「今更そんなこと言っでも、夏菜を困らせるだけだろ。あいつは、金田先輩のことが好きなんだからよ」

俺の言葉に、麗美は心底憂鬱そうに、深くため息をついた。

「な、なんだよ」

「ほんと、純君って女心が分かってないね」

——はい？

恐らく、今の俺は随分な間抜け面を麗美に向けているのだろう。俺を見て、麗美は呆れたように笑って見せて「ま」と短く声を出した。

「今、私から言っであげられるのはここまでだよ」

そう言つて、麗美は椅子から腰を上げた。

「まずはがんばって謝つて。とりあえず、私は純君のこと応援してるから。じゃね」

ひらひらと手を振って教室を出て行く麗美と、その後を追う大樹を見送る。

……いや、言ってることさっぱり意味分かりませんから。

つか、女心つて。そんな男に装備されてねえ未知なモン分かるわけなくね？

女心、女心、女心、女心……。一人になってひたすら考えているうちに、心地のいい眠気が俺の意識を包み込み始めた。

女心を子守唄に、俺は夢の世界に羽ばたいた。駄目だ、こりゃ……。

21・悪夢と八子公

あーあ。結局悟りを開く前に、午後の授業も終わっちまった。ちくしょう。なにさ、なんなのさ。女心って。夢の中で、女の文字を顔にして、心の文字を体にした化け物に「そんなに知りたいなら教えてあげるわ」って迫られて、延々全力で原っぱ（なぜか）を逃げ回ってた俺には、やっぱり女心を理解するのは不可能なのか……。つーか、マジ怖かったです。いや、マジで。女心の奴めちやくちゃ足速くて、しかも、どうやって走ってんだお前って、ツツコみたくなるような奇妙な走り方なんだよ、これが。つーか、50メートル六秒フラットの俺の足を持っても逃げ切れねえなんて……。最初は余裕こいて「けーけーけ。おーにさーん、こーちら」なんつって、パンパン手を叩きながらおちよくってたのに、最後には「すいません、すいません、すいません、（リピート）」って、半泣きで謝るハメに……。だって、あいつ、何時間でも同じペースで走ることができる超がつくスタミナ馬鹿なんだもん。

んで、最後には結局捕まっちゃって、押し倒されて――。

「ほほほほ、鬼ごっこはもうおしまい？　ぼ・う・や（ハート）」
「うっぎゃあああああ！　よ、寄るな、化け物、ごあらあ！　誰か助けてー（半泣き）！！」

「んもう、照れちゃって。かわいい」

「あああああああああああああああああああああ！」

――　　ってここで、神楽先生に「やかましいわ」つつって叩き起こされました。うん。どうやら、寝言で断末魔の悲鳴を上げてる俺がいい加減うつとうしくて、叩き起こしたそうです。いや、いや、神楽大先生様。あなた様は命の恩人でございます。

つーか、今夜女心の奴がまた俺の夢に出てきそうで怖えよ……。でも、女心を知るにはあの先までいかなきゃなんねえんだよね……。しかし、俺の悪夢を聞いて、麗美は「重症だね……」と呆れ、大

樹は「だははは！　なんだそりゃ！」と大爆笑して、教室を出て行く始末。どうやら、夢から覚めたばかりで寝ぼけてる俺が全力で女心の恐怖を訴えた様が、かなりイタくて、かなり笑えたらしい。お前ら、それでも友達か、このバケヤロイ！

はあ。んで、まあ、とにかくそんなこんなで、六時間の授業をぶっ通して眠り倒した罰として、たった一人で教室の掃除を押し付けられたわけで。

もちろん、昨日一睡もしてないんですよ、なんて言い訳しても、クール&ワイルドの返答は「知るか、ボケ」。あんた、昨日俺になにしたのか、もしかして忘れてねえか？　って危うく言いそうになったけど、平気な顔して「何のことだ」って開き直られそうだったから、黙ったときました。はい。マイネームイズ、コ、シ、又、ケ。

ちつくしう。おかげで夏菜に声をかけるタイミング逃しちゃったし。こうなったら、夏菜が部活終わるまで校門付近で待ちでもするしかねえか……。夏菜の性格からして、そこまですりゃ口利いてくれるだろ、なんて姑息な策を練ってる俺は、そう。アイアム、コ、シ、又、ケ。

「……はあ」

いい加減、一人でボケるのに飽きた俺は、一人寂しく教室の掃除に取りかかった。

「はあ……やっとな終わったぜ、ちくしう」

ようやく、教室の掃除を終えると、時刻はすでに五時を迎えようとしていた。まさか、一人で教室の掃除をするのがこれほど、地味にしんどいとは思ひもなかった。一人で三十数人分の机を移動さ

せ、ゴミを掃き、また、机を元の位置に戻す。また、これが見かけによらず神経質なモンで、机の列がちょっとでもずれてたら、ミリ単位で整えるこの職人芸。え？ なに？ 明日になれば、すぐぐっちゃぐちゃだよ、ぐっちゃぐちゃ？ テメエは黙ってる、このボケカスがっ！

いや、しかし、見張りなんていないのだから、何も生真面目に掃除なんてしてやることもなかったんだが、こうも、堂々と放置されちまうとな。逆になんかありそうで怖えよ。結局、隅から隅までピカピカにしちまったし。もちろん、机も、窓も雑巾で拭きましたよ。もしかして、この放置プレイも人間の心理を巧みに利用した神楽先生の高度な戦術なのか？ それとも、腰抜けの俺が言いつけサボるわけねえと高を括^くってるだけか？ うん、後者だな。間違いない。「ちくしょう。いつか、見返してやる……」

と言いつつ、ゴミ箱から出しておいたゴミ袋を持って教室を出る俺が、そんな日を迎える日は恐らく来ないのだろう。クスン。

さて。教室の鍵を閉めて、職員室に鍵を返しに行った後、俺はゴミ置き場に向かった。ゴミ置き場は自転車置き場の隣、つまり、裏庭の方まで回らないとならない。とりあえず、上履きを履き替えるために、下駄箱に向かったのだが、そこで俺は意外な人物と鉢合せた。

「あ、あれ？」

「あつ……こ、こんにちは」

下駄箱の前に手持ち無沙汰に立っていた彼女は、俺に気がつくと慌てた様に一步前に出て、ぺこりと頭を下げてきた。

「……南？ こんなところでなにしてんの？」

そう。今俺の前に立っているのは、あのおさげ髪の君、みなみゆいか南結華だった。

「あ、あの。昨日、傘ありがとうございました。本当に助かりました」

そう言って、南は片手に持った傘をおずおずと俺の前に差し出し

てきた。そして、俺は昨日南に傘を貸してやったことを思い出して「あー」と声を出した。

「そういや、貸してたよな。って、もしかして、今までずっとここで待っていてくれたのか？」

そう言って、俺は南から傘を受け取った。一方、南は俺と目が合うと、焦った様に俺から目を逸らして、しどろもどろに声を出した。「あ、いえ、その……はい」

「マジでか。わり。ちよつと、教室の掃除しててさ」

そう言って、片手に持ったゴミ袋を軽く上げて見せると、南は「い、いえ」と言って俯いた。

「つーか、傘一つ返すのにこんなとこでずっと待ってるなんて、忠犬八公みたいな奴だな」

「……え？」

俺の言葉に、顔を上げて固まる南。いや、ここは笑うところなのだが……。

「いや、ここは笑うとこなんだけど……」

「ご、ごめんなさい」

はっとした顔をしてそう言いながら、全力で頭を下げてくる南の前に、俺はぽりぽりと頭を掻いた。いや、困った。南ってこんな絡みづらい奴だったっけ？

しかし、頭を上げて俺と目を合わせて、顔を赤くする南を見て、俺は重大なことを思い出してしまった。

（長谷川先輩は、優しい人だと思います。私、先輩のそんなところいいなってます）

そつだよ、うん。南は昨日、別れ際にそんなことを言って、走り去って行ったんだよ。おう。普段の俺なら、動揺しまくってること間違いなしだな、うん。だが、悪い南。今の俺は夏菜のことで頭がいっぱいで、そちらにまで気を回してる余裕はないんだ。いや、なにが悪いのかはよく分かんけどな。

「えつと……ところで、こんなとこにいていいのか？ 部活あるん

「じゃねえの？」

なんとなく気まずい空気を払拭するために声を出す。すると、黙っていた南はおずおずと声を返してきた。

「いえ、今日は部活休みなんで……」

「そ、そっか。あーと……、じゃあ、傘サンキューな。俺ゴミ出し行かなきゃなんねえから。気を付けて帰れよ」

そう言っ、南に背を向け、そそくさと歩き出そうとすると、不意に南に呼び止められた。そして、振り返った俺に、南は申し訳なさそうに言葉を發した。

「あの……この後、時間ありますか？」

22・お前の味方

いや、いや、まさかこんな展開になるとは思ってもみなかったな。しかし、どうせ夏菜の部活が終わるのを待ってるつもりだったから、生憎時間はたつぷりとあつたわけで。様子から察するに「あの……この後、時間ありますか？」の台詞を口にするのに、南は命がけなノリだったわけで。本心は、君に昨日優しい人宣言されてなんか照れくさいような、気まずいような、そんな感じなんで勘弁してください、なんだけど、腰抜けマスターのこの俺が、その申し出を断れるわけもなく、今こうして南と裏庭のベンチに並んで座ってるわけ。ってか、あんな必死な顔されたら、誰だって断れなくね？

「えつと……で、どうした？」

とりあえず、ゴミ捨てを終え、並んでベンチに座り、とその場の流れにズルズルと流され続けた俺は、そんなまったく気の利かない言葉を武器にして、応戦。案の定、南は隣で申し訳なさそうな顔を俺に向けてきた。すんません。知らない女の子と（ってわけでもないけど）二人つきりでお話なんてシチュエーション初めてで、地味に緊張してんです、この腰抜けは。許してやってつかあさい。

「ごめんなさい。なんか、無理に付き合わせちゃったみたいで」

「え？ いや、いや、別に無理なんてしてねえって」

はい。別な意味でかなり無理してますけども。

「どうせ、まだ帰るつもりなかったしな。時間、持て余してんだよ」俺のその言葉を聞いて、南は「もしかして、誰か待ってました？」と言葉を発した。

「あー、うん。でも、まだかなり時間かかるから平気だ。問題ナツシン」

「もしかして……彼女ですか？」

「——はい？」

うん。恐らく今の俺はとんでもなく間抜けな顔をしているのだろ

うな。慌てて南が謝ってくるぐらいだから。

「す、すいません。変なこと言つて。ごめんなさい」

「……いや、別にいいよ。だが、南よ。この生物と好き好んで付き合うような物好きな女の子がこの地上に存在すると思いか？」

そう言つて、立てた親指を自分に向け、自虐ジョークをかます俺。しかし、南は曖昧に言葉を詰まらせ、俯いてしまった。つて、あれ？ なに、そのリアクション？ つてか、その場の空気を明るくしようとした結果、ますます気まずくさせちゃう俺つて、ヘボ男ですか？

「おい、南……お世辞でもいいから、いると思いますぐらい言つてくれよ。俺マジでへこむから」

俺のツツコみに、南は弾けた様に顔を上げた。

「ち、違います！ そういう意味で答えなかったわけじゃないです！」

「お、おお……そうなのか？ じゃあ、どういう意味で？」

「えっ……！ そ、それは、その……ごめんなさい」

「……」
いいんだよ、南。気を遣わないで。てめえの力量も考えず自虐ネタをかましたこの馬鹿が勝手に心に傷を負っただけさ。同情するなら、誰か俺を褒めて。

「あ、あの……。長谷川先輩……」

心配そうに俺を伺ってくる南に、俺は苦笑を返した。

「いいつて。気にすんな。それより、なんか話あんだろ？」

「あ、はい。話つていうか、相談なんですけど……」

「相談？」

「はい。沙里のことで、ちょっと」

南の言葉に、俺は頭の中で神木沙里の顔を思い浮かべた。そして、黙ったまま先を促すと、南はおずおずと話し出した。

「沙里、昨日からちよつと様子がおかしいんです。昨日、ちよつと心配になって、帰ってから沙里の様子見に行っただんですけど、なん

だか、塞ぎこんでるみたいで……。今日も学校休んで、今朝沙里のお母さんが、夕べからご飯も食べなくて部屋から出てこないってとても心配してたんです。こんなこと、今まで一度もなかったから私心配で……」

南の言葉に、俺は「そっか」と返事を返した。

感情を失くしたという神木沙里を見て、塞ぎこんでいると感じることがするのは、恐らく南ぐらいのものなだろう。そして、常に神木沙里を側で支えてきた南だからこそ、その心配は思い過ごしなどではないということもよく分かる。ただ、なぜその話を南が俺にしているのかが分からなかった。

そんな俺の疑問を察しているのだろう。南は俺と目が合うと、俺がどうして、と聞く前に声を出した。

「勝手な思い込みかもしれないですけど、私、沙里の様子がおかしくなったのは、長谷川先輩と会ってからだと思っんです」

俺は、昨日聞いた神木沙里の泣きそうな声を想った。彼女の口から発せられた言葉は、痛々しいほど悲しくて、裏腹に口を歪めて作られたぎこちない笑顔には、彼女の中に根付いている、深い感情が込められているような気がした。

「あの子さ」

俺は、そう言って南から目を逸らした。

「ほんとに、感情を失くしてるのかな」

「え？」

「俺には、そうは思えないんだけど」

「でも、お医者さんも強いショックから、一時的に感情が欠落してるんだらうって——」

「医者つつつても、人の心まで診るわけじゃねえだろ。ま、俺も偉そうなこと言えねえし、本当がどうなのかは分からねえけどな。——そうしてるのが、本人が意図してるのかどうかなんてさ」

「意図してって、そんな——」

珍しく語気を強めて声を発する南の言葉を遮って、俺は「分かん

だよ」と声を出した。

「大切な人失くして、そうしたくなる気持ち。……痛いほど、分かるだよ」

「……——長谷川、先輩？」

左手首に付けたビーズのブレスレットに目を落として、俺はそつと、ビーズをなぞった。ぬくもりのないビーズの感触は、あの日見たきらめきを今もまだ宿して、俺に眩暈を起こさせる。

ぎゅつとまぶたを閉じて目を開けると、南が心配そうな顔をして俺を見つめていた。俺は気を取り直して、小さく息をついた。

「ま、あの子は大丈夫だろ。なんたって、南みたいな友達想いな頼もしい味方がついてんだ。いつか、ちゃんと立ち直るってもんだ」

「先輩……」

俺の言葉に、南はそつと顔を俯けた。

「？ どした、南」

「私……自信ないんです」

「え？」

「沙里がおかしくなってから、私、ずっと沙里の面倒見てきました。沙里は私の大事な友達だし、そうしてる自分に初めは疑いなんてなかった。でも、よく偽善者って周りから陰口言われて、だんだん、それが辛くなってきた……。どうして、私がそんなこと言われなきゃいけないんだって思うようになって。そしたら、自分がやってることが、正しいことなのかどうか、不安になって、いつの間にか、自分のこと疑ってて。私、どうしたらいいか——」

「そつという時はな、南」

俺の言葉に、南は、え、と声を漏らして顔を上げた。

「誰か一人でも、自分のことを信じてくれる味方をつくりゃいいんだ。そいつは、自分がキツくなった時、どんな愚痴も聞いてくれる。困った時は助けてくれる。何より、自分のすることをいつでも信じてくれる。そんな人間が一人でもいてくれりゃ、そんな不安はたちまち消し飛ぶぞ」

「で、でも、私そんな友達なんて——」

「いねえのか。なら、作りやいいんだ。簡単だぞ」

俺の言葉に、南は元氣なく俯いた。そんな南に息をついて、俺は言った。

「今日、俺はお前の愚痴聞いてやっただろ」

「え……」

「もちろん、俺はこれからお前が困ってる時は助けてやる。お前のすることも信じてやる。今日から、俺はお前の味方だ」

「……先輩」

「——って、ちょっと、クサかったですか？」

そう言って肩をすくめて見せると、南は涙ぐんだ目を手で拭ってから、くすつと笑った。

「——はい。ちょっとだけ」

「お！　そうそう、そのリアクションね！　その心を今後忘れないように！」

そう言っつて、俺は南の背中をポンと叩いて、ベンチから腰を上げた。

「ま、冗談抜きで、なんかあつたらいつでも言えよな。気兼ねなんかすんなよ」

「はい。ありがとうございます、長谷川先輩」

「おう。じゃな、南」

そう言っつて、その場から離れようとした俺の背中に、南は「あの」と声をかけてきた。振り返ると、南はベンチから腰を上げて俺を見ていた。

「長谷川先輩は……彼女いるんですか？」

「……はい？」

「言いましたよね。気兼ねするなって」

そう言っつて、頬を朱に染める南の前に、俺はしどろもどろに声を返した。

「お、おう……。あ、彼女ね。えーと、残念ながら、そういったお

人は現在存在しておりません」

「……よかった」

そう呟いて、南はぺこりと頭を下げると、俺の元から走り去って行った。

23・延長の想い

教授！ 答えてください、教授！ あなたは仰おつつたじゃないですか！ 南結華みなみゆいかの優しい人宣言は、俺という人間をただ単に思い違いしているだけだと！ なのに、これはどういうことですか！ 俺の彼女いない宣言に彼女がボソツと呟いた、よかった発言の真意はどういうことですか！ きいよおうじゅうあ！ 答えんかい、ボケエ！ お、落ち着きたまえ、長谷川君。これは何かの間違いだ。うん、そう、空耳だ。そうに違いない。もしくは、あれは君がそうなったらしいな。って一人で勝手に妄想して――。

馬鹿にしてんのか、ごらあ！

そんな理不尽な！ この後に及んで現実否定して欲しがってるの、君じゃん！

うつせ！ うつせ、この馬鹿！ ご主人様に口答えすんじゃない、このゴミクスがっ！

ご、ごみく……カ、カッチーン！ 誰がゴミクスだ？ あ？ この……コシヌキングがあ！

んだ、そのどっかから取ってきたようなネーミングは！ って、誰が腰抜けの王様だ、ああ！？

てめえしかいねえだろが！

んだと、ごらあ！

「――ん？」

ってな具合で仮想教授とガチで言い争っている最中に我に返ってみると、あら不思議。いつの間にか辺りはすっかり薄暗くなっていた。ベンチに座って、ぼへとしたまま、ズボンのポケットからケータイを取り出し、画面を開くと、またあら不思議。いつの間にか時刻は六時三十四分でしたとさ。

「って、ええ！ いつの間に――」

どうやら、教授とケンカしてる間に、現実俺は無視して先に進

んでいたらしい。いや、それにしても、大丈夫か、俺。だって、一時間以上無意識状態でしたってことでしょ？　これって、あれじゃね？　その、なんかやばい病気とか、そんなんじゃないですよ？　しかし、その問いに答えてくれる人間はもういない。なぜなら、あの役立たずな教授はもうクビにしちゃったから。うん。仮想世界（俺の脳内）の住人だから、生かすも殺すも俺次第ってワケだ。つて、あんな役立たずな奴のことはどうでもいい。

そう、問題なのは南のあの発言――。

「――考えるな、考えるな、考えるな、考えるな……」

また、意識持つてかれるから！　別のこと！　別のこと考える！　もっと、こう強烈なもん思い浮かべて、南のこと頭からかき消せ！

とりあえず、夢に出てきた女心という名の化け物を思い出して、心を落ち着かせる俺。つて、やべえ、あんな化け物持ち出して心を落ち着かせる俺つて、もしかして、相当病んでる？

つて、んなアホなことやってる場合じゃねえ。夏菜の奴、まだ帰ってねえだろうな。

肝心なことを思い出した俺は、脇に置いた鞆を引っつかんで裏庭を後にした。

さて。急いでグラウンドの様子を見に行くと、案の定テニスコートの方にもう人の姿は見当たらず意気消沈。代わりに野球部の連中が練習もせずにはしゃぎながら、硬球とバットを使ってゴルフの真似事をしておりましたとさ。

はい。悔し紛れに職員室まで行って、体育教師、兼野球部顧問の鬼瓦先生（おにがわらまたの名を、鬼ケツバット）に、あることないこと逐一

報告して参りました。もちろん、鬼瓦先生はめっさ怖い顔して、無言で職員室を出て行きました。はい。あのお方はとても厳格な方でいらっしやいますので。

しかし、野球部の間抜け共を生贄いけにえにしたところで、俺の気分は少しも晴れなかった。なんだ。だったら、あいつらわざわざ生贄いけにえにすることもなかったな。まあ、いいや。

できれば、今日中に夏菜に謝りたかった。少しでも早く、夏菜の誤解を解きたかった。そういえば、そうだ。ガキの頃、夏菜とケンカした時はいつも決まって謝るのは俺からだった。それは、親父の教えもあつたけど、何より、夏菜とケンカしたままで、一日でも口を利かないでいると、どうしようもなく落ち着かなくなる俺のどうしようもない性質たちが要因だった。

この不安は、あの頃、夏菜とケンカした時に決まって感じていた落ち着かなさの延長なのだろうか。だとすると、俺はもうその時から夏菜のことが好きだったのかもしれない。

「気付くまで何年かかってんだよ、馬鹿野郎……」

独り言を呟きながら、とぼとぼと薄暗い廊下を歩いて、俺は昇降口に向かった。そして、昇降口にたどり着いたところで、俺は思わず足を止めた。

下駄箱の前に立っている人影に目を凝らす。そして、その場に突っ立っている俺に、その人物はゆっくりと近付いて、俺の前に立った。

「あ……か、夏菜……？」

うまく、状況が理解できず、俺は呆気にとられて目の前に立つ夏菜を馬鹿みたいに見つめた。そして、夏菜はじつと俺を見つめた後に、ムスツとした顔を作って、呟いた。

「遅いよ……馬鹿」

24・本心

神様、一言今朝のことを謝らせてください。え？ 何のことだつて？ ほら、今朝夏菜を迎えに行こうとしたところ、夏菜がいきな

り玄関から出てきて、その想定外の展開に俺が暴言を吐いたじゃないですか。あなたに対して。ほら。なんか俺に恨みでもあるんスカ、畜生って。あれは、ただの八つ当たりでした。すみませんっしたあ！

——で、神様？ 夏菜がたった今日の前に立っている、この今朝の出来事を凌駕する想定外の事態は一体全体どういう見ですか？

こういう嫌がらせがあなたのご趣味だとか？ はい。今朝のご無礼は謝ります。謝りますから、その横っ面一発張らせてもらってよろしいでしょうか？ あはは。何とか言わんかい、この神公かみこうがつ！

さて。俺の現実逃避はこんなもんじゃ終わらねえぞ。ほら、だって、これって夢じゃん？ 夢に決まってるよ。だって、現実の夏菜は俺を徹底的にシカトしてたじゃん。ほら、なにをベタなことをななんて野暮なツツコみは止めて、ほっぺをつねってごらん？ ほーら、全然痛くも痒くもないでしょう？

「……なにやってるの、純」

無言で両の頬を思いつきりつねり上げる俺を見て、夏菜がリアクションに困っている。そして、痛覚は確かに存在している。……なんてことだ。これは夢じゃないのか。さて、じゃあ、本腰入れて神の野郎を殴りに行くか。うん、ボケられる程度には冷静さは保てているようだ。

「あ……えっと、その、なんと言いますか——ど、どういう心境の変化で？」

頬から手を離し、恐る恐るその言葉を発すると、夏菜はぷいっと俺から顔を逸らして、下駄箱を出て行ってしまった。や、やべっ！ 怒らせた！？

下駄箱で靴に履き替え、俺は慌てて夏菜の後を追——おうとして、

ピタリと足を止めた。

……な、なんて謝ったらいんだろ？

ごめん。ごめんなさい。すまん。すいませんでした。悪かった。悪うございました。いや、いくら言葉を丁寧にしてもなんか、足りない気がする。ここはやはり、土下座でもして——って、そこまでしたら、夏菜引いちゃうよね？

なんてアホな事（深刻だが）考えてる間に、夏菜の姿が正門の向こうに消えて、俺は慌てて夏菜の後を追った。

ちくしょう。夏菜の奴、一体どういいうつもりだ。俺のこと許してくれる気になったから、待っててくれたんじゃないのかよ。だったら、一人でさっさと行っちゃまうことねえじゃねえか。

「って、うぉあ！」

正門を抜けると、夏菜が正門の影で立ち止まり、俺を待ってたもんだから、俺は仰天して両手を上げつつ驚いた。しかし、昨日みたいに、俺のオーバーアクションを前にしても夏菜は笑ってはくれなかった。俺と目が合うと、夏菜はすぐに俺から目を逸らしてまた歩き出した。

……やっぱ、まだ怒ってるよな？

夏菜の一步後ろを恐る恐るついて歩きながら、俺は声をかけるタイミングを伺った。しかし、微塵の隙も伺えない夏菜の背中を前に、言葉を呑み込み続けた結果、結局——。

「す、すいませんでした」

脈絡のない謝罪の言葉だけが、口からついて出てきた。

そして、続けて発した「ほんとに、ごめん」という俺の言葉に、ようやく夏菜は足を止めた。

「か、夏菜……？」

立ち止まった夏菜の背中に、恐る恐る声をかける。そして、何も言わず振り返ってはくれないよそよそしい夏菜の背中に、それでも俺は言葉を投げた。

「ほんとに、昨日の事は悪かったと思ってる。その、できれば、昨

日言った事全部なしにしてくんねえかな。昨日は、自分でもなんか途中から訳分かんなくなってる、なんか、本心とは真逆なことしか口から出てこなくて……。少なくとも、俺が大事に思ってるのは、弁当なんかじゃなくて、お前だから……」

「……」

「……ごめんな。夏菜」

「——傷……」

不意に夏菜の声が流れて、俺は思わず、え、と呟いた。すると、夏菜はクルッと振り返って、人差し指を自分の唇の端に当てた。

「ここの傷、どうしたの？」

親父に殴られて、俺の唇の端っことは切れて、赤く爛^{ただ}れていた。その傷に、大樹や麗美、もちろん南も気付いて、どうしたのかと聞いてきたが、俺は階段ですっ転んだと適当なことを言っておいたのだが、突然夏菜に話しかけられて動揺した今の俺に、そんな適当な嘘を言うような余裕はなかった。

「あ……こ、これは、親父に殴られて」

「え……どうして？」

「あ、そ、その——お前のこと泣かしたって言ったらな……」ってか、殴ってくれて頼んだのはむしろ俺の方だから、別に夏菜が気にするようないざ、うん」

俺の言葉を聞いて、夏菜は「そっか」と呟いて、くすつと笑った。

「おじさん。私の代わりに純のこと殴ってくれたんだね」

そう言っただけで、夏菜は呟いた。

「……ほんとだね」

「え……」

「ほんとに違うんだ。昨日、純にほんとに言いたかったのは、金田先輩との事じゃなくて、一言だけ、言いたかったの」

そう言っただけで、夏菜は顔を上げた。

「——ありがとう、って」

「え？」

「昨日、純、屋上で私に言ってくれたでしょ？ お前は馬鹿じゃない。俺が保証してやるって。……すごく、優しい言葉だった。本当に、嬉しかったの」

「夏菜……」

「結局、本心とは別なこと言っちゃったけど。でも、これで、おあいこだよな」

夏菜の言葉に目を丸くして「え？」と声を漏らす俺を見て、夏菜は「もう、怒ってないってこと」と言って笑った。

——お、おお、神よ。私は今、この瞬間あなた様に感謝したい。想定外の展開の結末に、まさかこんな粋な計らいが用意されていたよとは。あなた様をぶん殴ってやろうなどと、私がどうかしております。

「……えっと。つまり、許してくれると？」

「うん」

「……マジで？」

「マジで」

そう言って苦笑する夏菜を前に、俺は安堵のため息をついた。

「長い道のりだったぜ……」

「そんな、オーバーな」

「おい。人のことシカトしといてよくそんなこと言えるな、チミ」

「な、なによお。元はと言えば純が悪いんでしょ。自業自得だよ」

「——だな」

そう言って、俺たちは目を見合わせて、一緒になって吹き出した。

「おっし。じゃ、お許しも出たところで、帰りますか」

そう言って、俺は夏菜の肩をポンと叩いて、歩き出した。

「あ……そういや、お前俺のこと待ってたりして平気だったのか？

金田先輩は——って、あれ？」

横に視線を移すと、なぜか、夏菜の姿が隣になかった。そして、足を止めて振り返ると、数メートル後ろで、夏菜は俯いて突っ立っていた。

「……夏菜？ どした？」

「ねえ、純……。さっき、昨日言ったことは、本心じゃなかったって言ってたよね？」

「え……。お、おう」

「だったら、聞いてもいいかな。純の……本心」

「……え？」

顔を上げた夏菜が、少しでも不安そうな顔をして、俺を見つめた。俺は、そんな夏菜の発した言葉に戸惑いながら、思わず、ゴクリと息を呑んだ。

——おお、神よ。やっぱり、ぶん殴っていいですか？

25・仲直りのち仲違い

「う、うおおおお……！　そりゃ、また、随分な急展開じゃねえかよ、おい！」

「ちよつと、大樹は黙ってて！　それで、それで！　その後どうなつたの、純君？！」

「……お前ら、もしかして楽しんでねえか？」

昼休み。どうも、昨日夏菜が俺を待っていてくれたのは、麗美の口利きのおかげだったようなので、一言麗美に礼をと思い麗美に声をかけたところ、なぜか、事情聴取を受けるハメになったわけで、俺は今こうして、机を挟んで興奮気味の麗美と大樹に昨日の出来事を逐一報告してるってわけだ。

「つーか、お前らプライバシーって言葉知ってるか？　もつとも、こつちも相談がてら話してるから、まあ、いいんだけども。」

俺の言葉に、麗美と大樹はお互い顔を見合わせてから、麗美だけは居住まいを正した。

「ご、ごめんね、純君。別にそんなつもりじゃ——」

「つーか、いいじゃん。もつたいぶってねえで、さつさと話せよ。腰抜けてなにもできませんしたーって」

「おい、その素敵坊主。その頭丸刈りにして野球部の間抜けどもの仲間入りさせてやるうか？」

「んだと、ごらあ！」

「おお、表出ろ、ごらあ！」

「やめろっ！」

麗美の一喝に、俺と大樹は取っ組み合った直後に、お互いのシャツの乱れを直し合い、静かに椅子に座り直した。

「——続き」

「は、はい……」

腕組みをして俺を睨む麗美に逆らうことなどできるはずもなく、

俺は話の続きを始めた。

息が詰まりそうなほど息苦しい沈黙の中で、夏菜がじつと俺を見つめていた。その瞳は俺の答えを待っていて、俺はその瞳から目を逸らすことができなかった。

たちまち、体温が上昇して、鼓動が俺の胸をドンドンと叩きだす。道路を行き交う自動車のライトが、幾度も夏菜の顔を照らして、それでも、夏菜は身じろぎもせず数メートル先でじつと俺から目を逸らさなかった。そんな中、俺は唾を飲み込んでから、ゆっくり口を開いた。

「……ば、ぱーどうん（すみませんが、もう一度お願いします）？」俺のボケに、夏菜は動じることなく切り返してきた。

「ごまかさないで。お願いだから、こんな時ぐらい真面目に答えて私……本気で聞いているんだよ」

「あ、いや……ご、ごめ——」

はい。ボケてやり過ぎそうとした俺が愚かでした。

「純はさ。いいの？」

「え……」

「私が金田先輩と付き合っても……なんとも思わないの？」

「な、なんだよ、それ……。言ってる意味、分かんねえんだけど——。だって、お前らもう付き合ってたんだろ？　なのに、今更、なんでそんなこと聞くんだよ。ってか、それってお前の問題だろ？　俺がいちいち口出しすることじゃねえだろ」

俺の言葉に、夏菜は泣きそうな顔をして、俺から目を逸らした。

「……違う。私が聞いているのはそういうことじゃなくて」

「じ、じゃあ、一体どういう」

「私は純の気持ちを知りたいの！」

夏菜の声が、弾かれた様に空気を振動させた。その声に、俺は驚いて目を丸くする。夏菜は、膝の前で両手で鞆を持つ手をぎゅっと握って、俯いていた。

「か、夏菜……？」

もどかしかった。夏菜が俺になにを求めているのかが分からないことも。目の前で泣きそうな夏菜を救ってやれる術を知らないことも。そして、自分の気持ちに素直になれないことも。そんな自分の全てが、もどかしくて堪らなかった。

やがて、沈黙の中で、俺はごまかし笑いを夏菜に向けた。

「お前……金田先輩のこと、好きなんだろ？ だったら、俺は応援するよ」

「……そっか。やっぱり、そうだよね」

俯いたまま、夏菜は声を出した。

「え？」

「純はさ。純はずっと、恵美ちゃんのこと想ってるんだもんね」

「……夏菜」

「ずっと、ずっと、いなくなっても」

「やめろ！」

気がついたら、思わず怒鳴っていた。そして、俺の怒鳴り声に、夏菜はビクッと肩を震わせて言葉を止めた。

「あ……わ、わり。怒鳴っちゃまって——」

おずおずと夏菜に近付いて、手を伸ばす。が、夏菜は俺の手を振り払って、逃げるようにその場から駆け出した。

「あ……」

虚空に突き出した俺の手が、遠のいていく夏菜に届くことはなかった。

俺の話聞き終えた麗美と大樹は、なんか、可哀想なものを見るような目をして、俺を見てきた。って、うおい！ 口にせずとも「この腰抜けだけは……」って呆れてんのがその目から伺えんだよ！「駄目だ、麗美。この腰抜けだきや、どうしようもね」「ほんとに口に出すなっ！」

そう言つて、すかさず大樹の頭を引つ叩く。すると、大樹は「なにしゃがる、てめえ！」と怒鳴りつつ俺に掴みかかってきた。

「なにつて、ツツコみだよ！ ありがたく思わんかい！」
「誰もボケてねえだろが！」

はい。その後、お約束通り麗美の一声で僕たちは仲直りしました。「それにしても、あの流れでなんでそんなことになるの？」

机を挟み、向かいに座った麗美がそう言つて、憂鬱そうにはあ、とため息をつく。いや、なんか、ほんとすいません。せつかく、夏菜のこと説得してくださったのに、無駄にするどころか、ますます関係悪化させて。

「でも、夏菜今日も金田先輩のところだろ？ その時点で答えは出てたけどな」

横から口を出す大樹を横目で見た後に、麗美はむすつとした顔をして俺を睨んだ。

「い、いや、でもさ。夏菜は金田先輩のこと——」

「……純君さ。君の鈍感力って相当なものだよ」
「れ、麗美……？」

「——なんで？ 夏菜は勇気振り絞つてちゃんと純君と向き合つたじゃん！ なんで純君はちゃんと夏菜と向き合つてあげないのよ！ なんで、気持ち伝えてあげないの！ そんなの、夏菜が可哀想だよ！」

突然の麗美の怒鳴り声に、喧騒に包まれていた教室の中は、たちまち、シンと静まり返った。その場に居合わせたクラスメイトたちが、突然の出来事に驚いて、俺たちの方を伺っている。でも、一番驚いているのは、他ならぬ俺自身だった。

唇を噛んで、今にも泣き出しそうな麗美の頭をポンと叩いて、大樹は「言いすぎだぞ」と言った。そして、麗美の肩を抱いて一緒に立ち上がると、大樹はばつの悪そうな顔を俺に向けた。

「……悪い、純。あんま気にすんなよな」

そう言って、大樹は麗美と一緒に教室を出て行った。

26・再びの悪夢と来訪者

俺は夏菜のことを一番に考えている。だから、金田先輩と付き合いことを決めた夏菜の意思を尊重すると決めた。なのに、どうして、夏菜は俺の気持ちなんて聞いてくるんだ。どうして、麗美は俺を責めるんだ。

そもそも、夏菜が金田先輩と付き合い合ってなきゃ、俺だってつくに気持ちなんて伝えてる。そうできないのは、夏菜に恋人がいるからじゃないか。といつても、金田先輩の存在がなかったら、俺は今もきつと夏菜への気持ちに気付いてなかったのだろう。

……分らない。夏菜がなにを考えてるのか。夏菜が俺にないを求めてるのか。

でも、知りたいんだ。こんな苦しい思い、もうたくさんなんだよ……。

「ほほほほ。そんなに知りたいのなら、教えてあげましょうか？」
「え？」

まどろみが俺を吸い込み、気がつく俺はただっ広い見渡す限りの草原に立っていた。見覚えのあるその場所に背筋に悪寒を感じ、たった今背後から聞こえてきた聞き覚えのあるおぞましい声に、体中に備わった危険を知らせる警報装置が全力で作動する。

そして、俺は恐る恐る背後を振り返った。

——そこには、女の文字を顔にして、心の文字を体にした化け物が立っていた。

「出たあああああああああ！」

「ほほほほほほほ！ また会えたわね、ダーリン！」

なんで、なんで、なんで！ なんで、俺またこの化け物に追いかけてるの！

全速力で草原を走る俺の数メートル後ろを、笑いながら（なんか女の文字が歪んでる）おぞましい化け物が追いかけてくる中、俺は

混乱する頭の中を必死で整理した。

そう。確か、今日はまっすぐ家に帰って、自分の部屋に戻り、ベツドの上に転がり込んだ。それで、昨日の夏菜の言葉と、今日言われた麗美の言葉を考えて――。

――でも、知りたいんだ（女心を）。

……はい。そう強く思いながら、意識が途切れました。

「――って、だからって、てめえなんか誰も求めてねえんだよおお！」

「ほほほほほ！ 照れちゃってえ！ そんなところ好きよ、ダーリン！」

「誰がダーリンだ、ごらあ！ 俺にやもう心に決めた女がいるんだよあ！ てめえなんか、却下じゃ、ボケエ！」

「な、なんですってえええええええ！ 許せない、許せない、許せない！ だったら、そいつ殺して私も死ぬっ！」

「いや、なに怖いこと言ってるんだ、てめえ！」

「でも！ その前に私にダーリンを感じさせてえええええええ！」

「ざけんな、てめ……！ おあ！ ちょ……いや――誰か助けて――（半泣き）――！」

はい。あえなく、化け物に追いつかれ、化け物は俺の上に馬乗り

に。

「はーはー！ 覚悟はいいかしらあ？」

「だ、誰かー！ 誰か俺を叩き起こしてくれえええええええええええ！」

「ほほほほ。無駄よ、無駄。いっただっきまーす！」

「――（声にならない声）――！！！」

――ってとここで、謎の衝撃が俺を強制的に目覚めさせ、俺はくわつと両目を見開いた。

見慣れた天井が無愛想に俺を見返していた。俺はしばらく天井とにらめっこをしながら、左手を、そつと胸に置き心から呟いた。

「こ、怖かったよう……」

どうやら、夢にうなされているうちに、寝返りを打ち続けベッド

から運良く転落して、その衝撃で目を覚ましたらしい。絨毯じゅうたんの上に仰向けに転がったまま、俺はあの化け物の沸いてこないこの現実、心から感謝した。が、女心というものが分からない限り、今後もあの化け物が俺の夢に出てくる可能性は否めず、俺は深くため息を吐いた。

ふと、時計に目を向けると、時刻は七時前だった。普段なら、そろそろ夏菜が夕飯ができた俺を呼びに来る時間だったが、昨日はあんなことがあったので夏菜は俺を呼びには来なかったし、代わりに呼びに来てくれた紗枝さんにも、頭を下げて夕飯の誘いを断った。今日も、おそらく紗枝さんが呼びに来てくれるのだろうが、やはり夏菜と顔を合わせるのは気まずかったので、断るつもりだった。

が、数分後、チャイムの音が鳴り玄関のドアを開けると、そこには紗枝さんじゃなくて、夏菜が立っていた。

……俺は、絶句した。

27・交わらない気持ち

これは何かのドッキリではあるまいか。などと、一番に目の前に突きつけられた現実に対する都合のいい、かつ、できるだけ現実的な現実逃避が頭に浮かんだ。しかし、こんな想定外の事態を引き起こす性質の悪い人物は、それこそ、神様しか心当たりがなく、その神様も神出鬼没であり、その存在の有無さえ未だ未確認であったため——と頭の中でそんないらん解説が高速で通り過ぎ、俺ははっと我に返った。

目の前で、夏菜が気まずそうな顔をしながら、それでも、俺の目の前に立っているのは紛れもない現実だった。いや、試しに頬を抓つかってみてもよかったのだが、生憎さつき女心の化け物に追い掛け回される悪夢から覚めたばかりだったので、その行動も無意味だろう。などともいいことを考えてる（あくまで現実逃避）うちに、

夏菜が俯けていた顔を上げて、おずおずと声を出した。

「あの……こ、こんばんは」

「え……あ、こ、こんばんは」

はい。これが本日、夏菜と交わす初めての言葉です。

「あの、ご飯できてるんだけど——。その前にちょっと話したいことがあって」

「あ……お、おう。だったら、立ち話もなんだし、上がって——」

と言いかけたところで、夏菜は「ううん。ここでいいよ」と言つて、俺の申し出を断った。そして、申し出を断られた俺は、なんかイタイ感じで、とりあえず頭を掻いた。

「あ、そ、そっか？ で、で？ 話ってなに？」

はい。私はそんな分かりきったことをしれつと聞いている最低のクズ男です。誰か、罵ってください。そして、案の定、俺から目を逸らして俯く夏菜を見て、罪悪感急上昇だつてばよ。……できることなら、この罪悪感に埋もれて、私は死にたい。

「昨日は……ごめんなさい」

俺が内なる罪悪感に打ちひしがれている間に、夏菜は丁寧に頭を下げてきた。

「私……純の気持ちも考えずに、ひどいこと言っただよね。——本当に、ごめんね」

顔を上げた夏菜が、そう言っただけを見つめた。

違う。夏菜は何も悪くない。でも、俺が悪いわけではないことも、夏菜は多分分かってる。すれ違ってしまっただけ俺たちは、その現実戸惑って、お互いを傷つけることしかできなかった。そして、このままじゃいけないことも、もう戻れないことも、俺たちは分かっている。今日ね、大樹君に聞いたの。昼休みにあったこと」

「そっか……」

「うん。麗美、今日のこと気にしてて、純に謝りたいって言ってた。でも、分かっているんだ。本当は、麗美にそんなことさせちゃう、私たちが悪いんだって事」

「……うん」

「私の我が儘が、純だけじゃなくて周りの人まで傷つけちゃうって事。誰かと付き合っただけで事がどういふことなのか、私、分かっていたから。でも、もう分かっていたから、決めたの」

そう言っただけ、夏菜は俺を見つめた。

「これから、純とは少し距離を置こうって」

夏菜のその言葉に、俺は立ち尽くしたまま何も言っただけでやる事ができなかった。大切な俺が俺の傍から離れていく。そして、それが夏菜だと気付いても、何もできない自分がある。

こうなることを、初めから覚悟していた。そして、それを覚悟できたのは、今、この瞬間感じている途方もない喪失感を、想像もしていなかったからだ。

「夏菜——」

「ごめんね、純……」

引き止めたかった。でも、目の前で謝ってくる夏菜のせいで、言

い出すことができなかった。今まで、いつでも伝えられる距離にいた。でも、今は「好きだ」というたった一言の言葉も届かないぐらい、夏菜が遠かった。

俺は、溢れてきそうな言葉を飲み込んだ。そして、夏菜はもう一度「ごめんね」と呟いた――。

28・失恋後遺症

「うーい。生きてるかぁ、純？」

「……ん？ おう。誰かと思えば、過去三十六人の女を泣かせて来た色男の大樹君じゃないですか。悪いですが、君のような彼女持ちの色男と僕では生きる世界が百八十度違うんですよ。どうぞ、元の世界にお帰りください。あ、お帰りはあちらですから」

そう言つて、俺は教室の出入り口を指し示してから、再び自分の席の上に突つ伏した。

「おい、おい！ 戻つて来い、純！ いい加減、夏菜——」

「俺の前でその名を二度と口にするんじゃないやねえっ——」

反射的に脳が命令を下し、俺はガバツと体を起こして、大樹に掴みかかった。そして、いつも通り、握った拳を振り上げてから、はたと我に返り、目を丸くする。

「……ありゃ？ なにしてんだ、大樹」

「いつも通りのお約束ありがとうございます、クソヤロウ。さつさと、その手を放してもらえますか？」

「お、おう。悪い」

というような発作が、ここ一週間治まりません。ちなみに、大樹医師はこの俺の症状を失恋後遺症と命名。その場で取っ組み合いの喧嘩となりました。

「ったく、いい加減その発作何とかしろよ。いちいち付き合う俺の身にもなれつての」

「いや、しかし、この発作は相手がお前の場合のみ起こるものだから、害はないだろう」

「喧嘩売つてんのか、てめえ……」

「おいおい。無意識のうちにさえ、お前だけが心を許せる親友だと認めている、という事実を述べただけだ。他意はない」

「嘘付け」

苦虫を噛み潰したような顔をして俺を見る大樹。しかし、この一週間、誰よりも早く学校にたどり着く（夏菜と鉢合わせるのが気まずいから、登校時間極端にずらしてる）俺の次に教室に入ってくるのは、決まって大樹だった。おお、大樹————普段チャラ男のくせに、実は友達想いのいい奴なんて、お前はどこの売れない映画に出てくる主人公の友達役止まりの男だ」

「……てめ。その癖いい加減直さねえと、マジでボコるぞ」

「ん？ おお、悪い。つい思考が口に」

「出すなら、褒めてる時にしろ！」

「そんなこと言われても、肝心の褒めるところが」

「ないってか、ああ！ あってもなくても、てめえのさじ加減一つだろうがよお！」

目を血走らせて、俺に掴みかかってくる大樹に、俺はふうとため息をついた。

「まあまあ、落ち着いて。心に傷を負って情緒不安定になっている男にマジにならないでください、大人気ない」

ギリギリと歯を食いしばり、ものすごい形相で俺を睨む大樹。しかし、数秒後、大樹は気を取り直したように俺から目を逸らし、教室の出入り口に向かって声を出した。

「——あ。おはよ、夏菜」

大樹の言葉に、俺は慌てて大樹の手を振り払い、全力で教室から逃げ出そうとして、机の脚に足を引っかけ派手にずっこけた。そして、焦って体を起こすと、あら、不思議。夏菜の姿は教室のどこにも見当たりませんでしたとさ。

静かに立ち上がり、服についた埃をパンパンと払う。そして、腹を抱えて爆笑している大樹に、俺は決死の特攻を決めた。

夏菜に距離を置くと言われてから一週間、夏菜に距離を置かれるまでもなく、俺は夏菜を避け続けていた。その避けようといったら、朝登校する時間はずらずは、学校に着いたら、夏菜が教室に入ってくる前に姿を消して、チャイムが鳴ると同時にまた教室に入り直して声をかけられないようにするは、休憩時間にも同じようなことをするは、とまるで嫌がらせのように執拗で、ここ一週間、一度も夏菜と言葉を交わした記憶はございません。

「いくら気まずいからって、やりすぎだろ。ってか、てめえからますます気まずくしてどうすんだよ」という大樹の弁はごもつともでございますが、やつちまった手前、もう後戻りもできないわけではい。完全に自分を見失い、今日も朝も早はよから登校してる次第です。さて。取っ組み合いも終わり、俺は自分の席に着き直した。大樹は俺の向かいの席にどっかりと座り込むと、ぽりぽりと頭を掻きながら言葉を発した。

「まあ、女なんて他にも腐るほどいるんだ。あんま、落ち込むなよ」
「ああ。クソの役にも立たねえ、ありきたりな励ましの言葉、ありがとう」

「……お前な」

「いや、気にせず受け流してくれ」

俺の言葉に、大樹は大仰にため息を吐いた。

「分かんねえな。そんなに夏菜のこと好きなら、なんで気持ち伝えねえんだよ」

「……だってよ。夏菜には——」

「関係ねえよ。夏菜に男がいようがいまいが、俺がてめえなら、絶対気持ち伝えるぜ。要は、気持ち伝えるのが怖えだけなんだよ、てめえは。夏菜に男がいるってご丁寧な理由つけてるだけでよ」

大樹の言葉に、俺は無言で大樹を睨んだ。でも、睨み返してくる大樹から、先に目を逸らしたのは、俺の方だった。

「……かもな。でも、いいんだ、俺は。夏菜が笑ってられるなら、それで」

「それが、この一週間、散々人に絡んで来た奴の言う台詞か？」

「まあ、まあ。心に傷を負って情緒不安定になっている男相手にムキにならないで」

「……っけ。ま、いいや。俺も、熱血キャラはどうも苦手だしな。」

ここからは、俺らしく振舞わせてもらうぜ？」

そう言っていると、大樹は不適な笑みを俺に向け、声を出した。

「喜べ、純。俺が夏菜のこと忘れさせてやるよ」

29・合コン

「い、いや、大樹よ……。気持ちはいがたいのだが、生憎俺にそ
っちの趣味は……。っていうか、お前はてっきりノーマルだと思っ
ていたのだが」

「は？ なに言ってるんだ、お前」

「え？ いや、だってお前今、俺が夏菜のこと忘れさせてやるって
――」

俺の言葉を聞いて、大樹は呆れ顔で息をついた。

「アホか、お前は。何危ない勘違いしてんだよ」

「いや、よく見ればお前それっぽい顔してるし」

「ほっとけ！ ってか、余計な茶々入れんじゃねえ！」

「はいはい。それで、この夏菜のこびりついた俺の脳みそから、ど
うやって夏菜を除去すると？」

俺の言葉に、大樹は気を取り直したように、また不敵に笑い、声
を出した。

「俺を誰だと思ってやがる？」

「え？ 何の取り柄もない、しがない女つたらしだろ」

「うるっせえ！ いちいち勘に触る言い方ばっかしやがるな、てめ
えは！」

いや、だって、お前が変なこと聞くから。

「……まあ、いいや。いいか、純。今のお前に必要なのは、新しい
出会いだ」

「アタラシ・イデア・イ？」

これはまた随分難解な言語ですな。

「おう。新しい女作って、夏菜のことなんて吹っ切っちゃまえ。合コ
ンがお前を待ってるぜ純！」

「……はい？」

合コン。正式名称、合同コンパ。これは主として男女の出会いを求めるために行われるコンパで、女子の大学進学率が急激に上昇し始める1970、1980年代頃から盛んになり、その後学生同士に限らず広汎くわいはんに行われるようになった。合同コンパという名称はうんぬんかんぬん。

しかし、そういったものをまさかこの俺が体験することになるとは。いや、それというのも、俺のために今週の日曜日に、大樹が勝手に知り合いの女の子を集め、合コンを組んでいるというのだ。そして、夏菜のことを忘れられるという甘言かんげんに惑わされ、来る日曜日、俺は待ち合わせの午後六時、待ち合わせの駅前に来てしまったわけだ。

よく考えてみれば、親友が失恋で打ちひしがれているこの状況が大樹が放っておくはずなどないのだ。だって、ほら。もし麗美にこのことバレても、俺のためだって都合のいい言い訳ができるじゃない？ 安心してためえが合コン楽しめるってワケだな、うん。

そこに直れ、大樹、ごらあつ！

——と、普段なら麗美に告げ口をして「修羅場ドッキリ」を仕掛けてやる場所だが、気晴らしにはなるかな、などと思い、待ち合わせの場所に来てしまった俺は、やはり自分を見失っているわけだ。つか、まあ、社会勉強の一環として合コンというものを一度は経験しておくのもありかなと。いや、決して家で一人寂しく過ごすのが辛いなんて思ってません。あわよくば、夏菜のことを忘れさせてくれるような天使様との巡り合いなどを夢見てるわけでは、ええ、決して！

改札を抜け、駅の南口で人の流れをぼんやりと眺めながら大樹を

待っていると、程なくして人の流れの中から大樹を発見。大樹は俺に気付くと、テンション高めの声を出し、俺に手を振ってきた。

「おーす、純。時間通りだな。感心、感心」

「……お、おう」

バリバリのストリート系ファッションに身を包んだ大樹は、俺の元まで駆け寄ってくると、無遠慮に俺に肩組みをして、俺の腹を軽い調子で殴ってきた。

「どうした、どうした。情けねえ面しやがって。もしかして、緊張してんのか、お前」

「い、いや、まあ……なんだ。合コンなんて、初めてだからな」

俺の言葉を聞いて、大樹はニヤリと嫌らしく笑った。

「喜べよ。今日集まった女の子はみんな上玉だからよ。夏菜に勝るとも劣らないかわいこちゃん揃いだぜ」

「いや、俺は別にそんなつもりは……。とりあえず、気晴らしにだな」

「いいから、いいから。御託は抜きにして今日は楽しめよ。なんせ、今日の合コンはお前のためにセッティングしてんだからよ」

「はあ……」

「つか、お前のハイテンションについてけねえよ。」

「いいか、純。今日の合コンは4・4だ。そんで、こっちの男メンバーの残りの二人とも引き立て役を用意しといた。つまり、初心者のお前でも、充分に楽しめるって寸法だ」

「いや、引き立て役ってお前」

「さて。じゃ、行くとするか」

俺の言葉を聞かず、大樹は歩き出した。

「おい、おい、大樹。まだ、俺たち以外誰も来てねえだろ」

「あ？ いや、構わねえよ。もう、合コンは始まってっから」

「は？」

「遅れて行くのも合コンの戦術だ。今頃、引き立て役の男二人相手に、女の子達も白けてる頃だ。そこで、真打の俺たちが登場するこ

とで、俺たちの価値は高まる。これぞ名付けて捨石戦法」

「お前……そういうことばっかしてたら、いつか、友達失くすぞ」

……麗美よ。お前は一体こいつのどこに惚れたんだ。今度、マジで聞いてみていいか。いや、誰ならぬ、お前自身のために。

「馬鹿なこと言ってるねえで、さっさと行くぞ。ぐずぐずしてたら、女の子達が白けて帰っちまうぜ」

そう言っただけと弾む大樹の背中を見ながら、俺はこの時ほど強く疑問に思ったことはないだろう。

俺、なんでこんな奴の親友やってんだろ——？

30・意外な顔合わせ

さて。本日の合コンはカラオケ合コンということで、俺と大樹は「カラオケ・パラダイス」というカラオケボックスに到着。そして、女の子四人と引き立て役の哀れな男二人の待つ個室を外から覗いてみると、そこには想像以上の悲惨な光景が広がっていた。

ソファの端っこに身を寄せ合って座り、無言でうなだれている野暮ったい男が二人。そして、向かいのソファには、仏頂面で携帯をイジッている女の子が三名と、なんか、気まずそうに俯いてる女の子が一名。はい。カラオケボックスにまで来て、歌を歌わない現場に立ち会ったのはこれが初めての経験でございます。その光景を見て、さすがの大樹も一言ボソツと呟きました。

「や、やりすぎたか……」

しかし、こと女関係においては転んでもタダでは起きない大樹のこと。気を取り直して部屋のドアを開けると、大樹は威勢良く個室の中に入ってしまった。

「いよー！ お待たせー！」

ただでさえ高かったテンションを更に上げ、戦場へ赴く大樹の水面を目の当たりにし、俺は早くもここに来たことを後悔した。いや、だって、ほら。大樹の登場で女の子たちが途端に機嫌直してはしゃいでるよ？ ソファの端っこで縮こまってる彼らは、その瞬間、真正正銘の引き立て役に。うう、なぜか、お前らの無念の気持ち、俺には痛いほど分かるぜ……。いや、分かりたくねえけど、どっちかというと、俺もそっち側の人間っぽいからね？

などと、悲しいことを考えていると、大樹がドアを開けて、中から顔だけを出して「おい、なにやってんだよ。早く入って来い」と、外で突っ立っている俺に声をかけてきた。

いや、いや、この腰抜けにこの気まずい空気（あくまで、引き立て役男視点）の中、突撃しろと？

「わ、悪い、大樹。俺やつぱ、帰るわ」

「あ？ 馬鹿言つてねえで、さつさと来いって」

そう言つて、大樹は俺の腕を掴み、無理やり俺を部屋の中に引つ張った。

「お、おい……！」

抵抗するも、あえなく部屋の中に引つ張り入れられる俺。そして、女の子たちの視線が一齐に俺の元に。

「はい！ こいつ、俺のダチの長谷川純でーす！ ちなみに、こいつ失恋ほやほやの身だから、みんな慰めてやつてね！」

って、うおい！ 何余計なこと口走つてやがんだ、てめーは！

しかし、大樹に掴みかかる前に、女の子たちの好奇の視線にさらされ、俺は固まった。いや、だって、女の子みんなよく見れば、めっさ可愛ゆいんだもん……って、ん？

女の子の中で一人だけソファに大人しく座っている女の子にふと目を向けて、俺は驚きのあまり、目を見開いた。そして、彼女は俺と目が合うと、おずおずと俺に頭を下げてきた。

「み、南……？」

……うそおん？

いや、いや、いや、人は見かけによらないというが、まさかこのような俗な場に南がいるなどと誰が想像できただろう。いや、大人しそうな人間ほど裏ではなにをしているか分からないというし――。
「先輩にカラオケ行こうって誘われて来たんです。こういう集まりだなんて知らなかったから……」

――なんて、疑ったりしてすいませんでした。

さて。只今、大樹君は女の子三人を相手にくっちゃべりまくり、両隣に女の子を座らせたそれは、もはやキャバクラの様相を呈しています。そして、俺はというと、南の隣に座り、とりあえず、お話でもというわけで。

それにしても、今日の南はいつもとかなり雰囲気違った。普段制服姿しか見たことがないから、私服姿の南を見て雰囲気が違うと感じるのは当然なのだろうけど。それにしても、アイボリーの明るめのワンピースに、フリルのついた黒のカーディガンを着こなす今の南は相当可愛かった。おまけに、いつもおさげにしている髪を、今日は普通に下ろしてるものだから、遠目からは（部屋の外から中を覗いた時とか）南だとは気付かなかったぐらいだ。

「な、なんていうか、今日はいつもと雰囲気違うな、南」

といつても、南と会うのもおおよそ一週間ぶりなのだが。うん。裏庭で相談を受けて以来、南とは一度も顔を合わせてませんから。

「あ、急に呼び出されたから、髪を括る暇がなかったんです。や、やっぱり、変ですかね……」

そう言つて、南は自分の髪を恥ずかしそうに撫でながら、目を伏せた。

「え？ いや、変なことないぞ。可愛いつて」

「え……」

「普段おさげにしてる南もいいけど、俺はどっちかというところ、今の方が好きかな」

「ど、どうも……」

そう言つて、顔を赤くする南に俺は、ぽりぽりと頭を掻いた。いや、それにしてもこれが合コンというものか。まあ、これが標準とは思わないが（大樹が女独占して、端っこで男二人が落ち込んでるし）、やっぱり、こういうのは俺の性に合わないみたいだ。いや、もちろん馬鹿騒ぎするのは嫌いじゃないが、やっぱり、それも気心の知れた奴らとじゃねえと、落ち着かねえよ。

——そういや、夏菜ともよくカラオケ来たよな……。

「あの……長谷川先輩？」

「ん？ あ……な、なに？」

一人でブルー入ってるところで、横から聞こえてくる南の声に気付き、俺は慌てて南の方へ顔を向けた。

「さっき、先輩の友達が言ってたこ」

「ねえねえ、君さあ。彼女に振られたってほんとなのお」

南の声を遮り、突如割り込んできた無遠慮な声に、俺は慌てて右隣に顔を向けた。すると、さっきまで大樹とくっちゃべっていた女の子の一人が、いつの間にか俺の右隣に座っているではないか（南は左隣に座ってる）。ついでに、大樹の奴は女の子二人を引き連れ、なんかテンションのやたら高い歌を歌い出した。

「ねえねえ、どうなの？」

やたら、露出度の高い服を身に着けたその女の子は、遠慮のえの字も知りませんというような顔をして、俺の肩にタッチして、ゆさゆさと揺さぶってきた。

「は？ い、いや、別に彼女とかそんなんじゃないから——」

「えー、じゃあ、片思いだったんだ？」

「え……いや、まあ……」

って、南の前で何白状さすねん君！ とは思いながらも、その後の女の子の質問攻めに、僕の心は丸裸にされた次第で。

「ふーん。そっかー。好きな娘に彼氏ができて、間接的に振られちゃったんだ。でも、私だったらちゃんと自分の気持ち伝ええると思うな。ね、南ちゃんは思う？」

「え……！」

突然の女の子の無茶振りに、俺は慌てて南に顔を向けた。

「え……わ、私は——」

俺と目が合って、気まずそうに目を伏せながらも、南は声を出した。

「——黙ってると思います。好きな人を困らせたりしたくないから……」

……おお、南。君はなんていい子なんだ。まさに、僕も君と同じ答えだよ。

「ってか、南ちゃんって好きな人がいても絶対気持ち伝えられないってタイプだよな」

「……」

……確かに。

「で？ 南ちゃんは今好きな人いるわけ？」

「え……！」

突然の女の子の質問に、南は慌てた様子で俺に目を向けた。って、いや、そこでなぜ俺を見る南よ。そして、なぜ、うな垂れる？

「はい……。います」

——って、いるの、君！

「え、マジでー！ 南ちゃんったら、好きな人いるのに合コン来てるの！ 見かけによらず、軽いんだー！」

「ち、違います！ そんなんじゃない——」

「へえ？ じゃあ、今日来てる男の子の中にその好きな人がいるとかー！」

「……！」

「あ！ 顔赤くなってる！ 図つ星！」

そう言って、南を指差して無邪気に笑う、女の子。そして、南はその場の空気に耐えられず、「トイレに行ってきます」と言い残して、逃げるように部屋を出て行ってしまった。

いいように遊ばれてるな、南……。

「あはは。見た、あのリアクション。あの子、絶対男と付き合ったことないよ」

「……君ね。南は生真面目なんだから、あんまりからかうなよな」

「えー、からかってないよお。だって、南ちゃんの好きな人って、ほんとにこの中にいるもん」

「え……！」

女の子の言葉に、俺は思わず女の子に顔を寄せて、小声を出した。

「マ、マジで？」

「うん。ってか、この合コンもあの子のために開いてるようなもんだし。あの子、見るからに奥手だもんね」

「……」

マ、マジか……？　この中に南の好きな男が……。い、一体誰だ？

俺は素早くソファの端っこで落ち込んでいる引き立て役の男二人に目を走らせた。うん。こいつらは却下だ。ということは消去法でいくと――。

俺は女の子二人と仲良く熱唱している馬鹿に目を向けた。

――み、南……止めとけ……あいつだけは、止めとけ。お兄さん、悪いこと言わないから……。

「――で？　君的にはどうなの？　南ちゃんみたいな子」

愕然とノリノリの大樹を見ていると、横で女の子がそんなことを言つて、俺の肩に手を置いた。

「は？　……俺？」

「うん」

「いや、なんで俺が出てくるわけ？」

「え？　だって、南ちゃんが好きなのって君だし」

女の子の爆弾発言に、俺の意識は一瞬宙をさ迷った。

31・突然の告白

事の発端は、一週間ほど前。南が二年生の部活の先輩に、俺のことを知っているかと訊いたことから始まったらしい。その二年生の先輩が随分な姉御肌で、南が俺のことを好いていると勘違い。そして、俺がちやうど失恋していることを知ったその姉御が大樹と結託。この合コンの開催に至った——と。

それで、南が先輩にここに呼び出されたという話にも納得がいく。新しい出会いなどと嘯^{うそ}いていた大樹の魂胆もつまりそういうことだ。しかし……。

なぜ、俺は今、酔いつぶれた南を背に担ぎ、家路を辿っているのだ……。

いや、分かってる。こうなつた経緯はもちろん分かつてるけどもさ。

——あの後、合コンも終盤に差し掛かったところで、大樹が「ゲームしようぜ!」と言い出し、なぜかビールを注文。そして、一人ずつ歌を歌って、一番点数の低かつた者が罰としてそのビールを飲み干す、という至つてシンプルなゲームのルールを説明した後に、早速ゲーム開始。しかし、カラオケなど今日来るのも初めてだという南が、人前でまともに歌など歌えるはずもなく、あえなく最下位に。そして、その場の空気に逆らえず、中ジョッキ一杯のビールを飲まされた南は、その場でボタンキュー。流れから、俺が南を家まで責任を持って送るハメに。はい。敵の思惑通りに事は運ばれた。

しかし、一番気の毒なのは俺などではなく、南だ。部活の先輩からの誘いでは、断るわけにもいかず、仕方なく向かつた先は、なんと合コン会場だったというのだから。そして、よりによって好意を抱いていると勘違いされてる相手が、よりによって俺。俺だもの。お兄さん、この娘が不憫^{ふびん}で仕方ないよ。ほんに、こんなええ娘がな

あ……世の中ほんとに間違つとるわいなあ……。

そして、何より情けないのは、そんな敵の魂胆を知りながら、指を銜^{くわ}えて見てることしかできなかったこの腰抜けです……。いや、だって、俺びつくりして魂抜けてたんだもん。いきなり南が俺のことうきなんて言うから（もちろん、本人が言ったわけではないが）。でも、安心してくれ南。二次会に繰り出した大樹のヤロウは、今頃地獄を見てるから。うん。麗美にこのことキチンと報告しといたんだよ。今頃、鬼にトランスした麗美に大樹はこつてり絞られてるだろうさ。俺抜き^{抜き}の二次会、の時点で言い訳もできないしね？

ご安心くだされ。貴殿の仇は某^{それがし}が取っておきましたぞ……！

はあ……しかし、困った。南の家の住所を俺は全く知らないのだ。とりあえず、今は俺の家に向かつて、夜道を歩いてるんだけど……。

「んー……むにゃ……」

時々、南が寝ぼけてほつぺたを俺のクビ元に摺^すり寄せてくるんだよなあ……。いや、このこそばゆい感覚はなんとも言えず、心地いいのだけど、なんか南に悪いわけで……。

「むにゃ……」

とにかく、のぼせちまう前に（俺が）速攻で帰ろうか。

何とか我が家に到着した俺は、急いで玄関の鍵を開け、中に上がった。さすがに、三十分以上、一人おんぶして歩き続けた俺の体力は、もはや残っていないわけで、早く南をソファにでも寝かしてやりたいのだが……。

ソファに南を座らせて、寝かせてやろうとしたら、寝ぼけた南が

俺の首に腕を回して来ました……。

「お、おい、南……」

「んー……先輩……水う……」

しかし、本人に意識はないようで、俺はそつと南の腕から逃れた。はあ……やばかった。一瞬、ドキツとしちまったぜ。

とにかく、気を取り直して流してコップに水を汲み、南に持っていつてやる。

「おい、南。水だぞ。起きられるか？」

「んー……」

ソファに仰向けに寝た南が、顔をしかめて虚空に手を伸ばす。俺は苦笑してから、コップをテーブルの上に一旦置いて、南の体を起こした。

「ほら、水だ。飲めるか？」

テーブルからコップを取り、南の口元に持っていつてやる。すると、南はおぼつかない動きでコップを両手で掴み、チビチビと水を飲みだした。

「んー……もう、飲めませんから……」

そう言つて、まだ半分以上水が残っているコップを俺に押し付けてくる南。しかし、それにはアルコールは入ってはいないぞ、南よ。俺は苦笑してから、南からコップを受け取り、ソファから腰を上げ——ようとして、バランスを崩した。南が、不意に背後から俺の手を掴んで、後ろに強く引つ張つてきたのだ。

「わ……！」

思わず、手からコップを落としてしまい、水が南の服を濡らした。しかし、もっとまずいことに、バランスを崩してソファの上に倒れこんだ結果、俺は南の上に覆いかぶさる形で倒れこんでしまった。

柔らかくて、暖かい感触が、俺の体のすぐ下にあった。南の吐息が、俺の耳をくすぐる。はっとした俺は、慌てて体を起こそうとした。でも、それを引き止めるように、南は下から俺の首に腕を回してきた。

ほんの少しの静寂の中で、俺は金縛りにあったように動けなかった。そして、南の声で俺は完全に金縛りにあった。

「……私じゃ、駄目ですか？」

「え……」

「私……先輩のことが、好き……」

32・人違いor……？

すぐ横に、南の顔があつた。耳元をくすぐる南の吐息、押し付けてくる柔らかな温もり。普段の南からは想像もできない甘美な誘惑が、俺の理性という防壁を突き崩そうとしていた。

この、非現実的な状況で、それでも、俺の心臓の鼓動は悲鳴を上げて、俺を現実に戻す。南のぬくもり。南のおい。女の子しか持ち得ない、繊細な感触に眩暈を覚える。それでも、こんな時だというのに、夏菜の顔が頭に思い浮かんだ。飲み込まれそうだった俺の理性が、守りを固めて、俺ははっと我に返った。

「み、み、みな——」

声を出そうとした瞬間、南が急に膝を立ててきた。ちょうど、俺の股の下にあつた南の太ももが俺の股に擦り寄ってきて、不意に体が横に傾いた。南が、俺に抱きついた格好のまま寝返りを打ったのだ。

「あ、危——」

勢いそのままに、南に押されソファから転落する。そして、状況はさらに悪化することとなった。落下の際に南をかばって、下敷きになったのはいいのだが、そっくりそのまま体勢が入れ替わってしまった。俺の上に覆いかぶさる南の前に、俺は完璧に身動きが取れなくなった。

「み、みみ、み、南……？」

惜しげもなく、俺の体に自分の体を押し付けてくる南。頭の横に投げだされた俺の手を、南は手探りで探し出し、顔を上げないまま、俺の両手をきゅっと握った。

ごくりと唾を飲み込んで、俺は何とか声を絞り出した。

「み、なみ——お、俺……」

「ん……」

「……」

「……むにゃ……」

えーと……。

「——南？　もしかして、お前……」

——寝ちゃってます？

「まったく、人騒がせな……」

酔って眠りこけている南をソファに寝かし直してから、押入れから引つ張り出してきたタオルケットをかけてやって、俺は深く息を吐いた。酔ったせいかな、ほんのりと赤らめた顔をして、寝息を立てている南を少しの間眺める。

——もし、あの時南が眠ってしまわなかったら、俺はどうしていただろう？

密着した南の体の感触が蘇ってきて、俺は無性に恥ずかしくなつて、南から目を逸らした。

い、いかん、いかん。あくまで、南は酔っぱらってたんだからな。酔っ払って——。

（……私じゃ、駄目ですか？）

「……」

（私……先輩のことが、好き……）

だああああお！　違う！　断じて、違う！　あの告白は人違いだ！　そうに決まってる！　だ、だってほら！　先輩とは言ってたが、南は一言も俺の名前を口にしたわけじゃねえし！　確かに、好きな男がいるとも言ってたが、決してそれは俺じゃねえ！　他の先輩だ！　そうに決まってる！

「——って、言ってる場合じゃねえんだよ」

そう。この後、南をどうするかが問題だ。とにかく、このままつてワケにはいかないし、さっき水をこぼして、南のワンピースは濡れたままだ。このまま寝させていたら風邪を引いてしまうかもしれない。しかし、俺が脱がせるわけにもいかないし、なにより、ウチには換えの女物の服なんてないのだ。

となると、やはり――。

「だ、大丈夫。この時間だもんな。きつと、紗枝さんがでてくれるよ……」

というわけで、俺はケータイをポケットから取り出して、夏菜の自宅に電話をかけた。

神様、お願いします。神様お願いします……。

はい。コールの間の神頼みです。

「はい、大山です」

電話越しから聞こえてきた夏菜の声に、俺は即座に通話を切った。つて、神の馬鹿野郎う！

い、いや、いや、信じるものは救われる。アーメン。たまたま、紗枝さんはトイレにでも行つて、電話にでられなかっただけさ。

と、自分に言い聞かせ、三分後再度電話するも――。

「はい、大山です」

――やっぱ、夏菜ができました……。

「……もしもし？」

少し苛立たしげに声の調子を上げる夏菜。無理もない。さっき、無言電話かけたばかりだしな。でも……。

俺はソファの上で眠っている南をチラッと見てから、思い切つて声を出した。

「も、もしもし。あの……俺。純だけど」

「え……」

俺の声を聞いて、戸惑ったような夏菜の声が響く。そして、電話の向こうで何も言つてこない夏菜に「ごめん」と声を出してから、俺は夏菜に理由も言わずに、とにかく今からウチに来て欲しいとだ

け伝えて、返事も待たずに電話を切った。

33・大事な友達

一分後、玄関のチャイムが鳴り、俺は夏菜を家に上げた。夏菜とまともに面と向かうのは、実に約10日振りだった。それだけでも気まずいというのに、更にこの状況が上乘せされれば、その気まずさはもはや向かうところ敵なしだ。はい。とても夏菜に合わせる顔などありませんでしたが、これもすべては南のため……！

というわけで、リビングのソファに寝る南を前にして、呆然と立っている夏菜に、俺は恐る恐る後ろから近付いた。

「どういうこと？」

振り返らずに発せられた夏菜の第一声は、思いの他冷静なものだった。しかし、今の俺にそんなものは何の気休めにもならないわけだ。

「い、いや、その、これは、その、いわゆる、なんというか、つまり、その、俺はべ、別に何も——」

「落ち着いて。とにかく、事情を説明してよ、純」

そう言っただけ振り返った夏菜は、俺を見て苦笑した。

そんな夏菜を見て、こんな状況だというのに、安心して自分のいた。この安心感は、この状況を前にして、夏菜が全く怒っていないからか、それとも、この十日間の隔たりを全く感じなかったからか、どっちに對してのものだろうか？

いや、多分……夏菜と普通にこうしていられることに、俺はほっとしているんだと思う。

「あ、うん……。わり」

ほっと息をついて、俺は夏菜に事情を説明した。

まず、南の替えの服は別に女物じゃなくても、Ｔシャツで間に合ったこと。住所が分からなければ、南のケータイのメモリーから自宅の電話番号にかけて、親に事情を説明して迎えに来てもらえば済むこと。また、いきなり娘のケータイから男が電話をかけてくれば、向こうも余計な心配をするだろう、等々。あたふたしていた自分がまるつきり馬鹿だと思えるぐらい夏菜は冷静で、的確に俺の尻拭いをしてくれた。

Ｔシャツに着替え終えた南は、相変わらず気持ちよさそうにソファの上で眠っていた。一方、とりあえず南の親に事情を説明し終えた後、俺と夏菜はなんともなしに、ダイニングのテーブルに向かい合って座った。

嵐の後の静けさ、とでもいうのか。とにかく、慌しい状況も一段落つくと、途端に後を追ってきたように、静寂が部屋の中を支配した。別に、さっきまでもそんなに夏菜と言葉を交わしたわけではないけれど、こうして改めて向かい合っていると、さっき感じた安心感もどこかへ吹き飛んでしまった。

それも、夏菜が黙り込んで何も話してくれなくなったからだ。

……って、何勝手なこと言ってるんだ、俺は。この状況を作ったのは、全部俺のせいじゃねえか。この十日間、夏菜を避けてきたのは俺だ。それで、困った時だけこんな風に夏菜を呼び出すなんて、ほんとに自分勝手も甚だしいってものだ。こうして、夏菜が助けに来てくれただけでも、不思議なぐらいなんだから。

「えっと、お、お茶でも入れよっか？」

重い空気に耐え切れなくなった俺は、思い切って向かいに座る夏菜に目をやって、声を出した。しかし、そんな俺に、夏菜は慌てて声を返してきた。

「あ、ううん。いいよ、そんな気を遣わないで」
いえ、気を遣わせてください……。

「そ、そっか？」

「うん……」

そして、再び沈黙が……。やべえ、気まず過ぎて息が詰まる。とりあえず、なんか話さなきゃ――。

「な、なあ、夏菜……」

「なに？」

「あ、いや……俺、ほんとに何もしてねえから……」

そう言つて、ソファで眠っている南に目を向ける。いや、なんか夏菜からすれば呼び出されてみれば見ず知らずの女の子が酔いつぶれて眠っていたわけで、時間も時間だし（只今の時刻は夜の9時）……当然誤解されても仕方ないでしょう？　しかし、さっきから一度も夏菜はそのことに触れては来ないわけで、逆に、気まずいって感じで、はい……。

しかし、夏菜はなぜか俺の顔を見て、可笑しそうに笑った。

「あの子、可愛い子だね」

「うん……は！」

思わず素直に返事を返してしまつてから、俺は焦つて声を出した。そんな俺を見て夏菜は笑いをこらえ切れないように、クスクスと笑った。

「あ、あのな――」

「大丈夫だよ。ちゃんと、分かつてる」

「え？」

「純が酔つて無防備な女の子を部屋に連れ込んでいかがわしいことするわけないもん」

「あ……うん」

すいません。正直、かなり危なかったです……。

「それに、疚やましいことがあるなら、私に電話なんてしてこないだろうし。大体、女の子を襲つて純なんて想像できないよ。どうしていいか分からずに困つてあたふたして私に助けを求めてくる純は想像できるけど？」

そう言ってイタズラっぽく笑う夏菜に、俺は「あのな」と顔をしかめた。

「しょうがないだろ、あの場合は。勝手に南の服脱がせるわけにもいかないし」

「そうね。タオルで服を拭いてあげるぐらいの応急処置もできないくらい、あたふたしてたんだもんね」

「おい……」

「ごめん、冗談。——だつてさ」

そう言って、夏菜は困ったように微笑んだ。

「こつやって純と話すのつて、久しぶりなんだもん。嬉しくて、ついからかいたくなっちゃうの」

「え……」

夏菜の言葉に、俺は戸惑いながら、夏菜を見つめた。そんな俺から目を逸らして、夏菜はそつと声を出した。

「嫌われてると思つてた」

「夏菜……？」

「あんなこと言つたから。嫌われて、純が口を利いてくれなくなつたんだと思つてた……」

（もう分かつたから、決めたの。これから、純とは少し距離を置こうつて）

「あ……」

「だから、純から電話が来て、ほんととはすごく嬉しかったんだ」

そう言って、笑う夏菜の顔を見て、今頃俺は、自分のしていたことがあまりにも自分勝手なものだったことに気がついた。

あんなことを言われたから、夏菜にどう接すればいいか分からなかった。こつちがそれだけのつもりで取っていた行為が、夏菜を傷つけていたことも知らないで、この十日間、俺は夏菜を避け続けていた。それが夏菜のためにもなるんだと思い込んで、結局、俺は自分のことしか考えてなかったただけだ。

「ごめんね。私から距離を置くつて言つていてさ……。でもね、純

に無視されるのって、私には結構キツイから——」

「……ごめん！」

夏菜の言葉を遮って、俺は額を思いっきりテーブルの上にぶつけた。

「じ、純……？」

戸惑った声で俺の名前を呟く夏菜。でも、俺は顔を上げずに、額をテーブルに押しつけたまま、もう一度「ごめん」と呟いた。

そっだ。面と向かって本心が言えないのなら、こうしていればいい。気まずくても、恥ずかしくても、夏菜にキツイ思いをさせるぐらいなら、いくらだって俺はこうしてやる。

「そんなつもりじゃなかった。ただ、急に夏菜にあんなこと言われて、どう接すればいいか分からなくて、夏菜のこと避けてた。でも、絶対お前のこと嫌ってるとか、そんなこと百パーセント有り得ねえから。だって、俺、お前のこと——」

「え……」

「お、お前のこと——」

——好きだから。

「——大事な、友達だと思ってるから……」
「……そっか」

一瞬訪れた静寂の後で、静かに夏菜の声が流れた。そして、夏菜の声はぷつと笑うと、踊るように空気を振動させた。

「っていうか、純。そんな格好のまま言う台詞じゃないよ、それ。説得力ゼロなんですけど」

「え？ あ……そっか？」

慌てて顔を上げる俺。そして、俺と目が合うと、夏菜はイタズラっぽく笑った。

「はい。では今の台詞をもう一度」

「ばーか。男に二言はねえんだよ」

「ってか、使い方間違ってるし」

「おい。そこで真面目にツッコむな。俺がバカみたいだろ」

「え？ バカでしょ？」

「うおい！」

軽口を叩き合ってから、俺たちは一緒になって吹き出した。ああ、そうだ。こんな風に一緒にいてほっとできるのは、やっぱり、夏菜だけなんだ……。

「——ねえ、純」

「ん？」

「距離を置くって言ったけど、私と目が合ったら普通に声をかけて欲しいんだ」

「あ……うん」

「おはようとか、ありがとうとか、ごめんとか、なんでもないことでも、普通に今まで通り話して欲しい。それ以上は、私何も望まないから……」

それ以上は何も望まない。夏菜の言葉に、ちくりと胸を痛めながらも、今の俺にはそれ以上の関係を夏菜に求めることはできなかった。

34・八つ当たり

「いや、昨日はマジやばかったぜ。二次会に行く途中で麗美と鉢合わせになりそうになってよ。結局、見つかる前に解散だぜ……」
「つた
く、ついてねえ」

「ふうん。それは災難だったな」

「ち……。運良く難を逃れやがったか。」

「昼休み。例のごとく俺と大樹は机を挟み、昼食を摂っていた。つか、最近なんかずっとこいつとつるんでるような気がするのはいか？　麗美とは、なんか夏菜のことで怒鳴られてから、あんまり話さなくなっちゃったからな（向こうが明らかに俺のこと避けている）……。まあ、夏菜とは今まで通り普通に話せるようにはなっただけだ——。」

「ま、そんなことより、純。いい加減もったいぶらずに教えるよ。昨日はあの子とバッチリ決めたんだろ？」

「え？　——あー……。うん」

「昨日の晩から「うまくやったのか」だの「決めたのか」だのこいつからうつつとしいメールが頻繁に送られてきたが、面倒くさいので無視。それで、案の定顔を合わせればまた、この調子だ。朝からずっと無視していたのだが、いい加減もう真面目に答えるのもたらないので、俺は適当に相槌を打った。」

「そうか……。お前もとうとう童貞を捨てたか。で？　具合はどうだった？」

「えーと、最高だった」

「だろーなあ。初めての相手があんな可愛い子なら上出来だろ。つてか、感謝しろよ。俺のおかげで、お前もやっと大人になれたんだからな」

「そうだね、ありがとう」

「……。なんだ。なんかやけに素直だな、お前」

適当に返事を返す俺に、大樹は目を細めて俺を睨んだ。そんな大樹に、俺はまた適当に「気のせいだろ」と返事を返す。

「そうか。ま、なんだ。お前今日夏菜と普通に話せてたみたいだけど、こっちも吹っ切れたみたいだな。やっぱ、女ができると違うだろ？」

「そうだね、ありがとう」

「つまんねえの。てつきり、修羅場になると思ったのによ」

「……」

麗美に見つかっちゃまえばよかったのに。と、内心で舌打ちしながら、俺はふと思ったことを大樹に振った。

「つーか、大樹。お前って、いつもあんなことしてんのか？」

「あ？ あんなことって？」

「合コン」

「あー、ま、時々だな。麗美の監視が厳しいからよ。まあ、俺の場合黙ってても女の方からお誘いが来るんだよ」

そう言って、キザっぽく頭をかきあげる大樹。いや、坊主のお前にかきあげる髪はないぞ。つーか、女相手に黙ってるお前など一度も見たことないが。とツツコみどころ満載だったが、とりあえず話の腰が折れるので黙っておこうか。

「お前さあ、彼女いんのにそんなことして平気なの？」

「ふ……青いな、純。長く付き合うようになればお前にも分かるさ。なんつーか、新鮮な刺激？ そういうのが欲しくなるんだよ」

「勘違いすんな」

「——あ？」

「お前の事なんか聞いてねえよ。お前がそういう事してて、麗美は平気なのかって聞いてんだよ」

俺の言葉に、大樹は少しの間俺を見てから、つまらなそうに目を逸らした。

「んだよ。んなことお前に関係ねえだろ」

「答えになってねえぞ」

「——あ？」

苛立たしげに声を返して、俺を睨む大樹の目には、いつもの漫才ゲンカとは違う、本物の苛立ちが込められていた。が、大樹のその態度にイラついているのはこっちだって同じことだった。俺は大樹を睨み返したまま、それでも、感情を抑えて声を出した。

「前に麗美が俺に言ってくれたことがあんだよ。純君は私の大事な友達だってな。んで、俺も麗美のことそう思ってるわけだ。だから、もし麗美を泣かせるような真似してみろ」

そう言って、俺は大樹の襟首を掴み上げた。

「相手がお前でも、許さねえからな」

「……放せよ」

しばらくお互い微動だにせず睨み合ってから、俺は大樹から手を離れた。ちらりと見ると、女友達とおしゃべりをしていた麗美が、困惑した表情をして俺を見ていた。俺は、ぽりぽりと頭をかいてから、教室を後にした。

つくそ。なにをイラついてんだ、俺は……？

しかし、昨日のことはどうしても、許せんかった。決めたのかだの、うまくやったのかだの。酔わせて、無防備なところを襲えって言ってるようなもんじゃねえか。そんなの、女の子の気持ちを無視した最低の行為じゃねえのかよ。大樹の野郎、平気な顔して俺のおかげだなんて言いやがって……。てつきり、俺の適当な返答にツッコみ入れてくると思ってたのによ。マジに受け取んなっての、馬鹿野郎。

——あいつは、平気でそんなことができる奴なのだろうか。普段

バカで、女に弱くて、でも、根っこはそういう奴じゃないと思ってた。

同じ状況でもし昨日南の相手が他の男だったとしたら、南は本当にそういう目に遭ってたかもしれないねえんだ。まあ、南本人にも問題はあるのだが……。

——つつても、大樹は多分俺が南相手にそういうことしないって事、多分分かってたんだよな。その上で、俺をからかって遊んでたと。んで、そうなるとやっぱ、今回は俺があいつに八つ当たりしたって事なんだろうな、これは……。

（それ以上は、私何も望まないから……）

昨日の夏菜のあの言葉が、俺の胸に張り付いて離れない。本当は、俺が夏菜にそれ以上を望んでるから。でも、夏菜にああ言われたら、俺は何もできねえよ……。

昨日から抱えてるこのフラストレーションを、そっくりそのまま大樹にぶつけちゃった。まあ、あいつにも非はあるんだけど、当分、あいつとは普通に戻れねえかもな……。

ため息をつきつつ、廊下をぶらぶらと歩く。すると、階段の踊り場で、背後から不意に誰かに呼び止められた。

「あ……」

振り返ると、そこには南が立っていた。

35・説教

一棟の校舎は二年の教室のエリアだ。と言っても、別に縄張りを主張する猿でもあるまいし、昼休みには他の学年の生徒もうようよ二年のエリアにはいるので、別に南がここにいるてもそれは何の不思議もない。

ただ、昼休みにわざわざ南がこちらにまで出向いてくることを予想していなかったただけだ。だって、前も傘返してくれた時、南は昇降口ですつと俺が来るのを待ってくれてたし。

とりあえず、南に気付いた俺は挨拶がてら、声を出した。何のために南がここにいるのかなんて、南の性格を思えば考えるまでもない。

「よ、よお、南。昨日は大変だったな。もう、平気なのか？」

俺の言葉に、南はおずおずと声を返してきた。

「あ、はい……。あの、昨日は――」

「ああ、いいよ。気にすんな。悪いのは全部大樹のクソヤロウだ」
無意識に毒を吐いていたことに気付いたのは、南が目丸くして俺を見ていたからだ。俺はごまかすように頭を掻いてから、はは、と笑って見せた。うん、こりゃ当分大樹とは普通に話せもしねえな。いや、だって、八つ当たりって分かってるけど、胸が痛いんだもん。いつの間にか「フラストレーションは大樹へ」が癖になってら。

「そ、それより、あの後平気だったか？」

気を取り直して、俺は声を出した。

「親とか、すげえ心配してたろ。ごめんな。俺、南の家どこ知らなかったからさ。お前のケータイ勝手に開けて、自宅に電話かけて迎えに来てもらったんだ。あ、勝手にケータイいじったのも駄目かわり」

「あ……そんなこといいです。こっちこそ、すごい迷惑かけちゃって本当にすいませんでした」

そう言つて、丁寧に頭を下げてくる南に、俺は苦笑した。

「いいって。気にすんな。俺も気にしてねえから」

「はい……。それで、あの——私、変なことしませんでした？」

南の唐突な言葉に、俺は思わず「へ？」と間抜けな声を漏らしていた。そんな俺を見て、南は言いにくそうに声を出す。

「昨日、私お酒飲んじやつてから先の記憶が曖昧なんです。なんだから、すごく恥ずかしいことしちゃったような覚えがあるんですけど

……」

（私……先輩のことが、好き……）

つて、ええ！ 昨日のこともしかして覚えてんの！？

「あの……先輩？」

冷や汗をかきながらうつろたえている俺を、不安そうにうかがってくる南。うん、そうだよ。君は昨日の夜俺に（つてか、別の先輩だよね？）告白したんだよ。つて、言えるかつ！

「い、い、いや……。べ、べべ別に何もなきやた——な、なかったぞ？ き、きつと夢でも見てたんじゃないのかにや——なあ……」

少しの間俺をじつと見てから、南は息をついた。

「そう……ですか。やっぱり、そうですね」

「うん、うん。そうだ。そうに違いない」

……た、助かった——！

「と、ところで、南」

はい。ここぞとばかりにすかさず話を逸らすは、腰抜けの奥義だつてばよう。この呼吸をマスターしたければ、君も精進したまえ、はっはっは。

「わざわざ昼休みに来てくれなくてもよかったんだぞ。ほんと律儀だな、お前は」

「あ……いえ。今日、朝起きて昨日のこと聞いたら、合コンのこととか、お酒のこととか、お母さん気付いてなくて。それで、話聞いてたら、私の友達がどうこうつて言ってたから——」

「ああ、それはな」

そう言つて、昨日の出来事を南に話してやる。

昨日、南の親が迎えに来る前に、夏菜が南を自分の家に運ぼうと言い出したのだ。昨日、南のことを夏菜に話したのだが、その話から察するに、南はおそらくこういうことで親を心配させたことは一度もないだろうと夏菜が言い出し、だったら、余計な心配をかけさせないために、と夏菜が一計を案じた。

まず、夏菜が南の友達のふりをする。そして、今日は夏菜の誕生会を家で開いていたと嘘をつき、羽目はずしてコップ一杯のアルコールを南に飲ませてしまったことにする。そこでその嘘に安心感を持たすのは、紗枝さんだ。保護者が一緒だとそうではないのとは、その印象に雲泥の差が出るというものだ（つーか、昨日紗枝さんが電話に出なかったのは、その時に限って、たまたま外にビールを買いに出たからだとか）。

案の定、南の母親はそれを聞いて、眠っている南を車に寝かせながら、苦笑していた。あの様子なら、大丈夫そうだと思っていたが、どうやら、うまくいったようだな、うん。

さて。説明を終えると、南はほっと息をついた。

「ありがとうございます。ウチの親、そういうことにすごく厳しい人だから助かりました」

「はは。じゃあ、合コン行って酒飲みましたって言ったら、南のお母さんどんな顔したかな。それはそれで見てみたかったな」

「もう……先輩」

「はは、冗談だつて。それより、その友達役を演じてくれた夏菜にも礼を言いに来たつてワケか」

「あ、はい。放課後だと、私も部活があるし、すれ違いになっちゃうかもしれないから」

「なるほど。だったら、俺から夏菜によろしく言つといてやろうか」

「そんな。ちゃんと直接お礼しなきゃ」

そう言ってくる南に、俺は「はは」と笑った。

「そう言つと思った。さすが、忠犬八チ公だ。今日からお前のこと

をハチと命名しよう」

「犬と一緒にしないでください」

そう言っ、控えめに俺の腕を押してくる南。ってやべ。膨れてじゃれてくる南に、一瞬ドキツとしちまった。いや、だって、今まで南がこんなに俺に近付いてくることなんてなかったしっ（シラフの時だね）！

「あつと……。じゃあ、夏菜のとこ案内してやるよ」

「あ、はい。すみません」

「——つと、その前に一つ説教していいか」

そう言っ、俺は南に目をやった。南は、きょんとして俺を見返した。

「お前さ。もつと自分を大切にしろ」

「え……」

「いや……なんつーのかな。お前つて、いつもなんか周りに遠慮してるっぽいし。あんまり、自分の意見周りに主張しないタイプだろ」

「あ……はい」

「それを否定する気はねえよ。それつて南が人のこと思いやれるってことじゃん？ でもさ、昨日みたいに、嫌なことも断れずにずる周りに流されるってんなら、それは直した方がいいと思う。だって、昨日お前を連れて帰ったのがもし俺以外の奴だったら、今頃お前、すっげえ傷つくような目に遭っただかもしねえだろ」

「先輩……」

「そんなの、自分だけじゃなくて、お前のこと大事に思ってる人だつて悲しむぞ。だから、これからは嫌なことは嫌だつてきちんと言えるようになったほうがいいと思うんだ」

俺の言葉に、南は申し訳なさそうに顔を伏せた。

「……はい」

「……よし。分かればいい。説教終了」

そう言っ、ポンと南の頭を叩いてから、俺は笑った。

「いっつぜ」

「はい」

顔を上げた南は、嬉しそうに微笑んでいた。

36 ラブシーンは突然に

さて。昼休みのこの時間は、普段夏菜は金田先輩と弁当を食べているらしいのだが、困った。とりあえず、金田先輩の所属する3-Bの教室まで行ってみたのだが、そこに金田先輩の姿は見当たらなかったのだ。

えー。長身細身の、今時珍しい染髪してない短髪したハンサムなスポーツマンっぽいお方、つまり金田先輩はどちらですか、と最寄の男子の先輩に尋ねたところ、十五分ほど前に彼女と一緒に仲良く教室を出て行ったとか。おっと、見ず知らずの先輩の「彼女と一緒に^{ハート}発言に、思わずメンチ切ってしまいました。すいません、深い意味はないのでそんな喧嘩腰で睨み返さないください。

さて。親切な先輩と喧嘩になりそうになったところを慌てて南が仲裁に入り、その場は一件落着。しかし、いつも二人は屋上で仲良く昼食を一緒にやがることは判明したのだが、今日は生憎の雨模様。雷雲渦巻くどしゃ降りだ。そんな中、屋上で弁当を食べようなんて強情な輩はおそくないだろうというわけで、とうとう手の打ちようがなくなった。ちくしょう、夏菜め。どこで金田先輩とイチャついてやがる。

と、廊下で一人歯軋りしている俺に、南が恐る恐る声をかけてきた。

「あ、あの、先輩？」

「ん？ え、い、いや、誤解すんな。別に俺は金田先輩をぶちのめしてやるうなんて、物騒なことは全く考えてないぞ」

「え……。そ、そんなこと考えてたんですか？」

「——え？ あー……。いやいや。ジョークに決まってるじゃん」

「そ、そうですよね」

そう言って、苦笑を返してくる南。

うん。でも、先輩今歯軋り——と思いながらも、そんな本心を口

には出せないってのが、バカ正直にその苦笑に表れてるぞ、南。君は本当にいい子だねえ。

さて、「冗談は（あくまで）置いて、マジで困ったな。もう昼休み終わるまで十分も残ってねえし。このまま校内を探したところで夏菜を見つける前に昼休み終わっちゃうぜ。」というわけで、昨日のことは俺から夏菜によるしく伝えといてやるから、授業に遅れる前に教室に戻っておけ、という俺の言葉に、南は少し残念そうに、それでも素直に頷いた。

小さく頭を下げてから、自分の教室に戻っていく南と別れて、俺も自分の教室に戻ろうとしたが、ふと足を止めた。

そうだよ。今は大樹と気まずいんだった。今、教室に戻ったら、厄介（ガチで喧嘩とか）なことになる恐れがあるな。というわけで時間ギリギリに教室に戻ることにして、校内を一人でぶらつくことにした。しかし、次の授業は数学だからな。間違っても遅れるわけにはいかねえぜ。って、いや、別に今の何の振りでもねえからな？

もう、神楽先生の体罰はご勘弁だってばよう！

いや、しかし、一人になると、独り言が多くなっていかな。と言っても、ほんとにしゃべってるわけじゃないのだが。まあ、時々気を抜いてる時とか知らず知らずのうちに口に出してる時もあるけど、もしかしてこれもなんかまずい病気ですか？

くだらないことをとりとめもなく考えながら、校内をぶらつく。

そして、ふと、さっき南と話していたことを思い返してみる。

南と一緒に三年の教室に行く途中で、ふと、神木沙里かみきさりの話題が持ち上がったのだ。今までそれどころではなかったので彼女のことをすっかり忘れていたが、南が神木沙里のことを話し出してきたのだ。この前俺に相談を持ちかけてきたこともあるからだろう。とりあえず、一日学校を休んだ次の日には、神木沙里は登校してきたらしい。どうも、それ以降、神木沙里は無口になってしまったというのだが、そもそも、あの子の平時の状態を詳しく知らない俺には、南には悪いがいまいちピンと来ない話だった。

なんせ、神木沙里と初めて会った時、彼女は独り言を呟き、その様はまるで夢遊病者のようだったのだ。でも――。

（お姉ちゃんのこと忘れるなんて、私が絶対許さない）

あの時の神木沙里は明らかに正気だった。そして、もし初めて俺と会った時のあれが「障害者」に見えるようにした演技だったとしたら――？

真意は本人にしか分からない。ただ、神木沙里が壊れてしまっていることは確かだ。本人がそのことに気付いているのか、いないのか。そして、意図していようがいまいが、その事実が哀しいことであることに変わりはない。

いつだって、悲しい予感はそつと忍び寄ってくるのに、そのきっかけは残酷なほど唐突にやってくる。

あの頼りない細い肩に神木沙里が背負ったものは、運命の一言で片付けられるほど軽いものではないのだろ。世の中の全てが真理や理性で片付けられるというのなら、今頃世界からはとくに戦争なんてなくなっている。

あの時、雨の降る中見上げた神木沙里の目には、きつと、いつか失くしたものが見えていた。ただ、そこに立ち尽くして見上げることしかできなかったのは、手を伸ばしてみても暗く沈んだ空に触れることはできないと知っていたからだ。

「……」

一人で珍しく神妙（自分で言うのもなんだが）に考え込みながら校舎をぶらついていると、途中、視聴覚室の横を通った。いや、通ったというか、通り過ぎる直前に俺の足はその場に張り付いて止まっていた。

教室のドアが開き、中の様子は筒抜けだった。そして、そこに夏菜と金田先輩の姿を見つけたのだが、その映像はあまりにもショッキングなものだったわけで。

抱き合っている二人の姿は、まるで時間が止まった静止画像のよう感じられた。

一瞬か、一秒か、十秒か、百秒か。その間、俺はその光景を呆然と眺めてから、気がつくとその場から逃げるように駆け出していた。胸の鼓動が痛いくらい高鳴っていた。それなのに、体中の血の気は引いて、油断すると今にも何かが破裂して、暴れだしてしまいそうだった。

怒りとか悲しみとかそういう感情に似て、それとは全く別な何か。このめちやくちゃで、泣きそうな気持ちは、おそらく切ない、というもののだろう。

しかし、センチメンタルに浸る暇もなく、昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。そして、気がつくと旧校舎の壁に手をつけていた俺は、次の授業が数学であることを思い出し、全力で教室を目指して走る羽目になった。

37・揺れる気持ち

「最近やつと君の遅刻癖も治ってきたと思ったのにまた遅刻？ 全く、長谷川君つたらしようがないなあ」

「……」

「あ、いいよ。何か理由があるんでしょ？ じゃなきゃ、私の授業に遅れるなんて命知らずなことするわけないもんね？ で？ ——
な・ん・で、遅れた？」

「……気がついたら昼休みが突然終わってました」

「へーそうなんだー。じゃあ、一生正座でもして目え覚ませ、このクソ馬鹿野郎」

案の定、五時間目の数学の授業を遅れた俺は、前回と全く同じ拷問を受け「いいか、長谷川。仏の顔も一度までだからな」と、全くことわざを無視した神楽先生らしい捨て台詞を吐き捨てられ、ようやく職員室から解放された。もちろん、俺にそれで慈悲深いつもりか、あんだ。とツッコむ自殺行為に及ぶ勇氣はなかった。

しかし、拷問から解放されたというのに生きた心地がしないのは、昼休みに見たあの映像が俺の脳裏に焼きついて離れないからだろうか。それとも——。

「あ……純」

「……夏菜」

目の前に、夏菜が立っていたからだろうか。

「だいじょぶ？」

「……あ、お、おう」

職員室のドアから手を放した途端、その場にへたり込む俺を見て、夏菜が心配交じりの苦笑を向ける。そんな夏菜に、うまく笑い返せている自信はなかった。

「雨で部活中止になったの。だから、純と一緒に帰ろうと思って」
そう言って、夏菜は微笑んだ。

どうやら、夏菜は学校の行き帰りを金田先輩と一緒ににはしていないらしい。普段、夏菜から金田先輩との事を一度も聞いたことがない俺にとって、その事実は意外なものだった（なんか、俺からは二人の関係聞きづらいし、夏菜も自分から話そうとはしてこない）。もっとも、金田先輩の家は俺たちの方向とは全く逆方向らしいから、したくてもできないのだろう。ただ、部活の練習で遅くなった時などは、何度か金田先輩に家まで送ってもらったことはあるらしい――などと、夏菜が金田先輩のことを珍しく俺に話しているのは、一緒に帰ろうと言い出してきた夏菜に、俺が「金田先輩はいいのか」と聞いたからだ。そして、その返答は「今日金田先輩は用事があるし、一緒に帰るとなると決まって家まで送ってもらうことになるから、金田先輩に申し訳ない」だった。冒頭の解説は、夏菜が別に聞いてもないのに、なんか一人で焦ってペラペラと喋りただけのものだ。そんなことを喋られて俺は「ああ」とか「うん」とかしか返せなかった。

正直、夏菜と一緒に帰るのは気が進まなかった。金田先輩に気を遣っているというのもあるけど、何より、今は夏菜の顔を見るのも精神的に正直キツかった。でも、昨日夏菜に普通に接して欲しいと言われたばかりだし、俺と友達としての付き合いの線引きをするのは夏菜だ。ここで嫌だといえば、また夏菜を傷つけてしまうかもしれない。昨日、夏菜のことを一番に考えると決めただけなんだから、そんなことができるわけがなかった。

ただ、夏菜と金田先輩の抱き合っている姿が、さっきから何度も何度も頭に浮かんできて、その度、俺はそれを何度も何度もかき消

した。隣でしゃべっている夏菜の声は右から左に流れていた――。

「――ねえ、純。聞いている？」

一日中降り続けていた大雨も、俺たちが帰る頃にはすっかり小雨になっていた。俺の隣を歩いている夏菜が、そう言っただ俺の制服の袖を引っ張って、俺ははつと我に返った。隣を向くと、夏菜が難しい顔をして俺を睨んでいた。唐突に夏菜と目が合って、思わず俺は返事を返すのも忘れて、夏菜の顔に見入ってしまった。背伸びをして俺を睨む夏菜の顔は、思っていたよりずっと近くにあった。

「純？ やっぱ、なんかさっきからおかしいよ。大丈夫？」

「え……あ――」

訝しそくに引き締めた顔を、途端に緩めて、心配そうな表情を作る夏菜。そんな目の前の夏菜と、脳裏に刻まれた光景が重なる。それを振り払うようにぎゅっと目をつぶって、次に視界に映った夏菜は、ますます心配そうに俺を伺っていた。

「もしかして、どこか具合でも悪いの？」

「いや……なんでもねえ。気にすんな」

「でも――」

「いや、ちよつと、考え事してたんだ。どうやって神楽先生をギャフンと言わせてやろうかな。あの先生、男はみんな自分の足元にひざまづくと思ってるんだ。罰として決まって正座させるのがその証拠だ。今後のために、その性根を叩き直してやらねばなるまい。次の世代の若者のためにも」

「ばーか」

俺の冗談に、夏菜は安心したようにそう言って笑った。

「さっきから、ずーと難しい顔して、そんなこと考えてたの？ もう。心配して損した」

そう言っただ、夏菜はすたすたと先を歩いて行った。俺は小さく息をついて、夏菜の少し後ろを歩いた。

「でも、今日は何で五時間目の授業遅刻したの？」

「え？」

「ほら。だって、最近純、遅刻しなくなってたし。もしかして、何かあった？」

そう言って、夏菜は足を止めて俺を振り返った。そんな夏菜の横を素通りして歩くと後ろで夏菜が俺の名前を呼んだ。俺は足を止めて、仕方なく声を出した。

「ちよつと、お前のこと探しててさ」

「え？」

「南がさ。昼休みに来てたんだ。昨日のことで俺とお前にお詫びしにさ。んで、昼休にお前のこと探してて、んで、すっかり遅刻しちまった」

振り返ると、夏菜はなんとも言えない顔をして俺を見ていた。それは、遅刻の理由に自分が絡んでいることを知ってのただの戸惑いだろうか。

また、あの映像が脳裏をよぎった。でも、いい加減この胸の痛みにも少しは慣れ始めていた。

「南がさ、直接お前にお詫びしたいって言ってたけど、放課後会わなかったか？」

「あ……うん」

「そつか。やっぱ、すれ違いになったか。とりあえず、迷惑かけてすみませんでしたって。南の代わりに伝えとく」

「うん……」

なんとなく気詰まりな沈黙が流れた。分かっている。別に、夏菜は何も悪くない。でも、申し訳なさそうに顔を伏せている夏菜に、俺からかけてやれる言葉はなかった。

「——帰ろうぜ」

俺の言葉に、夏菜は静かに頷いた。

「ねえ、純。また一緒に帰ろうね」

家に着くと、夏菜は門扉をくぐって玄関の前に立ちながら、俺を振り返ってそう言った。俺を見る夏菜の目が、不安そうに見えるのはただの気のせいだろうか。しとしと降り続く雨が見せる、それはただの錯覚だったのかもしれない。

笑顔で「ったりめえだろ」と言うと、夏菜は嬉しそうに微笑んだ。ばいばい。

そう呟いて、夏菜は玄関のドアを開けた。

38・雨の日の思い出

「いないよ」

そう言つて、彼女はうつとうしそうに俺の傘を押しつけて、また顔を上げた。

憶えている。そんな彼女にどう接したらいいか分からなかったこと。雨に打たれながら、決して目を閉じずに、暗く沈んだ空を見上げていた彼女の横顔。

雨は相変わらず降り続いて、彼女の体を容赦なく濡らしていた。

雨に濡れて透けた薄青色のシルクのパジャマが、彼女の体に張り付いて、成熟しきっていない彼女の体の輪郭を写していた。異性を意識しだしたその頃の俺に、そんな彼女を直視することはできず、俺は下を向いた。濡れた芝生の上を彼女は素足で立っていた。なぜか、それだけで胸がドキドキと鳴っていた。

「雨っていいよね」

傘を叩く雨の音よりはつきりと聞こえてきた彼女の声に、俺は恐る恐る顔を上げた。彼女の体を見ないように、彼女の顔だけを直視するのは難しかったけど、俺は意地でも彼女の顔だけを視界に留める。そんな俺の努力なんて知りもしないで、気持ちよさそうに彼女は笑っていた。

「こうして雨に打たれてると、嫌なこと全部流れていくような気がする。だから、私雨って好き」

彼女の言っていることは理解できたけど、そんなことをする気はしれなかった。

「ねえ、あんたも傘なんて差してないで、雨に身を任せなよ。すつごく、気持ちいいんだ。嫌なこともちよつとだけ忘れられるよ」

「……無理だよ」

俺がそう言つと、横目で俺を見ていた彼女はつまらなそうに俺から目を逸らした。

「つまんないの。もしかして、ないの。嫌な事とか忘れたい事とか。羨ましいね」

「……あるよ」

「だと思った。なんか、陰気な顔してるし」

どうしてだろう？ その時、なんで俺はそんな事を彼女に言ったのだろう。

「死んだ」

そう言っつて、俺はじつと彼女の横顔に目を留めた。少しして、彼女は上げていた顔を戻して、体ごと俺に向き直って、俺を見つめた。
「――三週間前。母さんが死んだ」

少しの間見つめ合ってから、彼女は何も言わずに俺の手から傘を奪った。芝生の上に投げ出された、開いたままの傘を目で追ってから、俺はもう一度彼女に視線をなぞった。彼女は、そんな俺を無視して、気持ちよさそうに空を仰いだ。

「そういう時はね。嫌な事を忘れられるきっかけを作れば少し楽になる。だから、私はいつも雨が降ったらこうしてる」

雨は思った以上に冷たくて、その時、不意に湧き上がってきた喪失の悲しみは、思った以上に俺の心を飲み込んだ。

溢れてくる涙を彼女に気付かれないように、俺は彼女の真似をして空を仰いだ。忘れることなんてできなかったけど、彼女の言った通り、ほんの少しだけ気持ちが楽になったような気がした。

よりどころのない感情が、その時初めて涙になって流れたのは、今まで押し付けられてきたどんな励ましの言葉より、彼女の教えてくれた事が優しかったからだと思う。

「でも私、暗い空は嫌いなんだよね」

そう言っつて彼女はイタズラっぽく俺に笑いかけてきた。悲しかったけど、なぜかその時彼女につられて微笑んでいた。

それが、母さんを亡くしてから初めて泣いて、笑った記憶だった。

母さんが死んでも、なぜか涙は出てこなかった。多分、知らない人が見たら、俺よりも泣きじゃくる夏菜の方が母さんの子供だと思っただと思う。死ぬということの意味をうまく理解できなかった。夏菜のように、素直に泣いたらいいんだと分かっている、なんだからうまくできなかった。

どうやって泣けばいいんだろう。そんなことを、真面目に考えた。母さんが死んでから、毎日病院に足を運んだ。もしかしたら、そうしていれば母さんに会えるかもしれない。そんなことを、真面目に三週間毎日続けた。

病院の隣にある芝生の公園のベンチに座って、病院の真つ白な外壁を眺めた。雨が降っていて、病院の壁がいつもより遠くに感じた。そんな中、ふらふらと何の前触れもなく俺の視界に入ってきた彼女は、雨が降っているというのに、傘も差していなかった。

彼女は俺と目が合っても、気にせず俺から目を逸らして一人気ままに空を仰いだ。そんな彼女を俺は少しの間眺めてから、その身なりから、病院の患者であるらしいことを察した。

雨はなんだか冷たそうで、少しだけ肌寒い風が吹いていた。

ベンチから離れて、横から彼女の頭の上に傘を持っていくと、彼女はゆっくり俺に視線をなぞってから、俺と目が合うと小さく息をついた。

「いらないよ」

「私、神木恵美^{かみきめぐみ}。あんたは？」

「え……。長谷川。長谷川、純」

よろしく。そう言つて、彼女は物怖じせずに、握手を求めてきた。見ず知らずの女の子と握手することに抵抗はあったけど、差し出された手を無視する度胸をその時の俺は持ち合わせていなかった。

「でも、初めましてじゃないよね」

彼女の手を握ると、彼女はぎゅっと俺の手を握り返しながら、そう言つた。

彼女の言葉に、戸惑いながら言葉を返せない俺を見て、彼女は可笑しそうに笑つた。そして「ばいばい」と言つて、一人で公園を出て行く彼女の背中を、俺は何もできずに馬鹿みたいに見守つた。

その時は分からなかった。彼女の言つたよろしく、の意味も、初めましてじゃないよね、の意味も。でも、次の日病院を訪れて、受付で「神木恵美」の名前を見ず知らずの看護士に聞いている時に、彼女の言つたよろしくの意味を理解した。そして、ドアの開け放たれた病室の中に彼女を見つけた時、彼女の言つた初めましてじゃないよねの意味も理解した。

真っ白で清潔なその部屋に、ビーズの样々に光るキレイな色彩はすごく映えていた。陰鬱なその部屋の窓際のベッドの上で、午後のどこか気だるい日差しを浴びた彼女の横顔は、果てしなく静かで、病的に青白かつた。

いつか見た光景と、今見ている光景が重なる。騙されたとの的外れなことを感じてしまうのは、いつか見た女の子が、昨日みたいに雨の中傘を差さなかったり、ほぼ初対面の異性を相手に物怖じせず握手を求めてきたり、あんな風にイタズラっぽく笑う顔を想像もでき

なかったからだ。

テーブルの上で日差しを反射したビーズのきらめきは、やっぱり鮮明で眩しかった。そして、ビーズで何かをせっせと作っていた彼女は、病室の外に立っている俺に気付くと「ほらね」と言って、イタズラっぽく笑った。

「また会える気がしてたんだ」

39・秘め事

ふと眠気に誘われて意識が途絶えると、大抵夢の中にあの頃の記憶が顔を出している。最近……そう、あの雨の日に神木沙里と会ってから、度々あの頃の夢を見るようになった。

（お姉ちゃんのこと忘れるなんて、私が絶対許さない）

あの時の神木沙里の言葉にまるで暗示をかけられたように、恵美との出会いの思い出が何度も何度も顔を出す。あの日、雨に身を任せていた神木沙里の姿が、どうしても、あの時の恵美と重なった。

「……」

まあ、女心に追い掛け回される悪夢を見るよりはだいぶマシか、などと心の中で軽口を叩きつつベッドから起きる。部屋の電気をつけると、時計は七時三分を指していた。

夏菜を避け始めた日から、紗枝さんにはしばらく夕飯は要りませんと謝って、昨日まで一人寂しくコンビニ弁当で済ませていたのだが、果たして今日夏菜は夕飯を呼びに来るだろうか。来るとしたらもうそろそろいい時間なのだけど、できれば来て欲しくはなかった。いや、だって、好きな女が他の男と抱き合ってる光景を目の当たりにしたその日に、何食わぬ顔して夕飯を一緒に食べて、罰ゲームにしてもタチ悪くね？　つか、その日のうちに何食わぬ顔して一緒に帰るっただけでも拷問だったの。しかし、夏菜が呼びに来るすなわち、それは夏菜が俺に望んでいることであり、友達として、俺はそれを受け入れてやらなければならない……。くそう。今更ながら、なんて損できつついい役回りだ、これ。

ガラスのように脆いボクさんの心は、もうひび割れて、粉々に砕け散ってしまいそうだにやー！　などと、一人はっちゃけてみたところで、元気は沸いてきませんでした……。

「はあ……」

ため息を吐きつつ、淀んだ空気を換気するため、部屋の窓を開け

る。湿った風が部屋の中を吹き抜けて、レースのカーテンを揺らした。今朝からずっと降り続いていた雨は、どうやら止んだらしい。なんだか青っぽい匂いはらんだ風が、星の見えない夜の風景の中を走り回っている。

深く深呼吸をしていると、部屋の中にチャイムの音が響き渡った。俺は、小さく二度目のため息を吐いて、階下に下りた。

「——あ、あれ？」

しかし、玄関の外に立っていたのは、夏菜ではなくて——。

「こんにちは。ごめんね。突然」

「れ、麗美……？ どした？」

目を丸くして声を出す俺に、麗美はばつが悪そうに俺から一度目を逸らしてから、もう一度俺に目を戻して、控えめに微笑んだ。

「——ちょっと、いいかな」

麗美が俺の家を一人で訪ねてくるのは、これが初めてのことだった。一見して男受けしそうな外見に、社交的で我的強い性格、そして彼氏が女癖の悪い大樹と来ているので、付き合いが浅いと、麗美はよく我が侘な軽い女と誤解されがちだ。だが、一年ほど友達として接していれば分かるが、麗美は友達想いのいい奴だった。普段は男勝りだが、大樹と付き合い始めた日を記念日にしたり、大樹からのプレゼントを三年経っても大事に肌身離さず身に着けたりと、一途な面も持っている。そんな麗美だから、彼氏の友達、特に親友の俺とは付き合い方も気を遣っているのだろう。だから、こんな風に

麗美が一人で俺の家を訪ねてくるなんて事は今まで一度もなかったのだ。

その麗美が今ここに居る時点で、何か大きな意味があることは理解できた。学校では済ませられない話を、麗美がここに持ち込んでいることは明白で、その話に俺がかんではいる事も明白だった。

とにかく、玄関で立ち話もなかったので、俺は麗美を家に上げた。素直に「お邪魔します」と言っただけで家に上がってくる麗美に対し、妙な緊張を覚えながら、俺は麗美をダイニングルームに通した。体にぴったり張り付くようなＴシャツとデニムのショートパンツ。こういったラフな格好を麗美は好んで身に着けるが、麗美にはもう少し自分の体を服で隠すということをして欲しい。確かにスタイル抜群のその体を出し惜しむのは勿体無いのだろうが、無意識にもかもし出されるフェロモンにいちいち振り回されるこっちの身にもなっただけの事だ。とりあえず、俺は麗美の体を見ないように意識しながら、部屋の中をきよきよと見回している麗美に頭を掻きつつ、声を出した。

「えっと……お茶でも淹れようか？」

「いいよ。ってか、そんな改まらないでよ。なんか、緊張するから」
そう言っただけで、困ったように微笑む麗美に俺も苦笑を返した。

「……だな。なんか、変な感じだし。その、麗美と二人っきりってのも」

「うん。ごめんね、突然」

「いや、俺は別に構わないんだけどさ」

そう言っただけで、俺はダイニングのテーブルに据えた椅子に座るよう麗美を促してから、麗美の向かいに座った。

「で、今日はまた突然どうした？」

回りくどく攻めてもしようがなかったので、俺は単刀直入に切り出した。そんな俺に、麗美は「うん」と声を出してから、そつと顔を俯けた。どうやら、何か話づらいことのようにだが、ここは麗美が話し出してくれるまで待つことにする。

少しの沈黙の後、麗美はそつと顔を上げて、俺に目を向けた。

「今日は純君に謝りに来たの」

「——え？」

「ほら。前に、私純君に怒鳴ったでしょ。夏菜とのことで」

「あ、ああ……」

「あれから、ちゃんと謝ってなかったでしょ。私もちよつと意地になつてて、それで、謝るタイミング逃して、気がつくと純君となんだか気まずくなっちゃってて。だから、今日は面と向かってきちんと謝るためにお邪魔しました」

そう言つて、麗美はちよこんと頭を下げてから「ごめんね」と声を出した。そんな麗美に、俺は苦笑を返すしかなかった。

「相変わらず、気持ちのいい性格してんのな。女にしとくの勿体ないぜ」

「そつでもなきや、大樹の彼女は務まらないよ」

「違ういな」

そつ返すと、麗美はくすつと笑った。それから、気を取り直したように麗美は声を出した。

「ねえ、純君。今日、昼休みに大樹となに話してたの？」

やはり、麗美はそのことも気にしていたようだ。思えば、前にも大樹と取っ組み合った時、麗美は随分俺と大樹の事を気遣っていた。そして、今日のあれが、いつもの漫才ゲン力ではないということも感じ取っていたのだろう。

真剣な顔をして答えを待つ麗美に、ごまかしは効かないだろう。

何より、麗美に嘘はつきたくなかった。俺は、今日大樹と話したことを包み隠さず麗美に話した。

「そつか……」

話を聞いた麗美は、そう呟いて俺から目を逸らした。そして、その後に俺に微笑みかけてきた麗美の顔が、何か辛そうに見えたのは俺の気のせいだろうか。

「ありがとね、純君」

「……なあ、麗美。お前、本当はキツイんじゃないのか」
「え……」

「なんだかんだ言っても、お前って優しいだろ。その優しさに甘えて大樹が他の女と遊んだりしてるんだ。もちろん、それがただの遊びとかだとしても、そういうの、お前にしたらほんとは辛いんじゃないのか。もしそうなら、きちんと言った方がいいと思う。キツイならキツイってさ。お前、あいつの彼女なんだから」

俺の言葉に、麗美はありがと、ともう一度呟いた。

「でも、平気。あいつの浮気癖は今に始まったことじゃないもん。それに、大樹は私のこと一番大事に思ってくれてるって、信じてるから」

「……そっか。ならいいよ。でも、お前の彼氏だからって、容赦しねえからな」

「え？」

「もしお前を泣かしたりしたら、俺あいつをぶん殴るから」

俺の言葉に、麗美は目を丸くしてから、ぷつと笑った。

「もしかして、私今口説かれてる？」

「いや、そんな恐ろしい真似誰がするか」

「なんですって！」

そう声を上げてから、麗美は可笑しそうに笑った。そして、ほんの少し訪れた沈黙の中で、麗美は静かに声を出した。

「……ありがとね、純君」

黙って微笑み返してやると、麗美はそつと俺から目を逸らした。

そして、「やつぱり、私、このまま黙って見てられないよ」と、麗美は独り言のように呟いた。

「え？」

「私、やつぱり、純君の隣には夏菜がいて欲しい。だってさ——」

そう言って、麗美は俺を見つめた。

「夏菜は、純君のことが好きなんだよ」

麗美の突拍子のない言葉は、まるでパチンコ台の中を跳ね回るパチンコ玉のごとく縦横無尽に俺の頭の中をさ迷い、結局フィーバーに至らなかったそれは、俺の中で消化されずうんぬんかんぬん。いやはや、困ったな。とりあえず、聞き返すしかないでしょう？　つて、ことで――。

「……ホワッツ（なんですって）？」

うん。思わず英語で聞き返してしまったのは、それだけ動揺しているということだ。しかし、というか、やはり麗美はそんな俺の反応を予期していたのか、はあ、とため息を吐いて「だから」と声を出した。

「夏菜は純君のことが好きなの」

十秒ほど、俺は麗美から目を逸らしてからその言葉の意味を考え、何とか、麗美の言葉を理解した。そして。

「はい？」

また、聞き返した。でも、冷静でしょ？　母国語に戻ったしね。

「っていつか、言われる前に気付こうよ、純君……。夏菜がそういう素振り何度君に見せてると思ってるの」

「は……いや、でもそれって友達としてとか、そういう――」

そんな腰抜けた俺の台詞を一睨みで黙らしてから、麗美は言葉を発した。

「君がここまで鈍感で腰抜けたって分かってたら――。全部私のせいなんだ。だから、このまま二人がすれ違っていくの、黙って見てられないの」

いや、全部私のせいだとか言いながらなに毒吐いてんの君？　つてか、言ってること全然意味分かりませんから。

「あの、麗美さん？　言ってることさっぱりなんですけど」

俺の言葉に、麗美は小さく息を吐いてから声を出した。

「私なの」

「へ？」

「金田先輩に告白されたって夏菜に相談された時、私が付き合うように促したの。ほんとは」

「……え」

「そうすれば、君が夏菜を友達として好きなのか、それ以上の感情を抱いてるのか分かると思ったから。だから、私夏菜に金田先輩と付き合えって言ったの」

「あ……」

（私が金田先輩と付き合っても……なんとも思わないの？）

（私は純の気持ちが知りたいの！）

あの時の夏菜の言葉が脳裏をよぎる。そして、間抜けな声を漏らす俺を見て、麗美はため息を吐いた。

「夏菜はね、純君のことがずっと前から好きだったんだって。でも、その気持ちを伝えられない理由があった。だから、待ってたんだよ。君が自分に振り向いてくれるの、ずっと待ってたの」

「伝えられない——理由って……」

「夏菜言ってたよ。純君には、ずっと前から好きな人がいるって。だから、自分の気持ちを純君に押し付けて、君を困らせるようなことはしたくないって」

「……」

「聞いた。その人はずっと前に亡くなってるってこと。いなくなっただその人のことを、純君はずっと想い続けてるってこと。だから、って——」

麗美の言葉に俺は左手首につけたビーズのブレスレットに目を落とした。そして「でもさ」と言って、麗美の声は弱弱しく揺れた。

「そんなの、夏菜が可哀想だよ」

「麗美……」

顔を上げると、麗美は泣きそうな顔をして、まっすぐ俺を見ていた。

「純君、夏菜のこと好きなんですよ？　だったら、伝えてあげてよ。夏菜は、今も純君のこと待ってるんだよ」

言葉を返せない俺をしばらく見つめてから、麗美はそっと俺から目を逸らした。

「純君がいつもつけてるビーズのブレスレット。それ、その人に貰ったものなんですよ？　いつか、私がそれ女っぽくて気持ち悪い。似合っていないよって言っても、ずっとつけ続けてるよね」

「……」

「でも、傍にいられない人のことより、傍にいてくれる人のこと、大事にしてよ。じゃなきゃ、君だって辛い思いすることになるんだよ……」

そう言って、俺に目を戻す麗美と目が合って、俺はそっと俯いて左手首につけたビーズのブレスレットを右手でなぞった。

あの日見たビーズのきらめき。そして、恵美の笑顔。言葉。息づいてる思い出。それを忘れることは、俺にはできなかった。そして――。

「悪い、麗美……」

沈黙が部屋の中を支配していた。その中で俺の声は虚しく宙をさまった。

「でも、違うんだよ」

「……え」

「今もあいつのこと想い続けてるとか、そういう綺麗なものじゃないんだ。俺がこれを外すわけにはいかないから――」

「純君――？」

「……俺、夏菜のこと好きだよ。あいつのこと一番大事に思ってる。そんで、俺の知ってるあいつは、好きでもない奴と付き合ったりできる奴じゃない」

「え……。だ、だから、それは――」

俺の言葉に、麗美は眉をひそめて声を出した。でも、俺は麗美の言葉を遮った。

「付き合い始めの動機がどうでも、もう、夏菜の気持ちは金田先輩に向いてんだよ」

今日見た光景が、俺の胸を締め付ける。そして、麗美のどんな言葉も、俺を楽しにはしてくれなかった。

しばらく無言で俺を見つめてから、麗美は気を取り直したように「ごめんね」と声を出した。

「私、出すぎたことしてるよね。でも、純君と夏菜を見てたら、なんかもどかしくてさ……黙って見てられなかったんだ」

麗美の言葉に、俺は苦笑を返すしかなかった。

「でも、最後に一つだけ言わせてね」

そう言って、麗美は椅子から腰を上げて、言葉を発した。

「今、純君の胸になにがつかえてるのか知らないけど、それをすつきりさせる方法は一つだけだよ。それに、君も夏菜も相手のことばかり考えてないで、もっと自分の気持ちに素直になってもいいと思う。お互いが傷つかない恋愛なんて、どこにもないんだから」

「……麗美」

「ぐずぐずしてたら、ほんとに金田先輩に夏菜のこと奪られちゃうよ。あの人、純君よりずっと素敵な人なんだからね」

そう言って、イタズラっぽく笑ってから、麗美は「じゃあね」と言って、俺の家を出て行った。

好き。でも、夏菜は俺のことが好き。もし、勘違いだとしたら、夏菜は俺のことが好き、二度と立ち直れないかもしれない夏菜は俺のことが好き。

——昼休みに目の当たりにした光景が、頭の中にこびりついてい
る。金田先輩の胸に頭をもたげ、体を委^{まか}せる夏菜。そして、夏菜の
細い肩を抱く金田先輩……。その光景は俺の陳腐な妄想なんて
一瞬でかき消して、途端に俺の心を締め付けた。夏菜の隣に俺じゃ
ない別の誰かがいる。他の誰かが夏菜に触れることを思うと、頭が
どうにかなってしまいそうだった。

そうだ。麗美の言った通り、お互いが傷つかない恋愛なんてない。
自分も相手も傷つけないということは、結局何も始まってはいない
ということだ。相手を気遣って、自分が傷ついてみたところで、結
局それは自己満足でしかない。気持ちは、伝えなければ伝わらない
のだから……。

他の男が夏菜に触れるのが嫌だ。理由なんてそれで充分だ。この
気持ちを、ただ素直に夏菜に伝えればいいんだ。夏菜を大事に思っ
てるから、この気持ちも大事にしたい。そして、だから、伝えなき
やいけないんだ。

しかし——。

「好きだ、夏菜」

「勘弁してください」

——ってなことになったら、どうしよう……？

ごめんなさいじゃなくて、勘弁してくださいって、最上級のお断
りを本音でぶちまけられた日にや、俺絶対立ち直れそうにないよ……
。ってか、いくらシミュレーションしてみても、夏菜は一度も笑
ってくれませんでした。

「やっぱ、やめよっかな……」

って、なに考えてんだ、俺は！ 告白を決意したそばから挫けん
じゃねええ！

そうだ、告白なんてのは、ノリだ。その場の勢いでぶちかませば、

案外アツサリいくもんだ（根拠なし）。大事なのは勢いだって言うてたじゃねえか（ドラマの見過ぎ）。

そう覚悟を決めると、俺は冷蔵庫から栄養ドリンクをありったけ取り出し、全部飲み干してから、勢い付いて玄関のドアを開けて――玄関の外で呼び鈴を鳴らそうとしていた夏菜とバツタリ出くわした。

「わ……！　じ、純！？　びっくりしたあ……」

「か、かかつかかかかか……かかかな？」

びっくりしたと言葉を発した自分よりびっくりしている俺を見て、夏菜は目を丸くして「え……な、なに？」と声を出した。そして、そんな夏菜に俺は「な、なんでもない」と言葉を返し、燃え上がった闘争心はあえなく鎮火されてしまった。

「えっと……も、もしかして、夕飯呼びに来てくれたのか？」

「あ……うん。もしかして、もう済ませちゃった？」

「い、いや、まだ――」

「そっか。じゃあ、ウチで食べる？　一応、純の分も用意してあるから」

一応、の部分を強調してから、夏菜は笑った。しかし、笑い返す俺を見て、夏菜の笑顔は途端に引いてしまった。あれ、もしかして、うまく笑えてなかった？

「……純、なんか変じゃない？」

「へ！　い、いや、そんなことないって！　いやあそれにしても紗枝さんの手料理は久しぶりだな楽しみだ（棒読み）」

「おあいにく様。今日、お母さんは残業でまだ帰ってきてないの」

「……え、」

「私の手料理で悪かったですね」

そう言つて舌を出す夏菜を呆然と見つめながら、俺は心の中で神に問いかけた。

――神様。もしかして、これはあなたが下さった好機チャンスですか？

42・告白

「ぐへあ……」

夏菜の家へお邪魔して、ダイニングのテーブルに並べられた料理の数々を目の当たりにして、俺は精神的にダメージを受け、思わず呻き声を漏らした。そして、そんな俺をめっさ怖い顔をして夏菜が睨んできた。

「ちよつと、純。もちろん、それ感嘆のリアクションよね？」

「え？……うん」

「その間はなに？」

「本音？」

「馬鹿！」

いや、しかし、すっかり忘れていたが夏菜は料理音痴だったのだ。そのレベルがどの程度のものかといえば、テーブルの上に並べられた無残な料理を見れば分かるだろう。

えー、本日のおかずは、焼き魚の黒焦げ仕立てに、ウインナーの黒焦げカリカリ仕立てに、煎り卵の黒焦げ仕立て、そして、どこかの沼から採取してきました風、ダマダマ味噌汁に、シーチキンサラダ。うん。まともなのはシーチキンサラダだけだ。手を加える必要がないからね。

「いいよ。嫌なら食べなくても」

そして、夏菜は一人膨れながら自分の分のご飯をよそい、席に着いた。そして、勇敢にもスペシャルメニューに手をつける夏菜を俺はダイニングの入り口に突っ立ったまま、黙って見守った。

「料理は見た目じゃないのよ。味さえよければ——」

その言葉も、たった一口で遮られ、夏菜は静かに箸を置いた。そして、神妙な顔で虚空を見つめる夏菜に俺はそつと声をかけてやった。

「……外食にするか？」

夏菜は肩を落として呟いた。

「はい……」

さて。近所のラーメン屋で夕飯を済ませてから、只今、夏菜とともに家路を辿っている俺の頭の中は、告白という二文字の言葉に乗っ取られていた。夏菜の料理音痴のおかげで、家で二人っきりの時に、思い切って告白しちゃえ！ という俺の完璧なプランは幻に終わったわけで、しかし、たった今この二人っきりで歩いているこの絶好の状況を前にただ黙って歩くことしかできない俺は、なんという腰抜けか……いや、最初から腰抜けなのは知ってるけど。

なんか、料理失敗に落ち込んでる夏菜は終始無言で、そんな夏菜を慰めようと「気にすんな」と声をかけたところ「お前の料理音痴は今に始まったことじゃねえだろ」などと、余計な一言で墓穴を掘り、ますます夏菜はしゃべらなくなっちゃった次第で、めっさ空気重いです……はい、とても告白なんて空気じゃありません。なんて言ってるうちに、はい、家に着いちゃいました。んげげえ！

「じゃあね、純」

そう言って、門扉をくぐっていく夏菜に「お、おう」と声を返して、俺は振り返った。でも、足はその場から動かなかった。ここで何もできなければ、もう、ずっと夏菜に気持ちを伝えられない気がした。

（決めたの。これから、純とは少し距離を置こうって）

あの時、夏菜にそう言われてなにも言えなかった時に感じた喪失感に似た何かが、俺の胸を詰まらせた。あるいは、もう、その時に

俺は夏菜を失っていたのかもしれない。今は夏菜の気持ちは金田先輩に向いているのかもしれない。

でも、自分の気持ちをごまかし続けて、この先いつまでも一人で傷ついていくのは嫌だった。結果がどうであれ、気持ちを伝えなければ前に進めない気がした。俺も、そして、夏菜も。

「か、夏菜！」

思わず、振り返って夏菜を呼び止める。玄関のドアに手をかけていた夏菜が立ち止まって、俺を振り返った。

きよんとした顔をして「なに？」と声を出してくる夏菜に、俺は勇気を振り絞って「好きだ！」と叫ぼうとして、しかし、その言葉は声にならなかった。

金魚のように口をパクパクさせる俺を見て、夏菜は首を傾げながら「な、なあに？」と慎重に声を発してきた。俺は気を取り直して深く息を吸って吸って吸って吸って、盛大に息を吐きながら咳き込んだ。そして、一連の俺の挙動不審な行動を、難しい顔をしながらも、無言で見守ってくれている夏菜に、落ち着きを取り戻した俺は話しかけた。

「ちよつと、話があるんだけど……聞いてくれるか？」

「う、うん……」

こくりと頷いた夏菜に軽く笑って見せて、俺は静かに息を吐いた。そう、いきなり好きだ、なんて言えるわけがない。徐々にでいいんだ。少しずつ、この気持ちを解ほどいていって、夏菜に伝えていけばいいんだ。

「母さんが死んだ時、俺、泣けなかったんだよな」

「え……」

俺の唐突な言葉に、夏菜は戸惑うように声を漏らした。それでも夏菜は戸惑いながらも、俺を見つめながら俺の言葉の意味を真剣に汲み取るうとしてくれていた。

「分かってたんだ。夏菜みたいに素直に泣けばいいんだってこと。でも、泣けなかった。どうやって泣けばいいのか分からなかった。

泣いたら、母さんが死んだってこと認めたことになる。そしたら、ほんとにもう二度と母さんに会えなくなる。そんな風に思ってたのかもしれない」

「純……」

「それから、三週間、毎日病院の敷地内にある公園に通った。ベンチに座って、なにをするでもなく病院の外壁を眺めてた。そうしてれば、いつかひょっこり母さんに会えるような気がした。でも、会えなかった。その代わり、三週間目の雨の日に、恵美と会ったんだ」

「……」

（そういう時はね。嫌な事を忘れられるきっかけを作れば少し楽になる。だから、私はいつも雨が降ったらこうしてる）

「雨の中、傘も差さずに雨に濡れてるパジャマ姿の女の子が、そう教えてくれた。その時、なんだか分からないけど、俺、泣いてた。なんでかな、その時分かつたんだ。もう母さんには会えないってこと。そしたら、自然に涙がこぼれてた。その前にも、一度恵美のこを見てて、でも、好きになったのはその時からだと思う」

俺の言葉に、夏菜はそつと俺から目を逸らした。でも、俺は構わず続けた。

「母さんが死んで、でも、恵美がいてくれたから俺立ち直れた。でも、恵美がいなくなってから……そして、死んだって知ってから、俺を立ち直らせてくれたのは、多分、夏菜だった」

「え……」

「夏菜は、あの時俺に恵美を今でも想ってるって言ったけど、今、俺が一番大事に思ってるのは恵美じゃないんだ」

夏菜が、驚いたような戸惑ったような表情で俺を見つめる。分かっている。この先の気持ちを伝えてしまえば、もう、今まで通りの仲のいい幼馴染じゃいられない。でも――。

「俺……お前のこと――」

心臓の鼓動が、今までにないほど高鳴っている。口がうまく動かない。顔が熱い。夏菜が熱を帯びた瞳で俺を見つめる。息を吞む。

おぼつかない唇を、意を決して動かす。少しの間流れた沈黙が――
破れた。

「――す」

「あー疲れたー！」

背後からいきなり割り込んできた無遠慮な大声に、俺は飛び跳ねて驚き、ガバッと背後を振り返った。すると、そこには――。

「さ、さささささ紗枝さん！？」

「こんばんは、純君。いや、いや、参ったよー。こんな時間まで残業させられちゃってさあ。ったく、人使い荒いのよ、あのハゲ店（ハゲ店長）は」

そう言って、笑いながら俺の肩を叩きつつ、紗枝さんは悪びれずに声を出した。

「ところで、こんなところでなにしてんの二人とも？」

「あ、いや……その……」

恐る恐る振り返り、夏菜に目を向ける。と、同時に夏菜の声が鳴り響いた。

「お母さんの馬鹿あー!!」

荒々しく玄関のドアを開け、家に入る夏菜。そんな夏菜のリアクションに、紗枝さんは目を丸くして、俺に問いかけた。

「……な、なに。私、何かまずい事したの？」

俺は、なんとも言えず、ため息を吐いた。

43・恋敵との対面

ああ、くそう。これじゃ蛇の生殺し状態だぜ……。

放課後、俺は一人教室に残り、憂鬱の泥沼にどっぷりと浸かって
いた。昨日、告白の寸前までこぎつけながら、紗枝さんのおかげで
宙ぶらりん状態に陥った俺と夏菜の関係は、超気まずいものとなっ
てしまった。今朝から顔を合わせても夏菜は昨日のことには一切触
れてこない。かといって、昨日のことを全く気にしていないという
わけでもなさそうだ。なぜなら、明らかに普段と比べて夏菜の挙動
がぎこちない。なんつーか、上の空つーの？ 今日授業で三回も
当てられてのに、教師の言葉をまるで無視してたからな。真面目
な夏菜が教師をシカトしているとなんて初めて見たぜ。

やはり、完璧に「好きだ」とは言えなかったにせよ、俺の気持ち
は夏菜に伝わっているのでは？ うん。なら、わざわざまた伝え直
すなんてことする必要はくね？

しれっと「夏菜、昨日の返事聞かせてくれよ」って言ったら、案
外簡単に答え聞かせてくれるかも——って、は！ またいつの間に
か、なあなあで済まそうなどという流れに持っていこうとしてる！
？ こんの、腰抜けがっ！

でも、とてもじゃないが、告白し直す勇気なんてなあ……。ある
程度こっちの気持ち暴露してるだけに、余計やりずれえし……。そも
そも、今更だが恋人のいる奴に「好きだ」なんて伝えること自体、
気が重い——。彼女とデート中に元力ノと鉢合わせして、元力ノに
関係引っ掻き回されて、今後どうしようってぐらい気が重い（あく
まで、想像）……。

「はあ……頭痛え……」

「大丈夫かい？」

「いや、大丈夫……」

と普通に返事を返してみたら、俺は目をぱちくりして、机の上

に体を突っ伏した状態のまま、顔だけを横にずらした。すると、どうだ。俺の席のすぐ横にいつの間にか誰かが立っていた。いや、さつきまで一人だったはずだが。そして、ゆっくり視線を上になぞってみて、俺は驚きのあまり、慌てて体を起こして、その反動で椅子からひっくり返ってしまった。

「わ……うげえ！」

ギリギリのところで受身を取り、しかし床に背中を叩きつけられた俺は、あまりの痛みに身悶えした。そして、その人物はそんな俺を心配そうに見下ろしている。

「お、おい……大丈夫か？」

「か、金田先輩……？」

床に仰向けに転がったままの状態で、何とか声を出す。そして、そんな俺に金田先輩は苦笑した。

「ちよつと、いいか？」

さて。なぜか、放課後の教室で金田先輩と二人っきりになってしまった俺の心中は、とても言葉では言い表せそうにない。なんか、動揺と憎悪と不安と嫉妬と、少しの申し訳なさと猜疑さぎをミキサーにかけてジュースを一気に飲み干した、と言えば分かりやすいか。まあ、恋敵を前にした、これがあるべき心境じゃね？ 特に、相手が自分よりいい男（もしくは女）だったりしたらね？

「そういえば、君とこっやって話すのって、ずっと前に屋上で会っ

て以来だな」

しかし、そんな俺の気も知らずに、穏やかな微笑を携え金田先輩は平然と俺の席の隣の椅子を引つ張り出して、俺と向かい合ってた。さて、これでいよいよ逃げられなくなってしまった。弱ったな。

「それとも、もしかして俺、君に避けられてるのかな」

「え……！」

なぜ、それを！　と思わず口からついて出てきそうになった言葉をぐっと飲み込む。そして、明らかに動揺している俺を、まるで楽しんでるかのように眺めている金田先輩。ちくしょう。その余裕は夏菜を手に入れた優越感ですか？　張り倒すぞ、このクソヤロウ。つて、何一人で物騒なこと考えてんだ、俺は！

「冗談。だから、そんな怖い顔して睨まないでくれよ。別に君と喧嘩しに来たんじゃないんだから」

「い、いや……。こつちも、そんなつもり全然ないですけど」

俺の言葉に、金田先輩はにっこりと笑顔を作った。うぐう。この笑顔に夏菜はメロメロなのか？　確かに、まるで王子様みたいな爽やかなこの笑顔は、女の子の心を驚掴わしづかみにすること受け合いだ。

「確か、純君だよな。夏菜からよく話は聞いてるよ。幼馴染で、仲のいい友達だつてね」

「は、はあ……」

ぐはああ！　こいつ、今夏菜のこと夏菜って呼びやがった！　前は確か大山つて苗字で呼んでたろが！　馴れ馴れしいんだよ、てんめえ！　大山さんとさん付けで呼び直せやあ！　と心の中で叫びつつも、何とか表には出ないように堪える俺。はい。相手は夏菜の彼氏だし、ただのしがない友人の俺に、そんなことを命令する資格はありませんでした……。くそう、気が狂いそうなほどム力つく……！

……！　てめえら、一体どこまで進んでやがる……！

「あ、そうそう。聞いてくれよ。この間夏菜とキスしたんだけどさ」

「……え？」

あまりにも衝撃的な言葉に、俺の意識は五メートルほど跳躍してから、ようやく戻ってきた。そして、目を点にして聞き返す俺に、金田先輩は相変わらずの爽やかスマイルでこともなげに声を出した。「いや、夏菜とキスしたただけだね。なんか、ファーストキスだったみたいで、泣き出しちゃってさ。てっきりいい雰囲気だったからオッケーだと思——」

その瞬間、プチンと俺の中で何かが切れた。

「てんめえええ！ 死なすぞ、ごるらあ！」

「てのは、冗談だけだね」

「このクソ蚊があ！ 金田先輩のこと今刺そうとしてたが！ この、この！ 死なすぞ、こらあ！」

超人的な反射神経で、金田先輩に殴りかかった俺の拳は空中で軌道修正。何とか、蚊を拳で打ち落とそうとする間抜けへ変身完了。しかし、そんな俺を見て金田先輩はぷつと吹き出した。

「夏菜の言った通りだな、君は。単純で、馬鹿で、時々わけの分からない行動をして、周りを困惑させる」

「……それ、夏菜が言ってたんスカ？」

マイナスイメージのオンパレードに、俺は意気消沈して椅子の上にストンと崩れ落ちた。

「そして、嘘を付くのがものすごく下手」

「え？」

「君、夏菜が好きなんだろ」

「え……」

「さっきの反応は、ただの幼馴染に対してのものじゃないだろ。僕が大山とキスするのが、そんなに腹が立つ？」

さっきまで、夏菜と呼んでいたはずなのに、大山と言い直す金田先輩。そして、俺はようやく金田先輩に試されていたことを悟った。が、もちろん、素直に認めてやる義理もないので、すつとぼけてやる。

「いや、俺って見かけによらず友達思いですから」

「ごまかさなくていいよ。そうじゃないかと思ってたしね。君たち
すごく仲いいし、そういう感情を抱いてても不思議じゃないよ。た
だ、今大山と付き合ってるのは、僕だ」

常に微笑を携えていた金田先輩の顔から笑みが消えた。そして、
俺をまっすぐ見据えて、金田先輩は言葉を発した。

「正直、君が大山に近付くのは不快なんだ。よければ、あまり彼女
に近付かないでもらえないかな」

「……」

そんな風に面と向かって穏やか口調で威嚇をされては、俺も面食
らうことしかできなかった。そして、何も言い返せずにいる俺に、
金田先輩はにつこりと笑ってから席を立った。

「じゃあ、そういうことだから。部活に遅れるから失礼」

結局、何一つ言い返せないまま、金田先輩は悠然と教室を後にし
た。

44・相談相手

「ふうん。それで長谷川君ブルっちゃったわけか」

「いや、面食らっただけですけどね?」

「ま、どっちにしろ、何も言い返せずに指を銜^{くわ}えてたんでしょ」

「もっとソフトに人の相談に乗れないのか、あんたは」

「文句あるなら他当たれば?」

「すいませんでした」

さて。只今バイト終わりに、24時間営業のファミレスで遅い夕飯を摂ろうというところなのだが、メニューを注文して五分で俺は早速この人に相談を持ちかけたことを後悔し始めていた。

窓際のテーブル席で俺の向かいに座った杏奈^{あんな}さんは、堂々と煙草をふかしながら「で?」とテーブルの上に頬杖をついた。

「結局君はどうしたいわけ? 要はそこですよ」

「その前に、柏木さんってまだ十八でしたよね。何、堂々と煙草吸ってんスカ」

「ちよつと。まだ十八ってね。君こそまだ十六でしょ。年下のクセに、まだ、なんて生意気な口叩かないでくれるかな」

「いや、違いますって。俺が言いたいのは、喫煙は二十歳になってからってことです」

「知ってるよ。でも、私好きな人の言うことしか聞く耳持たないの
で、悪しからず」

平然とそんなことを言っただけの杏奈さんは、悪びれもせず煙草の煙をふうと俺の顔に吹きかけた。まあ、良識のある人間なら初めから煙草など吸わないのだから、これ以上なにを言っても無駄だ。つか、相手が杏奈さんの時点で無駄だ。そして、やはり人選ミスだったことを悟り、俺は深くため息を吐いた。

柏木杏奈^{かしわぎあんな}。俺より二つ年上のこの人は、二月ほど前に俺のバイト先に入ってきた後輩だ(年上だけ)。ちなみに、俺は毎週、月、

火、水の三日間、近所のスーパーで清掃員のバイトをしている。んで、なぜ俺がこの人に相談を持ちかけたのかといえば、理由は一つ。同世代の人間が俺のバイト先にはこの人しかいなかったからだ。

あくまで仕事上だけの付き合いだが、二ヶ月の間でこの人の人間性は大方把握している。見た目こそさらさらヘアーの黒髪ロングに、身に着ける服も控えめで大人しめのものを好む、落ち着いた印象のお姉さんなのだが、休憩室で堂々と煙草をふかしているこの人を目の当たりにして、その印象は吹き飛んだ。仕事は一応真面目にやるが、マイペースというか、協調性に欠けるといって、とにかくこの人は嫌いな人間の言葉には聞く耳を持たない。それが災いして幾度もトラブルを巻き起こし、もちろん先輩で同世代の俺がそのフォロ―に回ることはお約束になっている。こっちにしてみればいい迷惑なのだが、この人のストレートな性格は羨ましくもあり、少し天然の入った拳動はどうしても憎めないのだ。

しかし、そもそも、麗美や大樹に相談できれば何の問題もなかったのだが、今、大樹とは冷戦状態だし、昨日の今日で麗美に相談するのもあれだし。ってか、近場で相談したら、夏菜に情報が漏れそうで怖い（今更だが）ので、杏奈さんに「飯をおごる」ことを条件に相談に乗ってもらっているのだが……。

「で、君はどうしたいの」

「いや、どうって言われても……」

「じゃ、彼女に気持ちを伝えたいのか、彼女とどうにかなりたいのか、どっち？」

「とりあえず、両方……ですけど」

「二兎を追う者は一兎をも得ず。ご愁傷様です。はい、おしまい」
「……あんた、飯が来る前にさっさと終わらせようとしてねえか？」

俺の言葉に、杏奈さんは目をぱちくりさせてから、つつつと俺から目を逸らして、窓の外を眺め、厳かな表情のまま、ボソリと呟いた。

「ばれたか……」

「真面目にやれ、馬鹿野郎」
程なくして、店員が注文した料理を運んできた。

「確かに、何か困ったことがあれば遠慮せずに言っ来ていって、君に言った憶えはあるけどさ、なんか幻滅」

運ばれてきたカルボナーラをすすりながら、杏奈さんは上目遣いに俺を見ながら、そう言った。

「好きな子に告白するしないで相談に乗ってなんて、女々しいったらありやしない。ってか、君って処女の中学生？」

「……すいませんね、男らしくなくて」

「まあ、こうしてタダ飯にありつけたからいいんだけど」

だったら黙って相談に乗れ。と俺は心の中で呟いた。

「で……真面目な話どうしたらいいと思います？」

とりあえず、杏奈さんには「好きな女に告白をしたいが、その女には恋人がいて、でも告白しようと思ったら、その女の恋人に近付くなど凄まれた（ちよっぴり、脚色）」と大まかな事情を伝えていく。そして、杏奈さんは皿の上で力チャ力チャとフォークでカルボナーラを弄びながら「だから、それってさ」と言って、俺に目を向けた。

「結局君がどうしたいかってことでしょ？ 私にできるのは、君がどうしたいのかを聞いてあげることだけ。私がやめとけって言ったら、君大人しく身を引くの？」

「いや……」

「——で？ 君はその子に告白するの。しないの」

「……」

相談相手を間違えたのか。それとも、正しかったのか。どちらにしろ、この人のストレートな性格は、見習いたいとは思わないけど、やっぱり羨ましかった。そして、俺は小さくため息を吐いて声を出した。

「……します」

「うん。がんばってね。応援してる」

そう言っで、カルボナーラをすすする杏奈さんに俺は苦笑した。

45・最低の告白

杏奈さんと別れてから、俺は自転車にまたがり、家路を辿った。

杏奈さんには威勢良く「告白する」なんて言ってみたはいいが、やはり、金田先輩に「俺の彼女に近付くなクソ野郎（ちよつぷり脚色）」なんて威嚇されているので気は重かった。そもそも、なぜこのタイミングで金田先輩がそんなことを言い出してきたのかが気になる。もし、夏菜と仲のいい俺の存在が気に食わないのなら、もっと早い段階で釘を打ちに来るのではないか？ 付き合いだして二週間以上経つこの時期に、しかも、夏菜に告白しようとした翌日ということのタイミングが気持ち悪い。

おそらく、金田先輩も今日夏菜の様子がおかしかったことには気付いていたはずだし。もしかしたら、金田先輩は俺と夏菜の間に何かがあったことを感じていたのかもしれない。そう考えれば辻褄も合うのだが、もしそうなら、敵は恐ろしく強かだ。なんか、勝てる気がしねえ……。

って、いきなり挫けてどうする俺。大丈夫。自信を持て。昨日だって、紗枝さんがいなきゃ、告白できてたんだ。いや、でもあの時は不意打ちだったから何とか勢いで押せただけで――。

と、心の中で葛藤と戦っている、いつの間にか家にたどり着いていた。そして、二件先の軒先に立っている夏菜と金田先輩の姿を目の当たりにして、俺は思わず電信柱の影に自転車ごと身を潜めた。いや、明らかに隠れ切れてないが。だって、ほら。二人にあっさり気付かれた。

「あれ？ 長谷川君だろ。そんなとこでなにやってるの」

なにやら楽しそうにお話していた夏菜と金田先輩が、電信柱の影に身を潜めた不審者の下に歩み寄ってきた。そして、爽やかな笑顔とともに俺に声をかけてくるは金田先輩。いやはや、数時間前に「俺の彼女に近付くな」と言っただけの人間とは思えません。いや、

あの時も物腰穏やかだったけども。つか、なに？ 俺が夏菜にそのことばらさない腰抜けだって侮ってるのか？ 舐めんなよ？ その通りだけどね？

難しい顔をして金田先輩を睨んでいると、金田先輩の後ろから夏菜が俺に声をかけてきた。

「どうしたの、純？」

「え？ あ、いや……別になんでもねえよ。そ、それじゃな」

そそくさとその場から逃げ出そうとする。が、金田先輩にアッサリ声をかけられ引き止められた。

「こんな時間までバイトなんて大変だね、長谷川君」

「え……」

「大山から聞いているよ。週三日、近所のスーパーでバイトしてるんだろ？」

「はあ……」

金田先輩の言葉に、俺はチラッと夏菜に視線を向けた。そして、俺と目が合つと夏菜はそつと俺から目を逸らした。

「えつと……二人はなんですか。こんな時間までデートですか？」

「あれ、知らなかった？ 僕、時々、大山の家で夕飯ご馳走になつてるんだ。大山のお母さん、料理上手だよな。それにすごい若くて美人だしさ。君もそう思うだろ？」

「え……あ、ああ。でも、あの人におばさんは禁句ですよ。笑顔で尻叩いてきますから。百回」

俺の言葉に金田先輩は、はは、と笑ってから「じゃあ、俺帰るから。またな、長谷川君」と言つて俺の肩をポンと叩いた。そして、振り返つた金田先輩は、後ろに立つ夏菜におもむろにハグした。

突然の出来事に、俺はただ目を丸くすることしかできなかった。ぽかんとした表情の後に、顔を赤くして目を泳がせる夏菜。そして、そんな夏菜と目が合つても、俺は俯くことしかできなかった。『バイバイ、大山。今日は楽しかった』

そう夏菜の耳元で囁いてから、金田先輩は帰っていった。

金田先輩がいなくなってから、俺たちは向かい合ったまま一言も言葉を発せずに、その場に突っ立った。重苦しい沈黙の中で、今すぐにでもその場から逃げ出したかったのに、足が地面に張り付いてしまったように、動かなかった。やがて、夏菜がおずおずと俺に声をかけてきた。

「あ、あの、純……」

「わりい。俺、疲れてるから。じゃあな」

自分でも驚くほど感情のこもらない冷たい声が漏れた。今は、駄目だ。これ以上夏菜と向かい合っていたら、夏菜を傷つけてしまいそうだった。振り返る俺の名前を夏菜が呼んだ。その声を無視して歩き出そうとすると、夏菜が後ろから俺の手を取った。

「……なんだよ」

「待つてよ、純。純、誤解してる」

「……別に。見たまんまだろ。つーか、気兼ねする必要ないだろ。お前ら付き合ってたんだから」

俺の言葉に、夏菜はそつと俺から手を離れた。俺の手から夏菜の温もりが消える。その感覚は、揺らいでいる俺の気持ちを揺さぶった。もう一度俺の名前を夏菜が呟く。そして、夏菜は言葉を発した。「私……今日ずっと待つてたんだよ。純が、昨日の続きの言葉、言ってくれるの」

その瞬間、俺の中で今まで溜め込んでいたものが、堰を切ったように溢れ出した。

「……分かったよ。だったら、言ってやるよ」

そう言つて、俺は振り返つて夏菜を見つめた。

「俺、お前のこと好きだ」

吐き捨てるように投げ出したその言葉は、昨日伝えられなかった言葉と同じだった。それでも、それはただ俺たちの間を虚しく通り過ぎて、辛そうに俺の名前を呟く夏菜の表情のせいで、もう、歯止めは利かなかった。

「だから、もう俺に構うなよ。傍でお前らがいちゃついてんの見る

のきついんだよ」

「止めてよ……そんな言い方」

「だって、そうだろ。昨日だってお前ら昼休みに視聴覚室で抱き合ってたろ。つーか、待てたって？ お前も俺の気持ちに気付いてたんだろ。なのに、こんな時間まで金田先輩と会ったりしてよ。それで俺に好きだって言わせて、お前なにがしたいわけ？ つーか、さっきのって俺へのあてつけか？ お前ら二人で俺のこと馬鹿にしてんだろ？」

「違う……」

「なにが違うんだよ！ 俺が今までどんな気持ちでお前と接してきたか分かるかよ！ もう……これ以上我慢できねえんだよ！」

せき止めていたものの全てを吐き出した後に残ったのは、後悔と夏菜の泣き顔だけだった。俺は、夏菜をその場に残して、自転車にまたがり行く当てもなくペダルを思いつきり漕いだ。冷たい風が、虚しく俺の体を通り過ぎた。

46・心に空いた穴

翌日、夏菜は学校を休んだ。今まで一度も学校を休んだことのない夏菜の欠席を麗美は随分心配していた。

教室の中に一つだけぼつんと空いた席は、まるで、俺の気持ちを表しているみたいで、皮肉だった。

罪悪感と後悔しか残らなかった告白。いや、思い返してみれば、俺は夏菜のことを傷つけ通しだった。今まで、こんなことなんてなかったのに。たった好きだというこの気持ちのせいで、自分の行動に歯止めが利かなくなってしまう。

この先も、俺はこの気持ちに振り回されて、夏菜を傷つけるのだろう。だったら、これ以上俺は夏菜の傍にいない方がいい。

全てがもう、どうでもいいような気がした――。

来週末まで、この雨は続くらしい。

夏菜が学校を休み始めてから、三日が経った。心配して見舞いに行った麗美にも顔を見せず、夏菜は部屋から出てこないらしい。

「どうせ、失恋でもしたんでしょ」という紗枝さんの鋭すぎる言葉を思い出す。気の済むまで籠城させとくわ、という紗枝さんの軽い言葉は、おそらく紗枝さんなりの気の遣い方なのだろう。心配だったけど、やっぱり会おうという気にはなれなかった。

世界が変わる瞬間。ぼんやりとその言葉を思い出していた。

誰が言った言葉だったろう。ああ……恵美だ。いつ、どこで？

駄目だ。うまく思い出せない。ただ、恵美との思い出はほとんど病室だったので、多分、そこだろう。

世界なんて言葉を持ち出だされたのは、その時が初めてだった。その言葉の大きさと、その言葉を発する十一歳の女の子のギャップを、俺は冗談と受け取った。でも、その時の恵美の目は真剣だった。

暗く沈んだ空。しとしと降り続く雨。裏庭のベンチに寝転がりながら、手を伸ばしてみると、思ったよりずっと遠くに空があることに気付いた。雨は規則的に体を濡らして、よそよそしく体を流れていく。湿った匂いと、暗い空。だんだん、曖昧だった記憶が、はつきりとしていく。代わりに、今、自分がなにをしているのかが曖昧になっていた。

——世界が変わる瞬間って誰にでもあるのよ。知らないの？

恵美の言葉に真面目に取り合わなかったせいで、恵美は随分不機嫌だった。その時、恵美の言った世界の意味がそんな広大なものじゃなくて、閉鎖的なものだったことを知って、俺は、ああ、と思った。

その年頃の女の子は、男の子よりもずっと大人びているということだと思う。感傷と現実の間を揺れ動くその頃の女の子という生き物を、俺は未だに計りかねていた。雨はどうして降ると思う？と恵美に聞かれた時、持ち寄りの知識でその仕組みを解説しようとしたら「馬鹿じゃないの。嫌なことを忘れさせてくれるために降ってるのよ。何真面目に語ってんのよ」と理不尽なことを言われたことがあった。

恵美の世界が変わった瞬間は、自分の病名を知った時だったらしい。当たり前だったものが、その日を境に急に自分の手から零れ落ちる瞬間。恵美の指す世界の变革は、あくまで悲しい出来事にしか向いていなかったけど、そのことを指摘する気にはなれなかった。現実的でありながら、感傷的でもあるその話題は詰まるところ俺に

も答えを求めてきた。

俺の世界が変わった瞬間は、母さんがいなくなった時。その答えを聞いて、恵美ははあ、とため息を吐いて一言「暗っ」とツツコンできた。別にボケてもないのにツツコンまれる筋合いはなかったけど、二人揃ってしんみりするのも気が滅入りそうだったので文句は言わないでおいた。詰まるところ、その年頃の女の子は、男の子よりもずっと大人びている。

その時、普段通り明るく振舞う恵美を見てなんだか悲しかったのは、きつと、喪失の予感だったのだろう。

世界が変わる瞬間が悲しい出来事に限られなかったとしたら「恵美に出会った時」という選択肢もあった。なんだか分からないけど、恵美と会った瞬間から確実に俺の世界は変わっていたから。多分、人は誰かを好きになった瞬間から、世界が変わる。なんて、キザッばい台詞は恥ずかしくてとても口には出せなかった。

記憶が遠のく――。

夏菜が好きだと気付いた瞬間、俺の世界は変わったのだろうか。なんて大げさな、と笑ってしまいたかったけど、俺の中で今世界は回転している。見上げなければ見えない空が目の前にあって、でも、それは当たり前のことのような気がした。

気力が湧かない。悲しいとか辛いとかじゃなくて、ただ、どうでもよかった。なんだか、体を流れていく雨に溶けて、自分がなくなってしまうような気がした。空に向けて伸ばした手を握ってみると、感覚は随分曖昧だった。

「……？」

しばらく目を閉じて雨に打たれていると、不意に雨が止んだ気がした。でも、耳の外では静かに雨は降り続いていて、その異変に俺はそつと目を開けた。

視界に映ったのは、傘を差して俺のそばに立っている南だった。

「……南」

独り言のようにそう呟く俺を見て、南は静かに声を出した。

「風邪……引きますよ」

——雨が、止んだ気がした。

47・言葉にできない気持ち

ベンチから体を起こしてみると、一瞬眩暈に襲われた。一度ぎゅっと目を瞑ってから目を開けてみると、南はまだ俺のそばに立って、俺を傘の中に入れてくれていた。ようやく、欠けていた現実味を取り戻す俺に、南は無言でスカートのポケットからハンカチを取り出して、それを差し出してきた。

南の体温を少しだけ宿したハンカチの温もりに触れた瞬間、なぜか戸惑った。その温もりを手の中でぎゅっと握ると、少しだけ胸の奥が疼いた。徐々に徐々にそれははつきりとした感情に膨らんで、俺はどうしていいか分からずに、南から目を逸らした。

「わりい……」

ただ、その声を漏らすことしかできない俺の傍に、南は何も言わずにいてくれた。胸の奥で疼く痛みが通り過ぎる少しの間だけ、俺たちはそこから動かなかった。

「多分、こういう時に使っただろうな」

「え？」

「穴があつたら入りたい、ってーの。ってか、なんかへこむ。今の俺って、一体世界で何番目にかっちょ悪い男にランクアップしてんのかな」

「……先輩」

「でも、ありがとな。なんか少し楽になった」

俺の言葉に、南は俺から目を逸らして「いえ」と呟いた。

なんとなく、気詰まりな沈黙が流れた。振り続ける雨の中、校門を出た俺と南は、次に出す言葉を見つけれずに、黙々と歩いた。

ベンチで雨に濡れる俺を目の当たりにしても、南は何も詮索してこなかった。ただ、控えめに微笑んで「一緒に帰りませんか」と言ってくれた南の言葉に、なんだか救われた気がした。

そして、そんな南だからだと思う。こんなことを話せるのは。

「傷ついてもいいって思ってたんだけどな」

「え……」

「気持ちを伝えられれば、それでいいって。でも、結局、気持ちをぶつけることしかできなかった。本当はそんなことが言いたかったわけじゃない。好きだって、その気持ちだけ伝えるつもりだったのに、駄目だった。なんで、好きなのに、傷つけることばかりしてんだろ、俺……」

俺の声が虚しく雨の音に紛れて消えた。傍で南は何も言わずに、俯き加減に歩いている。少しの静寂の後、俺はわざとらしく笑って見せた。

「わりい。んなこと言われてもわけ分かんねえよな」

「……そんなことないです。見てれば分かりますから」

「え？」

「今、先輩がすごく傷ついてるってこと」

そう言つて、不意に足を止めた南につられて、俺も足を止めて、南を振り返った。義務的に雨を弾く南の赤い傘が、南の表情を隠していた。いつまでも、南の顔は傘の内側に隠れたままで、俺は無言でそうしている南に、戸惑いながら南を呼んだ。俺の声に、南はそのままで声を出した。

「私には勇気がないから……」

「え……」

「好きな人に気持ちを伝える勇氣……私にはないです。分かるから。その人は別の人が好きで、私じゃその人の支えになれないってこと……難しいですよ。気持ちって、大きければ大きいほど、うまく言葉にかえられない」

「南……？」

「——先輩、いつか私に言ってくれましたよね。今日から俺はお前の味方だつて。あの時、すごく嬉しかった。ううん。いつも先輩の言葉は優しくて、一緒にいるとそれだけで私、元気になるんです。だから……こんな時ぐらい、私が先輩を元氣付けてあげたい。私には、そんなことぐらいしかできないから……だから」

そう言つて、南は顔を上げた。

「頑張ってください。先輩」

雨の向こう側で、南の微笑む顔はなぜか少し寂し気に見えた。その微笑みはすぐに傘の中に消えて、何も言わずにそこに佇んでいる南にどうしていいか分からずに、俺は、ただ素直な気持ちを言葉にかえた。

「ありがとな……南」

それから、俺たちは無言で雨の中を歩いて、別れた。

別れ際、雨の中を一人で歩いていく南の後姿を、俺は見えなくなるまで見守った。きつと、そうしていたのは、垣間見た南の寂しそうな微笑が、頭から離れなかったからだと思う。

雨の振る音が、いつまでも耳の外で鳴っていた。

48・恋の賭金

「……なんスか？」

「おいおい。人の顔見て、そんなあからさまに嫌そうな顔しないでくれよ」

そう言って苦笑する金田先輩を前にして、俺はどうしていいか分からず、ただ、どうして金田先輩が俺の家の前にいるのかを考えた。もし、俺が今嫌な顔をしているのだとしたら、それは、この人が俺に会いに来る理由は一つしかないからだ。しかし、恋人が三日立て続けに学校を休んだからといって、俺を訪ねてくるのは随分なお門違いだと言ってやりたいが、その原因は他ならぬ俺で、その事実がまた俺を苛立たせた。

つまるところ、夏菜の恋人は俺の天敵だということだ。この人に例え命を助けられたとしても、俺はおそらく礼の一つも言わないだろう。それは別に、好き嫌いの問題じゃない。

「……用がないなら、帰ってください。俺、疲れてるんで……」

「っていうか、ずぶ濡れだな、君。風邪引くぞ？　ここで待つてるから、先に着替えてきていいよ」

「……」

金田先輩のペースで勝手に話が進んでいることに苛立ちながら、しかし、この人の目に悪気はなさそうだった。俺は小さくため息を吐いてから「ちょっと、待っててください」とお言葉に甘えて家の門扉をくぐった。そして、玄関に入ろうとした俺に、金田先輩は不躰に言葉を発した。

「先に言つとこうかな。君にとっては朗報だろうし」

「は……？」

金田先輩の言葉に、俺は眉根を寄せつつ金田先輩を振り返った。そして、そんな俺に金田先輩はやっぱり悪びれもせず、言葉を発した。

「僕、大山と別れたから」

金田先輩の唐突過ぎる言葉に、俺はリアクションに困ってとにかく固まることしかできなかった。そんな言葉をこともなげに微笑交じりで言っただけのこと自体、冗談にしか見えなかったが、もし、俺をからかっているのであれば、ここはキレても構わないだろう。

しかし、動揺のあまり身動きが取れない俺に、金田先輩はまた悪びれもせず言葉を発した。

「早く着替えてこないと、風邪引くぞ？」

金田先輩の表情から真意を読み取れないまま、俺は、促されるまま一旦、玄関の中に入った。

麗美は夏菜が俺の気を引くために金田先輩と付き合ったと言っていたが、その話を聞いてからずっと引つかかっていた。もし、その話が事実なら、夏菜は自分に好意を寄せてくれる金田先輩を利用していることになる。でも、夏菜はそんなことができるほど器用でもないし、何より、いい加減な気持ちで誰かと付き合うような奴ではないのだ。

だから、夏菜の気持ちは付き合うことを決めた時点で、もう、金田先輩に向いているんだと思った――。

「――はい？」

「だからね。賭けをしてたんだよ」

「賭け？」

「そう。賭け」

そう言つて、全ての事情を知っているであろう金田先輩はやっぱり余裕で微笑む。そして、さっぱり事情が飲み込めない俺は、随分間抜けな顔をしているのだろう。

あれから、金田先輩の言葉の意味が飲み込めないまま、俺は部屋着に着替えてから、金田先輩と近所の公園まで来ていた。雨除けの屋根のついた古びたベンチに並んで腰掛ながら、もう一度金田先輩の発した言葉の意味を考えてみる。

キーワードは「夏菜と別れた」「賭け」やっぱり、意味が分からなかった。

「あの……もう少し分かるように話してもらえませんか」

未だ冗談の域を出ない話の行き先を懸念しながら、俺は慎重に金田先輩を伺いながら声を出した。もしこの話のオチが「なんちゃって」なら、その時こそ俺は本気でこの人をぶん殴つてしまつたろう。夏菜とキスしたと平気でカマをかけてくるこの人なら、それぐらいはやりかねなかった。

「大山に告白して、付き合つてくれつて言つたら、断られた。他に好きな人がいるから付き合えないつてね」

「え……」

「ずっと片思いをしてるらしい。この先も告白するつもりはないらしい。その相手は親しい幼馴染で、向こうはきつと友達以上の感情を抱いてはいないらしい。そこで、僕はこう持ちかけた。だったら、僕と付き合つてる振りをして、相手の気持ちを確かめてみればいいつてね。そのまま何もしないでいても、君たちの関係は何も変わらない。

もちろん、大山はそんなこと僕に悪いと言つて受け入れなかった。だから、賭けたんだ」

「賭けた？」

「そう。付き合う振りをしている間に、大山が僕と本気で付き合いなくなるつて方に、五百円。まあ、一方的な賭けだったけどね。僕

は常にポジティブ思考で、まず、同じ土俵に立たせてもらえないことの方がよっぽど酷だと彼女を説得した。そして、しつこく頼み込んだ末に、ようやく彼女は頷いてくれた」

金田先輩のカミングアウトに、俺は何と言っていいか分からずに、金田先輩から目を逸らした。なんだか、さつきから金田先輩から大樹と同じ匂いがしているような気がするのはいのせいか。

「付き合ってる振りをしてるうちに、大山を僕に本気にさせる自信があった。相手は、君だったしね」

そう言っただけで、さつきは、さつき、大山に直接別れてくれって言うのをしかめることしかできなかった。

「でも、結局駄目だったよ。さつき、大山に直接別れてくれって言われた」

「いや、ちょっと待ってください。でも、抱き合っていましたよね。夏菜と」

「え？」

「ほら。昼休みに視聴覚室で。ずっと前に俺、見たんですけど」

俺の言葉に、金田先輩は少し考えてから「ああ」と声を出した。

「もしかして、あの時のことか。あれは、急に雷が鳴って、びつくりした大山がつまずいて俺に倒れこんでただけだよ」

「で、でも、夏菜に近付くなって俺に言いましたよね。夏菜にハグしてたし」

「それぐらいしてもいいだろ？ 一応彼氏役だし。まあ、なにをしても大山の気持ちは君に向いてたから、僕も少し焦ってたつてもあるけど、もう、止めることにした。気付かされたんだ。今日、大山に泣きながら別れてくださいって面と向かって言われた時にね。」

正直、そこまで大山を苦しめてとは思わなかった。僕が思ってたより、ずっと彼女は一途で、不器用だったよ」

金田先輩の言葉が、なぜかズキンと俺の胸を痛めた。

罪悪感と、後悔が^な縋^ない交ぜになった感情が、俺の中で膨らんでいく。そして、そんな俺をよそに、金田先輩は小さく息を吐いた。

「正直ね。僕は大山が好きだけど、別に相手がどうしても大山じゃなきゃいけなかったわけじゃないのかもな。彼女のことを一番に考えれば、やりようは他にいくらでもあった気がするし。でも、大山は多分違うと思う。彼女は君じゃなきゃ駄目なのかもな」

そう言つて、金田先輩はベンチから腰を上げて、俺を見下ろしながら言つた。

「君はどうかな」

「……なんですか？」

「うん？」

「なんで、そんなことわざわざ俺に言いに来たんですか？」

「決まつてるだろ」

そう言つて、金田先輩はイタズラっぽく笑つた。

「好きな人のためだよ」

正直、金田先輩がどこまで本気で夏菜のことを想っているのか分からなかった。ただ、少なくとも、好きな人に振られた直後に、そこまで好きな人のために行動できる自信は、俺にはなかった。

「すんません……」

「そんなことより、大山にこれ渡しといってもらえるか」

そう言つて、金田先輩はポケットの中から五百円玉を一枚取り出して、俺に放り投げてきた。

「賭けは僕の負け。それと、あんまり気にするなって大山に伝えといてくれ」

そう言い残して、金田先輩は雨の中に消えて行つた。俺は、一人取り残された公園の中で、ベンチの上に倒れこんで、目をつぶつた。雨の音がやけに近くで鳴っていた。雨の匂い。雨の音。少し肌寒い風は、いつかの感覚に似ていた。

目を開けて、金田先輩から受け取った五百円玉をかざしてみる。

まだ、間に合うのかな……。

指先に感じる無機質な感触は、もちろん、何の返事も返してはくれなかった。

でも、今度こそ、素直な気持ちを夏菜に伝えられるような気がした。

俺は、五百円玉をポケットにしまって、公園を出た。

49・恋の行方

公園を出て家に帰る途中で、紗枝さんと会った。紗枝さんは俺に気付くと、開口一番「夏菜を知らないか」と言ってきた。普段動じることのない紗枝さんの不安そうな面持ちに戸惑いながら、俺は知らないと答えた。

話を聞くと、散歩に行つてくると言つて家を出たきり、もう三時間以上夏菜が帰ってきていないらしい。ここ三日部屋にこもりつきりだったから、気分転換にいいだろうと行かせたのだが、いつまで経つても帰つてこないの心配になつて探しに来た。そう言つて、紗枝さんはうな垂れた。

「どうしよう。何かあつたら私のせいだわ……。どうせ失恋だつて、あの子のことよく見てなかったから……」

「……とにかく、俺も夏菜のこと探してみます」

「純君……」

「大丈夫ですよ。あいつ、元気だけが取り柄なんですから」

俺の言葉に、紗枝さんは苦笑して「そうね」と頷いた。

「とにかく、夏菜の行きそうな場所片っ端から探してみる。純君もお願いね」

「分かりました」

夏菜のケータイに何度かけてみても、応答メッセージが返ってくるだけだった。夏菜の友人関係を中心に心当たりは全部当たってみたのだが、全滅。ケータイも繋がらない。探し出して一時間弱。時刻は八時を回っている。いよいよ、本気で夏菜のことが心配になってきた。

夏菜と最後に会ったのは、おそらく金田先輩だろう。おそらく、夏菜は金田先輩に別れを告げた後、家には帰らずどこかへ行った。（今日、大山に泣きながら別れてくださいって面と向かって言われた時にね）

金田先輩の言葉が脳裏をよぎる。

この三日間、夏菜はずっと一人で思いつめていた。その責任は俺にだってある。

（俺が今までどんな気持ちでお前と接してきたか分かるかよ！もう……これ以上我慢できねえんだよ！）

俺が感情に任せてあの時あんな事を言わなければ……ちゃんと、夏菜の話を聞いててやれば、こんなことにはならなかった。

夏菜は、俺のことをずっと待っていてくれたのに――。

星の一つも見つけられない空の下で、一人雨に濡れている自分を想像してみてため息を吐く。自分の救いようのない馬鹿さ加減に、もう笑うしかなかった。

疲れきった体を、雨の雫が流れていく。重くなっていく思考回路が、とりとめもなく記憶の底を掬^{すく}った。

（ここから、おぼさんの病室が見えるんだよ）

昔。まだ母さんが生きていた頃の記憶。おぼろげで、曖昧な夏菜の笑顔がかすかにまだ残っていた。

（帰る時、いつも窓際に立って、おぼさんが手を振ってくれるの。私、それがすごく嬉しくて）

「……」

そういえば、母さんの病気が悪化して、面会ができなくなってからも、夏菜は母さんの病室が見える場所にいつも佇んでいた。落ち

込んだりした時は、いつもそこで、母さんの病室を見上げていた。まるで、今にも窓際に立って、母さんが手を振ってくれることを信じているみたいに。でも、母さんがそれから夏菜に手を振ることはなかった。

母さんが死んでから、夏菜はピタリと病院に通うことを止めた。いつまでも、そこにいたら、母さんが安心できないから。そう言うて――。

心当たりは、もうそこしかなかった。でも、もし、夏菜が行く当てもなく足を運ぶとしたら、そこしかないような気がした。

徐々に雨は雨脚を弱めていた。

俺は病院に向かって駆け出した。

隣町にある総合病院に辿り着いた頃には、俺の体力はすっかり空ケツになっていた。時刻はすでに九時を回っていた。今頃、紗枝さんもまだ夏菜を必死になって探しているだろう。とにかく、ここに夏菜がいなければ、一旦家に戻って紗枝さんと合流するつもりだった。

それにしても、これだけ走り回ったのは一体いつ以来だろう。自分の体力を顧ずに一駅分の距離を走りきることが暴挙だったことに気付いたのは、駆け出して五分後だった。これだけやったのだから、

ここに夏菜がいてくれなければ割りに合わない、などくだらないことを考えながら、とりあえず、病院の公園に入った。

道の脇に等間隔に立っている外灯が、仄かに遊歩道を照らしていた。時間が時間だけに人の姿は見当たらない。夜の公園がここまで侘しいことを初めて知って、なんだか、本当にここに夏菜がいるような気がした。そして、その予感ば遊歩道の脇に備えられたベンチにぼつんと一人で座っている夏菜を見つけて、ため息に変わる。

まるで、その風景は世界の終わりを暗示している、という例えはオーバーだったけど、雨上がりの夜の公園に、一人でベンチに座っているその姿は、遠目から見てもオーバーなぐらい陰鬱だった。

とにかく、無事に夏菜を見つけられた安心感が先行して、俺は夏菜の下へ歩み寄った。

不安とか、嫉妬とか、今まで窮屈な気持ちばかりに囚われていた。夏菜といると、そんな気持ちにはかりさせられたけど、今みたいに心からほっとできる瞬間だってあった。そして、その瞬間を、今の気持ちを俺は何よりも大切にしたかった。

ベンチに座ったまま、俯き加減に身じろぎもせず足元をじっと見つめている夏菜は、目の前に立つても俺に気付かなかった。俺はかける言葉に困りながら、とりあえず、ぽりぽりと頭を掻きながらとりとめもなく声を出す。

「あー、なんだ」

俺の声に、夏菜がビクつと肩を震わせてから顔を上げた。弾けた様に顔を上げた夏菜は、俺と目が合うと、目を見開いた。かすかに開けた唇が震えて、途端に夏菜は表情を崩して何も言わずに俺から目を逸らした。そんな夏菜になんて声をかければいいのか、やつぱり俺には分からなかった。一人だけ、わだかまりの解けている自分なんだから卑怯な気がした。でも、だから、俺は素直な気持ちを伝えなければいけなかった。

「……雨。すっかり、上がったな」

無言のまま俯く夏菜の隣に腰掛けて、そっと夏菜の横顔に目を移

す。泣きそうな夏菜の横顔が俺の胸を少しだけ痛めた。ここまで、夏菜を追い詰めた原因は他ならない俺だった。

「金田先輩から、お前に渡しといってくれて言われて届けに来た。これ」

そう言つて、俺はポケットから五百円玉を取り出して手の平に乗せた。手の平に乗った五百円玉を見て、夏菜は「これ……」と声を漏らして、俺をじっと見つめた。

「それと、あんまり気にするなつて言つてた。つーか、勝手にいなくなつたりすんなよ。ケータイも繋がんねーし。心配するだろ、馬鹿」

「ごめん」と呟いて俺から目を逸らす夏菜に、俺は「いや、つーか、俺の方こそ、ごめん」と言葉を返して、五百円玉を手の中で握った。「金田先輩に全部聞いたんだ。俺、お前のこと誤解してた。つてか、お前の気持ちもちゃんと聞かずに一方的に俺の気持ちだけ押し付けて、挙句の果てに、ひでえことしちまった。最低の告白だったよな、あれ……ごめんな」

俺の言葉に、夏菜は「純は……」と声を漏らした。

「純は……なんにも悪くないよ」

「夏菜……」

「罰が当たったんだよ。自分に好意を寄せてくれる人を利用して、純の気を引こうとなんてしたから……。こんなの、当然の報いなんだよ……」

夏菜の声は弱弱しく震えて、細い肩が頼りなく揺れた。あの時、屋上で泣きそうだった夏菜を前にして、どうしてやればいいかわからず、ただ見守ることしか出来なかった。でも、今は違う。今は、ただ素直な気持ちを伝えるだけでよかった。あの時と、今と、俺たちは何か変わったのだろうか。少なくとも、あの時感じていたわけの分からない衝動は、今ちゃんと明確な形になって、俺の中に根付いていた。

「俺さ、お前が金田先輩と付き合つてるって聞かされてから、なん

か落ち着かなかったんだよな」

そう言つて、俺は空を見上げた。真つ暗な空を、傍で外灯の明かりが仄かに照らしていた。そこには星一つ見つけられなかったけど、雨の匂いを含んだ空気はどこか気持ちよかった。

「お前と金田先輩が一緒にいるとこ見ただけで無性にいらついたりしてさ。でも、お前とは付き合い長かったし、それはきつと恋愛感情とは違うものだと思つてた。なんつーか、娘を嫁に送り出す父親の心境、つーのかな。そんな心境知りもしねーくせにな。そんな風にして自分を納得させようとしてたんだ。怖かったから。お前との関係が壊れんのが。好きだつてこと認めたら、もう今までみたいに仲のいい幼馴染じゃいられないことも分かつてたしさ」

「……」

「でも、やっぱり気持ちは抑えられなくて、それでも、お前には金田先輩がいたから、気持ちは伝えられなかった。快くお前らのこと応援しようと思つた。けど、やっぱりうまくいなくて、お前と喧嘩したりもした。徐々に、今まで通りいなくなつてきてて、でも、お前を傷つけるぐらいなら、今まで通りお前のこと一番に考えて友達でいようつて思つた。でも、やっぱり、それもうまくいなくて、お前と金田先輩の関係が苦しくて、気持ちを抑えることができなかった。」

麗美から、聞いたんだ。お前が俺の気持ちを確認するために金田先輩と付き合つてるんだつてこと。でも、お前はいい加減な気持ちで人と付き合うようなことができる奴じゃなかったし、お前は金田先輩のことが好きなんだと思つてた。だから、俺に何かを求めてくるお前の気持ちが多分なかった。分からなくて、苦しくて……お前のこと傷つけることしかできなかった」

俺の言葉を黙って聞いていた夏菜は、もう一度「ごめんね」と呟いてから、俺に目を留めた。

「私、知らないうちに、純のことすごく傷つけてたんだね……」

「でも、それと同じぐらい、俺も夏菜のこと傷つけてるし。何より、

もう俺の中でわだかまりは解けてるんだ。金田先輩から話聞いてさ。お前らしいなって思ったんだ。

お前は自分に好意を寄せてくれる人を利用したって言ってたけど、金田先輩はそんな風には思っちゃいない。あの人は本気でお前のことと落とそうとしてたし。お前だってさ、それだけ俺のこと一生懸命想ってくれてたってことだろ？」

「え……」

「賭け事なんて、てんでお前の柄じゃねえし。でも、柄じゃないことまでして、一生懸命俺のこと振り向かせようとしてくれたじゃん。きっと、お前のその思いが神様に届いたんじゃない？ だから、なんつーか、そうだ。これは、罰じゃなくて、一生懸命頑張ったお前への神様のご褒美なんだよ。」

—— きっと、俺がお前のこと好きになったのは」

俺のその言葉に、夏菜は目を丸くして俺を見つめた。そして、そんな予想通りの夏菜のリアクションに、俺は今更ながらこっ恥ずかしさで死にそうになり、高速で頭をぼりぼり掻いた。

「やべえ。キザなこと言ってる自分が超ハズいんですけど……。つか、この通り俺だって、柄にもないことしてお前のこと元気付けてんだからな。いい加減、いつまでも塞ぎ込んでんなよな」

「……うん。そだね」

そう言って微笑む夏菜の笑顔が仄かな明かりの中で浮かんだ。その笑顔に思わず見惚れたのは、きっと、夏菜の笑顔を見るのが久しぶりだったからだと思う。

「……なに？」

じつと夏菜の顔に見入っていると、夏菜が不思議そうに声を出してきた。俺は慌てて夏菜から顔を逸らして「い、いや、何でもねえよ」と声を返した。

少しの間俺たちの間に静寂が流れた。その心地のいい静けさの中に身を委ねた後に、俺は意を決して夏菜に顔を向けた。

「なあ、夏菜。今更な気もするけど、聞いていいか？」

「え？」

「——お前……俺のことどう思ってたんの？」

俺の言葉に、夏菜はすぐに俺から目を逸らした。その夏菜の仕草に、俺は途端に途方もない不安に襲われた。まだ、俺は一度も夏菜の口からはつきりした気持ちを聞いてはいなかった。

俺から目を逸らしたまま、しばらく夏菜は何も言わなかった。予想もしていなかった失恋の予感が、俺の背筋を冷や汗として伝った。必死に探して、延々と気持ちを連ねて、キザな台詞で元気付けた後に振られてもしたら、それこそ、今後俺は絶望の淵から這い上がることはできないだろう。

さつきとは打って変わった気まずい沈黙が、全力で俺を追い詰めていた。やがて、まるで駄目押しをするがごとく、夏菜の思いつめたような声が、沈黙を破った。

「ずるいよ、純……」

「か、夏菜……？」

夏菜の言葉の意味を汲み取れず、ただ俺は夏菜をうかがうことしかできなかった。そんな俺に視線を這わせて、夏菜はむくれた顔をして声を出した。

「私の気持ちは五年越したもん。そんな簡単に言葉にできないよ……」

「あ……いや、ごめ——」

「なんてね。嘘」

そう言って、夏菜は笑った。

「好きだよ、純」

「え……」

「私、純のことが好き。今まで、ずっと伝えたかった」

そう言っただけに、かんで笑う夏菜は、多分、俺が今まで見てきた中で一番可愛かった。恋愛感情がもたらす相乗効果に過ぎなかったにしても、その愛しさはきつと偽りじゃない。

気がつくと、夏菜のことをぎゅっと抱き締めていた。耳元で夏菜

が戸惑ったように俺を呼んだ。それから、我に返った俺は、手の中にある夏菜の小さくて柔らかい感触と温もりに、急に恥ずかしくな
つてから、身動きが取れないまま声を出した。

「え、えーと……わりい。なんか、思わず。い、嫌だったら、今すぐ離れるけど——」

俺の言葉に、夏菜はクスツと笑った。

「ばーか。嫌なわけないじゃん」

「じ、じゃあ、もう少しこのまま……」

「うん……」

「ねえ、純。純に話したいことがたくさんあるの」

「うん」

「なんで純を好きになったのかは分からないんだけど、気がついたら好きになってたってこと。いつから、どれぐらい、私の気持ち全部知って欲しい」

「とりあえず、紗枝さんが車で迎えに来てくれるって。その間だけでいいなら」

「駄目。長い話になりそうなの」

「えつと。じゃあ、話しきれなかったら明日聞くから」

「うん。じゃ、まずはこれだけ知っててね」

「なに？」

「——今この瞬間を、私が夢見てたってこと」

49・恋の行方（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございました。書きたいことをほとんど詰め込めないまま、とりあえず二人の恋の結末までにこぎつけられ、ホッとしている反面、自分の力量のなさに肩を落としています。

そもそも、毎日更新が無謀でした。やってみて後悔しつつ、やり始めたからには止められないと勝手に一人で気張っていました。

なんとなく、不器用な幼馴染二人の恋愛ものを書きたくなり、読みやすいようにラブコメにしてみようと思ったのですが、そもそも書き出して初めて自分がラブコメなど書けないことに気付き、ほとんどコメディ要素のない恋愛ものになってました。

もちろん、この話は現時点でハッピーエンドではなくハッピースタートなので、まだまだ続くのですが、集中力と根気が最後まで持ちそうになかったので、一旦ここで完結にさせてもらいました。

純と夏菜の関係のその後の行く末は大体浮かんでいるのですが、まだプロットの段階で一文字も文字にできてません。

本編では、神木恵美と純の関係も中途半端なままで、神木沙里など、伏線張ったくせにまったく活かせなかった体たらく。おまけに、南結華も最後はなぜか純を応援してるし、純と夏菜をくっつけようとしたら自分の思い描いてる話と全くかけ離れたものになってしまい、かなり落ち込んでます……。

でも、数少ない評価をしてくれた方々のコメントを励みにここまで

書き続けることができました。もし、続きが読んでみたいなーと思
つてくれる方の声が少しでもあつたら、また懲りもせず頑張つて続
きを書こうと思つてます。

では、ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます
た。少しでも暇つぶしにでもなつたなら幸いです。

50・そんな、昨日の幸福が嘘のような憂鬱な朝（前書き）

続編です。更新は不定期になりますが読んでくだされば幸いです。

50・そんな、昨日の幸福が嘘のような憂鬱な朝

「純……。私、純のことが好きなの……。だから、ね？」

「か、夏菜……」

記憶の前後がない。なにがどうなっているのだろう。気がついたら自分の部屋にいて、目の前には俺のベッドの上に腰掛けた夏菜が、潤んだ瞳で俺を見つめていた。

「純になら……。いいよ」

状況が把握できない俺をよそに、夏菜は俺を見つめたまま、身に着けたブラウスの胸のボタンをおもむろに外しだした。はだけたブラウスの間から、夏菜の胸を覆う薄ピンク色のブラジャーが顔を出した。

泡雪のように、繊細で真っ白な夏菜の素肌が、あられもなく俺を誘っていた。体中の血液が高速で走り出し、心臓が悲鳴を上げる。緊張のあまり、頭皮までがチリチリと反応して、頭の中はとろけそうなほど熱かった。

細くて、小さくて、頼りなくて、それでも途方もなく綺麗な夏菜の体に、俺は見惚れることしかできなかった。

夏菜がベッドから離れて、俺の前に膝を着いた。肩からブラウスがずれ落ちて、夏菜はゆっくりとブラウスを脱ぎ捨てた。そっと、俺の頬に手を添えて、夏菜は何も言わずに俺を見つめた。俺は、恥ずかしさで死にそうになりながら、夏菜から目を逸らした。意図したわけでもないのに、目は夏菜の胸元をなぞっていた。素肌の上をなぞるレースの生地のかめ細やかさに、眩暈を覚える。視線を上げると、艶やかに微笑む夏菜と目が合った。

その瞬間、俺の中でかすかに残っていた理性は音もなく溶けて消えた。夏菜の肩を抱いてベッドの上に押し倒す。かつてないほど心臓が早鐘を打って、欲望の渦が俺の中で渦巻いていた。際限なく膨らみ続けるその中心に立っているのは、胸が焦がれるほどの、夏菜

への愛しさだった。

「ほんとに……いいのか」

何とかのどの奥から搾り出した声は、確認の意味ではなくて、合図だった。もう、止まらないことは自分でも分かっていた。そして、夏菜は静かに目を閉じて、俺を受け入れる準備を整える。

夏菜の上に馬乗りになったまま、俺は少しの間夏菜を見つめた。静かな寝顔を思わせる穏やかな夏菜の表情の中で、ほんのりと赤らんでいる頬を愛でるようにそっと触れてみる。思ったより温かい夏菜の体温に戸惑って、俺は夏菜の頬に当てた手を離せなかった。

夏菜から香ってくる心地のいい芳香が、俺の鼻腔をくすぐった。そのあまりにも甘い甘美な誘いは、俺の意識を眩ませて、俺を躊躇させる。

それは、あまりにも綺麗に完成されたケーキに手をつけるのがもったいなくて、ただ眺めることしか出来ないような感覚に似ていた。幼い頃感じた、手をつけた時の少しの罪悪感と、心を満たした満足感が、俺の心をくすぐった。そっと夏菜の頬を撫でると、くすぐったそうに眉をピクンと動かして、静かに夏菜が目を開けた。

熱っぽい夏菜の瞳には、俺の顔しか映っていなかった。夏菜の視線と俺の視線が交わって一つになる。どれぐらい、見つめ合ったのか分からないほど感覚は曖昧なのに、はつきりとした愛しさだけは胸の中で膨らみ続ける。

やがて、夏菜が急かすように両腕を俺の首に回した。くすぐったい感触が俺を後押しする。夏菜が目を閉じる。俺はそっと夏菜の唇に唇を――重ねようとして、動きを止めた。

気のせいかな、俺の首に回した夏菜の腕が急に冷たくなったような気がした。おまけに、柔らかかった夏菜の体の感触が妙に硬くなった。その違和感に、俺は閉じていた目をそろりと開けてみた。すると、目の前には、なぜか夏菜の姿はなく――。

「……！」

「うふ。お久しぶりね、ダーリン（ハート）」

モンスター
——女心がいた。

「出たあああああああつあああ！」

突然の出来事に、俺は混乱を通り越して、パニックになりながらも、防衛本能が先に立ち、すかさずモンスターから離れて、部屋から逃げ出した。しかし、部屋のドアを開けると、当然のようにドアの向こう側には見たことのある草原が広がっていた。その瞬間、俺はここが夢の世界であったことを確信した。

「くっそおおお！ 夢オチかよ、ふざけんな、チクショー！」

「おっほほほほほ！ ざーんねんねえ。もう少しでダーリンとチユーできたのにい！」

例によつて、モンスターは俺を追いかけながら、身の毛のよだつ台詞を口にする。俺は、地面に唾を吐いて、全力疾走しながら、後ろを振り返り言つてやつた。

「てめえみてえなモンスターが夏菜に化けてんじゃねえ！ 俺の女神が汚れんだよ、この醜いゴミクズがつ！」

つてか、今後夢に夏菜が出てくる度にいちいちビクビクしなきゃなんねーのかよ！？ なんて、心の中で舌打ちしていると、モンスターが「な……なあんですつてえええ！」と俺の言葉に激昂して、スピードを上げてきた。

「う、うわ！ 化けもんかてめえ！」

つて、見りゃ分かるけどな。

「だああれがゴミクズだ、ごるううらああああん！？」

「ひ、ひええ！」

一瞬で10メートル程あつた距離を潰して、俺の顔の目の前に自分の顔（女）を寄せて、睨んでくるモンスターに、俺は情けなくも悲鳴を上げてしまった。そして、恐ろしさのあまり顔を逸らせず、器用に後ろを向いたまま走っていると、不意に、地面の感触がなくなった。そして、その違和感に「え？」と声を漏らして下を見ると、そこに地面はなくて。

「ぎゃあああああああああ！」

底の見えない深い谷底に真っ逆さまに落っこちた。

「……なんつー夢だよ」

夢から醒め、上半身をベッドから起こした俺は、寝起きから憂鬱に苛まれ、頭を抱えた。夢にしてはあまりにもリアルなそれに、寝汗が冷たくなっていた。俺は、心底深く息を吐き出してから、布団の上にまた倒れこんだ。

すっかり醒めてしまった眠気の後に残された、生々しい感触。最後のオチでケチがついたものの、夢の中で感じた夏菜の温もりと感触はまだ、俺の手の中に残っていた。

……興奮と愛しさも――。

「――って、あれって、女心が化けてただけじゃん……」

たかが、夢。されど、夢。誰も求めていないのに、勝手にバリエーションに富んでいく悪夢は、もしかしたら、何か悪い病気からくるものではないのだろうか。そのうち、夢と現実の区別がつかなくなったり――なんて、本気で疑ってしまうほど、夢の中で感じた感情と感触が鮮明に残っていた。というか――。

「昨日のことは、まさか、夢じゃないよな……？」

（私、純のことが好き。今まで、ずっと伝えたかった）

（――今この瞬間を、私が夢見てたってこと）

昨日の夢のような出来事が、本当に夢でしたじゃ洒落にならない。しかし、俺は果たして本当に夏菜に告白したのだろうか。そして、本当に夏菜は俺を好きだといってくれたのだろうか。いや、夏菜もこの瞬間を夢見てたって、いや……え？ 夢？ 夢なの？ 嘘でしょ？

いやいやいやいや、ないないないない。冷静に、冷静になれ、俺。だって、ほら。あの子のこともちゃんと憶えてるもの。

（——今この瞬間を、私が夢見てたってこと）

そう言った後に、すぐに眠りについた夏菜は、相当疲れが溜まっていたのだらう。自分の気持ちを聞いて欲しいと言っていたのに、そのまま俺に寄り添って眠ってしまった。そんな夏菜に苦笑したことも、紗枝さんが迎えに来てくれるまでの幸福感も、何もかも憶えている。

あの時の夏菜のかわゆい寝顔も…… って、は！ お、俺は別に夏菜が寝てるうちに如何わしいことをしようなどとは微塵も思っていないぞ！ き、キスぐらいいいんじゃない？ なんて愚劣なことなどもちろんこれっぽっちも！ なに言ってたんだよ、あの夢てめえの妄想そのものだろうが、なんてもっともなツツコミは勘弁してください…… って、誰に謝ってたんだ、俺。

と、とにかく、昨日のことは決して夢なんかじゃねえ！ ……はずだ。うん。多分……。

——そんな、昨日の幸福が嘘のような憂鬱な朝……。

「はあ……」

51・両想いのチカラ

さて。昨日の出来事が夢か否かは、夏菜と会ってみれば白黒はつきりすると思い至り、只今、潔く夏菜の家の門扉の前に立っているところだ。……かれこれ、五分。

小鳥のさえずりが心地いい爽やかな朝——とは程遠い雨降りの朝。この曇天は図ったように、そして嫌味なほど俺の心中を表しているようで、腹立たしいったらありやしない。と、まあ、今はそんなことはどうでもいいのだが……。

ケータイをポケットから取り出して、時間を確認する。そろそろ夏菜が出てくる頃だ、と思っていると、いきなりケータイの着信が鳴った。そして、画面に夏菜の名前が表示され、俺は慌てて通話ボタンを押した。

「も、もしもし」

（もしもし。純？）

「お、おう。ど、どした？」

（あ、うん。よかったら、一緒に学校行かないかなって。まだ、家にいる？ 私今から出るとこなんだけど）

「あ……おう。ちょうど、今夏菜の家の前にいる」

（ほんと？　じゃ、今から出るからちょっと待ってて）
「……」

ケータイをポケットにしまいつつ、自然に頬が緩んでいるのが分かる。いやいやいや、これはもう決まりじゃね？　だって、今まで夏菜が朝一緒に学校行こうって電話してきたことなんて——あったよ。何度か。いくら電話しても寝坊ばっかするってんで、呆れてもうしてこなくなっただったな……やはり、まだ黒の可能性が——。

「おはよ、純」

「おわあ！」

いきなり背後から声をかけられた挙句、肩まで叩かれたものだから

ら、俺はびっくり仰天して、差していた傘を投げ出しながら声を上げた。そして、振り返ると、そこには俺のリアクションに目を丸くして立っている夏菜の姿が。

夏菜と目が合った瞬間、極度の緊張が俺の頭の先から足の指先までを痺れさせた。昨日、好きだと言ったばかりの相手が目の前にいる。その緊張は、今朝見た夢が促進剤となって、俺の体中を駆け巡った。

慌てて夏菜から目を逸らした俺は「お、おはよう」とだけ呟いてから、なにを言っているのか分からず、俯いた。自分で顔が赤くなっているのが分かる。夏菜の顔をまともに見ることができない。それでも、このまま黙っているのは夏菜に不審に思われてしまう。

様々な思いが頭の中でぐるぐると回った結果、結局何もできずただ、うなだれていることしか出来なかった。そして、しばらくそうしていると、不意に体を濡らす雨の冷たさがなくなつた。顔を上げると、すぐ目の前に夏菜がいて、差した傘の中に俺を入れてくれた。いた。

「……なんか、変に緊張するね」

そう言つて、はにかむ夏菜をこの場で抱きしめることができればどんなにいいだろう。でも、その衝動を自然に行動に移せるだけの勇気も関係も、まだ俺たちの間には芽生えていない。それが分かっているから、今の俺にははにかんで笑い返すしかなかった。

「……だな」

「でも、おかしい感じ。純と一緒にいて、こんな風に緊張することってなかったから」

「なんだ。夏菜も俺と同じ気持ちなんだな」

俺がそう言つと、夏菜はおかしそうに笑ってから、言った。

「すごいね。両想いのチカラ」

「え？」

「だって、今私たち同じこと考えてたんですよ。それって、すごいと思わない？」

そんな恥ずかしい言葉を口にできるのも、頷いて返すことができるのも、きっとそれは両想いのチカラなのだろう。俺が頷いてみせると、夏菜は嬉しそうに笑って、その笑顔が俺には何よりも眩しかった。なんて、恥ずかしくてとても言えないけど。

「じ、じゃあ、そろそろいこうぜ。ぐずぐずしてたら、遅刻するし」
照れ隠しにそう言って、俺は足元に転がった傘を拾った。そして、夏菜の傘の中から逃げるように抜け出そうとする俺の制服の袖を引っ張って、夏菜はそつと声を出した。

「一緒に歩くのに、傘が二つもあるのって邪魔だと思っんですけど」
夏菜のその言葉に、俺は身動きが取れず、ただ顔面から火が出そうになるのを必死にこらえることしかできなかった。

しとしと静かに降り続く雨の音が、俺の中で落ち着きを取り戻した頃に、俺は言葉を返した。自分でも、呆れるぐらいぎこちない声が出ているのが分かる。

「そ、そつ——かな……？」

「う、うん。そうじゃ——ない？」

「いや……そうかも」

「そう？」

「うん。そう」

「じゃあ……」

「お、お言葉に甘えまして——」

拾った傘を畳んで右手に、夏菜の傘を左手に持って、俺たちは一緒に門扉をくぐった。

「あ、純。傘……私が持つ」

「え？ いや、いいよ」

「いいの。いいから貸して」

「お、おい……」

強引に俺の手から傘を奪い取った夏菜は、わざわざ左手に傘を持った。俺は道の道路側を歩いて、夏菜は俺の左隣を歩いている。なのに、どうしてわざわざ夏菜は左手で傘を支えているのだろうと不

審に思っていると、夏菜は横目で俺を見てから「鈍感」と呟いた。

「え……な、なにが？」

「もう。こういうことだよ」

そう言っつて、夏菜は空いた右手で、俺の左手をきゅっと握った。

「あ……」

「そんな調子で、ずっと私の気持ちに気付いてくれなかったのよね、純は」

「……わ、わりい」

事実なので返す言葉もない……。

「じゃ、覚悟しといてね」

「え、か、覚悟？」

「そう。昨日言ったでしょ？ 私の気持ちは五年越したよ」

「あ……お、おう。任せとけ」

俺の返事に、夏菜はくすつと笑って、俺の手を少しだけ強く握り直した。

「あ、夏菜。俺考えたんだけどさ」

「うん。なに？」

「俺たちが付き合ってること、学校ではしばらく秘密にしていた方がいいと思うんだ。ほら、金田先輩のことがあるし」

「そつか……。金田先輩に悪いもんね」

「まあ、それもあるけど、周りはお前と金田先輩が付き合ってるって思ってたろ？ だから、今までしてたことしなくなったら、すぐ別れたって噂になるだろうし、そうなった時に、俺と付き合ってることがばれたら、気まずいだろ？ 時期が近いだけに二股かけてたとか根も葉もないこと言われるかもしれないしさ」

「純……そこまで考えてくれてたの」

「まあな。とりあえず、お前のこと一番に考えてるから」

「とりあえず？」

「いや、照れ隠し」

「なら、よろしい」

「まあ、そういうわけだから、相合傘も手をつなぐのも、極力しない方がいいと思うわけだけど……」

「うん。じゃあ、もう少しだけね」

「うん。じゃあ……もう少しだけ」

初めての夏菜との相合傘の味は、俺の憂鬱なんてアッサリ取り払ってくれた。そして、今更だけど、昨日の出来事が夢じゃなかったんだと実感しているこの瞬間に、俺は幸福をかみ締めている。

きつと、幸福なんて人それぞれで、俺の幸福は手に収まるほどのものでしかなかった。そんなささやかな幸福で満足している俺は、慎ましやかな人間だろうか。

少しでも強く夏菜の手を握ってみると、夏菜もそれに応えるようにきゅっと俺の手を握り返してきた。

今、確かに俺の手の中には、小さな幸福が握られていた。

52・独りよがり

人の噂なんてとかくあつという間に広まるものだ。世間では、芸能人という人種の誰これが誰これと密会していたというだけでニュースに流れ、大々的に全国を駆け巡る。

恋愛。スキャンダル。人間の好奇心を満たすに、それ以上の格好の獲物はない。ある者は影で笑い、ある者は影で泣き、ある者は陰口を叩き、ある者は噂の根源に群がりたがる。

何も全国レベルで見る必要はない。しかし、学校など、所詮そこら中に広がっている社会を全て足して、適当なところで割ったような場所であり、なにが言いたいのかといえば、大げさに一言で片付けて、そこは小さな社会ということだ。さらになにが言いたいのかというと、学校は世間と同じで噂が広まりやすい。さらになにが言いたいのかといえば、もう、夏菜と金田先輩が別れたって噂が学校中に蔓延してることだ。

昼休み。クラスメイトから、他のクラスの男子、最終的には上級生や下級生までがとつかえひつかえ夏菜の周りに集まっていた。そうになると、一緒に弁当など食べる隙もないわけで、自分の恋人が見ず知らずの男に言い寄られているのを黙って眺めながら食べる弁当がうまいわけもない。もつとも、夏菜から渡された弁当の中身は、見るからに夏菜の手作りで、元々箸は進まなかったのは事実だ。

……いや、違う。美味い不味いなんて関係なくて、夏菜の手作り弁当に感動している自分がいる。そして、ただ単にお世辞とかそういうのも関係なくて、それを作ってくれた夏菜に「美味い」と伝えてみたただけだ。なのに、そんなこともできない自分にいらついている。知らない男に愛想笑いを振りまいている夏菜にいらついている。

彼氏だと言い出せないのは、そうすると、夏菜が辛い目に遭うかもしれないからだ。でも、改めて男子連中に囲まれている夏菜を目

の当たりにして、俺なんかが夏菜の隣にいるのは大それたことなんじゃないのかと思った。

そう思うと、急に自分が夏菜の彼氏だと言い出せないのが、辛くなった。

朝の相合傘。夏菜の手の温もり。授業中に何度も目が合つて、クスクス笑い合つたこと。そつと夏菜に気付かれないように夏菜の横顔を盗み見たこと。全てのことに舞い上がって、思い込んでいた。俺たちは、誰も立ち入れない二人だけの世界を共有してる。

そんな独りよがりの陳腐な世界は、突きつけられた現実に押しつぶされた。今、俺の手の中に朝感じた温もりなんて微塵もない。夏菜は知らない男連中と話し込んでいる。それが現実。

俺にできる唯一の抵抗は、そんな現実を視界から消すことだけだった。虚しさは変わらなかつたけど、教室を出ると、少しだけ気は楽になった。

「こんなところでなにやってるの」

その声を聞いた途端、安心と不安の同居したような、複雑な気分が俺の胸の中に広がった。気持ちが通じ合えば、こんな気持ちになんてなることはない。つい五分前まで、本気でそんなことを信じてた自分に嫌気がさした。

教室から程なく離れた階段の踊り場。一人不貞腐れてそんなところに寄りかかっているのは、追って来てくださいと言っているようなものだ。しかし、これで夏菜が追ってきつてくれなかったら、確かに俺は今頃絶望してる。と言っても、夏菜が来てくれたからと言って、格好の悪いことに変わりはない。

返事を返さない俺に息を吐いて、夏菜は階段の壁に寄りかかっている俺の隣に来て、同じように壁に寄りかかった。そんな夏菜の横顔を覗き見ても、気持ちなんて読み取れるわけもない。多分、今一番いらっているのは、たったあれだけのことで不安になっている、今の自分なのだろう。

「……いいんですか。こんなところ誰かに見られたらまた噂になりますよ」

「ばーか」

俺の子供染みた台詞を馬鹿呼ばわりして、夏菜はつんと俺に見向きもせずに不機嫌そうに声を出した。

「私たちのこと。秘密にしようって最初に言い出したのはどこの誰でしたっけ」

「別にばらしてませんけど、なにか問題ありますか」

俺の言葉に夏菜はあ、と深くため息を吐いた。

「なら、言っけど。自分だけ我慢してるって顔しないでよ」

「え……」

「私だって、堂々と彼氏がいるってみんなに言いたい。でも、私のこと考えて純が秘密にしようって言うてくれたんでしょ。私は、純の気持ちが嬉しかったから我慢してるんだよ。」

だから、自分だけ我慢してるなんて顔しないで」
夏菜の言葉は、俺がいかにか子供じみているのかを悟らせるには十分すぎる威力を兼ね備えていた。でも、もちろん、はいそうですかと納得する気にはなれなかった。謝っても謝らなくても、俺が子供であることにさして変わりはないのだけだ。

俺たちの前を、何人かの生徒がおしゃべりをしながら通り過ぎて

いった。俺はその間に謝るきっかけを探してみたけど、夏菜はこっちに見向きもしてくれなかった。

「そろそろ教室に戻るか」

諦めて、そう言った俺の手を夏菜がそっと握った。その感触に、

俺は驚いて夏菜に向き直った。

「なんとなくね」

そう呟いて、夏菜は横目で俺を見た。

「不安とか、心配とか、こうして手をつなげば安心に変わるところから」

「え……」

「素直に謝れない時とかね。言葉にうまくできない気持ちは、こうやってくれれば、ちゃんと私に伝わるから」

そう言って、夏菜は照れくさそうに俺から目を逸らした。

「ほんとは、純がヤキモチ焼いてくれて、少し嬉しかったし」

「あ、そ、そっか……」

独りよがりの陳腐な世界。さっきまでそんな風に思っていたくせに、この現実がもう嬉しくてたまらないのは、夏菜が隣にいてくれるからなのだろう。

結局、階段の踊り場は人通りが多くてすぐにつないだ手は離れたけど。確かに夏菜の手の温もりは、俺の不安を安心に変えてくれた。

53・おままごと

「つーか、馬鹿か、お前。いつまでおままごとやってるんだっつの」

「お、おままごと?」

「いや、最近のガキはおままごとでもチューぐらいはすんじゃない? だってことは、手をつないだだけで満足してるお前は、おままごと以下。そこら辺のガキにも劣るカスだ」

「お前、もしかして、喧嘩売ってんのか?」

「事実を述べただけだろ。文句あんなら、夏菜とキスしろ」

さて。大樹との冷戦状態も終結し、本日放課後、とりあえず大樹には夏菜と付き合うことになった旨を報告。こと恋愛においてはスペシャリスト（悪い意味で）なこいつに、恋の相談にでも乗ってもらおうと、放課後、誰もいない教室に大樹を引つ張り込んだのはいいのだが。

馬鹿呼ばわりした上に、おままごと以下。なぜ、そこまで言われなければならないのか。

彼氏って具体的になにすればいいんだ? そんな素朴で深刻な疑問を持ちかけた直後から、大樹は心底呆れている様子だった。いや、だって、ほんとに分かんないんだもん。

「いいか、純」

窓に寄りかかりつつ、ため息を一つ吐き、腕組みをして見せる大樹。何かっこつけてんだお前、と思わずツッコみそうになるのをぐっとこらえて、俺は恋愛の神（自称）のお告げをありがたく賜った。「付き合い始めてのは、どのカップルも盛り上がるもんだ。でも、その盛り上がりつつのは一ヶ月をピークに盛り下がる。いわゆる、恋の第一関門ってやつだ。いつまでも、二人だけの世界に浸ってられると思うな」

「……」

そういうお前は、自分の世界に浸ってね？ 恋の第一関門って…
…ぷい。

おっと。薄ら笑いを浮かべたら大樹が睨んできたので、真面目な面を作っておこうか。

「まあ、浮かれてる今のお前にこんなこと言っても無駄かもしれないが？ 付き合って一ヶ月以内に手を握る以上のことができなかった八割以上のカップルは、ことごとく二ヶ月以内に別れてるってことだけは知っておけ」

「どこから取った統計だ、それは」

「信じる信じないはお前の自由だ。が、彼氏の役割も知らないカナヅチなお前がそのまま恋愛という荒波に放り込まれた今の状況に、もっと危機感を抱くべきだな。両想いだからって、全てがうまくいくななんて思っなよ？」

「え……」

「女ってやつは基本クソ面倒くせえ生き物なんだぜ。誕生日、クリスマス、果ては付き合いだした日まで記念日に変えて、一緒に祝いたがる。他の女とちよつと話ただけでヤキモチなんて当たり前、とにかく、自分が一番じゃねえと納得しねえ。そのくせ、大概の女は潔癖ときてる」

大樹の言葉に、俺はゴクリと息を呑んでから「し、しかし」と反論を試みた。

「それが付き合っつてことなんじゃね？」

「いかにも、恋愛のれの字も知らないガキの台詞だね、純君」

「……」

「潔癖な女。これが、もつとも厄介な生き物だ。そして、これだけは憶えとけ、純。夏菜なんて、おもくそ潔癖女の典型だぜ。ああいう真面目な女ってのは、こと恋愛においてもクソ真面目なもんだからな。勢いだけで迫ろうものなら、次の日には確実にフラれてるぜ」

「いや、それは相手が潔癖以前の問題じゃね？」

「それが男の台詞か純！ 彼女ができれば、その日にでもやりたい

つてのが男の性さがだろうがっ！」

「そんなケダモノの部類に俺を巻き込むんじゃねえ」

白い目をしてそう言っでやると、握り拳を作っで叫んでいた大樹は、大仰にため息を吐いた。

「そうか。なら、お前はそのまま夏菜とお手手つないでまますとしてろ。二ヶ月後にまた失恋の相談に乗っでやるから」

そう言っで教室を出て行こうとする大樹の肩を、俺は背後からむんずと掴んで引き止めた。

「待て。このまま俺を見捨てるん？」

「それが嫌なら、今一度自分を見つめ直せ」

「お、おう……」

「いいか、純。これまでのお前の話を聞いている限り、お前は絶好のチャンスを経験となく逃しているんだ。ってか、好きだっで言われた時に、キスの一つもしねえ時点でお前のお先は真っ暗だと決まった」

「い、いや、でも——」

「でも？」

ピクンと方眉を吊り上げる大樹に、俺は物怖じしながらも反論した。

「一度、夏菜のことを抱きしめた」

「だから、そこまでしてなんでキスの一つもしねえんだっで話だ、この馬鹿」

「す、すいません……」

「潔癖女は好きだからって、なかなか体を許しちゃくれねえぞ。告白の際にキスもできなかったお前は、千載一遇のチャンスを逃したとも言えるな。一度しちまえば、こっちのもんだっでたんだが……」

「も、もう、手遅れと？」

「いや、まだ手はある。が、そのためにはお前も覚悟を決めなきゃならん」

「か、覚悟？」

大樹の言葉に俺はごくりと息を呑んだ。そして、そんな俺を見て、

大樹は厳かな表情で頷いて見せてから、重い口を開いた。

「今日中に夏菜とキスできなきゃ、お前と夏菜はままごとのままで終わる。まずはその事実を受け入れろ」

「え……！」

「ふ……案ずるな純。そうならないように、これから俺が秘策をお前に授けてやる」

そう言っ
て恋愛の神（自称）は不敵に微笑んだ。

54・涙の理由

恋愛の神のありがたいお告げを胸に留め、俺は教室を出た。

大樹と別れてから、夏菜を待ったため適当に校舎をぶらつく。その間に頭はいい感じに冷えてきて、大樹の言葉をそっくりそのまま信用するのは危険だと思い至った。そもそも、あいつは確かに女の扱いには慣れているのかもしれないが、あれは悪い見本みたいなものだ。つまり、そんなことに気付かないほど、俺は動揺していたということだ。

しかし、大樹の言葉にも一理あるところはあった。

今までに、夏菜とキスをしようと思えばできた気がする。でも、そうしなかったのは、その勇気がなかったからだ。そこまで求めてしまつて夏菜に嫌われてしまうのが怖かった。大樹の言うとおり、夏菜は真面目だから、恋愛に対してもそうだと思う。そういうのは段階を踏んでいってから自然に進展していくものだろう。でも、もっと、夏菜に近付いてみたかった。もっと夏菜を知りたい。その気持ちにブレーキをかけているのは、夏菜に嫌われるのが怖いというただの恐怖心だけだった。

両思いになつたら、こんな悩みなんてないと思っていた。ただそこには好きな人がいて、それだけで満足できると思っていた。でも、夏菜を好きになる気持ちが加速するにつれて、不安も大きくなっていく。失うことが怖くなる。

大事な人が目の前からいなくなる。そういうのは、もうたくさんだった。

「……って、暗っ」

ネガティブ思考にどっぷりはまっている自分に気付き、一人突っ込みをかます。いや、いや、キスできねえぐらいでなに夏菜がいなくなるのか想像してんだ。どんだけネガティブだよ、俺。たかがキスだろ。

「そつだよ、たかがキス……—されど、キス」

「……先輩？」

「わああ！」

背後から突然響いてきた声に、俺は万歳して悲鳴を上げたただけでは飽き足らず、その場でジャンプして、背後を振り返った。見ると、俺のリアクションに逆に驚いた顔をした南が俺の後ろに立っていた。

「お、おお。み、南か、びっくりした……」

「ど、どうも……」

そりゃ、こっちの台詞だよ。って顔して、しかしもちろんそんなことは口には出さず、苦笑いをする南。

えーと、もしかして今の独り言聞いてたよね？ でも、君はともそんなこと突っ込めるような子じゃないよね、信じるよ？ ってな具合に、堂々とすつとぼけて俺は声を出した。

「えつと……なにしてんだ、こんなところで？ 部活は？」

体操着姿の南を見て、部活中であることを察した俺の言葉に、南はたどたどしく言葉を発した。

「あ……その……今部活の休憩時間で。たまたま先輩見かけたから、その——」

そう言つて、南は気まずそうに顔を伏せた。そして、昨日のことを思い出して、急に俺も照れくさくなった。あんな格好悪いところを見せ、しかも今思えばあんな恥ずかしいことをよくもまあ、平気な顔して言えたもんだ。まあ、あの時はマジへこんでたから仕方ないけど……でも、うん。誰でもよかったわけじゃない。南だったから、あんなこと言えたんだよな。それで、あの時南がいてくれなかったら、きつと今頃俺は失恋という名の泥沼に飲み込まれて、人知れず朽ち果てていたことだろう。命の恩人……とまではいかないが、南は俺の恋のキューピットと言つても過言ではない。おお、天使様、おありがとうござえますだ。

「あ、あの、先輩……？」

思わず跪いてお祈りのポーズに入つた俺を見て、南が戸惑う。無

理もない。だって、素でお礼言うの照れくさいじゃない。

「ああ、すまん、引かないでくれ。今のはありがとうってことで」
「え？」

俺の言葉にきょとんとする南。俺はお祈りポーズを止めて、南の前に立って声を出した。

「昨日俺がへこんでる時、南言ってくれたじゃん。頑張れって。なんつか、すげえ救われたんだ。ありがとな」

「あ……いえ。先輩が元氣そうでよかったです。氣になってたから」
「心配かけて悪かったな。でも、もう大丈夫だから。南のおかげで自分の気持ちに向き合うこともできたし、好きな人とも気持ち通じ合えたし」

「え……」

俺の言葉に南は目を丸くして声を漏らした。そして、俺は照れ笑いしながらも南に言った。

「俺さ、夏菜と付き合うことになったんだ。あ、夏菜ってのは同じクラスの幼馴染で——ほら、南が酔っ払って大変だったときに、助けてくれたのが夏菜なんだ。憶えてるか？」

「あ……は、はい……」

「まあ、いろいろあったりして、へこんだりもしたけど、今はそんなこと忘れちまうくらい幸せなんだよな。なんか、つながってるつか、分かり合えてるつか、うまく言えねえけど……いいよな、こういうの。まあ、ひとえにこれも南のおかげってことで——」

もうお惚気モードのろけに突入した俺は、南の様子がおかしいことに氣付き言葉を止めた。なぜか、俺から顔を逸らし、胸に手を当て、肩を小刻みに震わせている南。いぶかしんでその顔を覗いてみると、目が合った南の瞳は涙で霞んでいた。

って、泣いてる！　なんで！？

「み、みな——」

うつたえながら南の名前を呟く俺の言葉を遮って、南は涙を拭って顔を上げた。

「す、すいません。なんでもないんで……気にしないでください」

「え、いや、でも……俺、なんか気に障るようなこと言ったか？
だったら——」

「ほんとに何でもないですから。じゃあ、休憩終わっちゃうから私
これで失礼しますっ」

ぺこりと頭を下げて、南は逃げるように廊下を走っていった。俺
はただ呆然とそんな南の後姿を見ていることしかできなかった。

55・約束

やることもなく校舎の中をぶらついて、最終的に図書室に立ち寄っていた。普段、滅多に立ち寄ることのないここをチョイスしたのは、それだけ暇だったということだ。

中に入ると何人かの生徒が、席に着き黙って本に目を落としていた。本をめくる紙の刷れる音が時々漏れるだけの静寂の中で、その主たちは、みんな似たような真面目な面構えで、自分の世界にこもっている。そのよそよそしさは、俺がこの場にいないのが場違いであることを、無言で指摘していた。それがただの被害妄想であるにしてもないにしても、それが図書室に滅多に足を運ばない理由でもある。一番の理由はただ単にその必要がないだけだ。生憎、読書の趣味は持ち合わせてはいなかった。

「お前何しに来たんだよ、こら」

図書室の精のテレパシーを訳すなら、そんなところだ。それが俺の被害妄想だというなら、俺が入室したことに気づいて本から目を上げた生徒の、あからさまな迷惑そうな視線は、どう説明する。

「うるせえよ。文句あるなら入り口のドアに用のない者お断りって張り紙でも張つてろ、馬鹿野郎」

図書室の精に俺もまた喧嘩腰でテレパシーを送る。窓の外から夕日が差している暖かそうな席を選び、机の上に無遠慮に体を突っ伏し、寝る体制に入ったわけだ。もし、直接「用がないなら出て行ってください」なんて言われれば、その時は素直に出ていくつもりだが、黙って寝ている分には何の支障もないらしい。五分ほどそうしていても、誰にも文句は言われなかった。

耳の外で、ぺらぺらと耳障りな音が不規則に入り込んでくる。寝るには、さほど気にはならないそんな些細なことにさえ過敏に反応してしまうのは、さっきの南の涙がどうしても頭から離れないからだ。

いくら頭をひねって考えてみても、理由は思い当たらなかった。多分、南を傷つけるようなことを俺が知らず知らずのうちに口走っていたのだろうけど、それがなんなのかどうしても思い当たらない。ただ、南にあの時の礼を言いたかっただけなのに……。

「だああ！ もう！」

頭の中でこんがらがる気持ちを支えず外に吐き出していた。頭をかきむしりながら叫び声を上げた直後、他の生徒の痛い視線に気付く。

「やっぱ、出てけお前」

図書室の精の容赦ないテレパシーに、俺はそそくさと席を立ち、本棚の並ぶ部屋の奥へと逃げ込んだ。背の高い本棚の間に入り、意味もなく収められた分厚い本の表紙をなぞっていく。やっぱり、南の顔が頭から離れない。

答えなんて出ないことは分かっている。それでも、考えてしまう。昨日、南が俺にかけてくれた言葉。俺を励ますためにかけてくれたあの言葉に、何か違和感を感じていた。そして、別れ際に見せたあの寂しげな微笑みも。

その違和感は、答えに繋がっている気がした。思えば、俺は一度も南の本心を聞いていない気がした。一緒にいても、南はどこか俺と距離を取っている。引っ込み思案という言葉で片付けることもできるけど、涙の意味まで、その一言に収めることはできなかった。

女心という未知の生物が、またも俺の中でこんがらがり、進化していく。ただでさえ化け物だったものが怪物に進化を遂げる様を、俺は黙って震えながら見守ることしかできない。

女心って……一体なんですか？

「はあ……」

軽く頭痛を覚えながらため息を吐き、本棚の間を歩いている途中で、俺ははたと足を止めた。全く人の気配を感じていなかっただけに、本棚を抜けた直後に目に入ってきたその背中に、はっとした。そして、ほとんど同時にそれが誰だか分かったのは、きつと、彼女

が図書室の隅に一人で立っていたからだ。俺の中で印象付けられている神木沙里は、そういう子だった。

後ろに立ってみても微動にしない彼女の背中中は、相変わらず他人を避けているようによそよそしかった。そういえば、南が以前、部活がある時は彼女は図書室で南を待っていると言っていた。そんなことを思い出しながら、彼女に声をかけるかどうか、迷った。その迷いがそのまま、俺と彼女の距離を指し示していた。

彼女は窓の前に立って、じっと一点を見ていた。そこからは夕日の色に染まったグラウンドが見渡せた。運動部の生徒の掛け声がかすかにここまで届いていた。見下ろすと、彼らは随分小さくて、ちっぽけなもののように感じた。彼女も、同じ事を思いながらその景色を見下ろしているのだろうか。

「いい眺めだな」

心にもないことを口に出したのは、少しでも彼女の気をこちらに向けたかったからだ。お世辞にも「いい眺め」なんて言えない景色を見つめている彼女を、こっちに向かせたかった。そうしなければ、会話も成り立たない。

でも、彼女はそこから目を逸らさなかった。こちらには見向きもせずに、ただ窓の外の景色を見つめていた。俺は思い切って彼女の隣に立ってみた。もしかしたら、俺の声自体彼女には届いていないのかもしれない。これだけそばにいながら、そんなことを疑ってしまっただけ、彼女は物静かだった。

病的に細い体。透けるようなブラウスの白さに負けない彼女の素肌は、夕日の光を受けて、綺麗に色づけされていた。肩で揃えられた彼女の綺麗な黒髪と、対照的に青白い彼女の横顔は、直視できないほど恵美に似ていた。でも、こんな風に感情のない表情を恵美は俺に見せたことはなかった。

しばらく、俺は声を出さずに彼女の隣で窓の外の風景を眺めながら、時々彼女の横顔を盗み見た。

いつかの雨の日に見た、彼女の感情と言葉。こうして隣に立って

いると、あれはただの夢か幻の類のものだったんじゃないかと思えてくる。あれは、俺に対するSOSだったんじゃないかなんて考えは、今の彼女を見ていると、おこがましい以外の何者でもなかった。彼女はあの日に一体なにを忘れてきたのだろう。それを知ろうとするのは、踏み込みすぎだろうか。

「許さないって、言つたら」

まるで、独り言を呟くように俺は声を出した。彼女を見ないのは、それが無駄だと分かっているからだ。

「お姉ちゃんのこと忘れるなんて、私が絶対許さないって。あれさ、言われる方より言ってる方がずっとキツイと思うのって、俺の気のせいかな？」

静寂の中で、俺の声は虚しく宙を舞うだけだった。それでも、俺は彼女が言葉の通じない人形だとは思わなかった。

「別に偉そうなこと言うつもりも、干渉するつもりもねえ。でも、女の子には笑顔が一番だと思うし。それに」

俺はそう言つて、彼女の横顔を見つめた。

「感情なんて失くしてたら、許さないなんて言わねえだろうし」

俺の言葉に、彼女は何も言わず窓の外を眺め続けた。今まで、ずっとそうして生きてきたのが、悲しみを埋めるためだというのなら、俺にそれをどうこう言う権利はなかった。でも、これだけはちゃんと伝えておきたかった。彼女にも、恵美にも。

「約束してるんだ。だから、俺は絶対恵美のこと忘れねえし」

俺の言葉に、彼女はそつと窓に手を当てて、ゆっくり俺に顔を向けた。そうしたことの意味があつたのかは分からない。またすぐに窓の外に目を戻した彼女に、もう俺の姿は映っては居なかった。

図書室に南が神木沙里を迎えに来た頃には、外の景色は暗く沈み始めていた。随分遅くまで図書室を開放しているのは、神木沙里のためだけらしい。その恩恵に与^{あずか}っている真面目な生徒の中に俺を見つけた時の南の驚きの中に、場違いな人間が何故ここに、という意味合いは含まれていただろうか。とにかく、校門で待っている神木沙里の母親に神木沙里を預けてから、俺は南と一緒に学校を出た。

一緒に肩を並べて歩きながら、俺たちはお互いに相手にかける言葉に困りながらしばらく無言でいた。本当なら、今頃は隣に夏菜がいたはずだった。

少しの後悔は、南の涙には勝てなかった。なんだか、夏菜には少し後ろめたくはあるけど、別に夏菜と一緒に帰る約束をしていたわけじゃないし、と頭の中で自分の納得する理由を作ってから、こうして南と一緒に帰っている。

俺の隣にるのが夏菜じゃないことに対する少しの罪悪感。やましいことはなくても、すつきりしないこの気持ち。この落ち着かなさを、南にかける言葉を見つけれないことのせいにして、それを払拭するように俺は声を出した。

「なあ、南。南って部活なにしてた？」

俺の唐突な言葉に、南は「え」と声を漏らした。身構えていたことは全く関係のないことを聞かれて、戸惑ってます。リアクションから、南の心理状態は簡単に読み取れた。

「あの……演劇部、です」

「え、演劇？」

今日体操着姿の南を見ているので、無難にスポーツ系の部活に所属していると勝手に思い込んでいただけに、その答えは意外なものだった。その意外、には南と演劇がどうしても結びつかないことも含まれている。少なくとも、南が舞台の上で演劇をしている姿はと

ても想像できない。

目を丸くする俺と目が合うと、南はおかしそうに声を漏らした。

「意外、ですか」

「あ、ばれた？」

「最初は強引に先輩に誘われて仕方なくって感じだったんですけど」俺の言葉にくすつと笑った後に、南は俺から目を逸らした。

「なんだか、今は少し好きになってます」

左手に持っていた鞆を南が膝の前で両手に持ち直した。そんな何気ない仕草にドキツとしたのは、この近い距離で取りとめもなく「好き」という言葉を聞いたせいだろう。いつか、酔って南の口から出てきたものとは違う、流れるような自然なその言葉に、なんだか俺の知らない南を見た気がして、急に照れくさくなった。

「いんじゃねえの？ よく知らねえけど、演劇の練習って大声出すだろ、多分。南は普段大人しいから、いいストレス解消にもなるわけだ。つーか、何者かになりきって大声張り上げてる南を見てみてえ。今度練習見に行こ」

照れ隠しに早口でそうまくし立てる俺に「止めてください」と苦笑してから、南は気を取り直したように俺から目を逸らした。

少しの沈黙が合図だったように「よかったですか」と南の声が流れた。

「もしかして、先輩が待ってたのって私じゃないんですか」
「そうだったけど、気が変わった。って言ったら、迷惑だな」

俺の言葉に、南は少し顔を俯けて、首を横に振った。

「そんなことないです。でも、本当に気にしないでください」

「あのな。女の子泣かしとして、気にするなつてのが無理な話なんだ。つーか、ほら。俺って奴は無神経なバカ男だから、無意識に南のこと傷つけてたのかもしれない。ああ、自己嫌悪。って具合に頭の中でぐるぐる回ってしょうがないっつーか。だから、ほんとになんか気に障ったこと俺が言ったなら、正直に指摘してくれ。ってか、謝罪させて、俺を救ってください。俺が自己嫌悪の底なし沼に頭ま

で飲み込まれる前に。ちなみに、もう胸の辺りまで飲み込まれて、身動きとれねえから」

そう言っただけをすくめて見せる。しかし、南は俯いたまま何も言葉を返してこなかった。もしかしなくても空気を読み違えたことに気付く、俺は閉口するしかなかった。

もはや、自ら空気を重くしてしまった愚か者に発言権はなかった。黙って歩く南のペースに合わせて、ゆっくり歩きながら、俺は黙り込んでしまった南の横顔をちらちらと盗み見ることにしかできなかった。

こんな時にこそ、女の扱いを知らない自分に腹が立つ。恋愛の神なら、この状況をどううまく切り抜けるのだろっ、なんて大樹の顔を思い浮かべている俺はアホだ。

なんて、どうでもいいことを考えてしまうほど如何ともし難い状況の中で、唐突に南が足を止めた。二、三步前に出てから、南が足を止めたことに気付いて振り返る。薄暗い景色の中で、そばに立つ外灯の明かりに照らされた南が、俺と目が合って唐突に微笑んだ。

困ったような、申し訳ないような、それとも諦めたような。南の微笑が意味しているものは、いい意味合いのものではない気がした。気がかりでその意味を汲み取ろうとする俺から目を逸らして、南はそっと声を出した。

「公園……寄っていきませんか？」

南が逸らした視線の先には公園があった。そして、今頃になってそういうえば南の家の方向からはこの公園にたどり着く前からとつくに逸れていた事に気付いた。

しようと思えば、そのことを指摘することはできた気がする。でも、それは南の申し出を断ることと同じことで、この状況を作り出したのが他ならない俺自身だったことに今更気付いた俺は、やっぱり馬鹿だった。

もう一度俺に向けられた南の目は、答えを俺に託していた。もう消えてしまった微笑みからは、答えを汲み取ることではできなかった。

57・失恋と告白

そういえば恋愛の神から授かった秘策の有効期限は今日までだった。神のお告げによると今日中に夏菜とキスができなければ、俺は夏菜とおままごとのままで終わる。正氣に戻った今、そんなことを頭から信じる気ははなからないけど、そのプランの中にはこの公園も含まれていた。

まさに、夏菜を誘おうと思っていた公園の中で、夏菜と一緒に座ろうと思っていたベンチ。でも、俺の隣に座っているのは、夏菜じゃなくて南だった。この状況を知れば、大樹はどんな顔をするだろうか。そんなどうでもいい事を考えてみても、この状況に対する答えが出てくるわけじゃない。

公園に入ってから俺たちは遊歩道を少し散歩してから、広場の中に入った。砂場と鉄棒があるだけの、子供心をくすぐる遊具一つない広場は、そのくせ結構な広さを有していた。人気のない広場の片隅のベンチ。そこから見上げた空は、暗く沈んでいた。ベンチの傍に一つだけ立った外灯が、心許ないオレンジ色の光を灯^{とも}している。視線を逸らすと、すぐそこに南の横顔があった。

「なんかさ」

お互いの息遣いさえ聞こえてきそうな沈黙の中で、耐え切れずに声を出したのは俺の方だった。暗闇の中を手探りで歩くように慎重に言葉を選ぼうとしても、相手の望む言葉を選べるほど器用じゃないことは自分でも分かっていた。俺にできることは、今の南を見て思ったことをそのまま口に出すことだけだった。

「悩みでもあるのか？ こっちから聞いといてなんだけど、もし話しぶらいことなら無理して話さなくてもいいし。ほんとに気にして欲しくないんなら、俺も気にするのもう止めるから」

「先輩……」

「帰ろうぜ。もう暗いし、家まで送ってくよ」

そう言つて、俺はベンチから腰を上げた。曖昧に笑つてみせる俺を見上げて、また南は俯く。少し待つてみても、南はベンチから立つとしなかった。そんな南に、小さく息を吐いて、俺は言葉を發した。

「俺でよければ、その悩み相談に乗りましょうか」

心許ない光の下で、南が膝の上に置いた手をぎゅっと握つた。俺は何も言わずにベンチに座り直して、何も言わずに南が話してくれるのを待つた。静かな夜の中によやく流れた南の声は、消え入りそうなほど小さかつた。

「私…… 失恋しました」

「え……」

「その人には好きな人がいたんです。だから、私気持ちを伝えられないまま、失恋しちゃいました。馬鹿ですよ。でも、迷惑に思われるの嫌だから、どうしても気持ち伝えられなくて…… 正しいとか、間違つてるとか、そんなんじゃない…… ただ、どうしていいのかわからなくて」

南の思いがけない言葉に、俺は戸惑いながら南の名前を呟いた。失恋で傷ついている南の前で、バカみたいにノロケ話を聞かせている自分を想像する。この場に南が居なければ、自分を自分で殴つているところだつた。

今ここで南にそんなことを話させている自分の無神経さに、腹が立つた。でも、今はそんなことを気にしている時じゃないことは知つていた。あの時、俺が南に辛い気持ちを吐露したように、南が俺にそれを話してくれていることの意味。相手が誰でもいいんじゃないことを、俺は知っていた。

失恋で傷ついた女の子を慰めるなんて、器用なことではできなかった。でも、単純に励ますことぐらいなら、俺にでもできる。

「そつえば、合コンの時に南言つてたろ」

「え……」

「ほら。もし、自分の好きな人に恋人がいたら、気持ち伝えるかど

うかつて話。あの時、南言ってたろ。迷惑に思われたくないから、黙ってるって。俺も同じ風に思ってたんだけど、今は違うんだよな」
そう言って、俺は南に目を向けた。

「誰かに想われることが迷惑だなんて、俺はそんなこと絶対あり得ないと思う」

「先輩……」

「悪い。あんま気の利いたこと言えねえけど、南に言われて俺は楽になった気がしたから言うな。——頑張れ、南」

俺の言葉に、南は少し照れくさそうに微笑んだ。その微笑みは、頼りないオレンジ色に照らされて、その後に眩かれた「ありがとうございます」の南の声には、少しだけ元気が戻ったような気がした。「前に言っただろ。俺はお前の味方だ。だから、困ったときはいつでも俺を呼べ。その辺のヒーローよりよっぽど早く駆けつけるぞ、俺は。あまり役には立たんがな」

俺の言葉に、南はそつと目元の涙を拭って、クスツと笑った。

「私……頑張ってみますね」

「よし。その意気だ、南」

そう言って、俺はベンチから腰を上げた。

「帰ろうぜ。家まで送ってくよ」

「はい……」

南は俺に心を開いてはくれないんじゃないか。そんな風に思っていたから、南が今日俺に話をしてくれて、なんだか嬉しかった。失恋の傷なんてまだ知らないけど、好きな人とすれ違う辛さは知っている。だから、俺にできる範囲のことなら南の力になってやりたい。そんな風に思っていた。

そんな風に、俺は南の気持ちをまったく分かっていなかった。広場を出ようとして、俺を呼び止めた南の声は、少しだけ震えているような気がした。振り返ると、南は太ももの前で、スカートの裾を両手でぎゅっと握ったまま、俯いていた。

どうした。俺がそう声を出す前に南が顔を上げた。その強いまな

ざしに、俺の言葉は表に出てこなかった。
「私……先輩のことが好きです」

58・鈍感力

信じる信じないの前に、南の言葉をとっさには理解できなかった。まるで実感を伴わず俺の横をすり抜けていった南の言葉は、ただ、俺を戸惑わせるだけだった。

（……純君さ。君の鈍感力って相当なものだよ）

いつか麗美にそんなことを言われたことがあった。今、その言葉が俺の脳裏をよぎっているのは、南が発した言葉のせいに他ならない。

静寂に包まれた景色は、まるで静止画像のように動かなかった。時間が止まってしまったような錯覚の中で、南は俺を見つめたまま目を逸らさなかった。

南のまっすぐな視線が、言葉に実感を取り戻していく。気がついたように鼓動が高鳴って、息が詰まった。金縛りに遭ったように、うまく体が動かなかった。

「本当は、憶えてたんです」

まるで、話の続きを語るように南が声を出した。その声は、俺の金縛りを解いて、それでも動けなかったのは、ただ、どうしていいのかわからなかったからだだった。

「合コンの日の夜のこと、本当は憶えてました。でも、私にはうやむやにして、ごまかすことしかできませんでした。その時から、ずっと胸の中で気持ちがつつかえて、苦しかった。会ったびに先輩のこと好きになって、でも、怖くて手が伸ばせませんでした。」

相手のこと気遣う振りをして、ただ自分が傷つくのが怖かっただけなんです。だから、今、こうやって先輩に告白してる自分なんて想像できませんでした。でも、いつだって先輩の言葉は私を勇気付けてくれるから……何より、この気持ちを大切にしたいから……伝えたいから……——好きです。先輩」

初めてだった。誰かに好きだと言われて、こんなに胸が痛くなる

のは。そして、気付いた。南にかけた自分の言葉があまりにも無責任なものだったことに。

罪悪感が痛みになってじわじわと俺の胸を締め付けていた。南は今にも泣き出しそうな顔で、静かに俺から目を逸らした。

答えは出ていた。俺も南も分かっていた。ただ、分かっているのにそうしている南の健気さに触れる勇気がなかった。その答えを口にして、南を傷つけてしまうのが辛かった。

お互いが傷つかない恋愛なんてない。いつか麗美がそう言っていた。その時は、その通りだと思った。誰かを想う事には、痛みが伴う。夏菜を好きになって初めて、俺も実感した。人を好きになることはそういうことなのだ。そして、その痛みに耐えられるのは、寄り添う相手が居てくれるからだ。

だから、何も望まずにただ気持ちだけを伝えてくれる南の想いが痛かった。この痛みと何も引き換えにできないことが苦しかった。でも、そうすることで何かを変えようとしている南に、俺にはきちんと向き合う義務があった。

それが、どれだけ痛みを伴うことだとしても。

「ありがとな、南」

うまく言葉にならない気持ち、必死になって紡ぎだした。俺の声を、南は何も言わずに、俯いて地面を見つめたまま聞いていた。俺の声に反応して、かすかに南の体が震えた。

「好きになってくれて、ありがとう。でも……ごめん。俺、南の気持ちには応えられない」

俺の言葉を聞いて、南は顔を上げて、声を漏らした。

「はい……分かってますから」

南の頬を涙が伝った。一筋だけ零れ落ちたそれを手で拭ってから、南はベンチに置いた鞆を取って、俺にぺこりと頭を下げた。

「ありがとうございました。先輩のおかげで気持ち、楽になりました」

多分、南は今自分が上手く笑えていると思っているのだろう。笑

顔になつていないその顔は、悲しみに歪んで、今にも泣き出してしまいそうだった。俺にできるのは、その嘘に気付かない振りをするだけだった。

「じゃあ、私帰ります。さよなら、先輩」

早口でその言葉を出して、南は俺を横切つて広場を出て行った。遠ざかつていく南の背中に言葉をかけられず、俺は南が公園を出て行くのを黙って見守った。

今頃分かった南の涙の理由は、痛みだけを俺の中に残していったやりにきれないこの気持ちは、一体どこに持っていけばいいのだろう。ただ、立ち尽くすことしか、俺には出来なかった。

ズボンのポケットに入れていたケータイのバイブに気付いて、はっとした。どれぐらい立ち尽くしていたのだろう。ポケットからケータイを取り出すと、紗枝さんから着信が来ていた。ケータイのデジタル表示で、時刻がもう九時を回っていたことを知った。やっぱり、南を家まで送って行ったほうがよかったかもしれない。意識せずそんなことを思っている自分に、やりきれない憤りを感じながら、電話に出る。

何の連絡もなく帰りの遅い俺を心配してくれている紗枝さんに、今日は夕飯は遠慮するという旨を伝えて電話を切った。それから画面に浮かんでいる新着メールの文字に気付いた。

新着メール四件。開いてみると、四件とも夏菜からだった。ほぼ三十分おきに送られてきていたメール全てを開いて、俺の背中に冷たい汗が伝った。

時間経過とともに、分かりやすくテンションの下がっていくメールの内容。最後のメールに至っては、一言だけ「もういい、純の馬鹿」とだけあった。感情表現にびっくりマークを使っていない辺りが、リアルに夏菜の怒りの大きさを表していた。慌てて、夏菜のケータイに電話をかけてみるも、案の定、夏菜は電話に出なかった。

今の今まではまり込んでいた自己嫌悪の底なし沼から超能力を発揮し、抜け出し、俺は一目散に夏菜の家を目指した。

「あれ、純君？ 夕飯はいらないんじゃないの？」

玄関の前で、大汗をかいて息を切らしている俺を見て、紗枝さんは目を丸くしてその声を出した。昨日夏菜を探し回って筋肉痛に陥った体をさらに酷使すれば、こうなることは目に見えていたが、緊急事態なので仕方ない。これも、夏菜を選ばず南と一緒に帰った罰なのか。いや、そんなことはどうでもいい。

「か……な……いま……す……か……」

「……とりあえず、上がったら？」

息も絶え絶えに言葉を搾り出す俺に、紗枝さんは何も理由を聞かず、俺を家に上げてくれた。コップ一杯の水を恵んでもらい、一息ついた後に紗枝さんから夏菜の様子を聞き、戦況は更に悪化した。しかし、負け戦だと分かっているにもかかわらず戦地に赴くのが男という生き物だ。そんな感じでこの最悪の状況を少しでも緩和させようと試みるが、笑えない。付き合い始めてまだ一日目、デートもしていないこの時期につまづいてる俺って、どんだけだよ。どんだけー！ なんてはっちゃけてみても、笑えない。アホか。

二階の夏菜の部屋へ続く階段は、まるで富士山頂までの道のりより険しく感じた（想像上）。足が重いのは、筋肉痛だけのせいじゃないことは確かだ。普段、ケータイをマナーモードにしているのが、こんな形で裏目に出ると思わなかった。

夏菜をないがしろにしていた自分に気付いて初めて、自分が後ろめたいことを抱えていることに気付いた。南と一緒に居たことを、夏菜には知られなくなかった。

今朝までの幸せな時間が嘘だったように、夏菜の部屋のドアは固く閉ざされ、それはゲームに出てくるところのラスボスの居城よりもよほど重厚に感じた。魔王に挑む勇者の心境は、実はこんなものではないのか。ごくりと唾^{つば}を飲み込んで、何度か深呼吸する。うまい言い訳も考えた。後は、魔王に挑むだけだ。

部屋の中から漏れてくるテレビの音に、夏菜が中に居ることを感じた。俺は意を決して、ドアを二回ノックした。

「夏菜？ いるか？」

案の定、応答はなかった。しかし、漏れていたテレビの音がプツンと途切れ、中で夏菜がドアの前まで来た気配を感じた。

少し待ってみても、夏菜は何も言ってこなかった。無言でドアの前に立っている夏菜の姿を想像する。今、夏菜はどんな顔をしてそうしているのだろうか。そう思うと、居た堪れなくなつて、俺は声を出した。

「夏菜。ちよつと、話しがあるから入つて――」

いいか、という俺の言葉を遮るように、ドアノブがカチャリと冷たい音を立てた。内鍵が閉まる音に、夏菜の意思がダイレクトに伝わってきた。通訳するなら「顔も見たくない」ということか。ドアの傍から夏菜が離れる気配を感じた。テレビの音が再び漏れてくる。俺は、慌ててドア越しから夏菜に声をかけた。

「なあ、夏菜。メール気付かなかったただけなんだ。無視してたわけじゃないんだよ。だから、開けてくれよ。ちゃんと夏菜の顔見て謝りたいんだ」

俺の言葉に、再びテレビの音が消えて、夏菜がドアのそばに立つ気配を感じた。その気配にホツとした直後、俺の安堵を夏菜の声が一刀両断した。

「あの子、確か前に純が合コンでお持ち帰りした子だよな」

「……え？」

「今日一緒に帰つてたでしょ？ 偶然見ちゃったんだ。ねえ、信じられる？ 私の彼氏昨日好きだつて私に言つたくせに一日経つたら別の女の子と一緒に帰つてるんだよ最低じゃない」

感情のこもっていない夏菜の棒読み口調が、容赦なく俺の急所を的確に刺し貫いた。おまけに、用意していたうまい言い訳も粉々に粉碎された。そこら辺の魔王など比較にならないその強大さに、眩暈を覚えた。なんてアホなことを言っている場合じゃない。眩暈がしたのは本当だが。まさか、南と一緒にのところを夏菜に見られていたとは思わなかった。でも、時間帯を考えるとありえないことじゃない。なぜ偶然という言葉の先には、悪いことばかりが待ち受けて

いるのだ。

「か、夏菜。あれは違うんだって。えっと、南とはそういうんじゃないんだ。俺が好きなのは、夏菜——」

「最低……」

俺の声を遮って、ドア越しから夏菜の声が漏れた。小さく漏れたその声は悲しそうに震えて、俺の言葉を制止した。

「言い訳に好きなんて言葉持ち出さないでよ……。——最低よ！純の馬鹿あ！」

「ちょ……待てよ。俺は別にそんなつもりで——」

「いいから、帰ってよ！ もう純の顔なんて見たくないの！」

「……なんだよ、それ」

夏菜の一方的な言葉に、苛立ちが俺の体を掠めた。解決に向かわないことは分かっているけど、すれ違う気持ちを前に、冷静でいられることなんてできなかった。

「ふざけんなよ！ 話ぐらい聞けよ！」

怒鳴ってドアを蹴ってみても、返事が返ってくるわけじゃない。

再び流れてきたテレビの大音量が、無造作に俺を突き放した。いくら呼んでも、もう夏菜の声は返ってこなかった。

60・さじ加減（前書き）

ネット小説ランキングに参加してみました。よければクリックしてください。励みになります。

「また派手な夫婦喧嘩だったわね、純君」

「……からかわないでくださいよ。マジ、ヘコんでんすから」

「まあまあ。で、あんたたちいつから付き合ってたの？ ケンカの原因はなに？」

あれだけ大声を出していれば、当然階下にいた紗枝さんに喧嘩の内容は筒抜けだった。夏菜との事を別に隠すつもりはなかったけど、今更改めてというのも照れくさかった。それに、紗枝さんがまだ俺たちのことを知らないということは、夏菜がまだ話してはいないということだ。それを、勝手に俺がここで告白してもいいのか少しの躊躇はあったけど、今は誤魔化すことに専念できる心の余裕はなかった。

昨日から夏菜と付き合うことになったことを告白しても、紗枝さんは全く驚く素振りを見せなかった。それどころか、やっとくつついたか、などと言われてはこちらとしては恐縮するしかなかった。

「ほんつと分かりやすいのよね、あの子。今朝は幸せ独り占めって顔して家出てったくせに、帰ってきたら一言も口利かないのよ。あの子、機嫌悪いとすぐ口利かなくなるからね」

リビングのソファに隣り合って座りながら、紗枝さんは俺の気などまるで無視して随分楽しそうだった。紗枝さんにデリカシーなんでものを求める方が無理な話なのは分かってはいる。

「で？ 焦りすぎちゃった？」

分かってはいるが、酒のつまみにそんなことを口走らないでもいい。

「なに言ってたんだ、あんた」

すかさず言葉を返す俺に、紗枝さんは片手に持った缶ビールを呷った。それから、酒臭い息を吐き出しながら、足を組み「あれ、違うの？」とあくまで意外そうに声を出した。

「当たり前ですよ。なに言ってるんすか」

「なにつて、純君ぐらいの年頃の男の興味なんて九割がセックスで占められてるもんでしょ。ま、私は放任主義だし、相手が君なら口挟む気ないから安心して。でも、ちゃんと避妊はして——」

「違うっつつてんでしょ！」

「分かってるけど、からかわせてよ」

けらけらと笑いながら、またビールをあおる紗枝さんに、俺は閉口するしかなかった。この期に及んで俺をからかって楽しむ紗枝さん。どうやったら、この人から夏菜のような生真面目な娘が生まれてくるんだ。おそらく、夏菜は親父さんの方の遺伝子を大幅に受け継いだのだろう。それが幸か不幸かはあえて言わないが。

ほろ酔い状態の人間に相談に乗ってもらおうとは思わなかったが、あれやこれやと絡まれて、結局あれやこれやと白状してしまった。

もちろん、喧嘩の理由を知った紗枝さんは腹を抱えた。あんたら小学生か、と笑われた。

「なんか、友達にもそんなこと言われましたけど、俺らって、やっぱり幼稚なんすかね……」

「あれ、もしかして気にしてんの？ 気にしない、気にしない。誰だって最初はそういうもんよ」

「はあ……」

「ま、あの子も融通利かないところあるかもしれないけど、今回は純君が悪いよ。君が軽い気持ちで言葉を選んでないにしても、相手に軽く受け取られちゃったら、それまでなんだから。大事なのは、言葉じゃなくて気持ちだろうけど、気持ちなんてやっぱり言葉にして伝えるしかないんだから。まあ、言葉以外の手もあるけど、あんたらにはまだ当分先の話でしょ」

紗枝さんの言葉に「はあ」と相槌を打つことしかできない俺を見て、紗枝さんは小さく笑った。

「ね、純君。夏菜はきつと、君のことが好きでしょうがないのよ。顔も見たくないって思っちゃうぐらいね」

「はあ……？」

「好きと嫌いは切り離せないってね。純君も、その癖今のうちに直
しとかなないと、後々苦勞するわよ？」

「癖？」

「誰にでも優しいその性格。さじ加減間違えると、取り返しつかな
くなるかもよ」

「……脅かさないでくださいよ」

「クス。ま、不束な娘^{ふつつか}だけど、これからよろしくね」

俺の肩に腕を回しながら、紗枝さんは一氣に残ったビールを^{あお}呷つ
た。

61・あてつけ

（おはよう、夏菜（星マーク）。この前は怒鳴ったりしてごめんな。夏菜の気持ちも考えずに、無神経なこととしてたって、すごく反省してる（ペコリ）。でも、ちゃんと話聞いてくれないかな。南とはほんとになんでもないし、夏菜のこと好きって言ったのも、軽い気持ちで言っただんじゃないんだ。もうすぐ家出るけどよかったら、一緒に学校いかないか（アットマーク）。返事待ってるな）

昨日から一睡もせず、ケータイとにらめっこをしながら考え抜いたメールの本文に、ささやかな絵文字を加えつつ、送信完了。ぐだぐだと言いつつ訳を連ねた本文を削り取ってはまた加えの気の遠くなるような反復地獄。送信後に、やはり絵文字は余計だったかもしれないと気づき、ベッドに正座していた俺は、布団の上につぶせに倒れこみ、顔を埋めた。

この土日に関係修復を図ろうとするものの、気まずくて声をかけることもままならず、週が明けてしまった。せつかくの休日を喧嘩したままで潰してしまう体たらく。しかし、夕飯をご馳走になりについて顔を合わせても、当の夏菜が一言も口を利いてくれないのだから仕方ない。そんな俺たちを見て楽しんでる紗枝さんはフオローにも回ってくれないし……こうして、翌週まで憂鬱を持ち越してしまった。

決死の覚悟で送信したメールを意味もなく読み返してみても、意味もなくそれを胸に当て、意味もなく神頼みをしながら、意味もなく十分が経過した。粘り強くもう十分待ってみても、返事は返ってこない。駄目押しにもう十分待っていると、徹夜のツケに飲み込まれて安眠開始。親父に叩き起こされた時には遅刻までリミット五分。すぐる思いで、寝ぼけながらケータイを開くも、新着メールは来ていなかった。

「起こすんならもつと早く起こせ、クソオヤジ！ 遅刻すんだろが
あ！」

全ての悲しみを八つ当たりに入れて、俺は家を飛び出した。ささやかな眠りの間に夏菜と仲良く登校していた夢の後味が、なんとも言えず苦かった。

結局、夏菜と一度も話しどころか、目が合うこともなく放課後を迎えた。意図して俺という存在を視界に入れていないのが、夏菜の横顔からありありと伺えた。それだけならまだしも、他の男子生徒に見せる夏菜のフレンドリーな笑顔。あてつけだと分かっているにしても、辛い。いや、分かっているから辛い。笑顔の裏に隠れた夏菜の怒りの大きさがひしひしと伝わってきた。それより何より、結局、夏菜が他の男子と馴れ馴れしく話していることが気に入らないだけだ、俺は。

大きく息を吐き出してみても、この気持ちのもやもやが晴れるわけじゃない。机に突っ伏して、意味もなくうめき声を漏らしてみる。やることなすこと、全てが虚しく通り過ぎていく。

昼休みに勇気を振り絞って夏菜にメールを出してみた。夏菜はケータイを開きはしたけど、返信せずにまた友人との会話に戻った。完璧、無視。シカト。でも、それに心が痛いわけじゃない。

夏菜に無視されて、他の男子と馴れ馴れしくされて初めて、想像した。

偶然、俺と南が一緒に帰っているところを、夏菜がどんな気持ち

で見送っていたのか。

声をかけることもできたはずだし、引き止めることもできたはずだし、その状況を責め立てることもできたはずだ。でも、夏菜は何もしなかった。

ただ、黙って俺たちの背中を見送ったのだろう。

その時、多分、夏菜は今の俺と同じ気持ちだったはずだ。うまく言葉にはできないけど……そう。全てが虚しく通り過ぎていく。そんな感じ。

今の俺が直接夏菜に声をかけられないみたいに、夏菜も俺に声をかけられなかった。何もできなかった。見ているだけで心が痛む光景を目の前にして、目を逸らすことしかできなかった。今……夏菜が味わったその辛さを実感して、初めて気付いた。

――俺は、知らず知らずの内に夏菜に辛い思いをさせていた。

そんなことに気付きもしないで「好きだ」と口にしたところで、それは、その場しのぎの言い訳にしか聞こえないだろう。だから、夏菜はあんなに怒っていた。

今更そんなことに気付く俺は、やっぱり、どうしようもなく馬鹿なんだと思う。でも、今ならきつと、言い訳じゃない本当の気持ちに夏菜に伝えられる気がした。

机に突っ伏したままで、顔だけを上にずらしてみる。ぼやけた視界は徐々にノイズを解いて、景色をそこに形作る。

見慣れた教室。変化のない、退屈な匂いが漂う密閉された世界。その真ん中にその人物が浮かび上がった時、俺の瞳はそこから動けなくなった。

夏菜のことをとっさに頭の中からかき消したのは、義務的な行為だった。それが、自分のためなのか、相手のためなのか、考えようとして止めた。

「南……」

教室の最前列に立っていた南の姿を目の当たりにして、俺にできることは、そうして声を漏らすことだけだった。

62・恋の宣戦布告

頭の中がクリアになった。一度呟いた自分の言葉に自信が持てなかったのは、ただの戸惑いだ。でも、そこに立っているのが南だということ、少しの間彼女を視界の中心に留めて確信した。戸惑いは、この間告白されたことに対する気まずさにはなかった。でも、遅れて、その気まずさを思い出した俺は、とっさにはまた声を出すことはできなかった。

見慣れたお下げ髪をばつさりと首筋辺りで綺麗に切りそろえた黒髪。外見の変化は、そのまま内面の変化を映し出す鏡のようだった。俺が戸惑ったのは、南の外見的な変化だろうか、それとも、その変化の意味そのものに対してだろうか。

女心に疎い俺でも、その変化の意味はすぐに感じ取れた。もともと、女は失恋すると髪を切る、という根拠のない通説からの思い込みに、説得力はない。ただ、今そこに変わった南が立っているという事実だけは、なにに対してだか分からない説得力を持って、俺を縛り付けていた。この落ち着かなさは、変化の意味より、髪型一つで別人のように雰囲気を変えてしまう女の子の生態に対する、純粋な驚きの割合が大きかった。大人しそうな雰囲気を払拭した南は今、活発な女の子にも、やっぱり人見知りな女の子にも受け取れた。

合わせていた視線を最初に逸らしたのは南だった。それでも、俺はぼかんと口を開けたまま、南から目を逸らすことができなかった。なにを確かめようとしているのかも分からずに、南から何かを確かめようとしていた。この状況でかけるべき言葉など見つかるはずもない。髪切ったの？とか、似合ってるな、とか、頭をよぎる場違いな言葉に苛立ちを覚えた。沈黙の中で、南から時間を動かしてくれるのを待つしかなかった。こんな情けない俺に、南は本当に好意を寄せてくれているのだろうか。

教室の中を取り巻く些細な音が、今は俺たちの時間を支配していた。カチカチカチと単調なリズムを刻む時計の針の音は、俺たちを急かしているのか、それとも興味なく傍観しているだけなのだろうか。床に落とされた南の視線を意味もなくなぞってから、鞆を両手で握る南の手が、かすかに震えていることに気付いた。恐れにも決意にも取れるその震える手を握ってやることはできなかった。

歩み寄ればすぐにでもつないでやれるのに、そうすることのできないもどかしさが、じわじわと俺の心を締め付けた。南が嫌いなわけではなかった。できことなら助けてやるつもりでもいた。でも、その気持ちは、この場に持ち出していい種類の気持ちじゃないことくらい分かっている。俺の出した答えに、答えを返すためにこの場にいる南に対して俺ができることは、ただ見守ることだけだった。

沈黙の中で、南の手の震えが止まった。そして、ぎゅっと鞆を握り締める南の両手から、俺は視線を上へなぞった。ショートカットのよく似合う女の子は、俺と目が合うと照れくさそうにはにかんだ。「髪……切ってみました」

白くて頼りない細い首筋に手を当てて、南は困ったように微笑んだ。俺は「うん」と返事を返すことしかできない。それ以上を、南が望んでいるとも思えなかった。そして、南は俺から目を逸らして、窓際まで歩いていった。一つ一つの動作に意味なんてなくても、俺は確かめるように南の姿を視界の中心に捉えた。

「正直、告白したこと後悔してます。先輩のせいですよ。先輩の言葉が私を勇気付けたりするから……柄にもないことしちゃいました。本当は、ずっと胸の中に閉まって、大事にとっておくつもりだったのに。そうすれば、こんな思いなんてしなくて済んだのに。思っちゃった。この恋は実らなくても、先輩ならきっと私の気持ちきちんと受け止めてくれるんだろうなって」

窓に手を当てて、南は遠くを見つめながら言葉を発した。気持ちを整理するように、慎重にゆっくりと言葉に紡がれていく気持ちに、南は今どうやって折り合いをつけているのだろう。たった数日会わ

なかっただけで、南の後姿はこの前よりもずっと大人びて見えた。でも、そこにいるのは確かに、今にも壊れてしまいそうな、華奢な女の子の背中だった。

「後悔してます。気持ちを伝えれば少しは楽になれると思ってた。諦められると思ってたから。でも、違ったみたいです」

そう言っただけで振り返った南に、俺は今どんな顔を向けているだろうか。

「気持ち、髪みたいに切ってすっきりできるものじゃありませんでした。告白しても、応えてもらえなくても、先輩のことを忘れることなんてできなかった。私の片思いは、まだ続いているんです」

高を括っていた。もう、南は俺のことを諦めているんだと思い込んで、微塵も疑っていなかった。引っ込み思案で、自分の気持ちをあまり表に出さない南だから。こんな気持ちの折り合いのつけ方も、こんな展開も想像なんてできなかった。

「いつか、先輩が私に振り向いてくれる日が来るかもしれない。そんな日が来ることを信じて、私……まだ先輩に片思いしててもいいですか」

肯定することも、否定することもできなかった。一つ一つの言葉に思いを込めて伝えてくるその積極さから、南を連想することはできない。でも、公園で好きだと言ってくれた時と同じ、このまっすぐなまなざしを俺は知っている。

声を出せないでいる俺に、諦めたように小さな微笑を浮かべて、南は俺に頭を下げた。そして、教室を出て行くこととする南の背中を、俺は思わず呼び止めた。

「あの……似合ってる。その髪型……」

俺の馬鹿みたいなその言葉に、南は「ありがとうございます」と控えめに笑って、教室を出て行った。

南が教室から出て行ってからようやく、俺の胸は思い出したようにドキドキと高鳴っていた。

63・相性

（話したいことがあるから、部活の練習終わるまで校門で待つてるな）

裏庭のベンチに寝そべり、天に向けてケータイを掲げ送信完了。今日のバイトは、無理を言って休ませてもらった。これで、夏菜との仲直りに専念できる――……はずなのに。

思い出すと、無意識に胸の奥が熱くなってしまう。南が俺に残していったものを確かめるように、そっと胸に手を当ててみる。かき消そうとしても、それはじわじわと俺の胸の奥にこびりついて離れなかった。

少し息苦しくて、でも心地のいい響きが、鼓動と一緒に俺の中に溶け込んでいる。意識して抑えないと、それはすぐに顔を出して南のことを俺に想わせる。

この戸惑いから目を逸らして、夏菜と会おうとしている自分がいる。

ただの後輩。その一言で、全てをなかったことのように夏菜に話そうとしている自分がいる。余計な心配をさせるよりなんて言い訳をしている自分がいる。それが、やましいことだと分かっている、そうすることしかできない自分がいる。

目の前をもやもやした気持ちが増えている。そのもやもやを振り払おうと手を伸ばしても、俺の手は空に浮かんだ薄い雲を掴み損ねただけだった。

どん底で雨に濡れていたこの場所で、俺を傘の中に入れてくれた南の顔が浮かんだ。あの時、南がかけてくれた優しさ。自分の気持ちを押し殺して俺を励ましてくれた時、南はどんな気持ちだったのだろう。同情だと思っていた。でも、あの時南が俺に寄せてくれたのは同情より親身なものだった。

目の前に浮かぶもやもやした気持ちを振り払うために、上半身をベ
ンチから勢いよく起こした。かすかな眩暈に紛らわせたものは、多
分、ごまかしてはいけない気持ちだった。

校門の柱に寄りかかりながら、なにをするでもなく夏菜のことを
待っていた。コンクリートの無機質な冷たい感触を背中で温めなが
ら、ちらほらと校門を抜けていく部活終わりの生徒たちを横目で見
送り、そろそろ夏菜が出てくる時間だと気付いた。

校門を抜けていく男子生徒の複数の馬鹿笑いする声が遠ざかる。
その能天気な笑い声に、見当違いな苛立ちが体を掠めて、俺はため
息を吐いた。何気なく暗く沈んでいく空を見上げながら、そうして
いるうちにまた、生徒が何人か校門を抜けていく気配をそばで感じ
る。

湿気を含んだ風は、少し冷たかった。妙に体がスースーするのは、
一人で待ち続けることに飽きたからだろうか。それとも、その光景
を目の当たりにしたからだろうか。

ふとずらした視線の先に、夏菜の姿を見つけた。昇降口からこち
らに向かってくる夏菜の隣に、金田先輩の姿を見つける。二人の親
しげなその姿も、俺に対するあてつけだろうか。どちらにしろ、俺
の胸は落ち着きなくざわめいていた。

俺の存在に気付いたのは、夏菜より金田先輩の方が早かった。数
メートル離れたところから、金田先輩は俺に気付くと、そっと夏菜
から少し離れて、俺に手を上げて見せた。相変わらぬ爽やかな笑

顔の持ち主に、ささやかな殺意にも似た嫉妬を感じる俺をよそに、夏菜は俺を一度見たきり、もう目を合わせようとしなかった。

「久しぶりだな、長谷川君」

そう言つて、ずかずかと人の間合いに踏み込んでくるこの人は、もしかしたらただ無神経なだけなのかもしれない。どちらにしろ、失恋して一週間もせずにその相手と恋敵を前にして平気そうな顔をしているこの人の器など、俺には図れそうになかった。

「もしかして、大山のこと待ってた？」

不敵に微笑む金田先輩は、俺達の関係をもう知っているのだろう。夏菜からあえて金田先輩に報告することは考えられなかったけど、この人が無遠慮に夏菜に詮索するところは容易に想像できる。

「ええ、まあ」

ぶつきらばうにそう返事を返す俺を見て、金田先輩はきょとんとした顔を作つてから、中途半端に離れた場所で立ち止まったままの夏菜に目を向けた。

「もしかして、喧嘩中か？」

そう俺に耳打ちしてくる金田先輩に、俺は顔をしかめることしかできなかった。そんな俺を見て、金田先輩は苦笑してから、夏菜を振り返つた。

「じゃあな、大山。僕、もう帰るから」

そう言つて手を振ってみせる金田先輩に、夏菜は「どうも」と口ごもりながらぺこりと頭を下げた。そして、金田先輩は俺の肩を軽く叩いてから、「もしかして、君達相性悪いんじゃないの」と言い残して、俺の横を通り過ぎた。

冗談にしては笑いのこもっていない金田先輩の声。振り返ることもできず、俺は遠ざかる金田先輩の気配に「うるせえよ」と呟いた。ただ胸の中に溜まるばかりの苛立ちを持て余しながら、俺は夏菜を睨むことしかできなかった。

64・言葉じゃなくて

膨らんでいく苛立ちに蓋をしようとして、大きく息を吐き出した。でも、苛立ちは募るばかりで、俺の吐き出した深いため息は意味もなくその場の空気を悪くしただけだった。気まずい沈黙の向こうで、夏菜は一向に動かずに自分の足元を見つめている。いい加減、背中が痛かったので、校門の柱から背中を離れた。

目算で大また3歩。それが今の俺と夏菜の間に開いた距離。三日前までは手を繋げる距離にいたのに、今はどう頑張ったって、俺の手は夏菜には届かない。どうして、こんなことになってしまったのだろう。

お互い好き同士なはずなのに、何でこんなにすれ違ってしまうのだろう。

きっかけが俺にあることぐらい分かってはいる。だから、理解して謝ろうとしていたのに、今はもうそんな気さえ失せかけている。

他の男子生徒ならまだ我慢もできた。でも、あてつけに金田先輩を持ち出してくるのは話が別だ。この憤りを胸に閉まって、笑ってごめんなんて言えるほど、俺は出来た人間ではなかった。

息苦しい沈黙を破ったのは、俺の方からだった。

「何のつもりだよ」

俺の言葉に顔を上げた夏菜は、硬い表情で俺に目を向けた。不機嫌そうな夏菜の目つきは、まるでそれはこっちの台詞だとも言いたげだった。わずかに残っていた理性が音を立てて、崩れ去った気がした。

「そこまですることねえだろ……俺が今どんな気持ちか分かんねえのかよ！」

胸の内側で暴れ狂っていた感情を抑えきれずに、表に吐き出した。俺の怒声に、夏菜はビクツと肩を震わしてから、すぐに、不安そう

な顔になって俺を見つめた。戸惑ったように泳ぐ夏菜の目に、少しの罪悪感が胸をよぎる。でも、嫉妬と不満に後押しされた感情にブレーキをかけることは出来なかった。

「確かに悪いのは俺だよ！ 無視されたって仕方ねえよ！ あてつけられたって仕方ねえよ！ でも、そこまですることねえだろ！ なんだあんな奴と一緒に――」

感情に後押しされてあふれ出してくる言葉は意図して止めたわけじゃなかった。怒りに任せて、持っていた鞆を地面に叩きつけて、顔を上げた時、予期せず夏菜が目の前に立っていて、俺は言葉を止めることしか出来なかった。

鞆がコンクリートの床に叩きつけられた鈍い音が間延びして、俺の耳の奥を通り過ぎた。唐突に嵐の目の中に飛び込まれたその感覚を、時間が止まったなんて言い表すのは少しオーバーだろうか。俺の傍に立って、夏菜は俺の制服の腕の袖を引っ張っていた。自分から行動を起こしながら、夏菜は不安そうな顔のまま、俺を傍で見つめていた。

「え…… な、なに……？」

自分でも上ずった情けない声が出ていることが分かる。制服の袖をつままれているだけなのに、体の熱が夏菜がかすかに触れている指先に集中している。自分でもブレーキのかけられなかった感情を、それだけでアツサりと飲み込まれた。夏菜に触れられた感触は、不安さえ思わせるほど繊細だった。

「純。何か誤解してるよ……」

「――え？」

「あてつけって、私にそんなつもり全然ないよ」

夏菜の言葉に、もう一度俺は間抜けな声を漏らした。夏菜の言葉と、近くで漏れる夏菜の息遣いに、俺は戸惑うことしか出来ずに、それでもたどたどしく言葉を紡ぎだす。

「えっと……でも……メール……」

「メール？」

「いや、部活の練習終わるまでここで待ってるってメール……送ってた？　それで、俺にあてつけるためにわざわざ金田先輩と一緒に出てきて——」

俺の言葉を聞いて、夏菜は俺の袖から手を離してから、おもむろに左手に提げていた鞆を開けて、中を探り出した。その様子をきよんとんと眺めている俺の横で、夏菜は鞆の中からケータイを取り出した。

夏菜のケータイについた複数の小さなキャラクターのストラップが、ジャラジャラと夏菜の手からこぼれて、宙にぶら下がった。夏菜は気にせずにケータイを開いて「あ」と声を漏らした。

「新着メール……ほんとだ。気付かなかった」

気付かなかった。夏菜のその一言はエコーを効かせて俺の脳内を反響した。

「部活の間はケータイずっと鞆の中に閉まってるから……」

「えーと……」

この如何ともし難い空気の中で、俺はぼりぼりと頭を掻くことしか出来なかった。

「……も、もしかして、勘違いしてました？」

むすつとした顔で俺を一睨みして、夏菜はケータイを制服のポケットに入れて、鞆を持ち直した。再び訪れるこう着状態。もう一度訪れた沈黙は、執拗に俺を騷^{なぶ}り者にした。

「ご、ごめん、夏菜……あの……」

こんな状況でも、今日夏菜が初めて口を利いてくれたことに勇気付けられていた。傍に立っている夏菜は、もう目を合わせてくれなかった。でも、俺の左腕には夏菜のささやかな温もりがまだ残っていた。そこに自分の手を被せてみて、俺は自分の正直な気持ちに触れた。

「分かったんだ。なんで夏菜があんなに怒ってたのか……夏菜に無視されて、やっと気付いた。夏菜が教室で他の男子としゃべってる。そんな些細なことが辛かったりして、きっと俺が些細だと思って取

つてた行動に、夏菜もこんな辛い思いしてたんだろうなって、思った。そんなことに気付きもしないで「好きだ」なんて言っても、駄目だよな。夏菜が怒るのも当然だと思う。でも、さ」

相変わらず、夏菜は足元に目を落としたままだった。一方通行に終わってしまいそうな不安が頭をよぎる。この言葉も言い訳の羅列に過ぎないと思われても、仕方ない。でも、あの時言った言葉が嘘だなんて、思われたままなのは嫌だった。

「言わせてくれよ。俺が好きなのは……夏菜だから。夏菜だけだから」

ずっと通り抜けた風は、俺の熱を帯びた顔を優しく撫でて通り過ぎた。気持ちを表に出すことは、なんでこんなにも心臓に悪いのだろう。多分、もっと上手に言葉でラッピングできたなら、受け取る側も喜んでくれるのだろう。でも、俺に出来るのはやっぱり「好きだ」ということだけだった。

ラッピングなしの贈り物への反応はやっぱり芳しくはなかった。

夏菜は俯いたまま何も言わず、俺も何も言えずに、お互いそのままで時間だけが過ぎ去った。そして、やがて俺の顔から熱が冷め始めた頃に、夏菜は静かに呟いた。

「もう、信じられないよ……」

「え……」

「純の言うことなんか、もう信じられない」

かみ締めるように漏れた夏菜の声は、ゆっくりと俺の中に浸透していった。言葉は理解できるのに、感覚がついてこない。俺は唾を飲み込んで、夏菜の言葉を馬鹿みたいに肯定することしか出来なかった。

「そつ、か……」

「だから、信じさせて」

今まで俯いていた夏菜が、顔を上げて言葉を発した。唐突な夏菜の言葉とまなざしは、ただ俺をうるたえさせるだけだった。

「信じて欲しかったら、言葉より直接、気持ち伝えて……」

「え……？」

照れくさそうにまた俯く夏菜に戸惑いながら、でも、その言葉の意味はいくら鈍感な俺でも理解できた。そして、その兆しを感じ取った俺の心臓が徐々に徐々に早鐘を打ち始める。

そつと夏菜の両肩に手を置くと、頼りない感触と同時に、温もりが俺の手のひらに広がった。その温もりの愛おしさに、俺はそれ以上踏み込むことに躊躇した。そんな俺に気付いて、夏菜が恐る恐る顔を上げた。

目が合うと夏菜は照れくさそうに俺に微笑んでから、すぐに俯いた。それだけで、もう気持ちが通じ合っているような気がした。

体中につながった神経が、とろけてしまいそうだった。夏菜の温もり。夏菜の匂い。寄り添うほど傍で感じる夏菜は、俺の心を捉えて離さない。もう一歩踏み出すだけで、今よりずっと、気持ちが通じ合えるような気がした。

震える手にぎゅっと力を込めると、夏菜の細い肩がびくつと震えた。応えるようにかすかに吐息を漏らした夏菜が俺に預けるようにそつと顔を上げた。

目をつぶった夏菜の無防備な唇に、思わず息を呑む。頭の中が熱くなって、感覚が曖昧になっていく。落ち着きを取り戻すために、何気なく夏菜から視線を逸らした。その時だった。

俺の視界の中に南が入ってきたのは――。

65・ファーストキス

いつからそこに立っていたのだろう。夏菜の肩越しに南の姿を見つけた瞬間、引き合うように南と目が合った。

目に見えない歯車が、噛み合つて最悪のタイミングを選んでいることを真剣に疑った。もちろん、その時の俺にそんなことを冷静に考えるような余裕はなかった。南と目が合った瞬間背筋を伝った寒気に、そんな疑問めいた意味合いが込められていた。

まだ、校内に生徒が残っている可能性は十分考えられた。正門を通りがかかることは十分考えられた。それでも、ここでこうしているのは、そんなことなんて完全に頭の中から飛んでいたからだ。南と目が合うまでは、夏菜のことしか考えられなかったのに。

交わった視線のやり場に困りながらも、なぜか南から目を逸らすことが出来なかった。この状況に南は気付いているだろうか。そんな考えは、俺からすぐに目を逸らした南に吹き飛ばされた。

南は俯き加減にその場から駆け出すと、声をかける間もないまま、俺たちの横を素通りして校門を抜けて走り去ってしまった。その気配に驚いて目を開けた夏菜と目が合った。

気まずい視線の交錯の中で、俺はとっさに夏菜から目を逸らした。戸惑いがちに夏菜が俺の名前を呟く。夏菜が何も知らず、この状況に気付いてもないという事実が、俺の罪悪感を募らせた。

夏菜が俺の傍から離れて、校門をくぐって、南が走り去っていった道の先を見つめる。俺はそんな夏菜に声をかけることが出来ず、ただ、夏菜の横顔を見つめた。その時だった。

ふっと、何かが俺の視界に唐突に割り込んできたのは。それが何かを理解する前に、俺の唇に何かが押し付けられていた。思考が停止する。状況が理解できない。いや、理解したから、考えられない。

目の前に神木沙里の顔があった。首に巻きつけられた温もりは、

神木沙里が俺の首に腕を回した温もり。唇に押し当てられた生々しい感触は、神木沙里が俺に自分の唇を押し当てている、感触。

目を見開いた俺の視界いっぱい、目の前に目を閉じた神木沙里の顔がある。

夢かと疑うほど唐突だった。でも、夢だと疑うには、その温もりと感触はあまりにもリアルだった。

どれぐらい、そのままだったのだろう。神木沙里が俺の首から手を解いて、唇を離すまで、俺はピクリとも身動きが取れなかった。疑問は疑問になりきらずに、俺の頭の中で溶けていく。ファーストキスを神木沙里に奪われたショックとか、この状況に対する答えだとか、全ては、初めて体験したキスの後味に飲み込まれた。

事を終えると、神木沙里はその場に何も答えを残さずに、何事もなかったように学校の中へ静かに歩いていった。その背中を眺めることは出来ても、引き止めることは出来なかった。そして、一人蚊帳の外でその光景を目の当たりにした夏菜は、呆然と俺を見つめていた。

見開かれた夏菜の瞳に、みるみる戸惑いと感情が取り戻されていく。そして、溢れてきた涙の向こうで、夏菜の瞳は弱弱しく揺れた。どうしていいか分からなかった。こんな状況で、どうしようもなくても、夏菜に歩み寄らずにはいられなかった。でも、夏菜は俺を拒絶した。

「来ないで！」

悲鳴にも似た叫び声は、かすれてうまく言葉になっていなかった。そして、弾けたようにその場から駆け出す夏菜の泣き顔を見て、俺の体は金縛りにあったように、その場から動かなかった。

66・記念日

「さて、今日は一体何の日でしょうか」

その日、いつも通り病室を訪れた俺への恵美の第一声はそれだった。目が合った瞬間放たれたその言葉に、俺はとっさに頭の中でカレンダーの日付を思い出しながら、ベッドの上に腰掛けている恵美に「え？」と聞き返した。そんな俺に、恵美は含み笑いをして首をかしげただけだった。

母さんを亡くしてから、そして、あの雨の日に恵美と出会ってから、意味もなく病院に足を運んでいた俺の日課に意味が生まれた。その意味と繰り返し返される日課のおかげで、恵美の性格は大方把握していたけど、時々飛び込んでくる恵美の突拍子のない言葉は、いつも俺をきよとんとさせた。

病室の陰鬱な白に差し込んだ柔らかな陽光が、ベッドのシーツを色づけていた。開け放たれた窓の外から吹き込んでくる風は、レースのカーテンを揺らして、恵美の肩の後ろまで下りた髪を撫でて、俺の横を通り過ぎる。頭の中で恵美の言葉の意味と答えを考えながら、俺は恵美から目を逸らした。恵美の身に着けたシルクのパジャマの袖の辺りに目を留める。光沢を帯びた薄青色と、午後のけだるい空気に、少しだけ眩暈に似た感覚を憶えた。

「ヒント」

答えを導き出せないでいる俺の耳に、恵美の声が弾んだ。顔を上げると、恵美はベッドの横の小さな置き台の上に置かれた牛乳瓶を指差していた。花瓶代わりの牛乳瓶に挿し込まれた一厘ごとの花に統一性はなかった。手ぶらで見舞いに行くのはどうかと思い、女の子が喜びそうなものと考えた結果、そんな安直なものしか思い当たらなかったのだ。形式的とはいえ、女の子に花を贈るなんて死ぬほど照れくさかったけど、恵美のはにかんだ笑顔と「サンキュー」の言葉に、羞恥心はなくなった。それから、見舞いに来る度に、

目に付いた花を一厘だけとってきて、牛乳瓶に挿し込むことも俺の日課だった。

殺風景な部屋を心なし彩る牛乳瓶は、すでに三本に増えていた。俺は今日の分の花を牛乳瓶に挿し込みながら「もしかして、今日誕生日とか？」とてきとうな事を口に出してみた。そういえば、恵美の誕生日がいつか、知らなかったことに気付いたのは、その時だった。

「違う。私の誕生日は八月二十日。まだ、一月は先」

「ふうん。そういえば、君の誕生日今まで知らなかったよ。ちなみに、僕の誕生日は九月十日だよ」

「今はそんなことどうでもいいの」

口を尖らせて、俺の生まれた日をそんなことと言つてのける恵美に、俺は苦笑するしかなかった。

「——じゃあ、今日は何の日なのさ」

「あんたって、女の子にモテないでしょ」

恵美の責め立てるような口調と視線に、俺はそんな横暴な、思いながらも、その通りだったので反論も出来ず、顔をしかめた。

「それって答えに関係あるの」

「まあね」

「じゃあ、教えてよ」

「しょうがないな」

そう言つて、恵美はベッドから腰を上げた。

「今日で五十回目なんだよ」

恵美の言葉に、俺は目を丸くさせることしか出来なかった。

「通算連続お見舞い回数。めでたく、今日で五十回を達成しました」
「それと僕が女の子にモテないのどんな関係があるっていうんだ」
「からかうように笑う恵美のそれは、果たして照れ隠しだろうか。
少なくとも、そう言つて恵美を睨む俺のそれは、照れ隠しに他ならない。突拍子のない恵美の言葉は、ほとんどの確率で俺の胸をドキドキさせるたちの悪い威力を備えていた。」

「だって、女の子にモテてたらここに来る時間もないでしょうに」
「モテなくて悪かったね」

「違う、違う。ありがとうって言ってるの」

「だったら、初めからそう言ってよ」

「やだよ、照れくさい」

そう言っただけで、恵美はストンとベッドの上に座り直した。

「仲のよかった友達もさ、見舞いに来てくれたのは最初だけなんだよね」

「え……」

「ま、入院生活長いし、仕方ないって言えば仕方ないけどさ。母さんや妹だって毎日に来てくれないよ。それが普通だと私、思うし」

俺から目を逸らして淡々と言葉を紡ぐ恵美の横顔は、無表情だった。その中に恵美が隠しているものを、そのときの俺が察してやれるわけもなかった。それでも、次に発した恵美の言葉に胸が痛んだのは、言った本人の方がずっと苦しいことが分かったからだ。

「だから、あんたもさ。別に無理して毎日来なくてもいいよ。変に気を遣われても、こっちも迷惑だし」

視線を足元に落としたまま、恵美はそれ以上何も言わなかった。

俯いた恵美の表情は、前髪に隠れてよく見えなかった。柔らかな風が俺と恵美の間を通り抜けた。恵美の左手首についたビーズのブレスレットは、差し込む陽光を反射しながらキラキラ輝いていた。

この胸の痛みも、毎日恵美に会いに来る理由も、気遣いという言葉で片付けるには、なんだか落ち着かなかった。

あの時から根付いたこの気持ちをつまく表現する言葉を、俺はまだ知らなかった。

「あのさ」

静かな病室の中で、不躰に俺の声だけが響く。病人に無理に元気を求めるのは気が引けるけど、快活を絵に描いたような恵美のらしくないその台詞も態度も、俺の不安に似た感情を助長させた。その不安を払拭させるために、俺は言葉が続ける。

「今更そんなこと言われても、困る。もう、ここに来るの日課にな
ってるし。第一、君が思ってるほど、僕は忙しい人間でもないし、
ここに来るの止めたら暇を持て余してしょうがないよ」

「……やっぱりね」

俺の言葉に、恵美は俯いたままつぶつと笑った。

「女の子にモテないわけだ」

「な、なんだよ、それ」

「今口説かれてたら、私あんたに惚れてたかもね」

につと白い歯を見せて笑う恵美の言葉が、どこまで本気だったの
かは分からない。でも、いつも通りの恵美の奔放な笑顔は、たちま
ち俺の不安なんて吹き飛ばしてくれた。

「沙里っていうの。私の妹」

その日、珍しく恵美は病室で俺に妹の話をした。その日、恵美になにがあったのか知らなかった俺は、いつもとはどこか違う恵美の様子を黙って見守っているしかなかった。ベッドに寄せた椅子に座る俺には目を向けず、恵美はまるで独り言のように言葉を発した。

「ウチ、お父さんいないの。それで、私が病気になってからは母さんも私にかかりつきりで、沙里は多分ずっと寂しい思いしてると思う。でも、あの子は不満とか全然表に出さないし、私にも一度も文句なんて言ってこないんだ」

恵美の妹は、俺とは入れ違いでよく恵美の見舞いに来ているらしい。

姉思いの妹。そんな風に思っている俺の考えを、恵美は静かに否定した。

「でも、分かるんだ。口には出さなくてもね」

「え……」

「あの子が、私のこと憎んでるってこと」

その日、確かに恵美の様子はおかしかった。そして、その原因を俺は知らなかった。

「今日ね。母さんが知らない男の人連れてきてさ。そうとは言っていなかったけど、多分、母さんあの人と再婚するつもりだと思うんだ」

俺は、恵美がなにを思っているのかなことを俺に話すのか、そして、その先になにが待っているのかまるで見当もつかずに、恵美の言葉を受け止めることに必死だった。

「私は別にいいんだ。ここにいる限り、私に変わることは何もないもん。でも、その分負担は全部沙里にかかっちゃう。いつか、あの子が爆発しちゃうんじゃないかって……私、それが心配なんだ。だから——さ」

その先の言葉を表には出さずに、恵美は初めて俺に目を向けた。その時、恵美が俺に訴えようとしたことは、多分、悲しいものでしかなかった。

困ったように微笑む恵美を見て、俺は確かにそう感じていた。

68・躊躇(ちゅうちょ)

その場に立ち尽くして、遠のいていく神木沙里の背中を見ていることしか出来なかった。夏菜の悲鳴に似た声も、泣き顔も、止まってしまった思考では上手く消化できない。ただ、唇に残った感触は、無性に、あの日の恵美の奔放な笑顔を俺に思い出させていた。

あの時、恵美が俺に求めていたのは、ありふれた励ましなんかじゃなかった。その時、何も言えずに目を逸らすことしか出来なかった俺とは違って、恵美は悲しい結末を予見していたのだろう。

——なのに、今の俺はそれを知っていても、立ち尽くすことしか出来なかった。

(お姉ちゃんのこと忘れるなんて、私が絶対許さない)

あの雨の日に、神木沙里が俺に残した言葉を何度も反芻する。あの言葉に込められた本当の意味。神木沙里の真意——。

それが、あの時の恵美の言葉通りだとしたら辛すぎる。そうじゃないとしたら悲しすぎる。

あの時、雨に濡れながら空を見上げていた神木沙里は、悲しいくらい俺に恵美を連想させた。そうすることで、恵美は少しでも抱えきれない不安をやり過ごそうとしていた。恵美と神木沙里の見ていた景色は、どんな哀しい色をして二人を捉えていたのだろう……—

「おい純！ 純！ お前夏菜とバッチリ決めたのかよ、この野郎。」

もったいぶってねえで聞かせろって！ ボクタン腰抜けてチューで
きませんでちたぶ！」

昼休み。人が廊下で一人たそがれて手すりに寄りかかっていると、
K・Yな大樹君が無遠慮な大声とともに、俺に肩組みをして来たの
で黙って迎撃。その赤く染めた素敵坊主の頭頂部を思いつきり引ッ
叩いてやると、思いのほか気持ちのいい音が響いて、大樹は頭を抱
えうずくまった。が、その三秒後に威勢良く掴みかかられた。逆切
れですな。

「てんめえ！ いきなりなにしゃがる！」

「いや、全力で喧嘩売ってきたのはお前だろ」

「つけ！ 凶星だからって俺に八つ当たりしてんじゃねが！」

「おう。君の頭は太鼓張りにいい音出すね。さすが中身がスツカラ
カンなだけありますな」

再び気持ちのいい音を叩き出してやると、大樹はまた血相を変え
て俺に襲い掛かってきた。

「調子に乗ってんじゃねえ、このビビり虫野郎が！」

「うるせえ！ やってねえなんて誰も言ってねえだろが！」

「だったら、ちゃんとやっただろうな、ごら！」

「やっただも誰も言ってねえだろがっ！」

「なんじゃそりゃ！ ビビリが逆切れしてんじゃねえよ！」

と殴り合いに発展する前に、通りすがりの麗美様の手により、仲
直りする僕たち。しかし、これ以上その話題にツッコまれても、こ
ちらもなんと返答すればいいか困るので、とにかく何も言わず二人
の下からダッシュで逃げる俺。他の子とならキスしたわ、なんて誰
が言えるか。

それにしても、やはり、というか、案の定というか、事態はかな
りの深刻を極めた。昨日のキス事件（仮名）から一日、夏菜は当然
のごとく口を利いてくれないどころか、目も合わせてくれない。お
まけに、神木沙里ともまだ落とし前つけてないし、南の事だってあ
る。

この複雑に絡み合う災難は神の陰謀か、などと、自分のふがいなさを棚に上げて心の中で舌打ちを一つ。その後、すぐに神木沙里の後を追いかけて問いただしていればよかったのだが、出来なかった。

神木沙里が何故あんなことを俺にしでかしたのかは分からない。とにかくもう、彼女に関わることに躊躇している場合ではなくな

た。いくら言い訳を連ねても、向き合ってからじゃないと「嘘」になっ
てしまう気がする。それが、すぐに夏菜に謝りにいけない理由だ
った。上辺だけ謝ってみたところで、夏菜は納得なんてしてくれな
いだろうし、許してもくれない。それは、この前の南とのことで痛
感している。でも、何よりも躊躇してしまう理由が別にあることに、
もう俺自身気付いていた。

目を落とすと、あの日のきらめきを失ったビーズのブレスレット
が、俺の左手首にぶら下がっている。そこに詰まったものを手繰り
寄せて得られるものは、罪悪感でしかなかった。

——心の折り合いのつけ方なんて、本当は俺だって分かってはい
ない。

いつの間にか、昼休み終了のチャイムが鳴っていた。

68・躊躇(ちゅうちょ)(後書き)

第4話と66話の本文を一部修正しました。

放課後の図書室に、神木沙里の姿はなかった。以前、神楽先生からの「教育的指導」という名の体罰から俺を救い出してくれた柔和な笑顔の持ち主を思い出し、俺はその足で職員室に向かった。確か白川先生は神木沙里のクラスの担任だったはずだ。案の定、銀縁眼鏡のよく似合う優男、もとい、白川先生は物腰穏やかに神木沙里は今日学校を欠席していることを俺に教えてくれた。

しかし、神木沙里の家の住所を聞くと、途端に白川先生の顔から笑顔は消えた。どうしたの、急に？ と相変わらず声は穏やかだったが、その顔にはかすかな不信が図らずも浮かんでいた。

しばらく質問に答えあぐねた結果「え、えーと……べ、別にストーカーとかじゃないですから、ご心配なく」などと自ら墓穴を掘る俺に、白川先生は眉根を寄せた。どうやら、キヨドる俺の態度は、まんまストーカーだったようだ。おまけに、近くで俺たちの会話を聞いていた神楽先生が「白川先生。その年頃の男子はみんな盛りのついた猿ですので、お気をつけください」などと、口出ししてきて状況は悪化。

「いや、フオローしろ、お前」と思わずポロつと漏れた俺の本音に、神楽先生は笑顔で「今何か言った長谷川君？」と俺の足をヒールでグリグリと踏みつける始末。結局、何とか「友人のお見舞いに」という苦しい言い訳を突き通し、神楽先生の悪魔の笑顔の下繰り出されるヒール攻撃から逃れ、職員室から命からがら脱出成功。

それにしても、あのクール&ワイルドのバカめ。こっちの気も知らねえで……。いつか絶対仕返ししてやる。ヒールにこっそり画鋏^{がびょう}仕込んでやる。

まあ、とにかく。散々ヒールに踏みつけられた足を引きずりつつ、俺は学校を後にした。

白川先生から受け取った、住所と簡素な地図の書かれた紙を頼りに、道路沿いに建ったいくつかの背の高いマンションの中から、神木沙里の住むマンションを見つけ出し、俺は一息ついた。

駅からほど近い場所に建ったマンションは、想像していたよりずっと立派なものだった。広いエントランスに、入居者の身の安全を守るための行き届いたセキュリティ。俺のような不審者は、オートロックの自動ドアから自動的にお引取りを願われるわけだ。

自動ドアの横に設置された、テレビモニターのついたインターホン。入居者はここでパスワードを入力して中に入るのだろう。来訪者はインターホンで入居者を呼び出し、自動ドアを開けてもらう仕組みか。しかし、おそらく呼び出したとしても神木沙里は出てくれないだろうという予感、実行してみて現実となった。

エントランスの一角には防犯カメラが設置されており、いつまでもうろろしていると、本気で不審者になってしまいかねない。仕方なく、俺はエントランスから出て、古典的な方法に打って出ることにした。

マンションから出て、防犯カメラの死角からじつとその瞬間を辛抱強く伺う。途中何度も自分のしている行為に虚しさを覚えつつも、およそ三十分後に訪れたその瞬間に、張り詰めていた俺の神経は、ここぞとばかりに反応を示した。

エントランスの奥の通路から、入居者と思しき女性の姿を視界に捉えた瞬間、俺はとっさにマンションの中に入り、ケータイ電話を片手に演技開始。女性が自動ドアを開けると同時に、素知らぬ顔でケータイ電話をいじりながら、自動ドアの内側に潜入成功。

近代科学も、人間様の柔軟な思考にはついてはこれないというわけだ。使い古された手段に打って出た自分がなにか恥ずかしいが、背に腹はかえられない。

高級ホテルのような外観を呈したマンションは、中身まで手を抜かず高級感で溢れていた。琥珀色の石材で作られた廊下は、ワックスでピカピカに磨かれ、光沢を帯びていた。壁も床と同じ琥珀で固められ、そこに漂っている空気は外とは違い、どこか柔らかくて優しい気がした。

エントランスの郵便受けで確認した「神木」の苗字の下には905と部屋番号が表記されていた。使い慣れないエレベータで9階までたどり着き、慣れない通路を歩き、目的の部屋を探す。程なく905号室のドアを見つけ、俺は一つため息をついた。

インターホンのベルに指を当て、ゆっくりとボタンを一度だけ押す。中に響いたであろう反響音は、外にまでは伝わらず、俺の指先に不安を残す。

もし、誰も出てこなければ、そのまま帰るつもりだった。ここまでしてやってきたのだから、と自分を納得させる準備も整っていた。エントランスのインターホンに出てこなかったのだから――。

でも、俺の思惑をあざ笑うかのように、ドアはゆっくりと開いていった。そして、開いたドアの隙間に立つ神木沙里と目が合った瞬間、気付いた。

俺が今ここに立っているのは、逃げの理由を作り出すための、口実でしかなかったことに。

そんな俺の心中なんて知るはずもないのに、神木沙里の無表情な顔から向けられる静かな瞳は、全てを知っていてなお向けられているような気がした。昨日のことも、今俺がここに立っていることも、全ては神木沙里に操られているような感覚が、俺の背筋を伝った。

それなのに、神木沙里はまるで興味がなさそうに俺から目を逸らした。そのまま、玄関の外に俺を放ったまま、部屋の奥へと引き返していく。

その行為にさえ感じる意図は、果たして神木沙里の思惑なのだろうか。部屋の中に入るのも、引き返すのも自由なはずなのに、玄関の中に足を踏み入れている今の自分の行動に確信が持てない。薄暗い部屋の奥で、神木沙里は静かに俺を見つめていた。

70・答え

玄関の正面に位置する大きなほど広いリビングの片隅に、神木沙里が立っていた。玄関を上がる俺を見てから、神木沙里はおもむろに俺から視線を逸らして、リビングに接したベランダの窓に手を置き、そこから見える景色と向き合った。

暮れ行く街の景色を見下ろす神木沙里の細い背中が、やっぱり、俺を拒絶しているように思えた。

濃淡なオレンジは、沈み行きながらリビングに影を落としている。その影の中に立ちながら、神木沙里は決して光の中には入ろうとはせず、その背中は微動だにしなかった。

——そんな暗いところに立ってんじゃねえよ。

そう言つて、神木沙里を影の中から、光の中へ引つ張り出してやりたかった。でも、そうするには神木沙里の背中が、あまりにも俺によそよそしかった。手を伸ばせばすぐそこに光はあるのに、神木沙里は決してその中に入ろうとはしない。

そうまでして、神木沙里は一体なにを求めているのだろうか。神木沙里の背中が物語る答えに、俺はいたたまれなくなつて声をかけた。「いつか、恵美が俺に言つてたこと思い出したよ」

すぐ傍で俺の声を聞いても、神木沙里の背中が揺らがなかった。

俺の口から出た恵美の名前は、自分でも戸惑うほど、言葉に託したはずの实感を伴わない。言葉では補うことが出来ない喪失感が俺の胸をよぎった。それでも、あの日、確かに恵美はそこにいた。

「お前のこと、心配してたよ。いつか、爆発するんじゃないかって言つてた」

それが、虚しいだけの行為だと知つていても、俺は言葉を続けた。「口には出さなくても分かるつて。お前が恵美のこと憎んでるつて、あいつ、言つてた。その時の俺は、恵美に何も言えなかった。今も、それは変わんねえ。だから、聞かせてくれよ。お前の……答え」

多分、恵美はその答えを知らない。神木沙里は、伝えることが出来ずに、今もその胸に答えをしまい続けている。だとしたら、せめて、その答えは少しでも優しいものであつて欲しかった。同情では埋められなくても、神木沙里を蝕んだものが悲しみや後悔であるなら、きつと、いつかは立ち直ることが出来る。そう思ふのは、ただの独りよがりな思い込みに過ぎないのだろうか。

やがて、沈黙に浸った空気に、独り言のように神木沙里の声が流れた。

「――違う」

あの雨の日に聞いた、哀しい声とは違う音色は、静かに、しまわれた想いを吐き捨てる。

「私は、お姉ちゃんをあの日からずっと呪つてるだけだもの」

振り返った神木沙里の瞳は、冷静に、冷静に、俺の幻想を否定した。

71・呪い

理性を宿した神木沙里の言葉が、静かにリビングの中に流れる。

そこに、いつか見た、自我を失くした人形のような神木沙里の面影はなかった。敵意とも、憎悪とも違う。ただ、神木沙里の瞳に宿った冷たい理性は、悲しいくらい、俺の求めた答えとは違う場所に向かっていた。

「どういう、意味だよ」

それでも、聞かずにはいらなかった。

「あいつのこと呪ってるって…… どういう、意味だよ」

言葉が喉の奥で詰まった。神木沙里の口にしたことを、同じように言葉にするだけで胸の奥がじくじくと痛んだ。それなのに、神木沙里は何事もなかったように俺を見ている。そんな俺を無表情で見返している。そこに、虚偽や演技なんて、どこにもなかった。

「意味なんてない」

そう言つて、神木沙里は俺から目を逸らした。

「ただ、私はお姉ちゃんを呪ってる」

「…… そんなの、答えになつてねえよ」

俺の言葉には答えずに、神木沙里はベランダの窓を開けた。雨の季節の湿った風は、神木沙里の髪を撫でて、俺の横を通り過ぎる。窓の外の街並みは、じわじわと暗闇の膜に覆われていく。ぽつぽつと明かりの灯る街並みを見下ろしながら、神木沙里の背中はそのから動かなかった。

「ずっと、疎ましかった」

「え……」

「私の世界はずっとお姉ちゃんを中心に回ってた。母親の関心はいつもお姉ちゃんに向いてた。お姉ちゃんが病気になってからは、母親の目に、私は映らなくなった。だから、ずっと願ってた。——お姉ちゃんなんて、いなくなればいい」

そう言つて、神木沙里は俺を振り返つた。

「そうしたら、本当にお姉ちゃんはいなくなつた」

無表情な中で、その瞳だけはかすかに揺らいだ気がした。それでも、すぐに垣間見えたものをしまつて、神木沙里は言葉を続ける。

「本気でそんなこと望んでたわけじゃない。それなのに、その時、私は心の底で笑つてた。可笑しくて、堪らなかつた。私の本心は、お姉ちゃんに暴かれた」

言葉とともに、神木沙里が俺の元に歩み寄つて来る。

「否定したくても、出来なかつた。そんな自分が許せなかつた。何より、そんなお姉ちゃんが許せなかつた」

後退る俺を、神木沙里はかまうことなく後ろのソファに押し倒してきた。ソファの上に仰向けに倒れた俺の上に、馬乗りになつて、神木沙里は俺を見つめる。

「だから、私はお姉ちゃんを呪つたの」

言葉の分だけ、神木沙里の心が解けていく。

「大好きなお姉ちゃんを失くして、心が壊れた可哀想な妹。そんな私を見て、母親は嫌でもお姉ちゃんを思い出す。いつまでも、いつまでも、罪の意識に苛まれる。自分だけ幸せになろうなんて、私が絶対許さないから……」

「え……」

猟奇的な言葉とは裏腹なその無感情な声色は、何事もなかつたように虚空に消えていった。それが、神木沙里の本心だと言ふのなら、あの日の恵美の気持ちとは一体誰が救えるのだらう。神木沙里の瞳は、静かに俺の心を侵食していく。

「私はお姉ちゃんが死んで生まれた結果。だから、お姉ちゃんに深く関わつた人間は、みんな私を見てお姉ちゃんを思い出す。嫌でも悲しい記憶を呼び覚ます。そして、お姉ちゃんの記憶は、関わつた人間すべてを不幸に堕とす。——それが、私の呪い。私のお姉ちゃんへの復讐……」

「そんな——」

「——言ったよね？ 忘れないって……」

口元を歪めて、神木沙里は俺を見下ろしながら笑った。

初めて見たその微笑みに、いつか見た恵美の笑顔が重なる。

（お姉ちゃんのこと忘れるなんて、私が絶対許さない）

あの雨の日に、神木沙里が俺に向けた言葉は、喪失の先に用意された答えだった。その答えにせめてもの救いを求めた俺の願いは、今向けられた神木沙里の微笑みに飲み込まれた。こんな時にさえ、神木沙里に恵美の幻影を重ねている自分が、どうしようもなく許せなかった。

「お姉ちゃんのこと、好きなんだよね。——今でも」

「違う……」

「お姉ちゃんもあなたのことが好きだった。今でも、きっと」

耳元で囁かれたその言葉に、俺は身動きが取れなくなった。夢と現実。記憶と思い出。俺の中のすべてをかき回しながら、神木沙里は顔を上げた。

「もし、お姉ちゃんが生きてたら、有り得たかもしれない現実。私がお姉ちゃんの代わりになってあげるから……だから、いいんだよ」

俺の上にまたがったまま、神木沙里はおもむろに身に着けていたブラウスを脱ぎ捨てた。部屋に落ちた影の中で、神木沙里の露出した肌は病的に白かった。

俺に触れる神木沙里の重みと体温が。言葉が。息遣いが。俺の心にまとわりついて、犯していく。今、ここにいるのが恵美じゃないことは分かっていた。それなのに、神木沙里の出した答えはどうしようもなく、俺の目を眩ませた。

神木沙里のしていることは、人の良心につけ込んだレイプだった。それが、恵美が死んだ結果だというのなら、そこに正しいも間違いもない。過ちだとも、否定できない。

それでも、恵美を呪うことでしか紛らわせなかったものは、神木沙里にとってかけがえのないものだったのだと思いたかった。

（いつか、あの子が爆発しちゃうんじゃないかって……私、それが

心配なんだ。だから——さ)

一緒だった。俺も神木沙里も、本当は恵美の死に、折り合いなんてつけられていない。

「私がお姉ちゃんを感じさせてあげるから……」
でも——。

「……止めるよ」

俺の声に、神木沙里は俺に被せていた体を起こした。

無表情な瞳が冷たく俺を見下ろしている。その瞳を直視することはできなかった。

「誰も恵美の代わりになんてなれねえ。お前がそんなことしてる限り、恵美だって——」

俺の言葉を遮るように、神木沙里は俺から離れた。

「——あいつ、本気でお前のこと心配してたんだ……」

床に落ちたブラウスを拾って、神木沙里は俺に背を向けたまま、それを身に着けた。もう、神木沙里の瞳に、俺が映ることはなかった。

無言でリビングを出て行く神木沙里に、俺は声をかけることができなかった。

72・喪失の予感

神木沙里の住むマンションから出た頃には、すっかり陽は落ちていた。帰りの電車の中で、二日続けてバイトをサボった俺に、杏奈さんは随分腹を立てていることだろう。などと取り留めのないことを考えているうちに、家から最寄の駅に着いていた。

改札を抜けると、蟻の群れのように人が流れ出した。その中で意味もなく立ち止まって、意味もなく通り過ぎていく人たちを眺める。雑踏の中においても、神木沙里が俺に残したものを紛らわせることはできなかった。

よそよそしく通り過ぎていく風景の中に、俺は足を踏み出した。

帰りの道中、ポケットに入れていた携帯電話のバイブに気付いた。ポケットから取り出して確認すると、新着メールが一件。夏菜からだった。

『今どこにいるの？』

無題の、そっけないメールの本文がディスプレイに浮かぶ。今日一日、目も合わせてくれなかった夏菜からの突然のメールに戸惑いながらも、このタイミングは偶然ではないような気がした。

ちゃんと神木沙里と向き合ってから、夏菜にすべてを話すと決めていた。でも、それはただの自己満足でしかなかったことに、気付いた。

神木沙里に俺自身の望む答えを求めているように、今、夏菜にさえ、俺は自分自身の望む答えを求めている。

今、神木沙里のことを夏菜に話そうと思っているのは、神木沙里の呪いを一人で受け止める勇気がないだけだ。居た堪れないこの気持ちを少しでも楽にしたくて、誰かに理解して欲しくて……何より、夏菜に傍にいて欲しかった。

（——言っただよね？ 忘れないって……）

（お姉ちゃんのこと、好きなんだよね。——今でも）

（お姉ちゃんもあなたのことが好きだった。今でも、きっと）
拭いきれない神木沙里の言葉が、俺の不安を募らせていく。胸に
よぎる喪失の予感に、もう、気付かない振りはできなかった。
でも——。

俺はメールを返信せずに、携帯電話をポケットにしまった。家の
門扉に背中を預けてそこに佇んでいる夏菜を、少し離れたところか
ら眺める。不安がまた、俺の中で大きくなっていく。

——でも、手を伸ばさずにいられたのは、何より、夏菜を
失ってしまうのが怖かったからだ。

「……夏菜」

俺の声に、夏菜は静かに顔を上げた。

73・思い出の鎖

俺と目が合うと、夏菜はすぐに俺から目を逸らして俯きがちに足元に視線を落とした。

なんて、声をかければいいのだろう。言葉に変えられない気持ちには、出口を求めているのに、胸につつかえて表に出てこない。気まずい沈黙の中で、夏菜からこの均衡を破ってくれるのを待つことしかできなかった。

昨日あんなことがあったのに、今日、夏菜が学校に来ていたのは、きっとこの時のためだったのだろう。口や態度には出さなくても、夏菜が俺を待っていたことは分かっていた。一連の原因が俺自身にあることも……。

——時間が止まったような沈黙の中で、夏菜の頼りない声が流れた。

「どこ、行つてたの？」

足元を見つめたまま、夏菜は俺を見なかった。そんな夏菜を目の前にして、用意していたはずの言葉は口から出てこなかった。

「なんで、何も言ってくれないの……？」

昨日の夏菜の泣き顔が脳裏をよぎる。不安がまた、俺の中で膨らんでいく。その不安にだけ捉われて、俺は声を出した。

「夏菜……話——」

「恵美ちゃんの妹なんだよね」

予期しない夏菜の言葉が、俺の言葉を遮った。

「え……」

「あの子、恵美ちゃんの妹なんだよね。——……なんで、何も言ってくれないの？」

「夏菜……」

「なんで私が自分でそんなこと調べなきゃいけないの？　なんで私だけ、こんな不安で惨めな思いしなきゃいけないの？　今日、ずっ

と待つてたのに……なんで——」

夏菜の頼りない肩が、小さく揺れた。俯いたまま発せられる言葉にまた、夏菜の泣き顔が思い浮かぶ。触れるだけで壊れてしまいそうなその脆さを前にして、俺は夏菜に触れることができなかった。

「夏菜……聞いてくれよ。神木沙里のこと、別に夏菜に隠してたわけじゃないんだ。前に、俺、障害のある子を助けたことがあった。そのせいで昼休みの後の授業遅れて、神楽先生にこつてり絞られてさ。その時のその子が神木沙里で……もちろん、その時は俺もその子が恵美の妹だなんて知らなかったんだ。それに、そんなことあって夏菜に話すことでもないと思つてて……」

「なんで……そんな風に思うの？ 私は、話して欲しかった」

「だ、だって、そんなこと話しても夏菜には面白いことじゃないと思つし、余計な心配もさせたくないかったし……」

「違うよ」

「え？」

「純のそれは思いやりとは違うよ。私に心配させたくないかった？ 知られたくなかっただけじゃない」

そう言つて、初めて顔を上げた夏菜の顔は、昨日と同じ悲しみに歪んでいた。

「まだ、恵美ちゃんのこと好きだつてこと……私に知られたくなかっただけなんだよ……純は……」

微笑みながら、夏菜の頬を静かに涙が伝った。諦めたような夏菜の笑顔は、予感より確かに、俺の心を痛めた。

「違う。違うつて……。そういう変な心配させたくないから俺

——」

「だったら、なんで外してくれないの？」

「え……」

「そのビーズのブレスレット。私と付き合いだしてからも、外してくれなかったよね」

「——あ……」

「それでもいいって思ってたよ。私、純のこと好きだし、一緒にいるだけですごく幸せな気持ちになれるし、純だって私と同じ気持ちでいてくれるの、感じてたし。それでいいって、思ってた。でもさ、やっぱり……駄目みたい。私……」

「夏菜……」

「好きな人が目の前で知らない女の子とキスしてるんだよ。その相手が、恵美ちゃんの妹なんだよ。これって……ただの偶然？」

夏菜の言葉と涙に、俺の体は金縛りにあつたように動けなかった。「平気でいられるわけ、ないじゃない……」

一緒にいられることに満足だけして、気付くことができなかった。本当は、夏菜がいつも不安を抱えていた気持ちに。気付かなければいけなかった気持ちに。

「こんなこと言ったら、純が私から離れていつちやう気がして怖かった……。でも、今は純と一緒にいても同じぐらい、苦しいの。辛い……。だから、私——」

そこまで夏菜を追い詰めていたことに、今頃気付いた俺は、やっぱり救いようのない馬鹿だった。全てを否定して、今すぐ夏菜を抱き締めれば、あるいは繋ぎ止めておくことはできたのかもしれないでも、そうできなかったのは、多分——。

「——もう、純と一緒にはいられないよ……」

その言葉が、何よりも俺の心に重く響いたからだ。

「ま、待てよ……夏菜。外す。ブレスレット外すから——」

慌てて左手首のブレスレットを外そうとする俺の手に、夏菜は何も言わずに自分の手を重ねた。少しだけ冷たい夏菜の手の感触に、俺は自分のしていることの無意味さに気付いた。

「駄目だよ、純」

「待ってくれよ。俺……だって、夏菜のこと——」

「思い出にさ……」

かすれた夏菜の声が、静かな夜の空気に溶けた。

「私たち……思い出に負けたんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2305d/>

半熟果実

2010年10月11日04時10分発行